

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

^{おお}大 ^{ぶち}渕 遺 跡

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

この度、財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、名古屋環状2号線建設工事に伴う事前調査として、海部郡甚目寺町大淵遺跡の発掘調査を愛知県の委託事業として実施しました。この結果大淵遺跡においては、弥生時代中期の52軒の竪穴住居や、まだ県内でも調査例の少ない古墳時代から室町時代にかけての掘立柱建物群が検出され、町名の由来となっている白鳳期創建の甚目寺との関連や当時の低地部における集落の姿が注目されました。また弥生時代の円窓付土器や魚網に使用されたと思われる古代の土錘などをはじめ多数の遺物が出土しております。

調査にあたり、愛知県教育委員会のご指導、並びに地元住民の方々及び関係諸機関・関係者の皆様に格別のご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

また、本報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対するご理解の一助となれば幸いと存じます。

平成3年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠次

例 言

1. 本書は愛知県海部郡甚目寺大字甚目寺字大淵に所在する大淵遺跡の調査報告書である。
2. 調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として、建設省・日本道路公団から愛知県教育委員会を通じて委託をうけ、財団法人愛知県教育サービスセンター・財団法人愛知県埋蔵文化財センターが昭和58年度から昭和60年度にかけて行った。
3. 調査担当者は下記のとおりである。
58年度 田中信夫（現 豊田市立梅坪小学校）、福岡晃彦、宮腰健司
59年度 清水雷太郎（現 尾西市立尾西第三中学校）、梅村清春（現 小原村立本城小学校）
梅本博志（現 愛知県教育委員会文化財課）、福岡晃彦、長島 広（現 春日井南高校）、宮腰健司
60年度 竹内尚武（現 国府高校）、山田耕治（現 蒲郡市立塩津小学校）
平野 清（現 津島高校）、梅村清春、宮腰健司
北村（浅井）和宏、池本正明、酒井俊彦、竹内宇哲（現 名古屋市見晴台考古資料館）、中野良法（現 春日井南高校）
なお、担当調査区については表1に示した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局、甚目寺町教育委員会
5. 本書の執筆分担は下記のとおりである。なお、編集は宮腰健司が行った。
I・II・III 宮腰健司
IV-1 石黒立人、宮腰健司
IV-2 宮腰健司
IV-3 池本正明、宮腰健司
V-1 石黒立人
V-2 宮腰健司、古橋佳子（調査研究補助員）
VI-1 三辻利一（奈良教育大学教授）
VI-2 森 勇一、前田弘子（調査研究補助員）
VII 宮腰健司
6. 調査区の座標は、国土座標Ⅶ座標系に準拠する。
7. 遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号は表として本文中に示した。
8. 本書の執筆にあたり下記の諸機関・諸氏にご指導・ご助言をいただいた。
記して感謝申し上げたい。（敬称略）
上村安生、内田智久、加藤 優、斎宮歴史博物館、西宮秀紀、林部 均、藤澤良祐
三重県埋蔵文化財センター、三辻利一、吉水康夫

目 次

I. 調査の概要	1
II. 位置と環境	3
III. 遺 構	5
1. 遺構・層序の概要	6
2. 弥生時代	8
3. 古墳時代後期～平安時代中期	22
4. 平安時代後期～室町時代	37
IV. 遺 物	43
1. 弥生時代	45
2. 古墳時代後期～平安時代中期	54
3. 平安時代後期～室町時代	64
V. 考 察 1	75
1. 弥生中期土器にみる複数の<系>その2 ——大洲遺跡並行期を中心として——	77
2. 大洲遺跡出土の土鍾について	91
VI. 考 察 2	111
1. 大洲遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	113
2. 大洲遺跡から検出された珪藻遺骸について	118
VII. ま と め	124
遺構一覧表	133
遺物一覧表	139
図版	149
写真図版	209

図版目次

遺構図割付表

図版 1		
}	下面遺構図	
図版 7		
図版 8		
}	上面遺構図	
図版20		
図版21	弥生時代土器実測図	1 ~ 17
図版22	弥生時代土器実測図	18 ~ 41
図版23	弥生時代土器実測図	42 ~ 55
図版24	弥生時代土器実測図	56 ~ 78
図版25	弥生時代土器実測図	79 ~ 104
図版26	弥生時代土器実測図	105 ~ 122
図版27	弥生時代土器実測図	123 ~ 137
図版28	弥生時代土器実測図	138 ~ 150
図版29	弥生時代土器実測図	151 ~ 158
図版30	弥生時代土器実測図	159 ~ 179
図版31	弥生時代土器実測図	180 ~ 195
図版32	弥生時代土器実測図	196 ~ 211
図版33	弥生時代土器実測図	212 ~ 226
図版34	弥生時代土器拓本	227 ~ 258
図版35	弥生時代土器拓本	259 ~ 295
図版36	弥生時代土器拓本	296 ~ 306
図版37	弥生時代土器拓本	307 ~ 327
図版38	弥生時代土器拓本	328 ~ 342
図版39	I期土器実測図	343 ~ 371
図版40	I期土器実測図	372 ~ 389
図版41	I期土器実測図	390 ~ 410
図版42	I期土器実測図	411 ~ 424
図版43	I期土器実測図	425 ~ 447
図版44	I期土器実測図	448 ~ 466
図版45	I期土器実測図	467 ~ 491
図版46	I期土器実測図	492 ~ 515
図版47	I期土器実測図	516 ~ 543
図版48	II期土器実測図・拓本	544 ~ 563
図版49	II期土器実測図	564 ~ 595
図版50	II・III期土器実測図	596 ~ 630
図版51	IV期土器実測図	631 ~ 663
図版52	V期土器実測図	664 ~ 696
図版53	V期土器実測図・拓本	697 ~ 728

図版54	V期土器実測図・拓本	729 ~ 766
図版55	加工円盤実測図	767 ~ 817
図版56	石器実測図	818 ~ 854
図版57	特殊遺物実測図	855 ~ 866
図版58	製塩土器・木器実測図	867 ~ 897
写真図版 1	特殊遺物	1 ~ 7
	上面SE01 8 (西から)	
	下面SE03円窓付土器出土状態	
	(上:南東から、下:南西から)	
写真図版 2	60A ₁ 上面(南から)・60B ₁ 区上面(南東から)・60A ₂ 区上面南側(北東から)・59A区(北から)・60D区上面西側(東から)・60C ₂ ・C ₃ 区上面(東から)・60E区(北から)・60H区(北から)・60G(南から)・59B区(南から)	
写真図版 3	60A ₁ 下面西側(東から)・60B ₁ 下面(南から)・60A ₂ 区下面北東側(西から)・60C ₃ 区下面西側(東から)・60F区中世遺構(東から)・60F区(東から)・60I区南側(北西から)・60J区(北東から)・60K区(東から)・60L区(東から)	
写真図版 4	下面SB05・SB06(東から)	
	下面SB05(東から)	
	下面SE03 上層土器出土状態(南から)	
	・下層土器出土状態(西から)	
写真図版 5	下面SB14 炭化材・土器出土状態(南西から)	
	下面SB26 炭化材・土器出土状態(東から)	
	下面SB19	
写真図版 6	SE22 井戸枠・曲物出土状態(東から)	
	SE10 井戸枠出土状態(北東から)	
	SE13 土器出土状態(北から)	
写真図版 7	SE14 井戸枠出土状態(北東から)	
	SE14 井戸枠・砂おさえ出土状態(南から)	
	SE24 土器・曲物出土状態(北から)	
写真図版 8	SE11 土器出土状態(北西から)	
	SE03 曲物出土状態(西から)	
	SK125 土器出土状態(南から)	
写真図版 9	弥生土器	8 ~ 15

写真図版10	弥生土器	16～23
写真図版11	弥生土器	24～30
写真図版12	弥生土器	31～38
写真図版13	弥生土器	37～45
写真図版14	Ⅱ期遺物	46～59
写真図版15	Ⅱ・Ⅲ期	60～75
写真図版16	Ⅱ・Ⅲ期	76～87
写真図版17	Ⅱ・Ⅲ期	88～106
写真図版18	Ⅳ・Ⅴ期	107～120
写真図版19	Ⅴ期遺物	121～132
	加工円盤	133～136
写真図版20	石器	137～170
写真図版21	特殊遺物	171～176
	木製品	177～182
写真図版22	土錘	183～190

表 目 次

第1表	発掘調査工程表	1
第2表	SXO1計測表	20
第3表	端面処理状況表	92
第4表	形態別重量分布表	94
第5表	土錘計測グラフ	96・97
第6表	魚網の種類	98
第7表	土錘計測表	100～105
第8表	大洲遺跡出土須恵器 蛍光X線分析データ	117
第9表	大洲遺跡から産出した珪藻遺骸のリスト	121
第10表	古墳時代後期以降時期別主要遺構	126

挿図目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	遺跡位置図	3
第3図	周辺の主要遺跡	4
第4図	層名基本図	6
第5図	土層模式図	7
第6図	弥生時代挿図一覧	8
第7図	SB04・05 (1:40)	9
第8図	SB14 (1:40)	10
第9図	SB21～23土器出土状態 (南東より)	10
第10図	SB16炭化材出土状態	10
第11図	SB17 (1:40)	11
第12図	SB26 (西より)	12
第13図	SB27 (西より)	12
第14図	SB35 (1:40)	13
第15図	SB39 (1:40)	14
第16図	SB52 (1:40)	15
第17図	SE01 (1:40)	16
第18図	SE02 (1:50)	17
第19図	SE03 (1:50)	17
第20図	SK13土器出土状態 (南から)	18
第21図	SK47 (1:40)	18
第22図	SD01 (1:40)	19
第23図	SX01 (1:200)	21
第24図	古墳時代後期～平安時代中期挿図一覧	22
第25図	SB24 (1:40)	23
第26図	SB17・SB18 (1:40)	23
第27図	SB20・SB21・SB22・SB23 (1:40)	24
第28図	SB33・SA17 (1:40)	25
第29図	SB37・SB38・SA18 (1:40)	26
第30図	SB41・SB42・SB43・SA41 (1:40)	27
第31図	SB47 (1:40)	28
第32図	SB48 (1:40)	28
第33図	SE01 (1:40)	29
第34図	SE08 (1:50)	30
第35図	SE09 (1:50)	30
第36図	SE10 (1:50)	31
第37図	SE13 (1:50)	31

第38図	SE14 (1 : 50).....	32	第78図	7 C後の須恵器のRb-S,分布図.....	114
第39図	SE22 (1 : 40).....	32	第79図	8 C後～9 C初の須恵器のRb-S,分布図	115
第40図	SE21 (1 : 50).....	33	第80図	10 C前の須恵器のRb-S,分布図.....	115
第41図	SE28 (1 : 50).....	33	第81図	11 C中の須恵器のRb-S,分布図.....	115
第42図	SE24と出土折敷・曲物.....	33	第82図	大洲遺跡出土須恵器のK-Rb相関図.....	116
第44図	SE07 (1 : 50).....	34	第83図	Fe因子の比較.....	116
第45図	SE23 (1 : 50).....	34	第84図	試料採取位置図.....	118
第46図	SE25 (1 : 50).....	34	第85図	大洲遺跡出土珪藻遺骸写真.....	123
第47図	SX01 (1 : 200).....	36	第86図	弥生時代遺構図.....	125
第48図	SX04 (1 : 200).....	36	第87図	土師器甕細分類.....	127
第49図	SX06 (1 : 200).....	36	第88図	主要遺構軸線方位グラフ.....	128
第50図	SX41 (1 : 40).....	36	第89図	グループ別掘立柱建物.....	129
第51図	平安時代後期～室町時代挿図一覧.....	37	第90図	主要遺構変遷図.....	131
第52図	SB06・SB08・SB09・SB11 (1 : 40).....	38			
第53図	SB30・SB31・SB32・SA12・ SA42 (1 : 100).....	39			
第54図	SE04 (1 : 40).....	40			
第55図	SE11 (1 : 40).....	41			
第56図	SE16 (1 : 40).....	41			
第57図	SE18 (1 : 40).....	41			
第58図	SE27 (1 : 40).....	41			
第59図	弥生時代後期以降出土土器(1/4).....	53			
第60図	主要器種分類.....	55			
第61図	灰釉系陶器 椀・皿の分類.....	64			
第62図	SD15出土土器.....	74			
第63図	Ⅱ系土器の消息.....	84			
第64図	ⅠE系.....	87			
第65図	Ⅳ系.....	88			
第66図	Ⅳ系.....	89			
第67図	諸系.....	90			
第68図	弥生時代の土錘.....	91			
第69図	土錘分類模式図.....	93			
第70図	製作法のわかる土錘.....	94			
第71図	大洲遺跡出土土錘(1).....	106			
第72図	大洲遺跡出土土錘(2).....	107			
第73図	大洲遺跡出土土錘(3).....	108			
第74図	大洲遺跡出土土錘(4).....	109			
第75図	大洲遺跡出土土錘(5).....	110			
第76図	6 C後～7 C前の須恵器Rb-S,分布図	114			
第77図	7 C前の須恵器のRb-S,分布図.....	114			

I. 調査の概要

大淵遺跡は、昭和56年のガス管埋設の立会い調査による須恵器片等の出土によって初めて確認された。当初は北側にある阿弥陀寺遺跡との関連で阿弥陀寺南遺跡と仮称していたが、名古屋環状2号線に伴う昭和58年度の愛知県埋蔵文化財センターの試掘調査によって、阿弥陀寺遺跡とは旧福田川を挟んだ異なる微高地上に立地する古代を中心とする集落であることが判明したため、改めて「大淵遺跡」と命名した。

調査は、昭和58年度の16ヶ所400㎡の試掘調査、昭和59年度の東側側道部分1620㎡、昭和60年度の本道・西側側道部分8427㎡と三ヶ年にわたって実施された。また、昭和61年度には遺跡西部において福田川整備事業に伴う調査もおこなわれている。なお、以上の調査は全て愛知県教育サービスセンター及び愛知県埋蔵文化財センターによって行われた。

- 愛知県教育サービスセンター 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』1984
- 愛知県教育サービスセンター 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』1985
- 愛知県埋蔵文化財センター 『年報 昭和60年度』1986
- 愛知県埋蔵文化財センター 『年報 昭和61年度』1987
- 愛知県埋蔵文化財センター 『大淵遺跡・阿弥陀寺遺跡』1988

	59							60												
	Tr	A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
4																				
5						清水・梅村・宮腰														
6	田中・福岡・宮腰	梅本・福岡・長島	清水・梅村・宮腰		清水・梅村・宮腰								山田・池本		宮腰・竹内宇					
7																				
8																				
9																				
10																				
11																				
12																				
1																				
2																				
3																				

第1表 発掘調査工程表



第1図 調査区位置図

II. 位置と環境

位置 大淵遺跡は、愛知県海部郡甚目寺町に位置する。甚目寺町は濃尾平野中央部のやや南よりにあり、現況は標高2～4mのほとんど比高差の無い平坦な低地状の地形を呈している。

立地 遺跡の立地は、北側に展開する朝日遺跡・廻間遺跡・森南遺跡・阿弥陀寺遺跡同様、東西及び北東から南西に延びる微高地上であり、地山は沖積上部砂層の上部に堆積するシルト層からなっている。この微高地の形成については、五条川の自然堤防と海岸線に沿ってできる浜堤列という二つの見解があり、最北に位置する朝日遺跡が縄文時代後期、他の遺跡も弥生時代中期までには陸地化している。

歴史 旧石器・縄文時代の遺跡は濃尾平野南部においてはほとんど確認されておらず、朝日遺跡において縄文時代後期前葉のドングリピットが検出されているのみである。

弥生時代においては、前期より始まる東海地方最大級の環濠集落の朝日遺跡をはじめ、旧河道を挟み北接する中～後期の環濠集落である阿弥陀寺遺跡、北西1.7kmにある中～後期の森南遺跡がある。

古墳時代では、集落としては弥生時代末～古墳時代前期にかけての廻間遺跡があり、北西1.2kmに二ツ寺神明社古墳、西方2.8kmに奥津社古墳、廻間遺跡前方後方型低墳丘墓、朝日遺跡・土田遺跡に後期の円墳がみられる。

古墳時代末～平安時代にかけては、稲沢市内に尾張国衙・国分寺・国分尼寺が造営され、甚目寺町内においても白鳳期に法性寺・清林寺等が建立されている。また、清林寺遺跡では礎石建物跡・瓦塔が検出されている。

鎌倉時代～室町時代には尾張低地部全域で大がかりな土地改変が行われているようであり、各遺跡で区画溝が多数確認されており、居住地がみつまっている阿弥陀寺遺跡・森南遺跡、方形土坑で構成される墓域を検出している土田遺跡・朝日遺跡などがある。



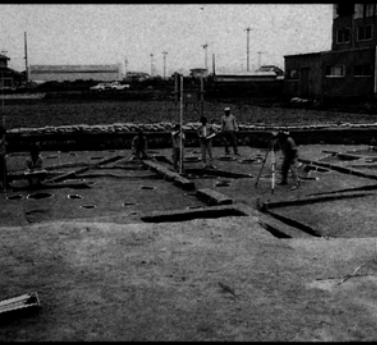
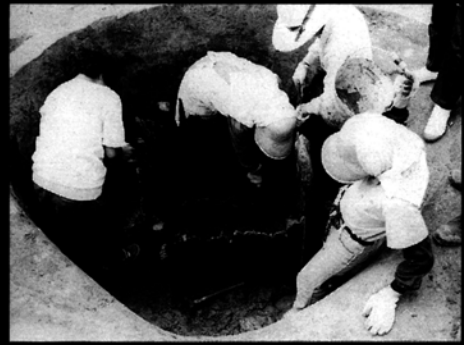
第2図 遺跡位置図



1. 中島庵寺
2. 東福庵寺
3. 尾張国府
4. 尾張国分尼寺
5. 尾張国分寺
6. 正楽寺跡
7. 三宅庵寺
7. セツツ寺跡
9. 伝法寺庵寺
10. 川井薬師堂庵寺
11. 脚土井庵寺
12. 弥勤寺庵寺
13. 仁昌寺跡
14. 諸桑庵寺
15. 興津社古墳
16. 瀧高庵寺
17. 寺野遺跡
18. 篠田庵寺
19. ニツツ寺古墳
20. 四反畑遺跡
21. 森南遺跡
22. 清明遺跡
23. 法性寺跡
24. 大洞遺跡
25. 阿弥陀寺遺跡
26. 菖目寺
27. 清林寺跡
28. 土田遺跡
29. 趣間遺跡
30. 清洲城下町遺跡
31. 朝日遺跡

第3図 周辺の主要遺跡

III. 遺構

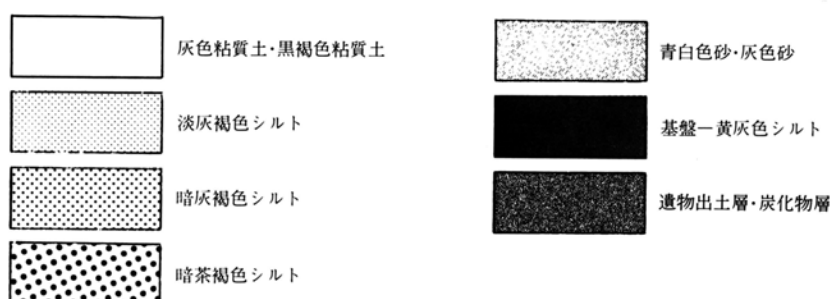


1. 遺構・層序の概要

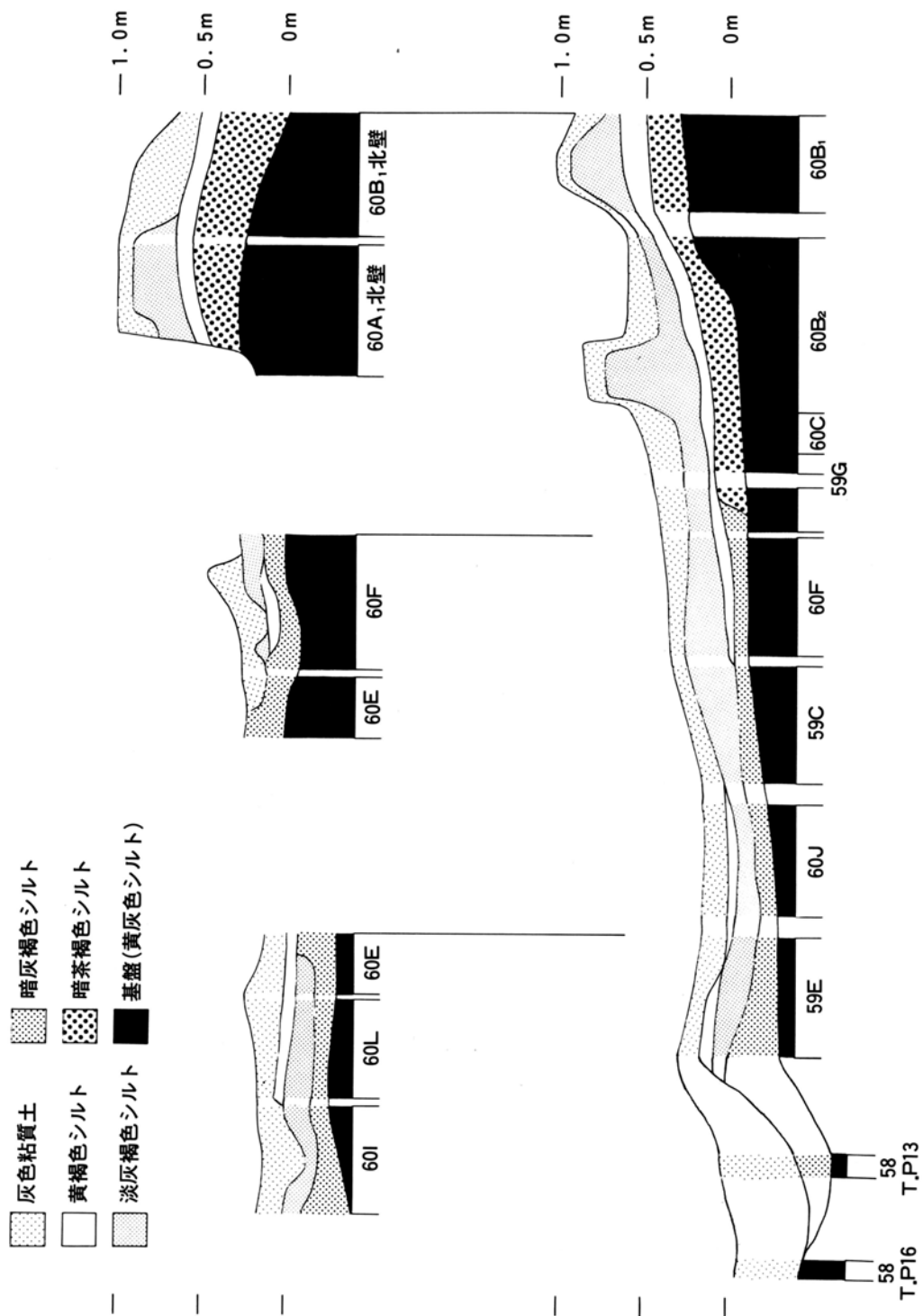
大淵遺跡は基本的に黄灰色シルトが基盤となっており、この基盤が北から南へ1 m程度の比高差をもって低くなっている。また、東西方向については、西側にむかってなだらかに基盤が低くなっていくことが、調査区内においても、遺跡中央北より走る道路部分の立会い調査においても確認されており、遺構も希薄となっている。東側についても若干低くなる傾向がみえるが、地形的な面は不明である。北側については、昭和56年～59年にかけての阿弥陀寺遺跡の調査、61年の福田川整備事業関係の大淵遺跡の調査において、旧福田川と思われる谷状の地形があることが認められており、遺跡内最高地である調査区北端のすぐ北側で急激に基盤が落ち込むものと思われる。この谷状の地形については、下限が護岸施設が作られた17世紀前後と想定されるのみで、上限についてははっきりしないが、遺構の分布からみて弥生時代中期においてすでに大淵遺跡と阿弥陀寺遺跡を隔てる地形があったものと考えられる。南側は、調査区南端で基盤が最も低くなっており、名鉄津島線をすぎて再び高くなっている。つまり大きく大淵遺跡の地形をみると、弥生時代～室町時代を通じて北側に谷状の地形をもち、西・南になだらかに落ち込んでいく微高地に遺構が作られているといえよう。

層序は下層より、基盤—黄灰色シルト(8層)、暗茶褐色シルト(7層)、暗灰褐色シルト(5層)、淡灰褐色シルト(3層)、灰色粘質土(1層)の順となっており、暗茶褐色シルトと暗灰褐色シルトの上層、淡灰褐色シルト(各々、6層、4層、2層)の上層に部分的に黄褐色シルトが乗っている。この黄褐色シルトには遺物はほとんど含まれず、下層との攪乱状態を示しており、整地に伴うものかと考えられた。基盤は60A₂区の北側で急な落込みをみせるが、この地形は後世にまで影響を与えているようである。さらに、弥生時代の包含層である暗茶褐色シルトは59G区の南側で終わるが、これは同期の遺構の分布とも合致する。古墳時代～11世紀にかけての遺物を包含する暗灰褐色シルトと淡灰褐色シルトは非常に似かよっており、場所によっては不可分な場合もあったが、60F区などで黄褐色シルトで区分され、上下の層であることが確認された。淡灰褐色シルト上層の黄褐色シルトは、調査区南側でのみ検出されている。灰色粘質土はほぼ全面にみられ、12世紀以降の遺物を包含する。特に、調査区北側では淡灰褐色シルトを削平して凹凸のある地形を作り出しており、現代にまで影響を与えるような改変となっている。

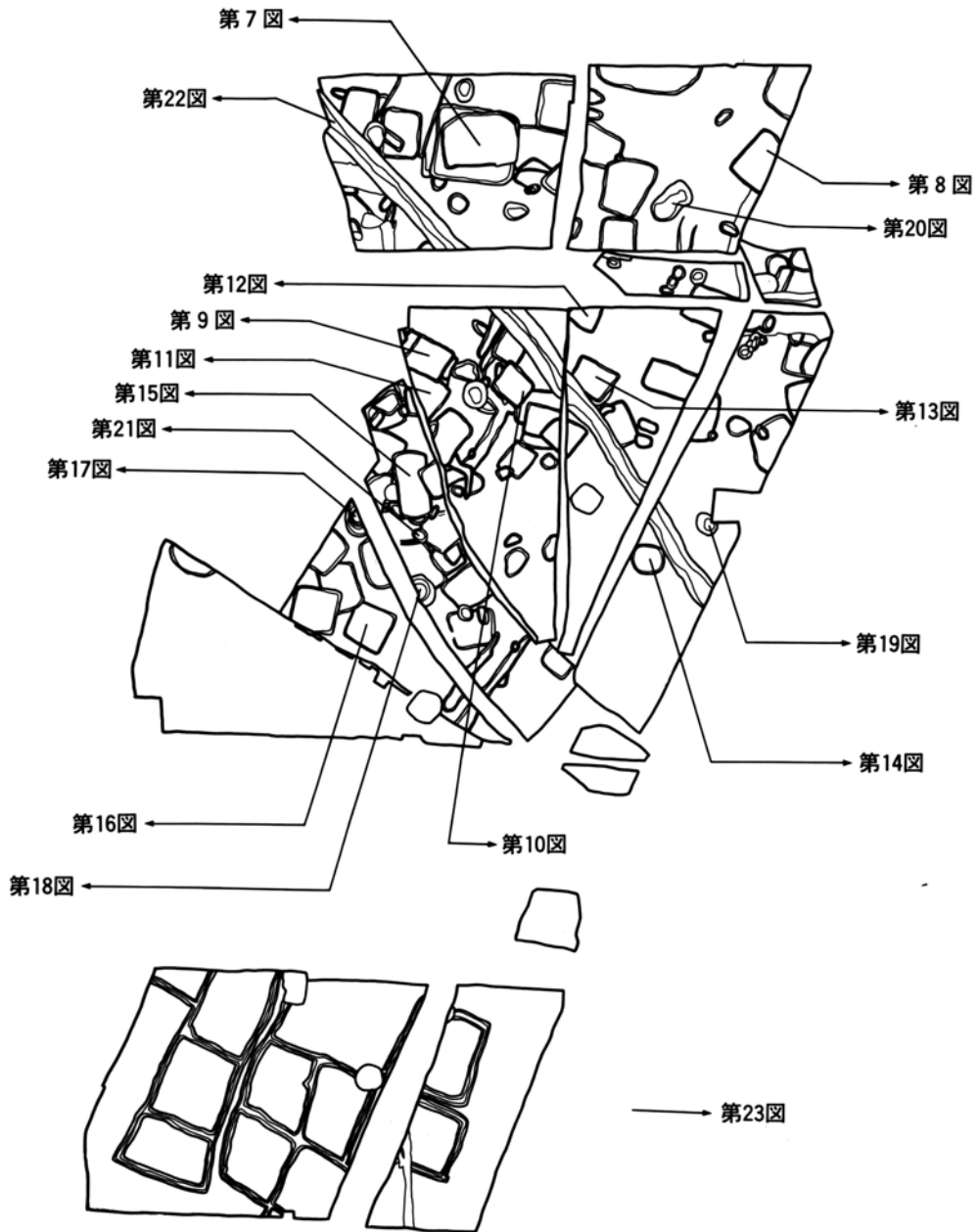
以上のように層序が確認されたため、発掘調査では基盤と暗茶褐色+黄灰色シルト上面、淡灰褐色シルト+黄灰色シルト上面でそれぞれ弥生時代、古代、中世の遺構検出を試みたが、古代面と中世面は分かちがたく、結局、下面—弥生時代、上面—古代・中世という2面の検出に終わった。それにあわせて遺構番号も下面、上面別につけることとした。また、挿図の層序の基本的な分類は下記の通りである。



第4図 層名基本図



第5図 土層模式図



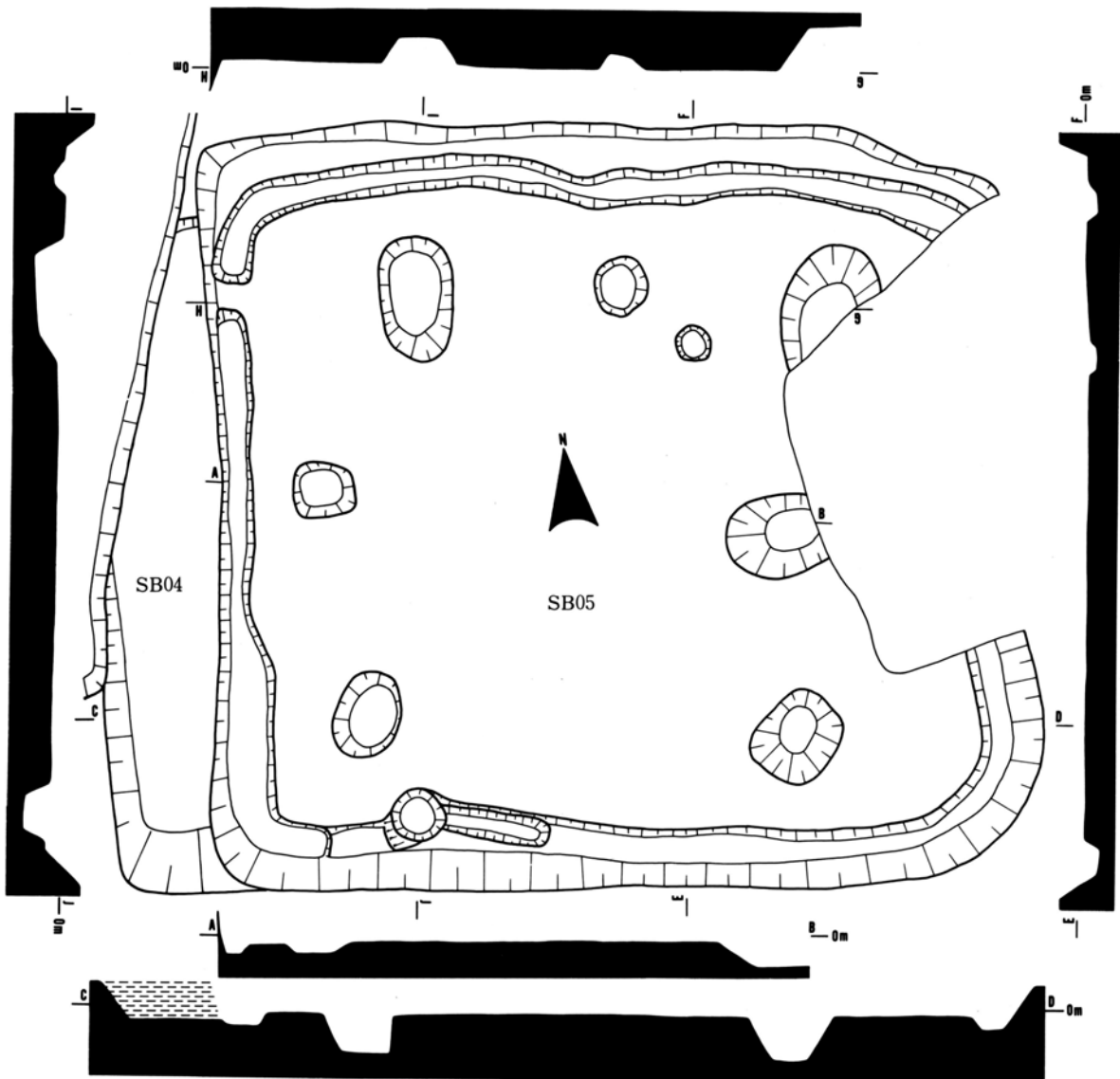
第 6 圖 弥生時代挿圖一覽

2. 弥生時代——下 面

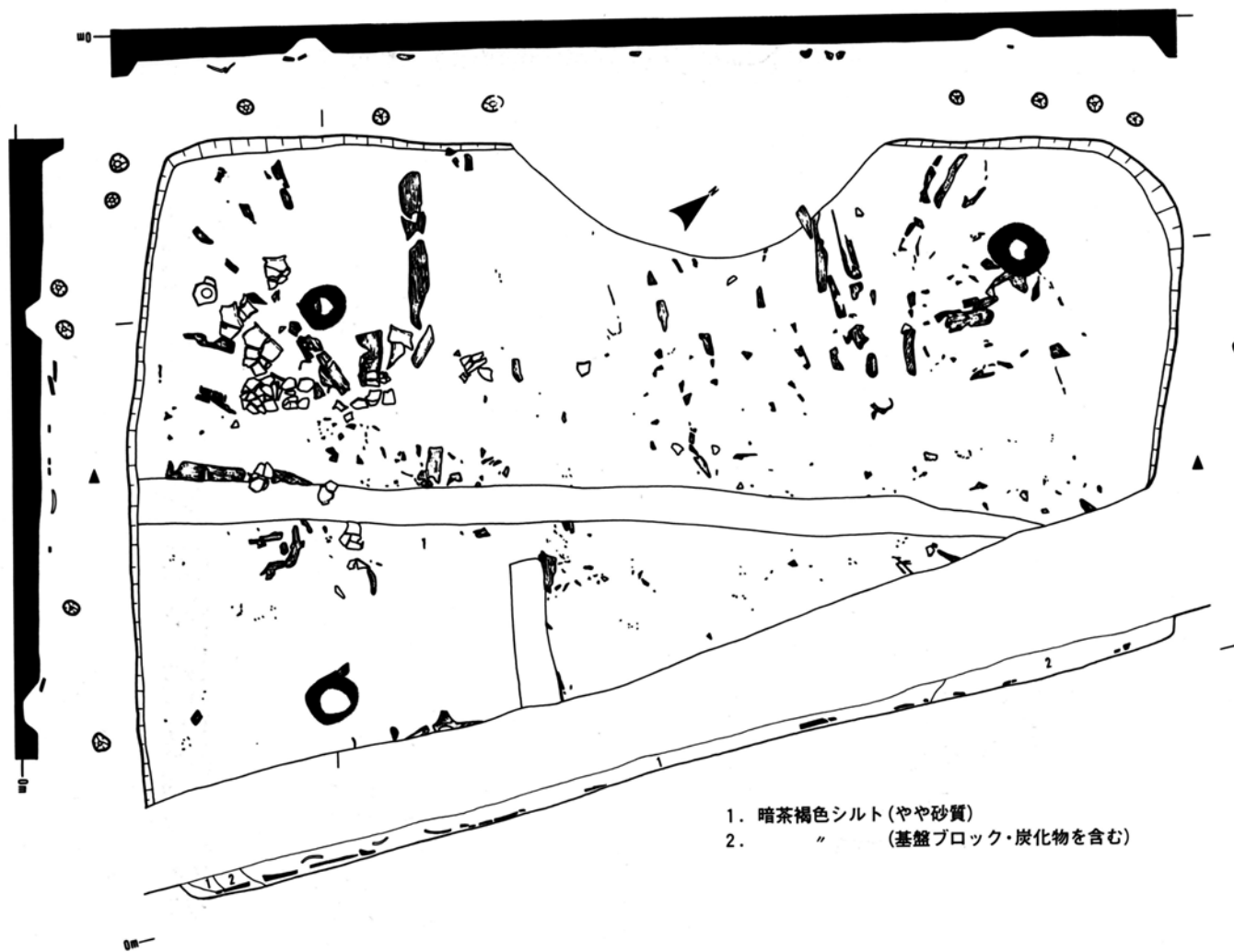
SB（住居）

弥生時代の住居は52軒検出されているが、全て竪穴住居である。住居は、60A₁と区南と60A₂北、60B₁区北、60A₂区と60B₂と59A区の南部分において広場のような住居のない空間があり、その周辺に2～3回の切り合いをもって作られている。60D区以南においては、住居の痕跡はまったくみられない。また、中央から北西にかけての住居群には周溝も柱穴もみられないものが多く、住居の掘込みレベルの差が影響しているためかと思われた。

SB01— 長径5m・短径3.9mを測り、幅30～40cm・床面より深さ5～10cmの周溝が住居内を全周する。柱穴は少なくとも4基認められ、南側の中央部のもも候補にあげられる。ま

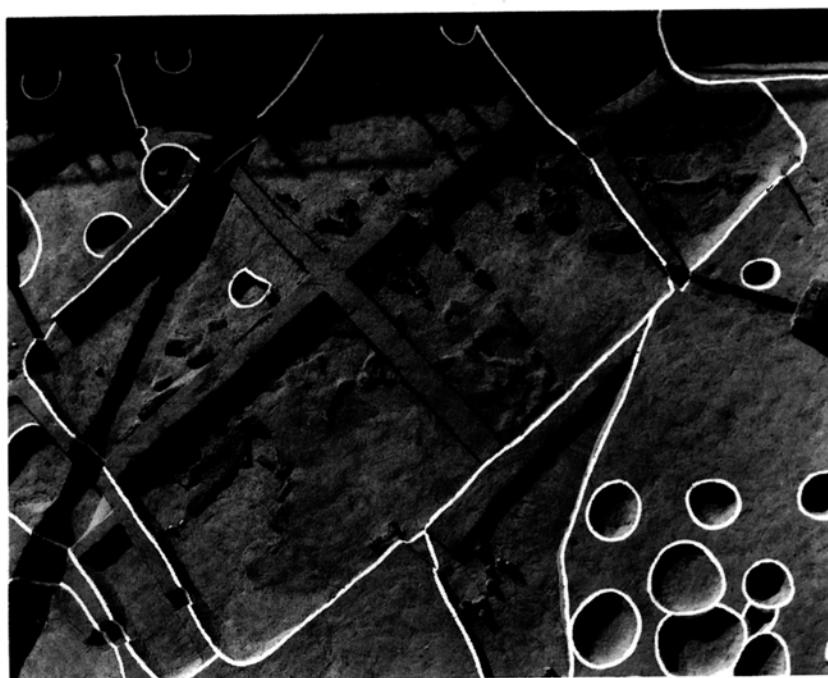


第7図 SB04・05 (1:40)



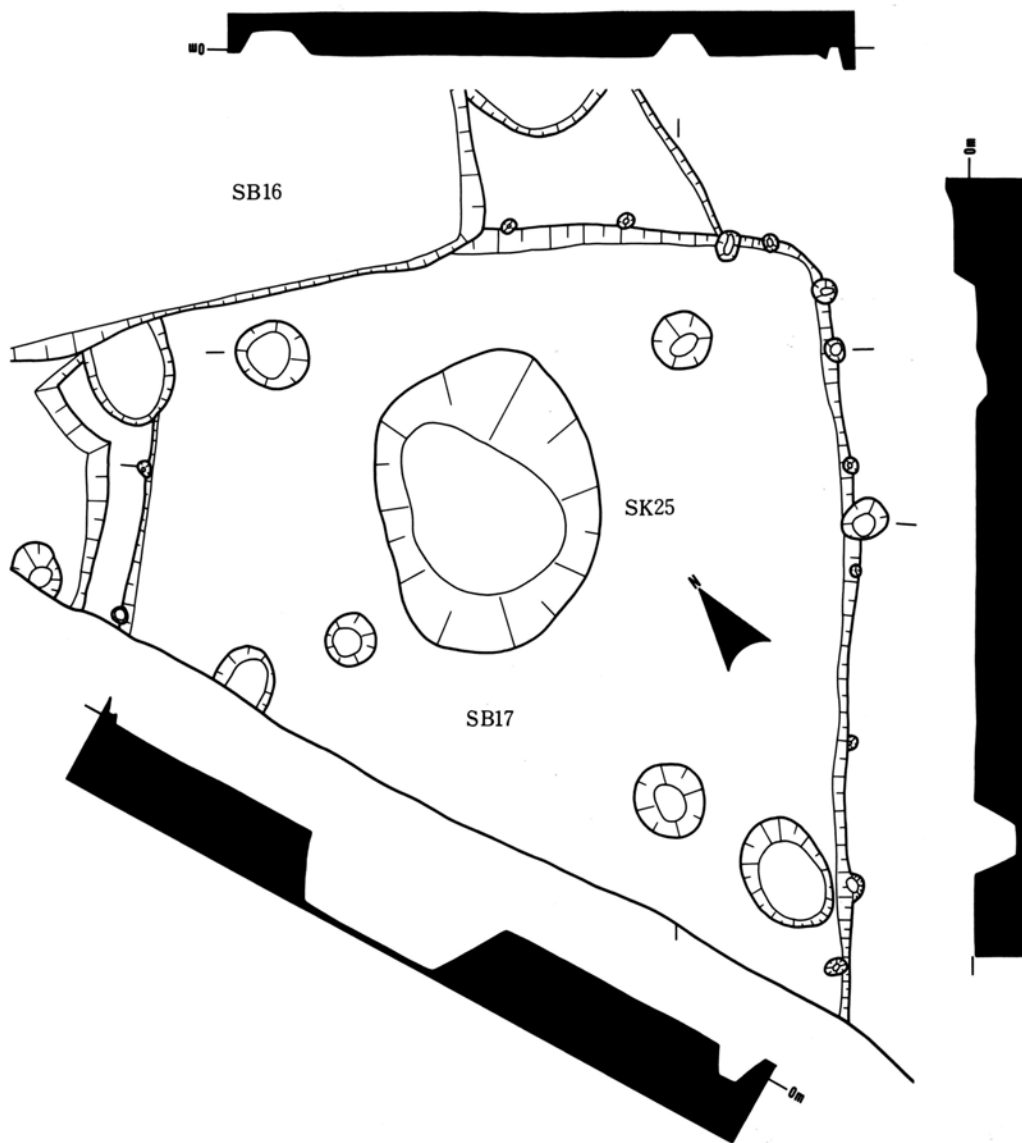
- 1. 暗茶褐色シルト(やや砂質)
- 2. " (基盤ブロック・炭化物を含む)

第8図 SB14 (1:40)



上: 第9図 SB21~23 (南東より)
土器出土状態

左: 第10図 SB16
炭化材出土状態



第11図 SB17 (1:40)

た、掘形の端部には3個の小ピットがみられ、垂木及び支柱痕の可能性がある。SB01 → SK03の順となる。

SB02— 長径5.5m・短径4.3mを測り、周溝はみられない。柱穴は4基あるが、北西のもののみやや大きくなっている。SB03→SB02→SK03の順となる。

SB03— 当初その規模の大きさから不明落込みとして扱っていたが、その形態より大型竪穴住居として認定した。規模は短径6.2m・長径10m以上を測る。

SB04— SB04→SB05→SB06の順に作られてゆくが、04と05については、ほぼ同

SB05 規模で同位置・同方位で建てられており、近接した時期の建て替えである可能性がある。

SB06 SB06は、やや不定形な形状をなし3基の柱穴をもつ。床面上において多量の土器廃棄がみられたが、細片が多い。SB05(第7図)は、掘形より床面まで約30cmを測り、竪穴住居中最も壁面のしっかり残っているものである。周溝はほぼ全周するが、北西部で一部途切れる場所がある。柱穴は6基あり、掘形が他の住居のものに比してやや大型であ

り、まん中の2基が僅かに西方にずれている。土器廃棄も床面上で若干みられ、SB06と違って大きめの破片が目立った。

SB11— 長径6.4m・短径4.3m~5.3mを測る。形態は不定形な台形状を示しており、4基の柱穴も方形をなす位置ではなく、壁に沿うように不安定に作られている。

SB14— 床面上においてまとまった炭化材と部分的に焼土が出土した(第8図)。北東から南西方向にある太めの部材は、サブトレンチの掘削によりほとんど失われたが、その位置からみて棟木と思われる。さらに、それに直行するように出土した太めの部材については、梁の可能性が考えられ、中央に向かって放射状に出土した部材は垂木及び支柱になるものであろう。また、住居掘形にそって検出された小ピットについても垂木・支柱の痕跡と思われる。柱穴は3個検出されたが、それに伴う部材については不明である。数個体の土器が南西部において出土したが、全て炭化材の上部からあり、床面で出土したものは数少ない。

SB16— 北西側に拡張が認められる。まとまった炭化材の出土があり、棟木・垂木の可能性のあるものも若干みられたが、SB14ほどはっきりとはしていない。土層の観察と炭化材の分布により、拡張時点での焼失であると考えられた。

SB17— 短径4.8mを測り、SB16に切られている(第11図)。北西にも住居状の落込みがあるが、住居であるかどうか、確定できなかった。掘形である壁面上端から斜辺に、垂木及び支柱になるものと思われる小ピットが13基検出された。中央の大型土坑(SK25)については、土層断面の観察により住居に伴う可能性が高く、埋土より多量の炭化物を出土している。柱穴はやや北東によった位置で4基確認されている。

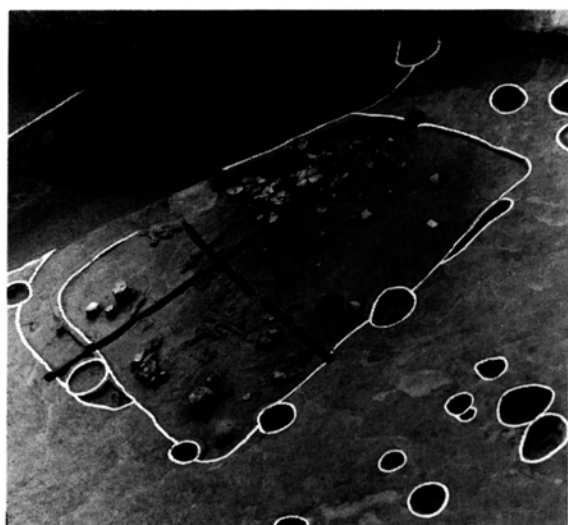
SB21— SB21・22・23(第9・10図)とも長径約4~5m、短径約3~4mの中程度規

SB22 模の住居であり、22と23には各々建て替えの痕跡がみられ、SB22~22建て替え

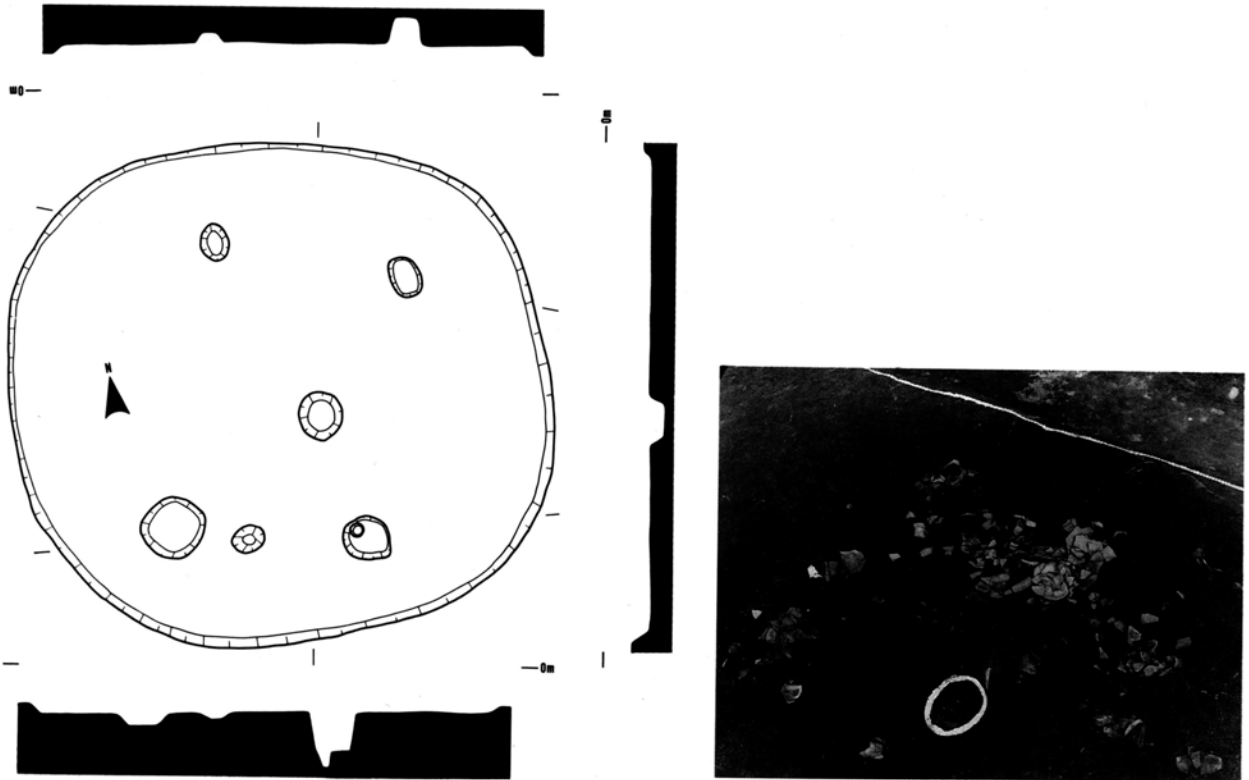
SB23 →SB23と、SB22建て替え→SB21の順となる。3軒ともにほとんど破片の状態であったが、床面上で多量の土器廃棄がみられた。それぞれ、柱穴・周溝とも検出されなかった。



第12図 SB26 (西より)



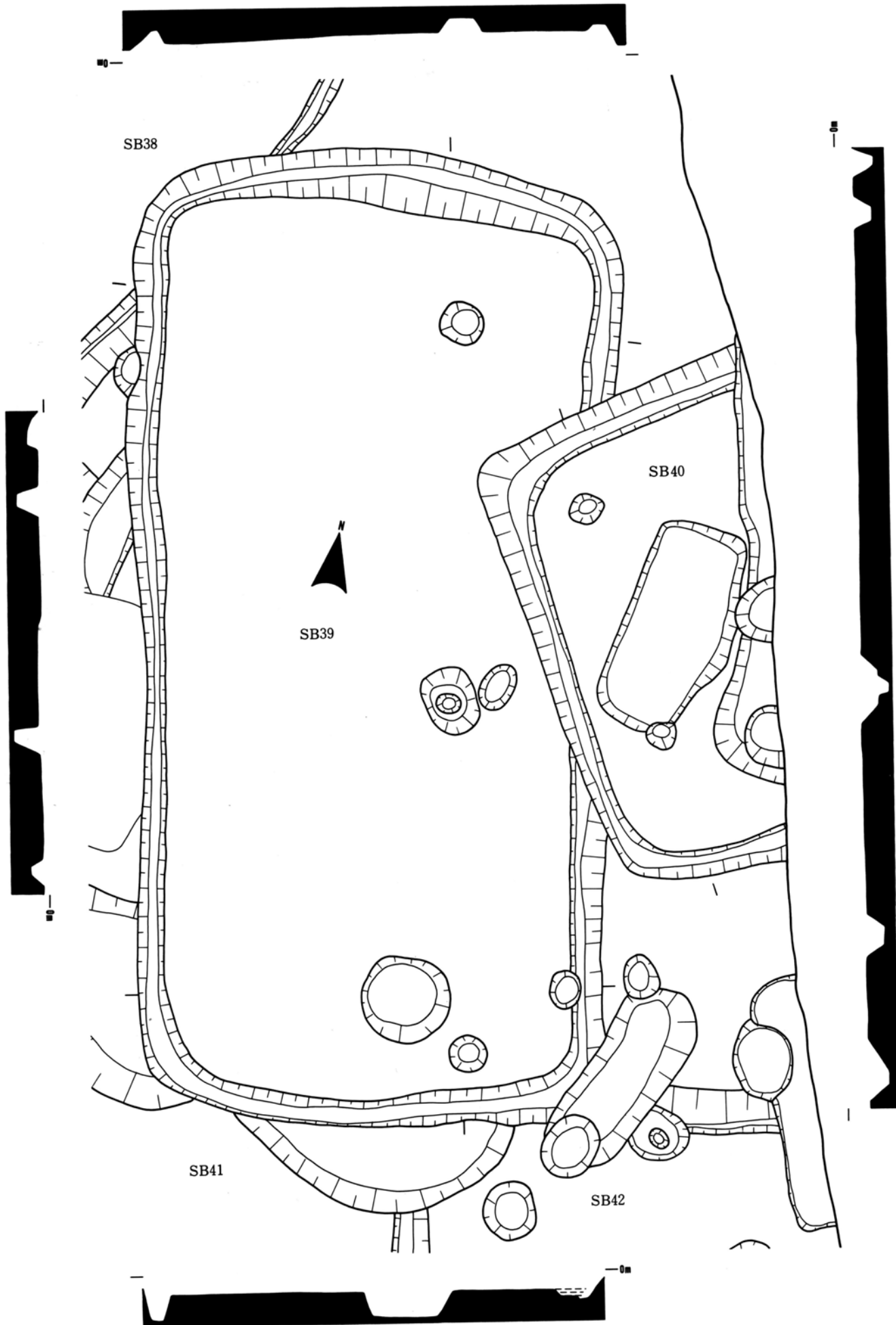
第13図 SB27 (西より)



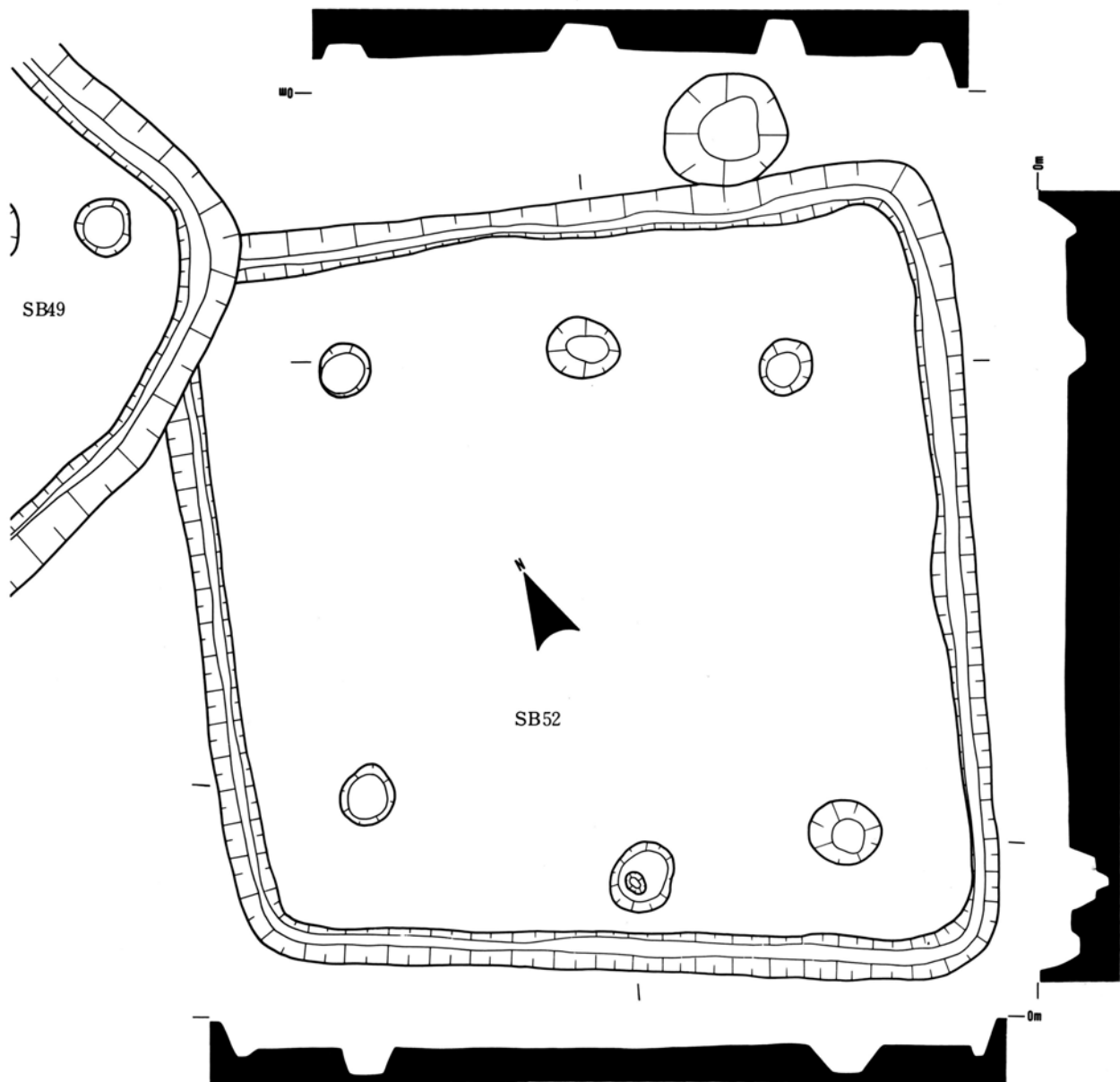
第14図 SB35 (1:40)

写真は上層土器出土状態(南から)

- SB25— 長径3.4m・短径2.8mを測る小型の住居である。遺物の出土はほとんどみられず、柱穴が3基確認されている。
- SB26— SB21～SB23と同規模・形態の住居であり、同じく床面上より破片状態の土器群SB27が出土している。特に、SB27では土器片間に若干の炭化物が見られた。
- SB29— 短径3.3m・長径5.4m以上を測る長方形の住居で、SB03やSB39と同形態をしているが、規模はそれらに比して小さい。柱穴等は確認できなかった。
- SB33— 周辺の住居群の中で唯一明瞭に周溝が確認されたものであり、東側の南よりで1ヶ所途切れる部分がある。長径は約5.3mで、やや隅丸方形を呈する。
- SB35— 長径3.5m、短径3.2mを測る隅丸か円形に近い住居であり(第12図)、埋土上層より多量のまとまった土器群が出土している。これらは、当初上位面で土器廃棄SX01として扱っており、土層断面でもはっきりしたことは分からなかったが、廃棄の範囲がSB35と一致するため、住居廃絶後の投棄と考えた。構築されている所は、他の住居と切り合いながら重層的につくられていく場所ではなく、離れた地点に位置している。柱穴はやや不定形に4基検出され、中央よりも同規模のものが1基みられた。
- SB36— 長径4.2m、短径3.0m～3.7mのやや台形状をなす住居である。周溝は全周確認された



第15図 SB39 (1 : 40)



第16図 SB52 (1:40)

が、柱穴については不明であった。

SB39— 長径7.7m、短径4.8mを測る、長径が短径に比して非常に長い長方形の大型住居である(第13図)。形態はSB03と類似する。周溝は全周し、柱穴は東側のみに3基検出された。SB38→SB39、SB41→SB39、SB39→SB40の順になる。

SB44— SB44は検出された住居中最小のものであり、長径・短径とも3.3mを測る。周溝はSB47 全周するものと思われ、SB43→SB44→SB42→SB41の順となる。SB47もSB44と同規模・形態のものである。

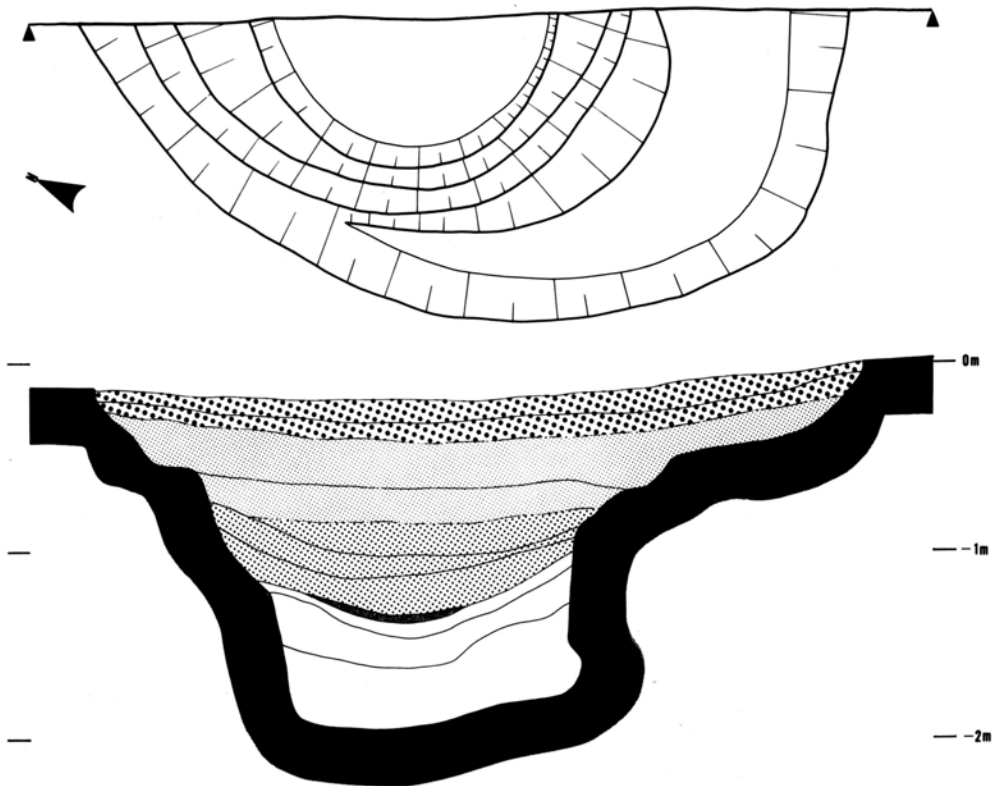
SB52— 住居群の南端に位置するもので、6基の柱穴を持つ(第14図)。柱穴の内中央の2基、特に南側のものは外方向に張り出している。周溝は全周する。

SE (井戸)

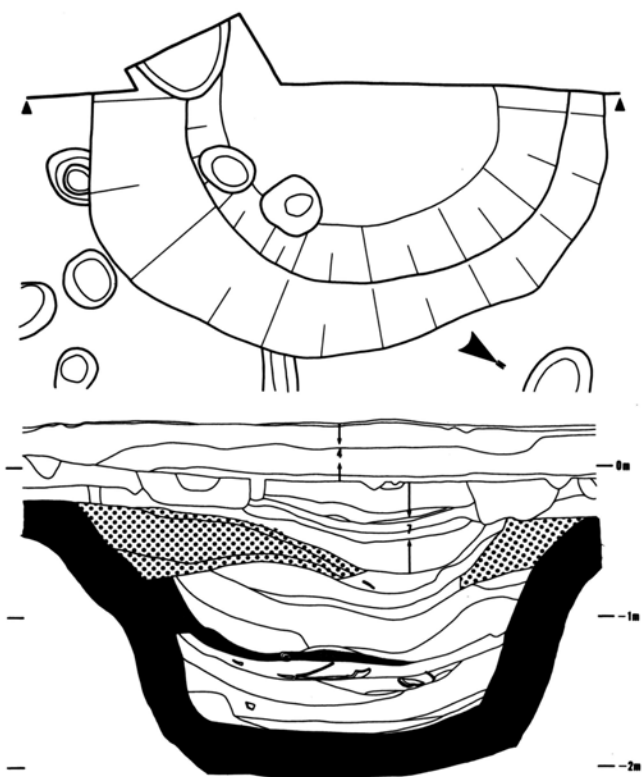
総数3基確認された。井戸枠等の施設の出土がみられなかったが、大型の土坑で、下端が砂層に達しており、上端が開くロート状の落込みを示すもののうち、二要素をもつものを井戸と認定した。掘削された場所は、弥生時代の遺構がみられる地域でもやや低い地点にあたる南部に集中している。

SE01 - 60C₃区の北隅で検出されたため、1/2程度しか調査できなかった(第17図)。そのため、水道管のため未調査であった部分を挟んだC₂区に広がる深さ3~5cmの浅い不定形な落込みが、上層でつながるかどうかは不明であった。壁は幾段かになる階段状に掘削されており、南側の上部ではやや大きめの平坦面が作られている。埋土は、下層に水平堆積する灰黒色及び灰色粘土があり、その上の窪み状の部分に炭化物と自然木が堆積し、さらにその上に暗灰褐色シルト・淡灰褐色シルトが水平堆積している。遺物は暗灰褐色シルト上部より若干量出土しているのみである。

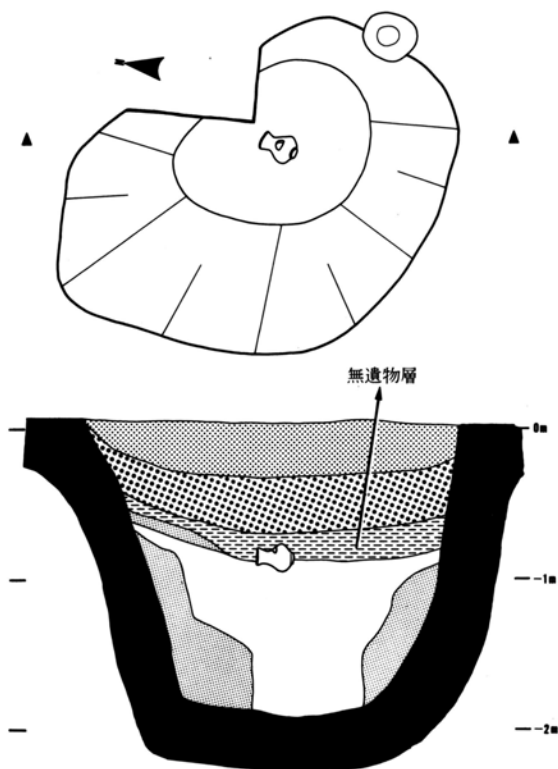
SE02 - 60C₂区の南西壁沿いで検出したため、SE01と同様1/2程度しか調査できなかった(第18図)。断面形は、上部でやや開く台形を呈している。埋土は、下層が黒褐色粘土、斜めにはいる炭化物層を間に挟んで青灰色粘土、暗茶褐色シルトが堆積する。ただ、この埋土中の粘土は粘度が低く、褐色シルト及び暗茶褐色シルトをブロック状に多く



第17図 SE01 (1:40)



第18図 SE02 (1 : 50)



第19図 SE03 (1 : 50)

含んでいた。堆積状況は、下層下部は水平であるが、それより上の層はSE01と違って上部より土が順次流れ込んだような状態をみせている。遺物のほとんどは下層の上部、炭化物層のすぐ下の地点で自然木の木片と共に出土している。

SE03

59A区の中央部東端で検出されたため(第19図)、全体の1/5程度は隣接する民家の土台の下になり、未調査のまま終わってしまった。また、下層については、湧水のために調査が困難をきわめた。埋土は、下層の両側に淡灰褐色シルトが二段からなる階段状に堆積しており、その中に灰色粘土(暗灰褐色シルトブロックが多く混入する)がロート状に堆積する。この灰色粘土は、下部の垂直に落ちるあたりで上下二層に分かれる可能性があったが、上述の理由で確認し得なかった。また、その上層には淡灰褐色シルト、暗灰褐色シルト(第19図の層名中「無遺物層」としているもの、炭化物を多量に混入する)、暗茶褐色シルト、暗灰褐色シルトの順にはほぼ水平堆積している。

遺物は、上下層に分かれて出土しており、暗茶褐色シルト層より出土したものを上層遺物、灰色粘土層より出土したものを下層遺物として取り扱った。この両層の間に炭化物を含む暗灰褐色シルト層がはいており、この層の下端で灰色粘土層の上端に半分埋まった状態で円窓付土器が横倒しになって出土した。同レベル付近での出土はこれ1点のみであり、埋没しつつある井戸に対する最終的な祭祀に関係するものかと思われる、炭化物を含む層が堆積した後に、新たな土器廃棄が行われている。

SK (土坑)

SK03 — 長径3.2m・短径2.5m・深さ30cmの不定形な卵型を呈するもので、暗茶褐色シルトが埋土となっている。遺物群は当初包含層(暗茶褐色シルト)中で検出され、伴う遺構が不明であったが、土層観察の結果SK03の最上層に廃棄されたものであることが確認された。

SK10 — 現長11.6m・深さ7cmの下端に向かってゆるやかに傾斜する大型の土坑である。竪穴住居である可能性も考えられる。埋土は暗茶褐色シルトで、穿孔された円形土製品(甕体部)が出土している。

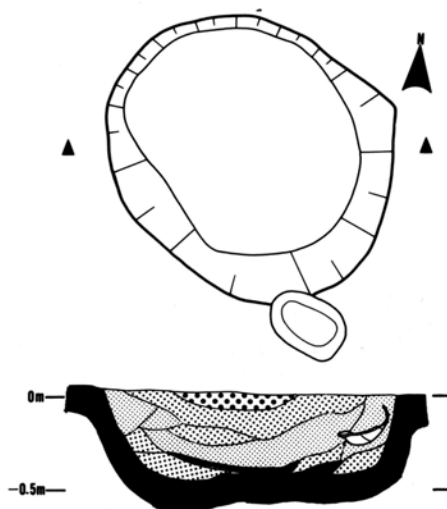
SK13 — 長径5.0m・短径2.8m・深さ40cmを測る。下端は凹凸のある不安定な形状をなし、上端も全体に不定形な方形である。SK03と同様に埋土の暗茶褐色シルト(第20図)の上部で土器群が出土している。

SK47 — 弥生時代の土坑中最も炭化物の層が明瞭にみられたもので(第21

図)、底面直上に炭化物層には焼土ブロックが多く含まれていた。埋土は両側からシルトが流れ込んだ状態となっており、壁際より甕1個体が出土している。



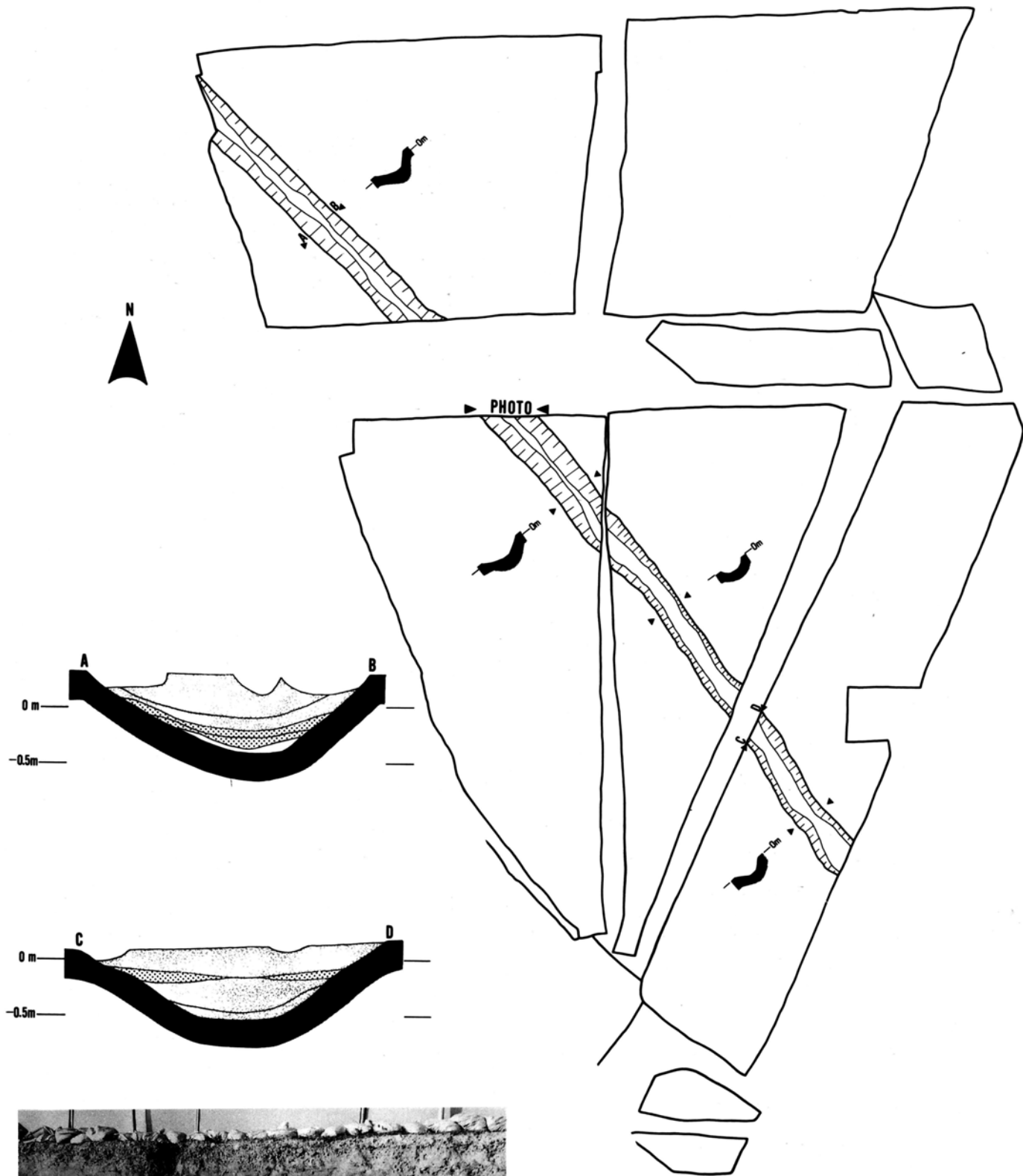
第20図 SK13 土器出土状態(南から)



第21図 SK47 (1:40)

SD (溝)

SD01 — 調査区を北西から南東にかけて横断するように走る、幅2~3m・深さ50~80cmの溝である(第22図)、断面は、北西側でV及び台形、南西側で台形及びU字形を示す。埋土は、部分的に最下層や間層にシルト層がみられたが、ほとんどが砂(中~細砂)であり、水流があったことを示している。SD01は、弥生時代中期末としたその他の全て遺構を切って掘削されており、遺物の大多数が中期のものであったが、中・上層の砂層より破片ではあるが弥生時代後期~古墳時代前期の遺物が僅かに出土しており、少なくともその時期まで水流があり溝としての機能をもっていたものと考えたい。



第22図 SD01 (1:40)

※ 写真は60A₂区北壁

S X (不明遺構)

S X 0 1 - 弥生時代の居住地域から若干下がった低い場所にあたる60F区・59B区より検出された、溝で区画された方形の部分全てをS X 0 1 (第23図)と呼ぶこととする。

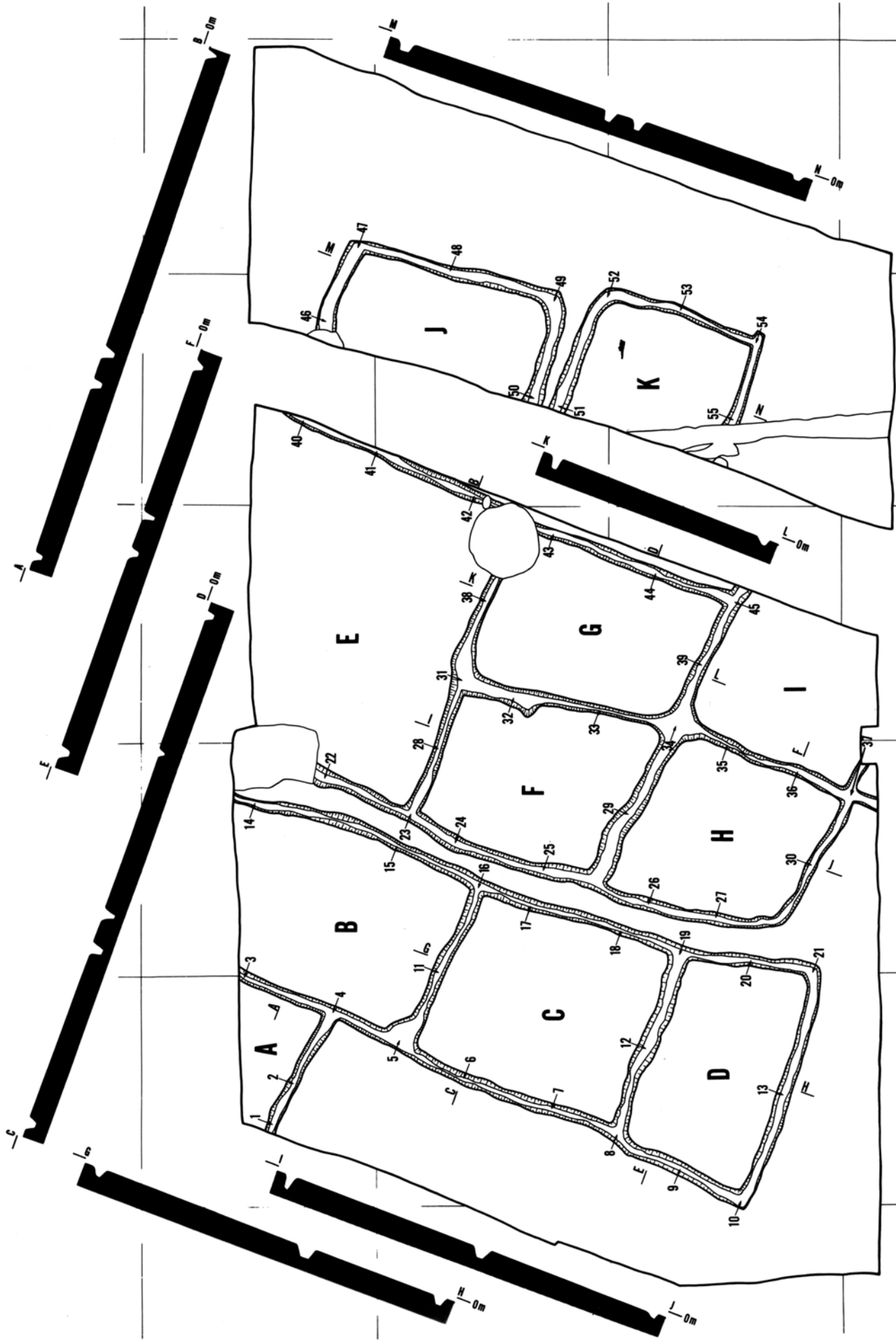
数片の土師質土器が溝内から出土したのみで、遺物はほとんどみられなかった。そのため、当初これらの調査区では弥生時代に属する遺構が無いことから、古墳時代後期遺構のものであろうと考えたが、当該区にある全ての遺構に切られることや、古墳時代以降の地割とすれば掘立柱建物と重複し、地割として問題を残すこととなり、それ以前に掘削されたものと考えたほうがよいという結論に達した。そのため、この遺構の時期としては弥生時代中期～古墳時代中期までの長い時間が充てられる。

溝は、幅30～70cm・深さ30～50cmを測り、断面はU字形をなす。全体に基盤とよく似た暗黄褐色シルトの均一な埋土で、水流の痕跡はみられなかった。また、溝と溝の交差部分についても精査したが、明瞭な切り合い関係は認められず、同時に掘削されたものと考えられた。基盤と類似した埋土であったため、厳密なものとは言い難いが、各々の溝底レベルを第2表に示した。これによれば、全体に北側が高くなることと、溝交差部よりその間の中央付近が深くなる傾向がみられることが窺える。A～Kとした方形区画は、約7～9mの方形及び長方形をなし、北側にはさらに大きな区画が存在する。また、Iの南にももう一区画が想定できる。

番号	レベル	番号	レベル	番号	レベル	地区	東西	南北	レベル
1	-21	21	-25	41	-18	A	—	—	-8 ~ -11
2	-20	22	-30	42	-30	B	760	—	-8 ~ -12
3	-23	23	-28	43	-29	C	810	910	-6 ~ -16
4	-21	24	-35	44	-16	D	930	580	-8 ~ -13
5	-28	25	-34	45	-24	E	1,320	—	-8 ~ -14
6	-28	26	-30	46	-28	F	700	860	-5 ~ -11
7	-30	27	-32	47	-31	G	640	920	-5 ~ -9
8	-26	28	-35	48	-37	H	710	760	-9 ~ -12
9	-28	29	-30	49	-30	I	—	780	-7 ~ -14
10	-27	30	-23	50	-27	J	—	910	-7 ~ -16
11	-21	31	-25	51	-25	K	—	685	-1 ~ -8
12	-30	32	-23	52	-28				
13	-26	33	-21	53	-20				
14	-22	34	-26	54	-17				
15	-38	35	-35	55	-22				
16	-34	36	-24						
17	-35	37	-20						
18	-30	38	-34						
19	-28	39	-28						
20	-26	40	-16						

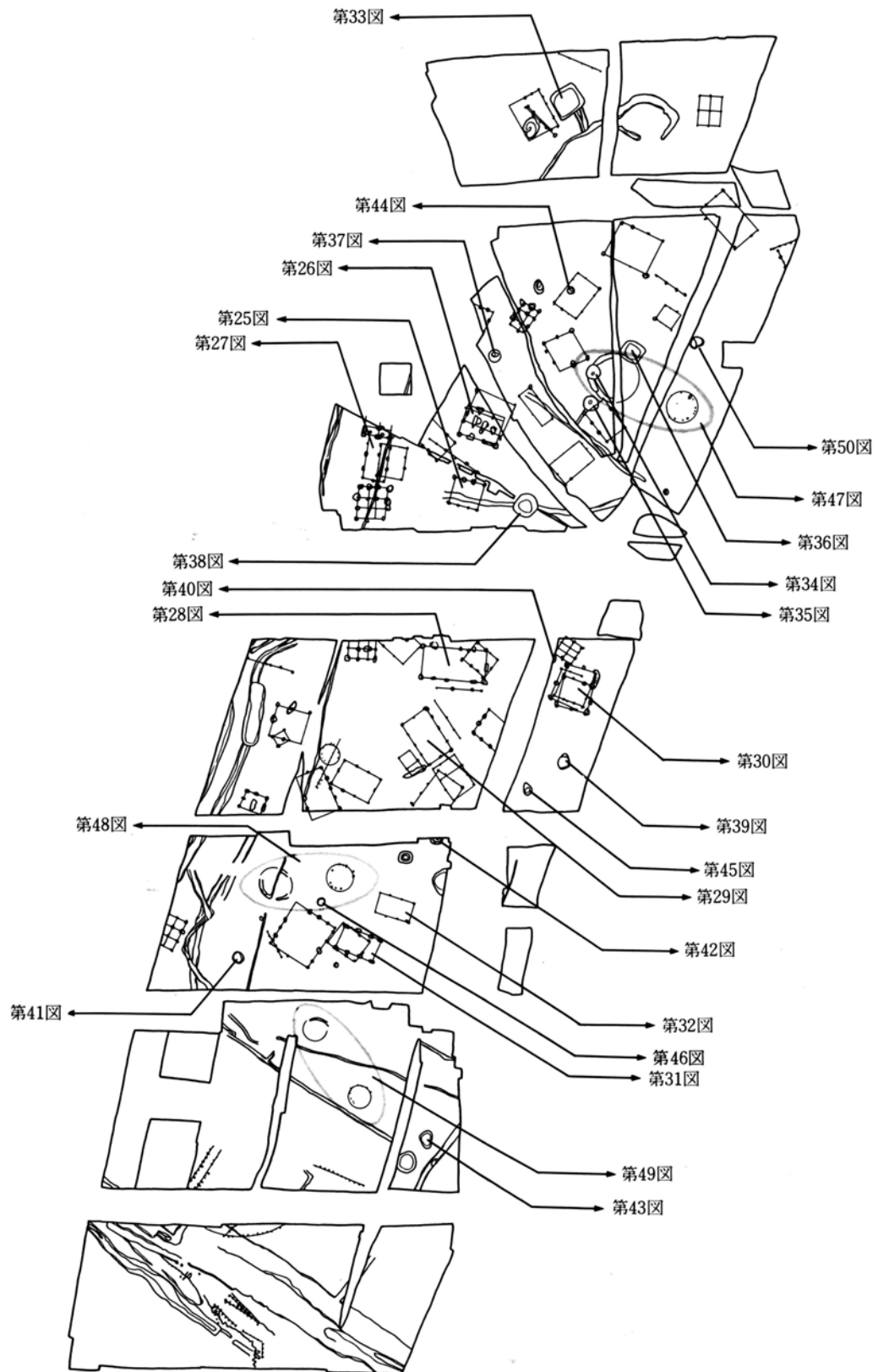
※ 数値はcmである。
 ※ 各地区の東西は北西-南東、南北が北東-南西をさす。
 ※ 溝で囲まれた方形の区画を11に分け、各々の規模を計測した。計測値は方形区画側の下端間で求めた。

第2表 S X 0 1 計測表



第23图 SX01(1:200)

古墳時代後期～平安時代中期遺構——上面——



第24図 古墳時代後期～平安時代中期挿図一覽

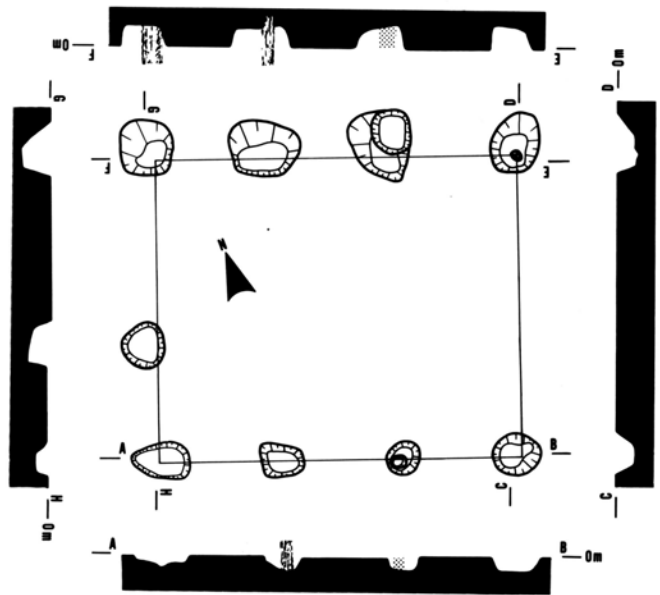
3. 古墳時代後期～平安時代中期 上 面

SB (住居),

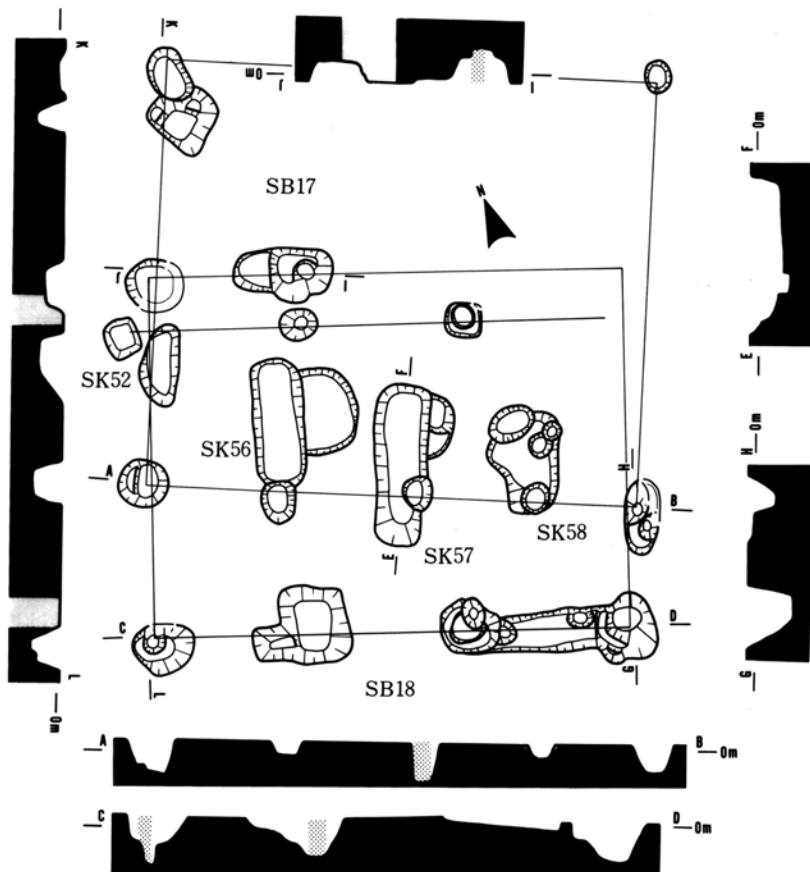
SA (柵列) として番号をふったものの中で、掘立柱建物に関連すると思われるピット列については、ここで扱う。

SB 0 1 — 桁行 4 間または 5 間×梁間 2 間以上となる。桁行が法形の掘形をもつ SE 0 1 と同方向をむき、同遺構との関連が考えられた。

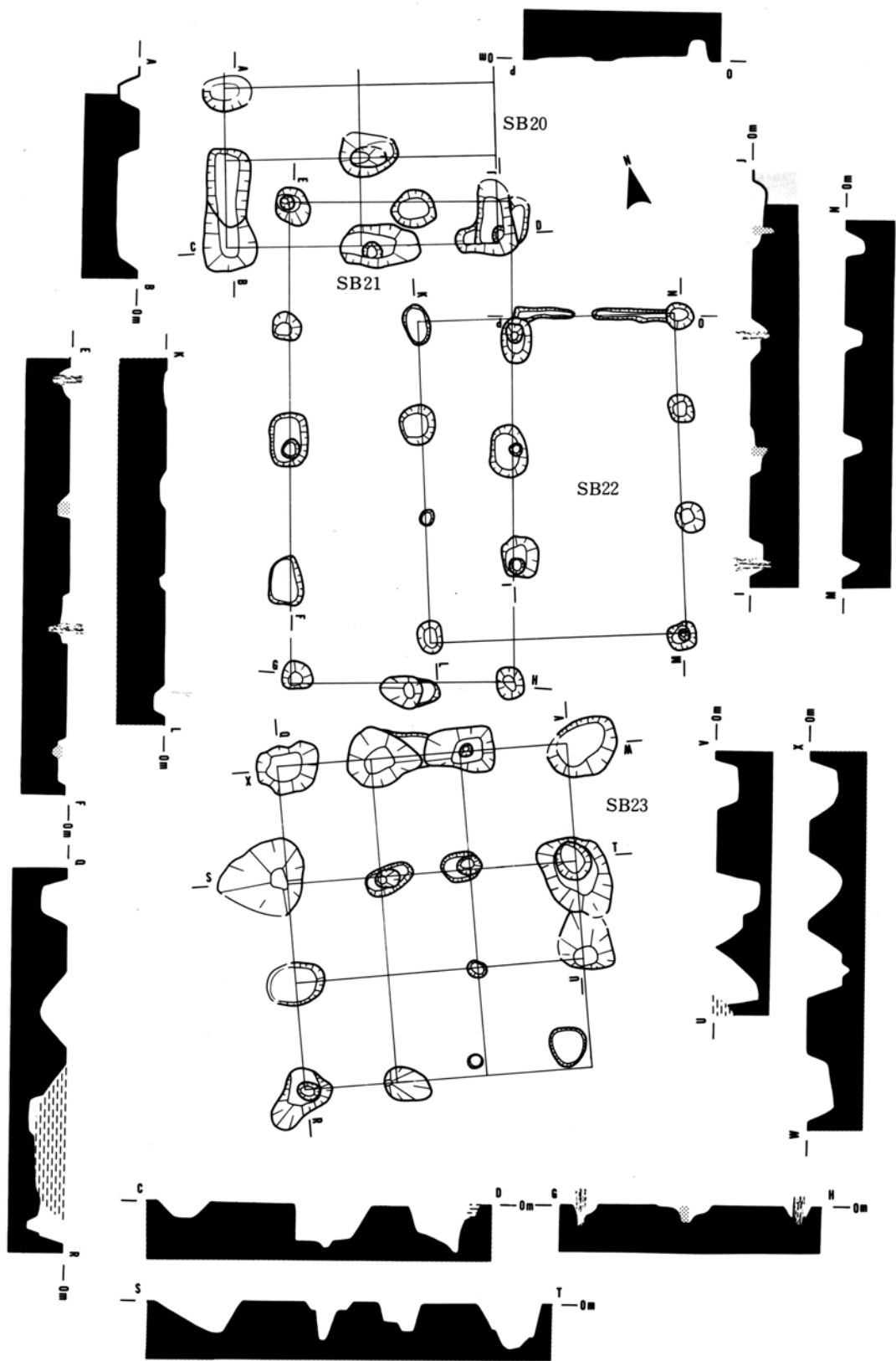
SB 0 2 — 他の遺構と切り合うことなしに検出された 2 間×2 間の総柱建物であるが、全ての柱穴が 20~30cm と他の総柱建物のそれと比べて、ずいぶん規模の小さなものになっている。



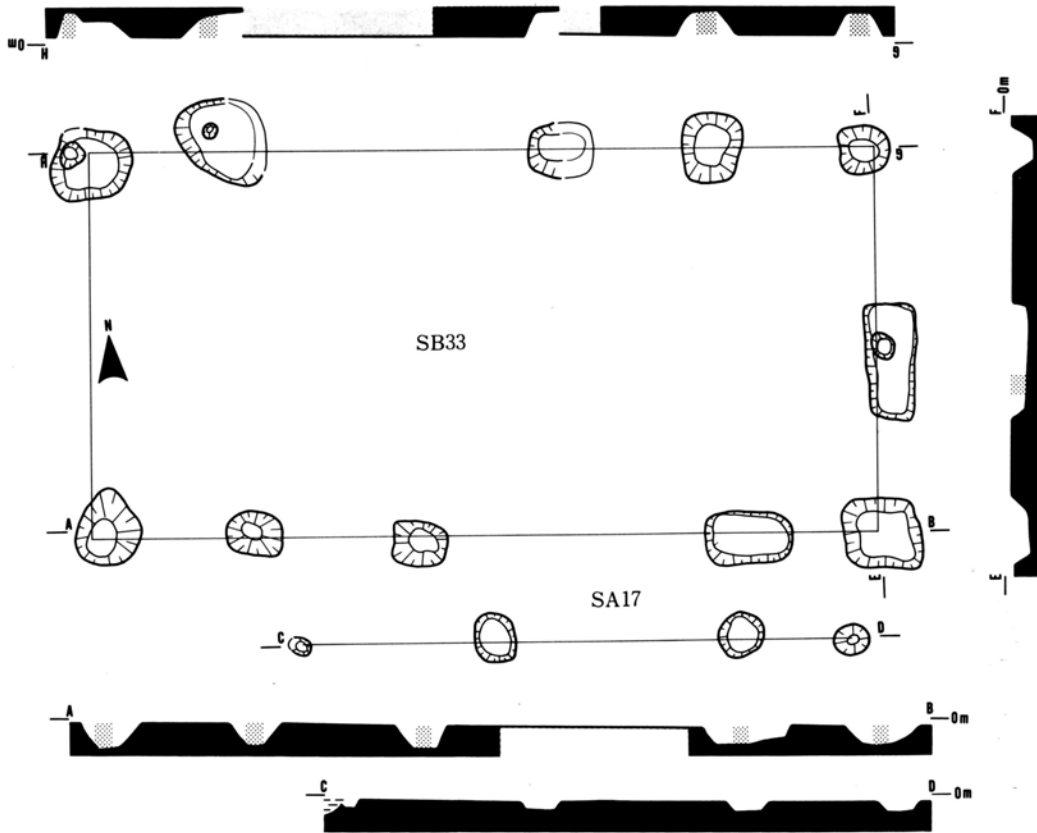
第25図 SB 2 4 (1 : 40)



第26図 SB 1 7・SB 1 8 (1 : 40)

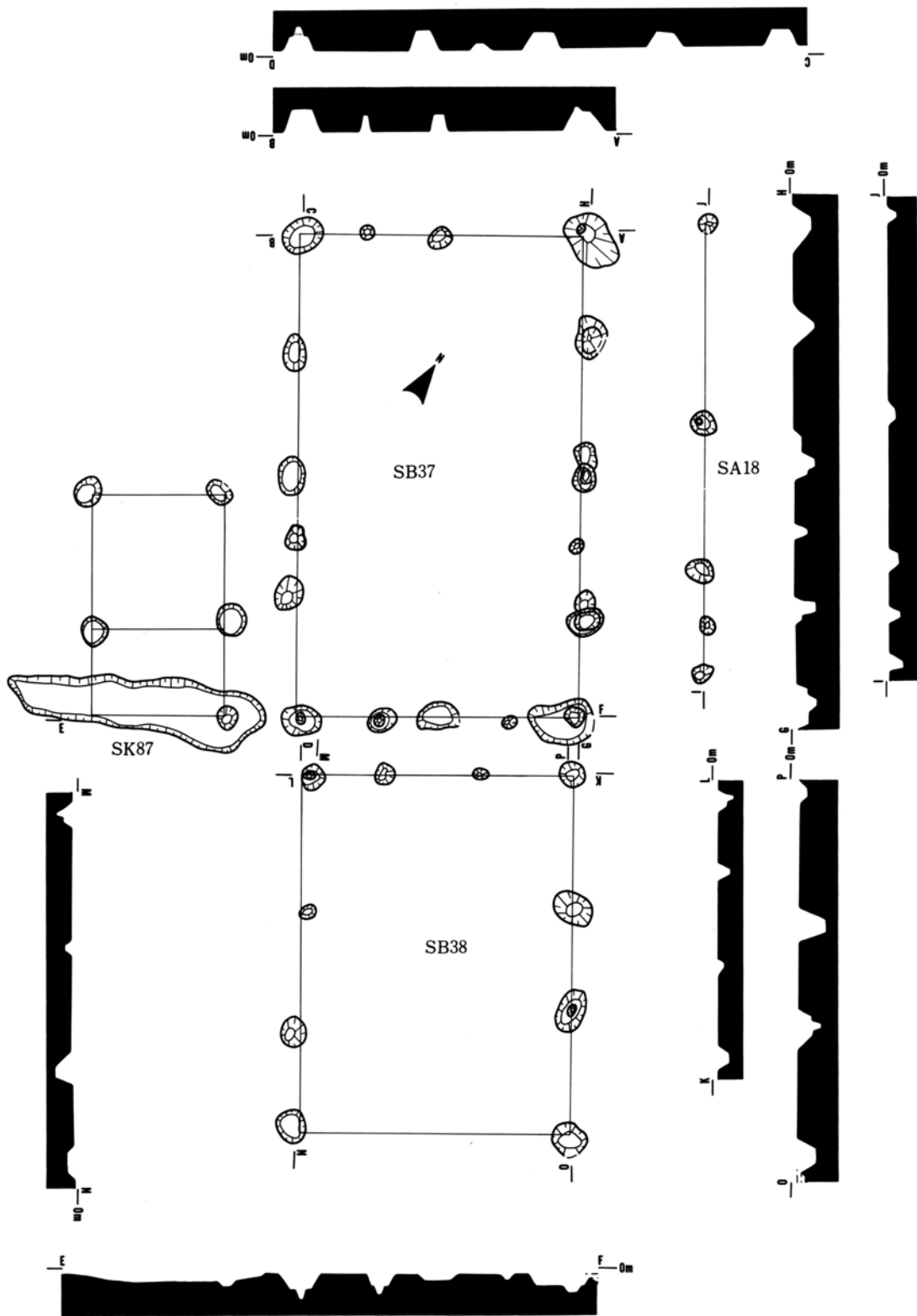


第27图 SB20·SB21·SB22·SB23(1:40)

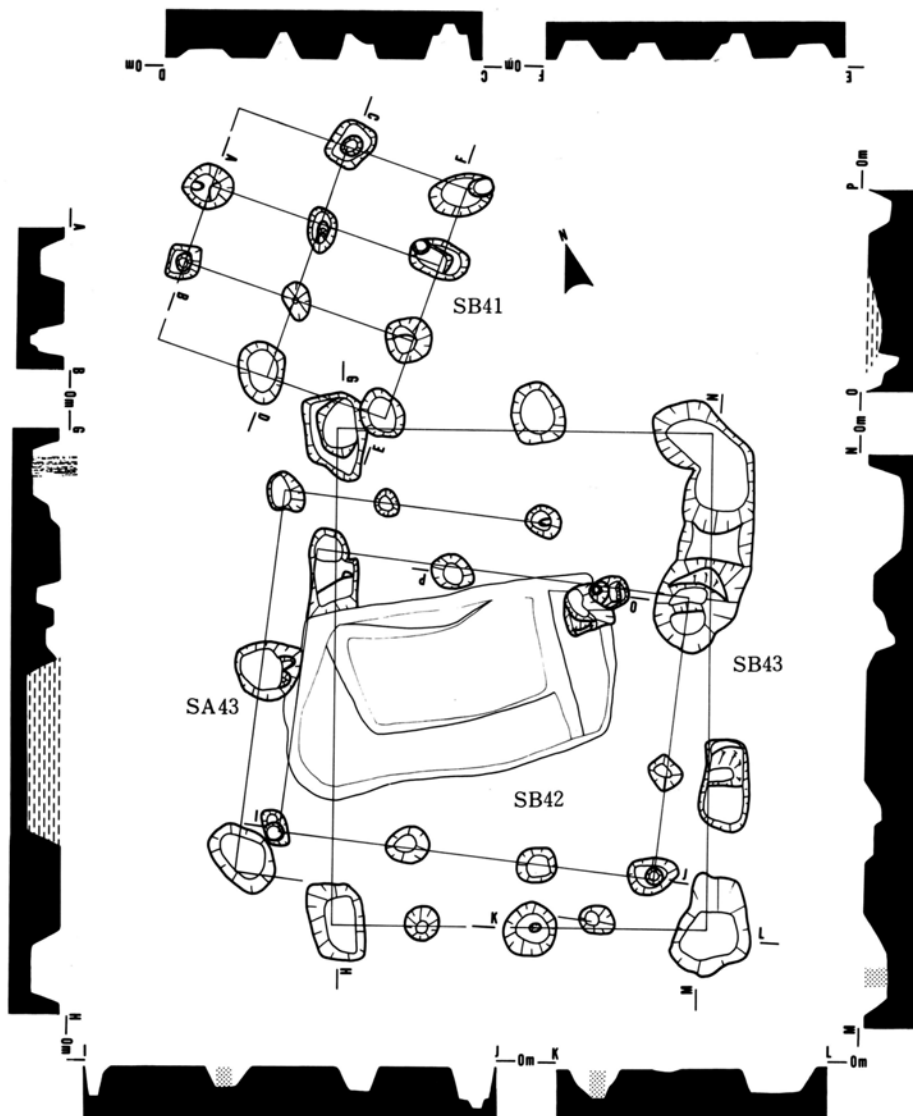


第28図 SB33・SA17(1:40)

- SB17 - SB17は桁行4間×梁間1間で、これとほぼ重なるようにあるSB18も桁行3間×
SB18 梁間1間で梁間側が狭くなっている(第26図)。SB18の中央において斜方向に4基
(?)並ぶ長楕円形の土坑SK52・SK56~58は、SB17の南側桁行にあたる柱
穴に切られている。SB18との関係は不明である。また、SB18の北側桁行の内側
には、若干ずれながらも並行して走るピット列があり、建て替えの可能性が考えられた。
- SB20 - SB20は東西方向2間の総柱建物で、西側の柱穴列において南→北の順に掘形が掘られ
SB21 ていったことが観察された。SB21は桁行4間×梁間2間の桁行方向に長い掘立柱建物
SB22 で、SB20に切られている。断片ながら柱部材は6基の柱穴に残っており、その他の全てに土
SB23 層観察で柱痕が確認できた。SB22は桁行3間×梁間1間を測り、北側梁間の柱間をつ
なぐように幅6cm・深さ6cmの溝が走っている。SB23は、南側が後世の掘削で削られ
ているが、3間×3間の今回の調査の中では最も大きい総柱建物となる。(第27図)
- SB24 - 桁行3間×梁間1間(?)の掘立柱建物で、桁行の北側の2基、南側の1基において断
片的に柱部材が残存する。梁間は西側のピットを使えば3間となるが、他は検出されてい
ない。(第25図)
- SB27 - 桁行2間×梁間2間と小規模なものであるが、SB18でみられたような長楕円・長方
形の土坑SK78が中央にあり、南東側中央の柱穴の長さも他に比して長くなっており、
総柱建物の可能性も考えられた。

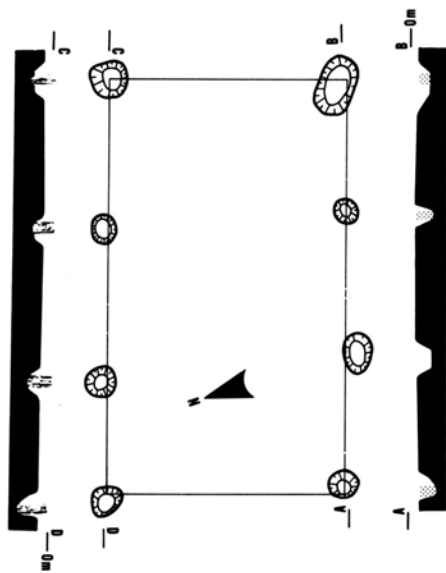


第29図 SB37・SB38・SA18(1:40)

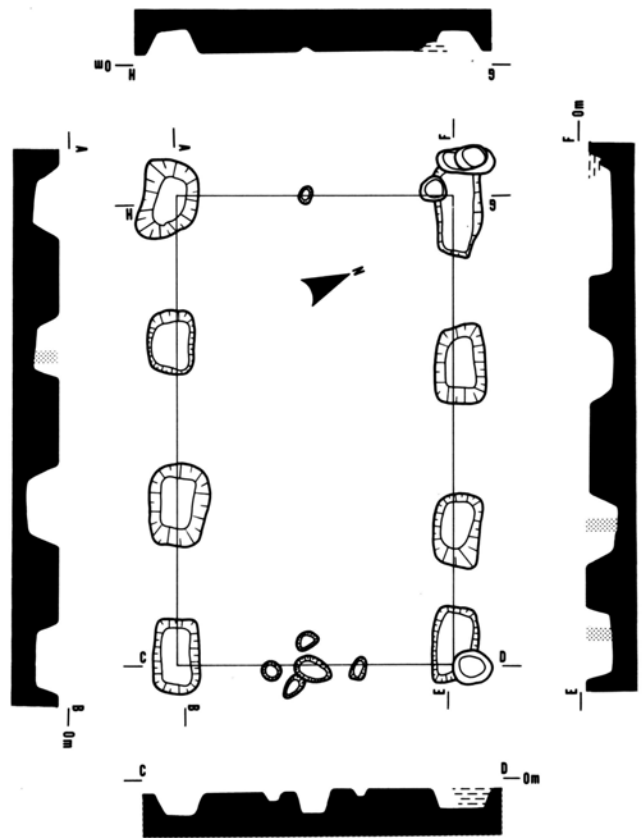


第30図 SB41・SB42・SB43・SA41(1:40)

- SB33 - 桁行5間×梁間2間と桁行側に長い掘立柱建物で、ほぼ全てのピットに柱痕が確認され
SB17 た。また南側桁行に沿って、柱間の距離がやや不揃いであるが、ピット列が検出され、S
B33と関連が考えられる。(第28図)
- SB35 - 桁行4間×梁間2間の掘立柱建物で、建物中央部に桁行方向に2基の小ピットが並
ぶ。棟木を支える支柱であろうか。
- SB36 - 桁行3間×梁間2間の掘立柱建物で、北西側に梁間と並行して走る小ピット列SA1
3と楕円形に巡る小ピット列SX03がある。
- SB37 - SB37は桁行4間×梁間4間で、桁行側に長い。南側梁間を延長するようにSK87
があり、それを南側梁間の掘形としたと思われる2間×1間の掘立柱建物がSB37と並
行してみられた。また、北東側の桁行方向に、不揃いであるが、ピット列SA18があ
る。さらに、同じくSB37と軸線を合わせるように南東側にSB38が存在している。



第32図 SB 4 8 (1 : 40)

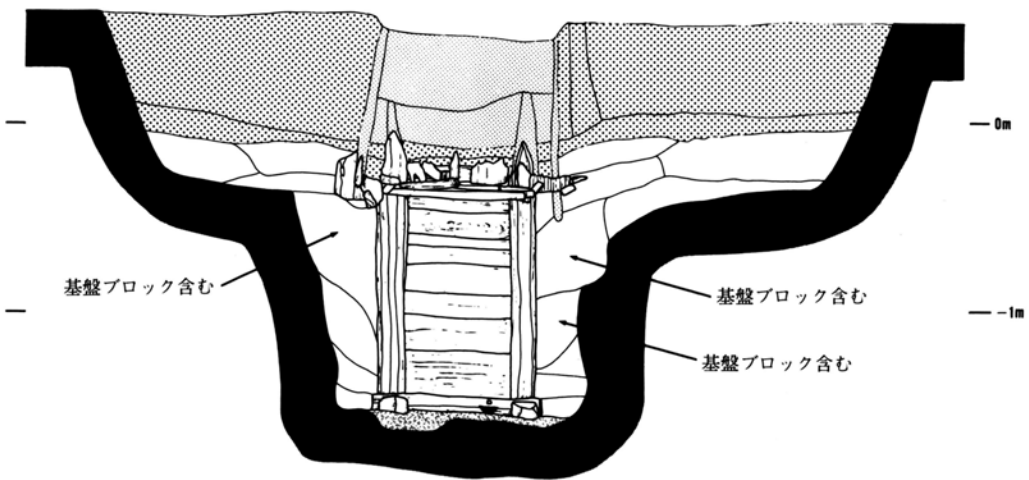
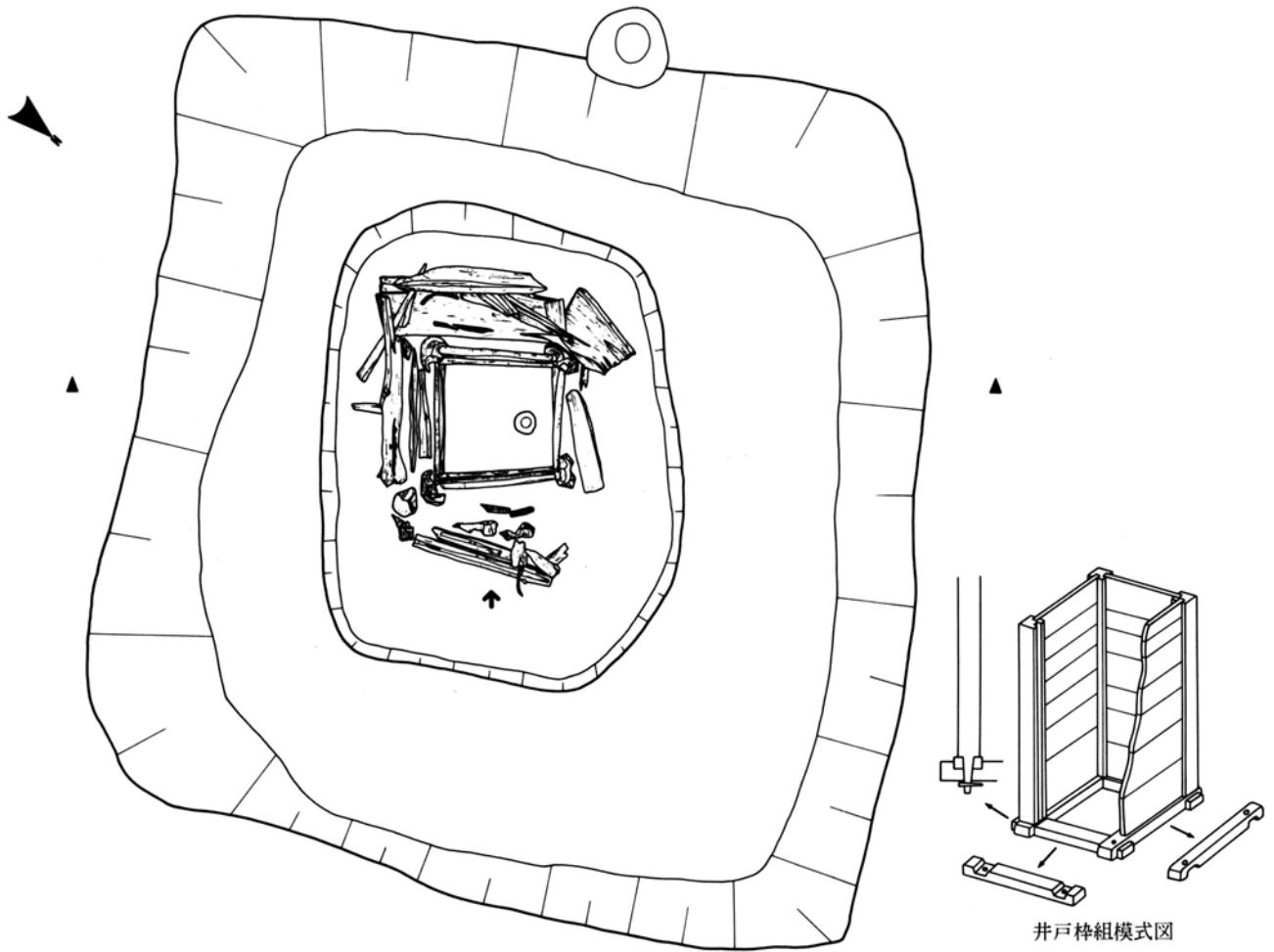


第31図 SB 4 7 (1 : 40)

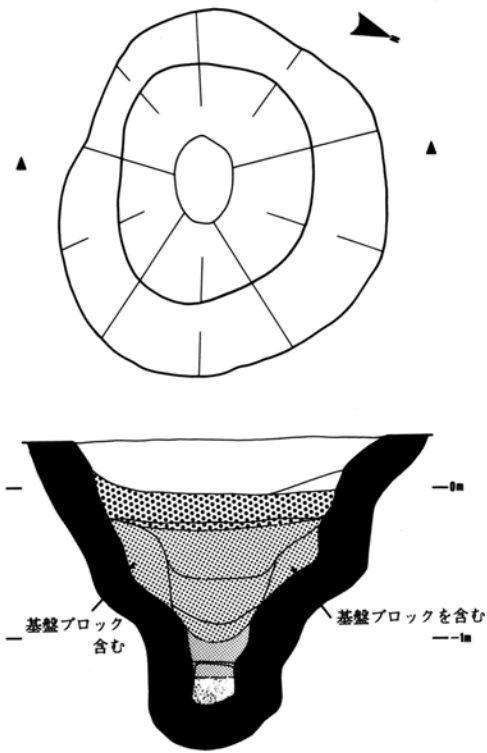
この建物は桁行3間×梁間3間で、梁間の長さはSB 3 7とSB 3 8の距離は、約70cmと近接している。(第29図)

- SB 4 1 - SB 4 1は総柱建物で北東・南西方向は3間で、北西・南東方向は2間であるが、調査SB 4 2区外の北西側にまだ延びる可能性がある。SB 4 2の桁行は3間であるが、梁間についてSB 4 3は後世の掘削もあり、3間及び1間のどちらかであろう。このSB 4 2を一回り大きくして、北西側をコ字状に囲むように検出されたSA 4 3は、当所SB 4 2に伴う柵列と考えたが、北西側のピット列の規模がSB 4 2のそれより大きいことから、建て替えがSB 4 2の掘立柱建物に伴う施設である可能性も考えられた。SB 4 3は桁行3間×梁間2間で、南側梁間の柱穴間に小ピットが2基存在する。この建物には、今回の調査で検出された中では最大規模の長さ180cm・幅90cm・深さ50cmを測る柱穴を有し、その他のものも掘形が1mを超える大きさで、掘立柱建物としても最大となる。(第30図)
- SB 4 7 - 桁行3間×梁間2間の掘立柱建物である。桁行方向の柱穴は、ほぼ長さ100cm・長さ70cm・深さ30~40cmで方形の掘形をもつ一様なものであったが、梁間方向の中央柱穴のほうは桁行側に比べて大変小さくなっている。(第31図)
- SB 4 8 - 桁行3間×梁間1間で、北側の4基の柱穴全てに柱部材が残存していた。柱部材は、幅15~20cmのもので、底部部分のみが出土している。(第32図)

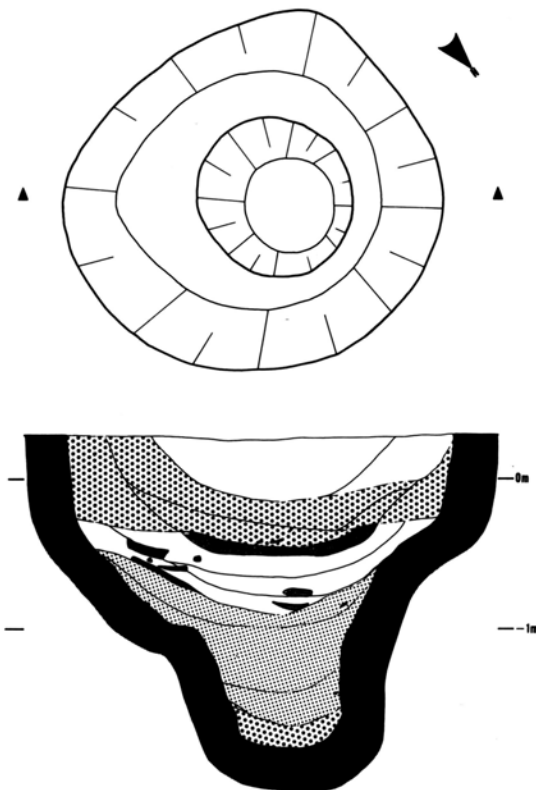
SE (井戸)



第33図 SE 01 (1 : 40)



第34図 SE 08 (1 : 50)



第35図 SE 09 (1 : 50)

SE 01

今回の調査で最大規模の井戸であり、長径4.6m・短径4.3m・深さ2.2mではほぼ正方形の掘形を呈し、断面は二段掘りとなっている。構築順序は、まず地面を上下二段に掘り、規模の小さい下段に木枠を組んで裏込めを行い、またその上に上段の木枠を組み、裏込めをしている。上段については残存状態が悪く、土層観察では枠の痕跡が窺えたが、下段の木枠の上に断片が散乱していた。木枠の組み方であるが、まず細長い長方形の角材の両端に近い部分を抉り、その抉った部分を上下にして合わせて垂直方向に穿孔し、下端を補足した多角径の隅柱を挿入する。下位に突き出部分にも穿孔を施して楔状の木片差し込み、動かないようにしている。隅柱には垂直方向に溝が穿たれ7~8枚の長方形の板が横方向に落しこまれている。最下層より杯(609)が出土している。(第33図)

SE 07

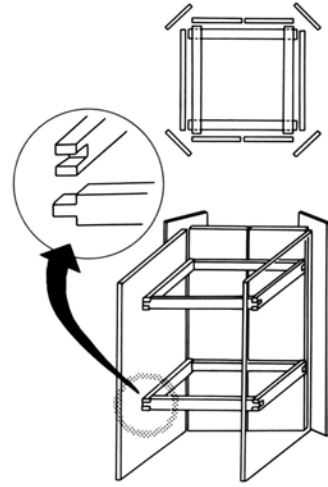
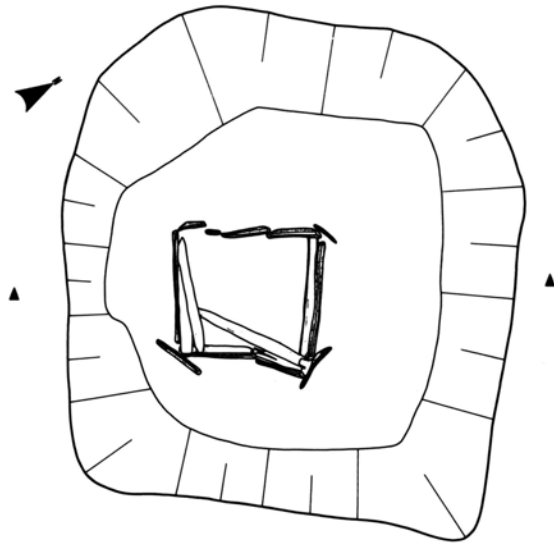
長径1.3m・短径1.1m・深さ1.3m、掘形は卵形を呈する小型の井戸である。断面は、細長い逆台形をなす。(第44図)

SE 08

長径2.4m・短径2.2m・深さ1.8mの大きさで、円形の掘形を呈する。断面はロート状をなし、一~二段の段をもつ。下端は径40cm程度の広さしかなく、若干開いてそのまま中層まで続いており、中層ではその側部に基礎ブロックを多量に含む暗灰褐色シルトが裏込めしたように存在し、当時は円筒状の状況であったことが考えられる。曲物等の井戸枠は確認されなかった。(第34図)

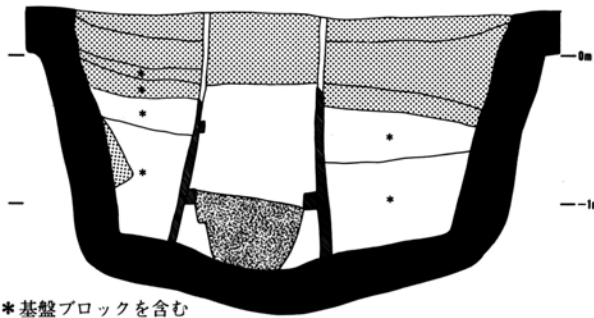
SE 09

長径2.4m・短径2.3m・深さ2.1mを測



井戸枠組模式図

り、円形の掘形を呈する。断面はロート状で、シルトと粘土が交互に水平堆積している。下層の粘土層の上には炭水化物・焼土がまとまってみられ、その下部より遺物・自然木が散乱して出土している。(第35図)

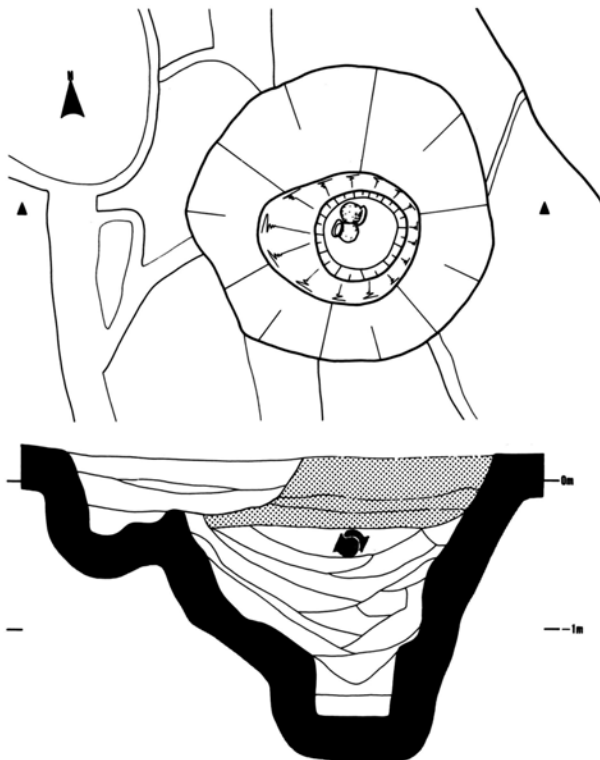


* 基盤ブロックを含む

第36図 SE 10 (1:50)

SE 10

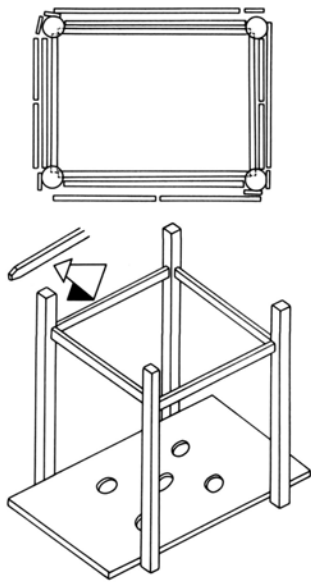
長径3.3m・短径3.0m・深さ1.7mで、方形の掘形をもつ。断面は逆台形を呈する。井戸枠は土層をみると二段あったようだが、上段のものは断片が散見できただけである。下段の木枠は隅柱をもたず、長方形の板のみで組まれている。横木は、凸状と凹状の端部合わせで方形に組まれたものが上下二段ある。側板はそれに添って、一枚のものと横に二枚合わせたものが、対面どうしに置かれており、四隅にあたる部分には細長い板が45度程度斜め方向に立てられている。木枠外には、基盤ブロックを含む灰色粘土が裏込めのように堆積する。遺物は木枠内に堆積する暗灰褐色シルト層より出土している。(第36図)



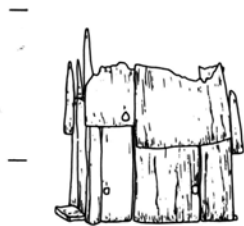
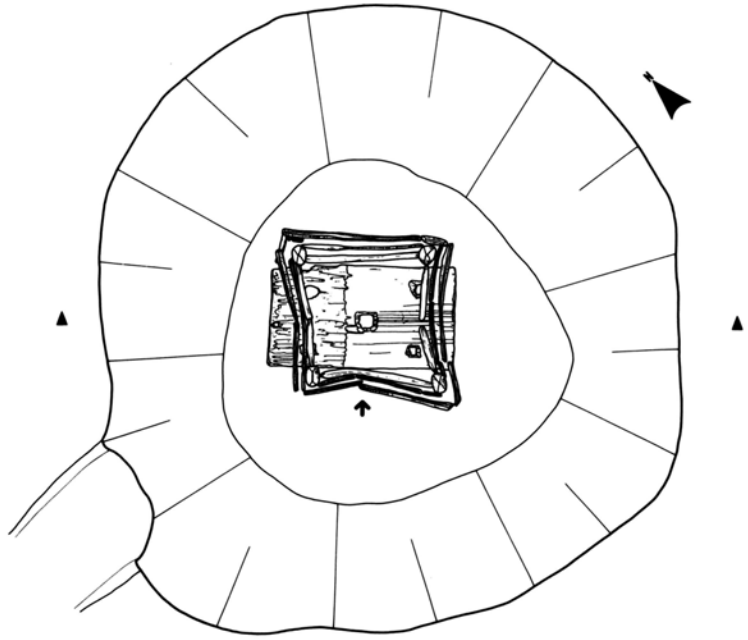
第37図 SE 13 (1:50)

SE 13

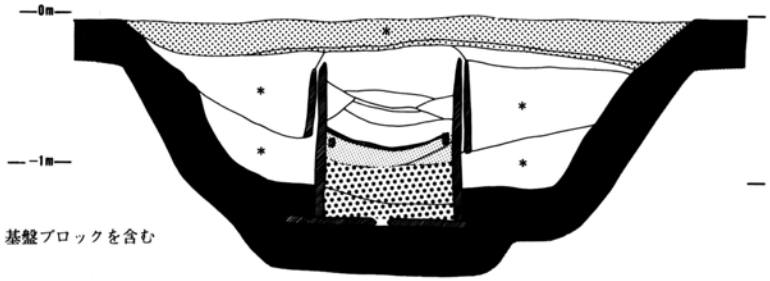
径2.0m・深さ1.6mの掘形が円形の井戸である。断面は段をもった逆ハ字状になり、下位部分のみ垂直に落ちる。埋土は、下層の垂直に落ちる部分は黒褐色粘土の水



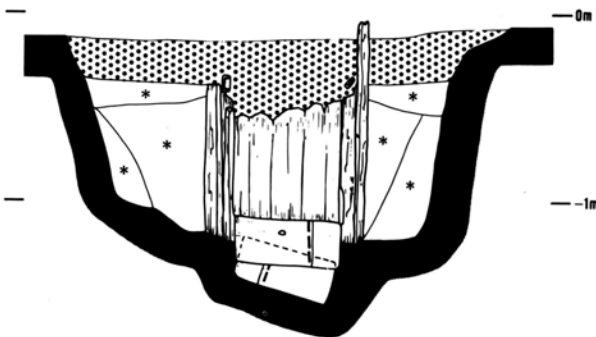
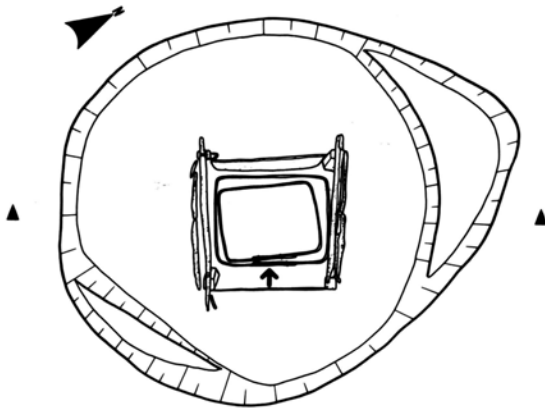
井戸枠組模式図



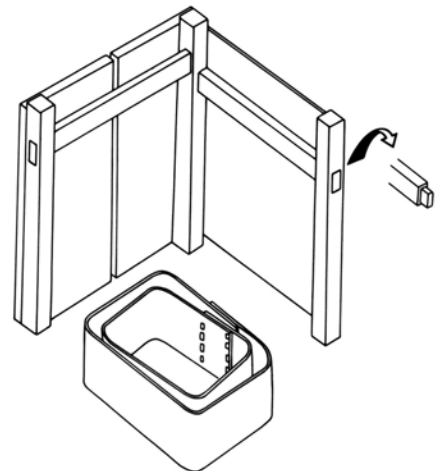
* 基盤ブロックを含む



第38図 SE 1 4 (1 : 50)

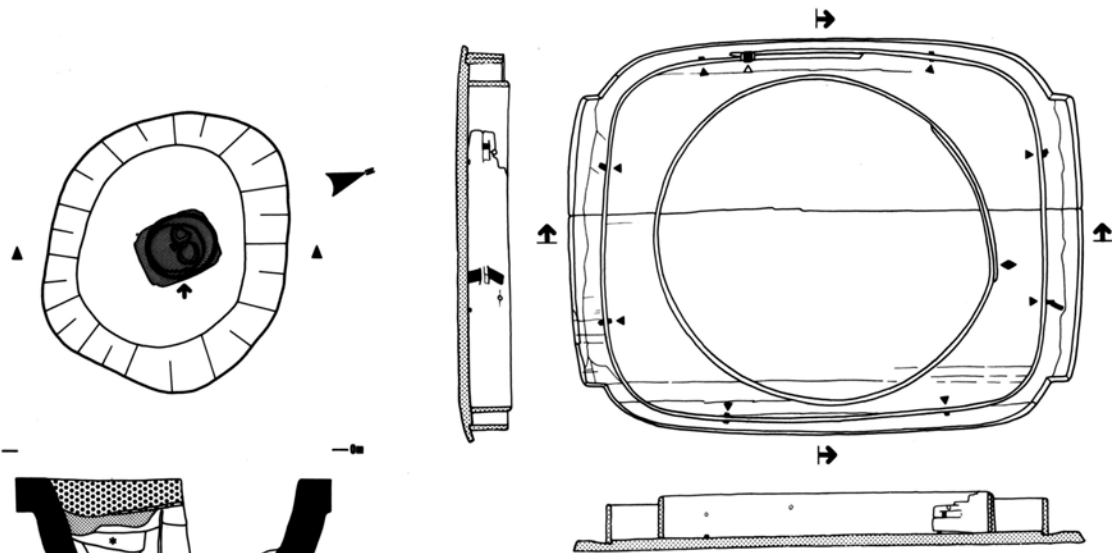


* 基盤ブロックを含む



井戸枠組模式図

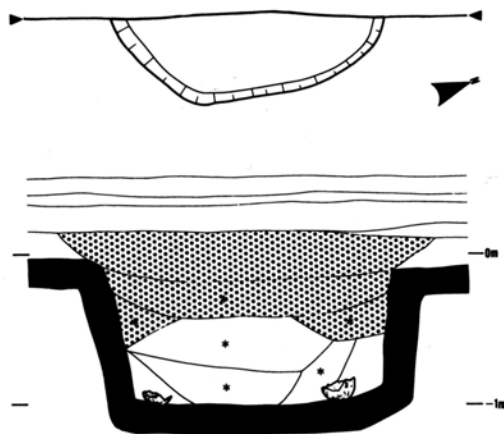
第39図 SE 2 2 (1 : 40)



縁部の位置 (1/4)

▶ 底板と側板 ▷ 側板 ◆ 曲物

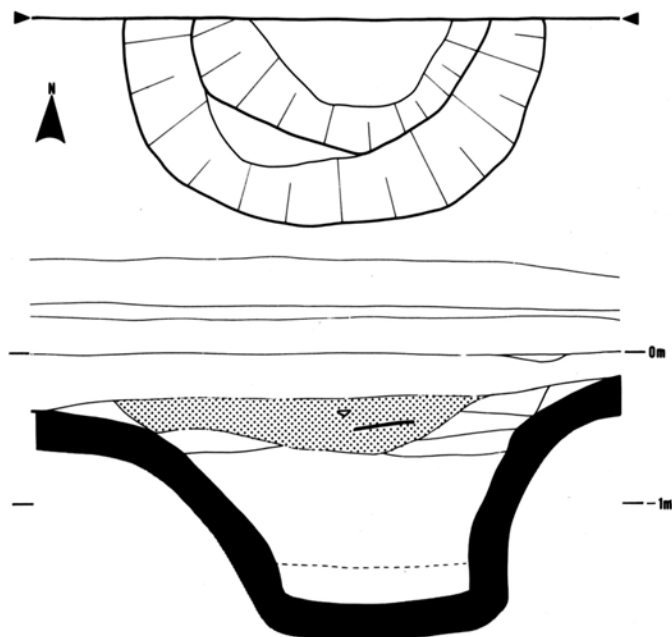
(1:50)

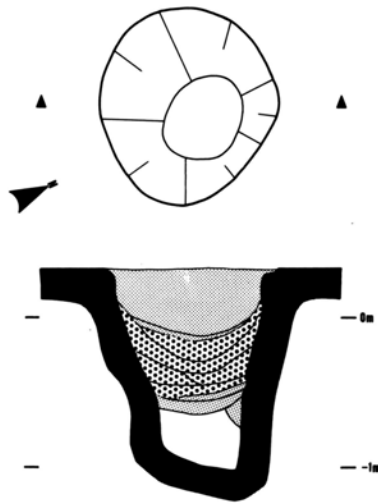


* 基盤ブロックを含む

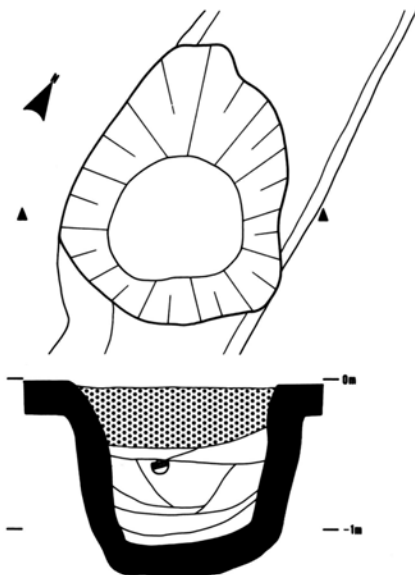


左中：第40図 SE 2 1 (1:50)
 左下：第41図 SE 2 8 (1:50)
 左上・右：第42図 SE 2 4 と出土折敷・曲物

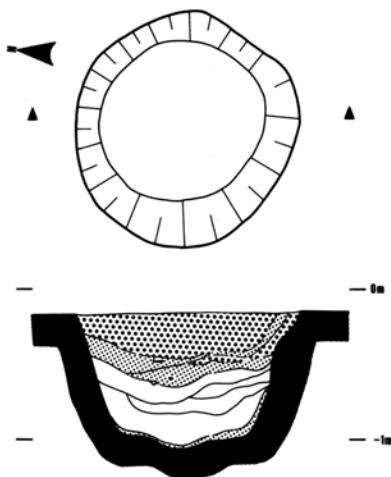




第44図 SE 07 (1 : 50)



第45図 SE 23 (1 : 50)



第46図 SE 25 (1 : 50)

平堆積であるが、中層は左右から黒褐色粘土及び灰色粘土が交互に流れ込んだ状態となっており、上層は暗灰褐色シルトの水平堆積に変わる。中層最上部で、小型甕が口縁を逆向きに、横位の状態で出土している。(第37図)

SE 14

ほぼ径3.7mの掘形が円形の井戸で、深さは1.0mを測る。断面は逆台形をなし、木枠部分のみ若干深い。木枠は上下二段あったようで、上段の下位部が僅かに残存していた。下段の木枠は、やや角のとれた方形の隅柱の上部に貫通しない穴を穿ち、端部を細くした横木をはめこみ、1~2枚の側板で周囲を囲っている。また、四隅には細長い板が立てられていた。最下層には、粗く両方向より穿孔された孔を5ヶ所持つ長方形の板が、横位に敷かれた状態で出土しており、砂押えのためのものかと考えられる。埋土は、基盤ブロックを含む黒褐色粘土が裏込めに使われており、上層に暗灰褐色シルトが水平堆積する。

SE 21

調査区壁際であったため半分しか検出されなかったが、現状では径1.8m・深さ1.1mを測る。掘形はおそらく円形となろう。断面は、逆台形を呈する。最下層より、甕の底部が直立した状態で2点(423・424)出土している。(第40図)

SE 22

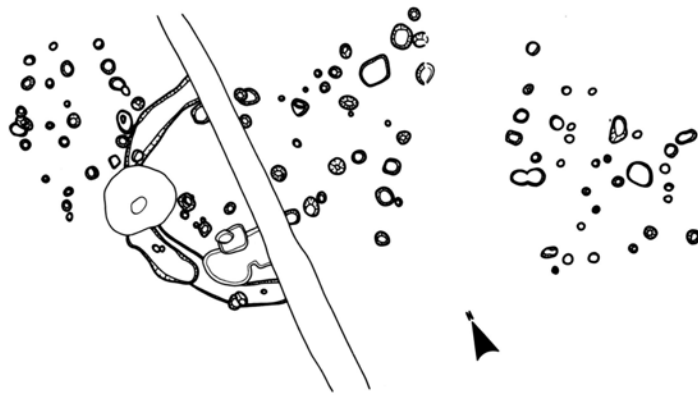
長径2.5m・短径2.0m・深さ1.1mを測る、掘形が卵形の井戸である。断面は、上部に僅かに段をもつ逆台形をなし、木枠部分のみ若干深い。木枠は、一段のみ確認されており、上部にもう一段あった痕跡はみられなかった。組み方は、方形の隅柱に貫通する枘

穴を穿ち、柵を付けた横木を差し込んで、それに添って厚く2枚の側板と薄くて1枚の側板が対面の位置に立てられている。さらに、この木枠内の底面には、入れ子状になった大きさの違う方形の曲物が、基盤の砂層に半分程度埋められた状態で出土している。

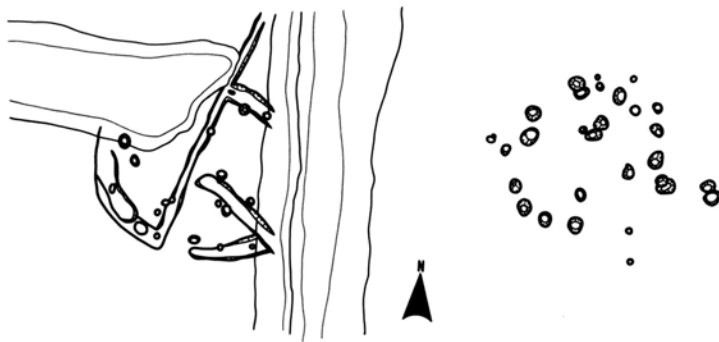
- SE23 - 長径1.8m・短径1.5m・深さ1.0mを測る小型の井戸で、掘形は卵形を呈する。中層の掘り返し部分の上位より甕・杯・蓋が出土している。(第45図)
- SE24 - 長径1.9m・短径1.6m・深さ1.0mで、掘形が楕円形を呈する。断面は、逆台形である。調査を行った期間が丁度増水期にあっていたため、井戸枠の曲物と土層を確認した時点で崩落がおき、最下層の詳細については確認できなかった。曲物は2段あり、土層観察ではさらに上部に続くものとおもわれ、側部を基盤ブロックを含む黒褐色粘土が裏込めされている。曲物内では底に近いレベルで椀(562)と皿に(563)が出土し、さらにその下に板状のものが敷かれているのを認めるにとどまった。崩落後に遺物のみを取り上げた時点で、第41図に図示した折敷と曲物最底部を確認した。折敷に残された痕跡から推測すると、スクリーンで示したような位置関係であったろうと思われる。(第41図)
- SE28 - 58T. P6で検出され、淡灰褐色シルト層より土器・土錘が出土する。(第41図)
- SE31 - 長径2.6m・短径2.2m・深い0.9mを測る。掘形が楕円形の井戸で、断面逆ハ字状をなす。下層の中位より下駄・箸・鎌柄が出土し、中層の掘り返しを受けたと思われる層の上部で杯や甕・自然木・自然石が出土している。(第31図)

SD (溝)

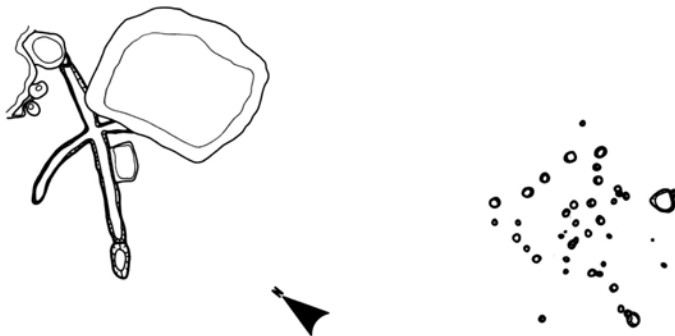
- SD10 - 60A₁区と60B₁区にかけて走る、幅約60~120cm・深さ約10cmの鉤の手状に屈曲する溝で、SD13を加えて60B区で方形の部分を作り出している。また、SE01とつながるようSD08・SD09が走っており、SD10・SD13とも井戸と関わりのあるSD09施設の一部かと考えられる。
- SD26 - 北西から南東にかけて走る幅約50cm・深さ約10cmの溝で、SD10と同様に、直交するSD24とSD24でSE09とつながる。
- SD32 - 東西方向に走る、幅70cm・深さ10cmの溝で、東側でやや弧を描くように北に曲がりSE14の中央部を走る。切り合い関係は確認できないが、井戸の付属施設であろう。
- SD41 - SD41は、60D区を北東から南西に走る幅約2m・深さ約30cmの断面逆台形をなす。60E・G区のSD47・49も同様な規模で、おそらく何等かのつながりがあるものと思われるが、60E区の北側で東に屈曲し、確実なことは不明である。
- SD42 - SD42は上記の溝に並行して走る、幅約40m・深さ約20cmの小溝で、南側のSD53とつながるものと思われる。北側は58T. P1までは続いている。
- SD116 - 60I・L区・59E区を北東-南西にかけて走る、幅約8m・深さ5~10cm程度の浅い溝である。溝が埋没する過程で掘り直しが幾度が行われたようであり、何条かの溝が中でみられるが、埋土が浅く、切り合い関係や埋没過程については明らかにならなかった。



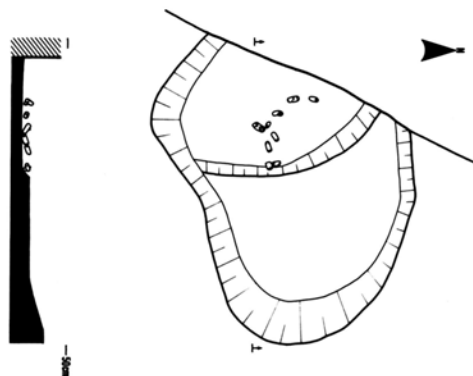
第47図 SX 01 (1:200)



第48図 SX 04 (1:200)



第49図 SX 06 (1:200)



第50図 SX 41 (1:40)

SK (土坑)

SK 43

長径2.1m・短径1.6m・深さ10~15cmを測り、底面に段がみられる。下段の底面に近いところで、弧状に並んだ9個の土錘が出土している。土錘は孔部どうしが向き合うようになっている部分もみられたが、明確な規則は窺えなかった。その他、埋土中より8個出土した。(第50図)

SX (不明遺構)

SX 01・04・06

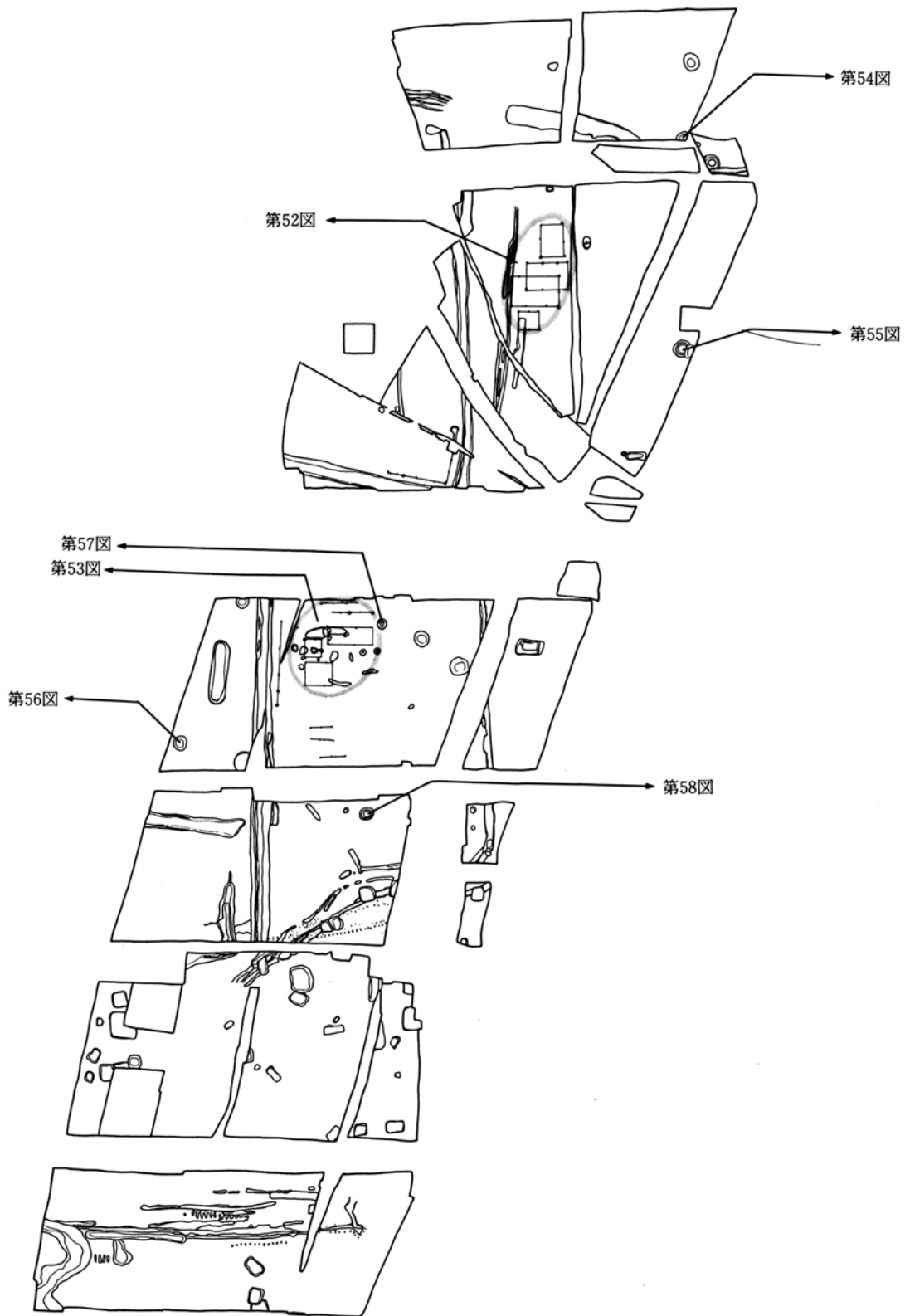
円形に巡る深さ約5~10cmの浅い溝と、円形に並ぶ小ピット群で構成される遺構である。溝は全周せず、ピット列も完全な円ではないが、径を計測するとSX 01は溝-7.2m・ピット-4.6m、SX 04は溝-4.6m・ピット-4.0m、SX 06は溝-4.6m・ピット-3.4mを測る。(第47・48・49図)

SX 02

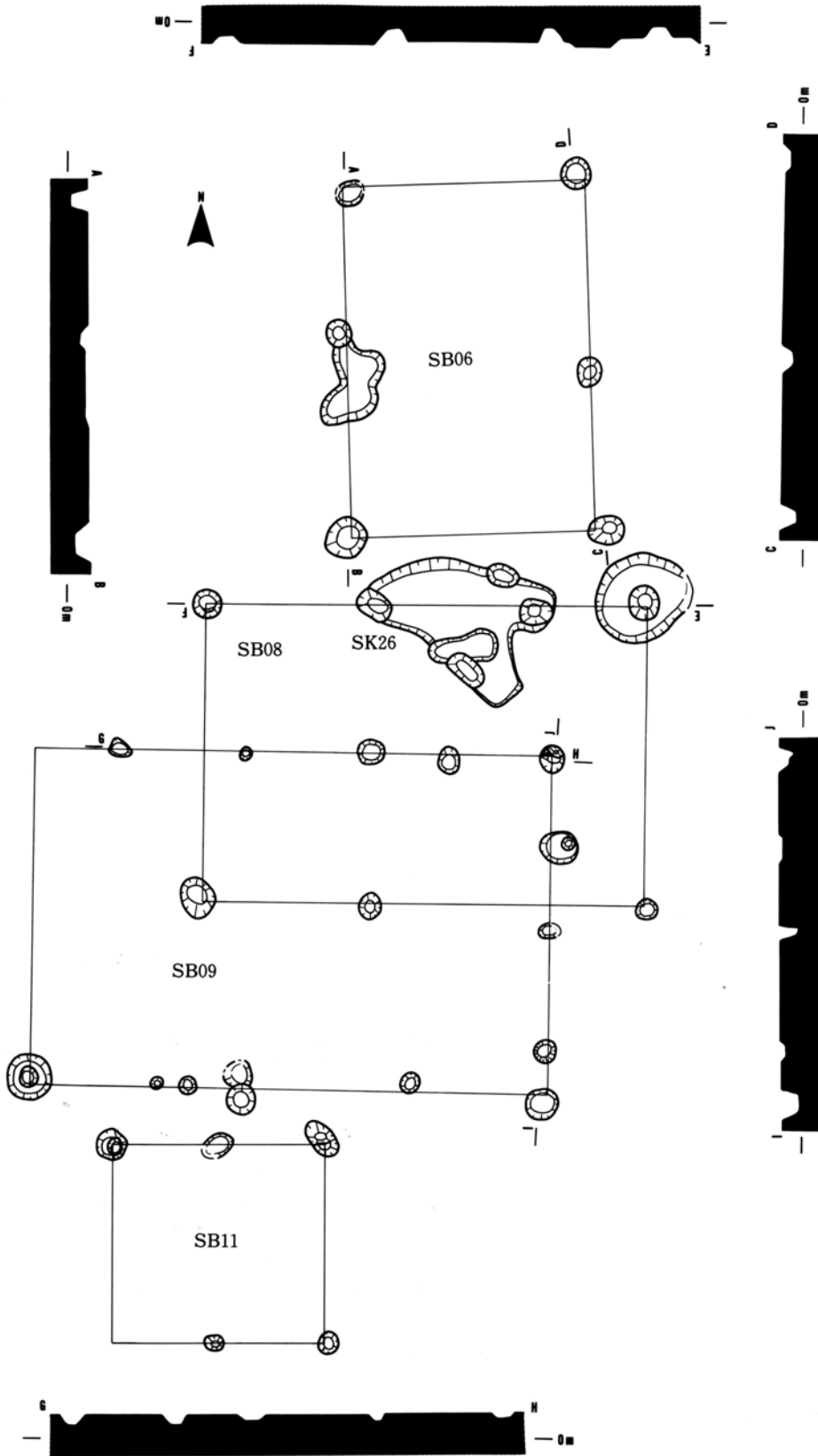
60E区の暗灰褐色シルト層中で出土した土器群であるが、伴う遺構は確認できなかった。

SX 03

60F区でSA 13と重なるように検出されたSX 01等と同様の円形及び楕円形の小ピット列で、SA 13の部分で途切れ、半円形になる可能性がある。



第51圖 平安時代後期～室町時代挿圖一覽



第52図 SB06・SB08・SB09・SB11 (1:40)

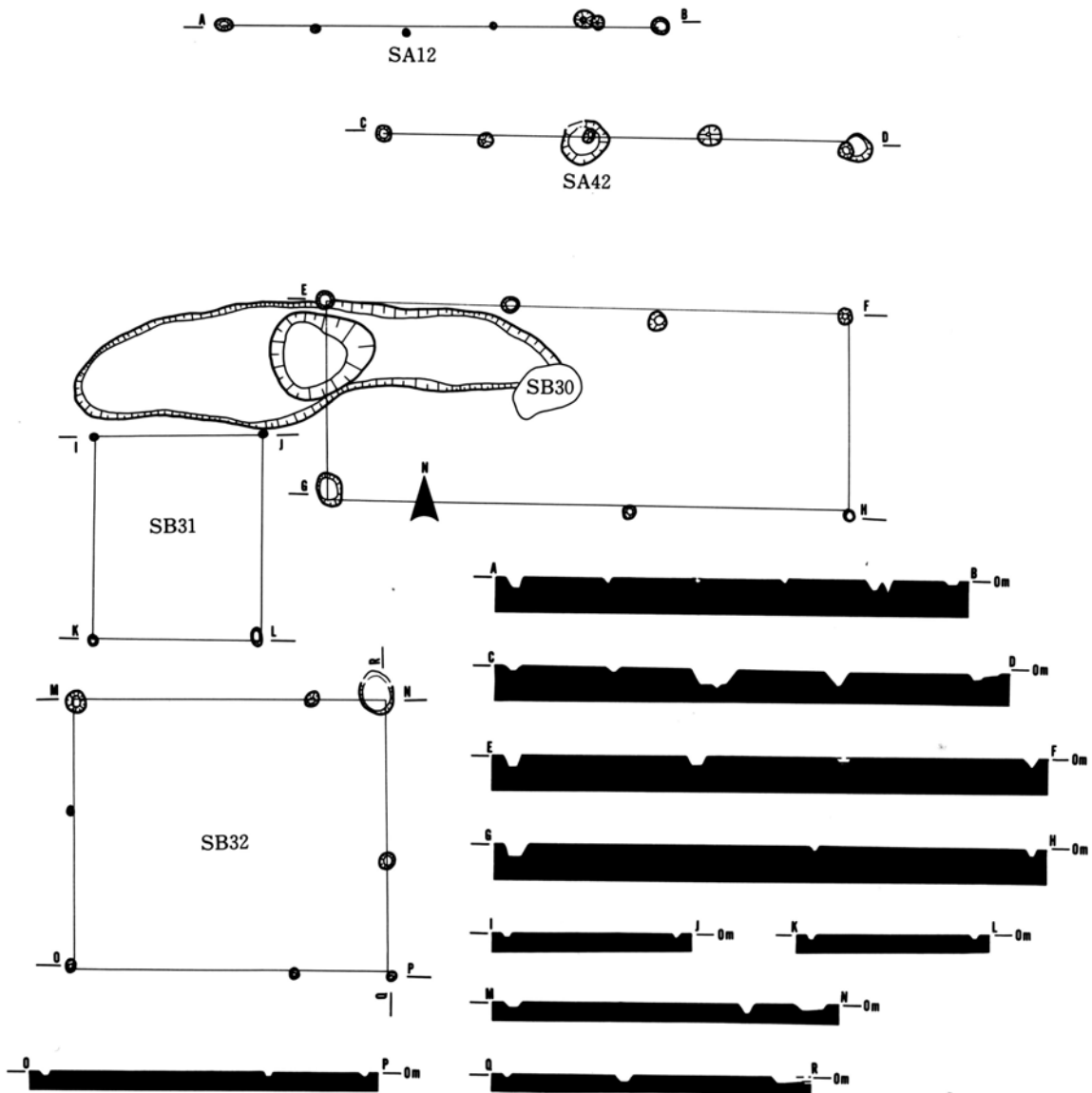
SB (住居)

SB06・SB08・SB09・SB11

60A₂ 区で検出された4棟の掘立柱建物で、SB06とSB11が桁行2間×梁間1間、SB08とSB09が桁行3間×梁間2間である。柱穴は各々掘形30~50cm・深さ10~30cmの小規模ものである。SK26は、その位置・方向からみてSB08に伴うものと考えられた。また、SB09については柱間の距離が一定でなく、不明なピットもあるため、間数については問題がある。各住居の切り合いについては不明であるが、SB09はSD18を切って作られている。(第52図)

SB30・SB31・SB32・SA12・SA42

60F区で検出された3棟の掘立柱建物で、SB30が桁行3間×梁間1間、SB31が

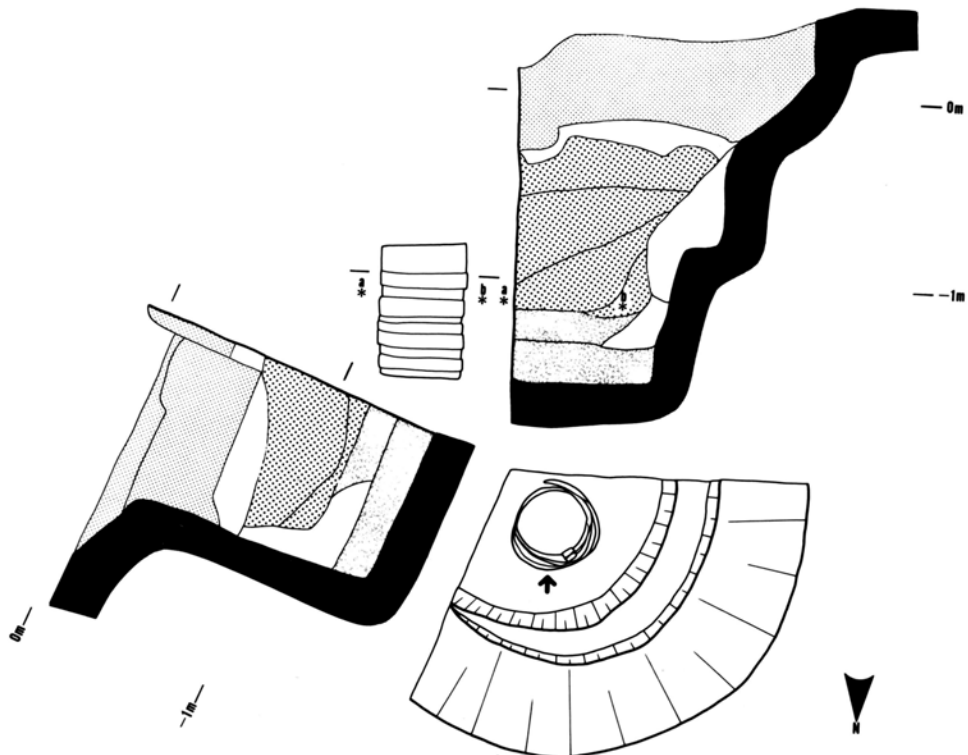


第53図 SB30・SB31・SB32・SA12・SA42 (1:100)

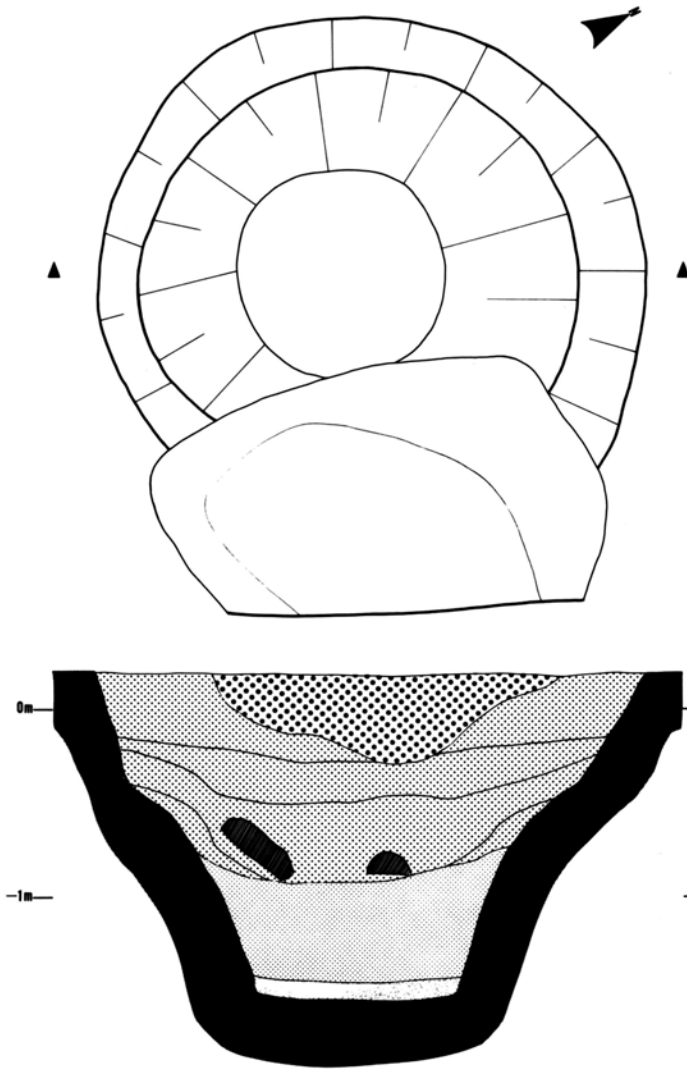
1間×1間、SB32が桁行3間(?)×梁間2間となる。柱穴は各々掘形10~30cm・深さ5~10cmを測る小規模なものである。SB30の北側で桁行方向に続く4間のSA42と5間のSA12が検出された。また、SB32の南約8mの地点で、同方向のピット列SA14・SA15・SA16がみつがっている。(第53図)

SE (井戸)

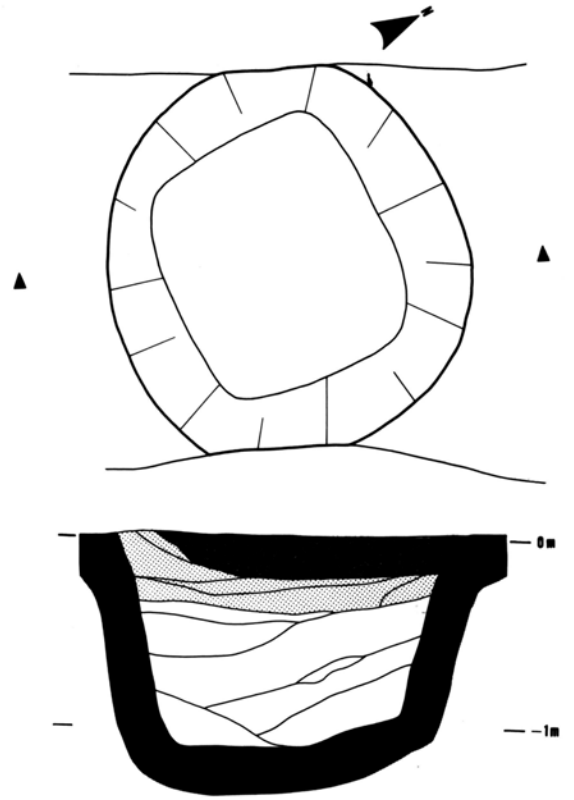
- SE04 - B₁区南東隅の調査区壁際で検出されたため、1/2程度しか確認されていない。掘形は円形で、深さ1.5mを測る。断面は上方がやや開く逆台形をなし、北西側に一段の段をもつ。井戸枠として、曲物が下層の砂層に埋め込まれる状態で出土している。曲物は、径45cmの二段組で、一段の高さが約40cm、上下に重ねられている。(第54図)
- SE11 - 径約2.9mの円形の掘形をなす井戸で、深さは、1.7mを測る。断面は途中に一段をもつ逆ハ字状を呈する。中層の暗灰褐色シルト層の下部より、径25cmの自然木を長さ50cmに切って、さらに縦1/2にしたものが出土している。上層の暗茶褐色シルトより2点の椀(1631・632)が、口縁を合わせて縦位の状態で出土している。(第55図)
- SE16 - 長径2.4m・短径2.2m・深さ1.1mを測る、掘形が円形の井戸である。断面は、逆台形を呈する。埋土は、下位2/3程度が灰色粘土で、北側より流れ込んだ状態で堆積している。遺物は、主に上層の淡灰褐色シルト層より出土している。(第56図)
- SE18 - 長径1.8m・短径1.5m・深さ1.3mを測る、掘形が円形の井戸である。断面は、北側の



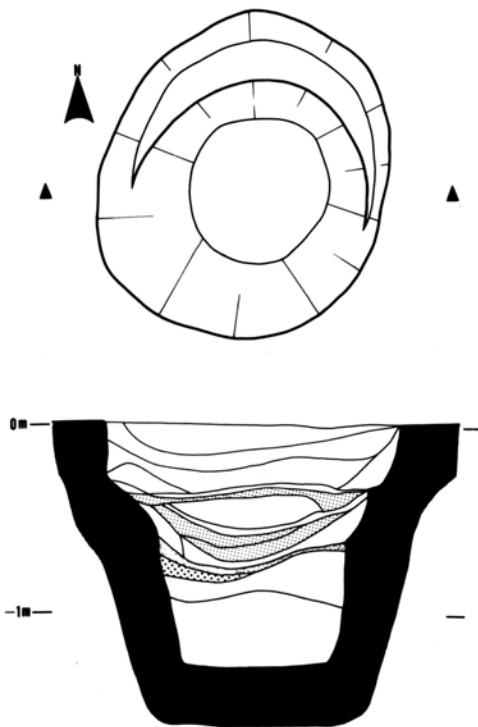
第54図 SE04 (1:40)



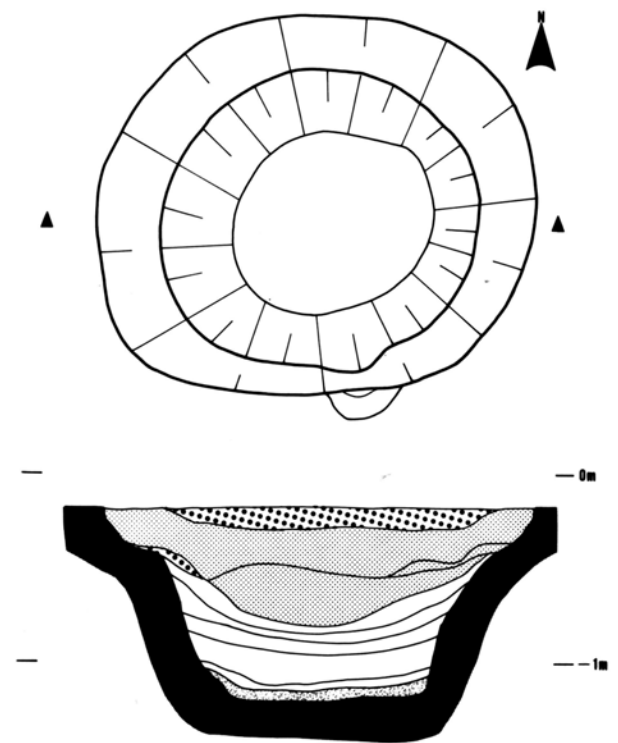
第55图 SE 11 (1:40)



第56图 SE 16 (1:40)



第57图 SE 18 (1:40)



第58图 SE 27 (1:40)

上部に一段の平坦面をもつ逆台形を呈する。中層の淡灰褐色シルトがU字状に窪んで堆積する層から遺物・自然木が出土している。(第57図)

SE19 - SE19は長径2.6m・短径2.4m・深さ0.9mを、SE20は長径3.3m・短径3.0m・深さ1.1mを測る大型のもので、掘形・断面は双方とも円形・逆台形をなす。SE20下層より、曲物片が出土している。

SK (土坑)

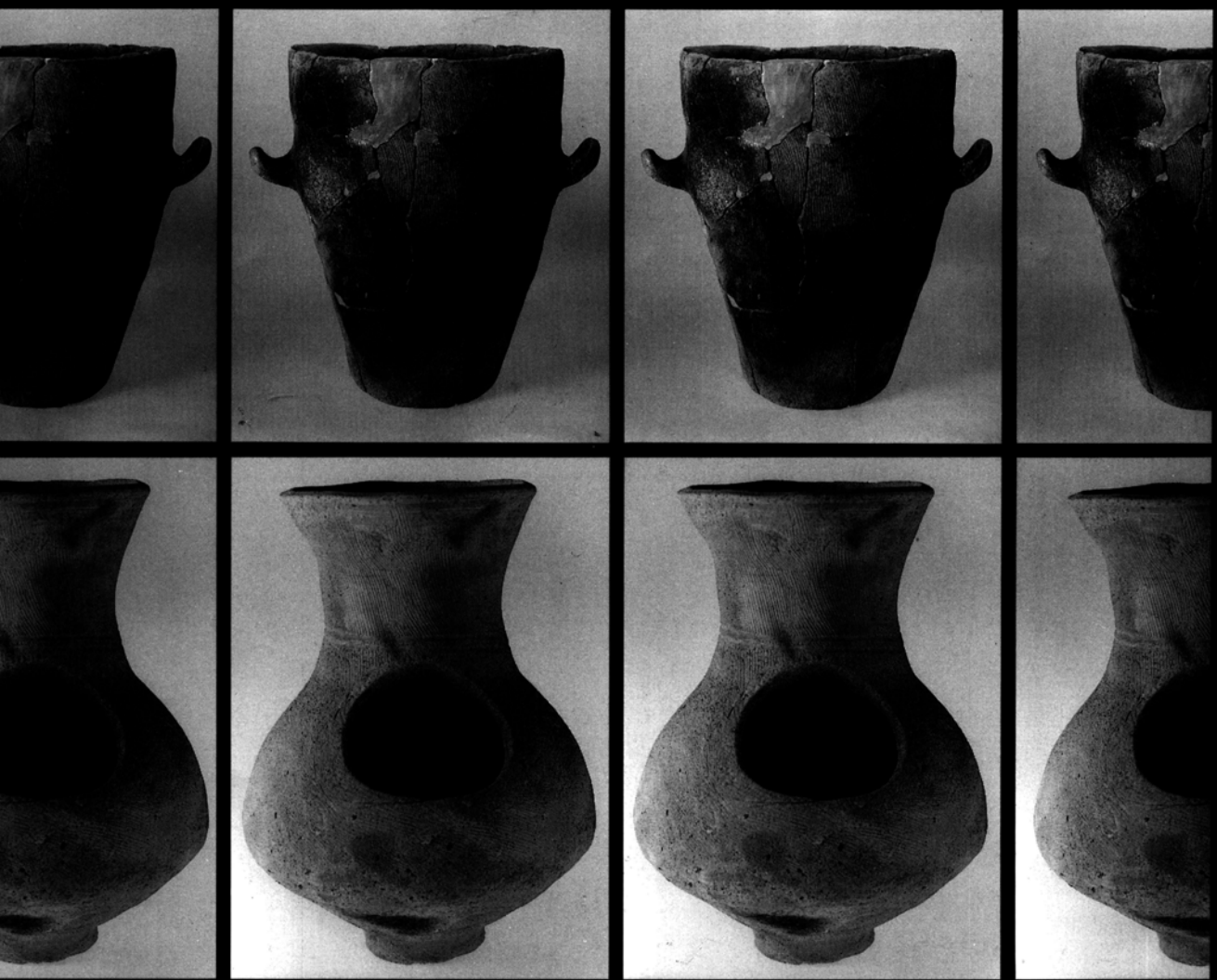
SK74 - SD49を拡張するように作られた大型の土坑で、長径10.0m・短径2.4m・深さ60cmを測る。断面は逆台形をなし、上部より灰釉系陶器が出土している。

方形土坑 - SD55より東、SD68・71・72の溝群より南で検出された掘形が方形を呈する土坑で、39基確認されている。埋土は灰色粘土・灰褐色シルト・黄褐色シルト(基盤)の斑土となっているものが多いが、小型のものには灰褐色シルトに黄褐色シルト(基盤)ブロックが混入するものもみられる。掘形は上記したように隅の丸い方形を呈し、垂直に近い状態で掘り込まれ、底面はわずかに舟底状になる。規模は、長径4mを超える大型のもの、2~3.5mの中型、1~2mの小型のものに分かれる。掘形の形態も、正方形のもの、長方形のもの、細長い長方形と3形態みられる。また、主軸の方向も、南北方向をむくグループ、北より0~20°傾くグループ、北より40~60°傾くグループがある。その中で、SK94は二重の掘形や平坦面をもつ特異な形態をしている。また、SK11・114・SK13・139のように接続して作られているものもみられる。

SD (溝)

溝は南北方向と東西方向の2方向があり、規則的に配置されている。南北方向の溝はほぼ真北方向に走り、東西方向のものはわずかに北西-南東方向をむき、最南の一群のみ東西方向を向く。南北方向の溝SD50は幅約2.5m・深さ約60cmをはかる大きなもので、60H区と60J区の間で途切れる。そこから東へ約360mのところには並行して走るSD55とその南北方向の延長線上にあるSD15、またさらにそれと並行して走るSD18・19がある。ただSD15とSD55は規模に差があり、同一溝である確証は得られなかった。SD55は南側でSD50の途切れ部方向に孤状に曲がり、この孤状になるあたりでは溝が何条も並行して走る。また、同じく途切れ部付近で直角に折れ、SD50との間に通路状の部分を作り出すSD63がある。さらに、東西方向に走るSD59もSD50と約1mの間をあけ途切れてる。東西方向の溝は約62~68mの間隔で走っており、最北のSD11は60A₁区で途切れ、その延長線上の西側は3条の溝となる。また、最南では幾条かの溝・柵が並行して走っている。

IV. 遺物



1. 弥生時代

土 器

資料の性格

出土状況 大淵遺跡出土土器は、基本的には遺構出土に限られる。それ以外に廃棄空間が存在したかどうかは、現状における遺跡の削平状況では言及不可能であるが、すくなくとも居住域内廃棄が行われていたことはまちがいない。

出土状況が、その資料の性格を決定することに異論はない。しかし、それが全てではない。出土状況とそれを構成する遺物・土層・遺構そして空間的位置の全体が性格を決定する。その意味で、廃棄と埋没は区別しなければならない。廃棄とは遺物となる「物」をめぐっての確定された〈場〉ので人為的作用であり、因果系列の比較的明確な一次的作用である（広辞苑「不要として捨てさること」）。それに対し、埋没は物だけでなく構造物をも含む広い概念で、自然と人為の両作用があるだけでなく、一次的・二次的作用もあり因果関係は不明確である（広辞苑「うもれかくれること。埋もれて見えなくなること」）。

廃棄は、それが一回きりのもので直後に整地でもされているのであれば、その単位にはまさに廃棄の同時性は保証されようが、その場合でも遺構形成が最初期でなければ整地土に混入して当該遺構以前の時期の土器片が遺構内埋土に含まれることはあり得る。通常大破片まではそれを混入として認めても、完全に近いようなものが複数あったときはそれらを単純に混入とすることは難しい。このような場合に、廃棄の単位がまさに使用されたそのまま（廃棄の必然性が高い資料）であれば〈群〉としての固有性はあるわけだから、生活実態に近いものとしての資料的有効性は高いものとなるけれども、廃棄への経路が開かれ多方向となればそれだけ偶然性も増し不安定（廃棄の偶然性の高い資料）となる。こうしたことは、出土状況をつぶさに観察しても果して認識できるかどうかは疑問なところである。

これに関連して、埋土が分層できたからといって廃棄をも部分に区分することができるかどうかという問題がある。過剰な分層が行われれば土器群を分けるような層区分線が引かれるかもしれないが、すでにあった土器群（大破片や完全に近い形のものが多ければそれだけ隙間も多い）に土が流入したのであれば両者は成因が異なる以上区別されねばならないことは当然であり、そこにおいて層区分線は土器群（廃棄単位）の区分線とはならない。

層区分線が遺物群を拘束するのは特定の層位と遺物が明確な正および負の内的な関係性を有しているときだけである。正関係は、貝層形成のように土と共に遺物が廃棄された場合。もちろんそこでは偶然的な混入の頻度が高くなる。他は自然埋没過程での人為的な遺

物の混入である。自然埋没という時間経過の中に含まれてくる遺物には時間的な拘束が伴いそれが層位の違いに対応した遺物自体の変化としても現れることになる。負関係は、自然的・人為的な層位形成の間に廃棄による遺物群形成が行われる場合である。巨視的には廃棄そのものが層位と同じ性格を有することになる。

住居では居住時期の決め手となるような「床面直上」と言われる資料や柱穴内出土土器はほとんどなく、大多数は住居廃絶後の窪地状部分に「廃棄された物」のようだ。火災にあってはSB14ですら出土した多量の土器は床面から浮いており、「廃棄の場」としての性格が強いことが窺える。だから「住居に伴う」ということは難しい。

ところで、住居跡出土土器には後述するように時期幅を有する例が比較的認められる。この時期幅という問題は一応の編年の確定を前提にしてのことであるけれども、「一括出土」として取り上げられたSB35の場合でもどうも2時期に細分できそうなのである。こうしたことは、「一括出土」であるか否かの判断は出土状況によって決定されとしても、そのことがその一群についての廃棄の同時性を保証するものではないことを示している。

土坑は多くが廃棄土坑のようであり、土器はそこに「廃棄された物」である。

井戸は他の遺構に比べて完全な形になるものが多く、それらが「廃棄された物」であっても、他とは性格が異なるのかもしれない。

接合関係 大淵遺跡での廃棄単位間の接合は現状で次の2例が確認されている。②はまとまりのある群間での関係で時期的にも併行するが、①はSB02に一部小破片を含み不安定さがある。

① SK03……………SB02 ② SE03上層……………SB35上層

土器の分類と時期的区分

個別分類 大淵遺跡では住居跡・土坑・井戸などから土器組成サンプルが得られている。このうち完全に近い形の土器を多く含みかつ層位区分に連動して時期差に関わる群単位に区分できるものとしては、SE03が最もすぐれた内容を有している。本遺構からは図示しただけでも38固体が出土しており、しかも出土土器は井戸の堆積及び土器廃棄の状況から上下2層に区分できることが確定している。だが、それはあくまで大淵遺跡資料中での優秀さであって、地域的・時期的総体では偏っていることは否めない。

本来「分類」は雑多な要素を秩序あるものにし、認識の階段を上方に登るために一定の段階でまとめることであることを考えるなら、特異な一個体にまで分類項目を与えることは無意味であるだけでなく、混乱を呼ぶ恐れさえある。単なる言葉の置き換えであるならそれは作業的（認識的）にも非経済的である。

系統分類 大淵遺跡にとどまらず尾張地方南西部における土器相は単純ではない。近畿地方に於て「様式」概念は旧国単位でさえ「小様式」にすぎないというような広域性が強調されているのであるけれども、当地方では旧国内でさえ「大様式」に対応する存在が複数並存するのである。現状ではそれらの範囲はなお確定できていないので、範囲を前提とする「様式」ではなく、ひとまず空間的問題を置いて時間的連続性を有する固有の運動体の存続を重視して、それを〈系〉としてくくりにすることにする。これら〈系〉区分に関してはすでに提示している（石黒 1990b）が、それは次のようになる。

I系……………いわゆる「朝日式」・「貝田町式」の連続にほぼ一致するが、伊勢湾西岸部と東岸部では細部に相違がある。前者をIW系、後者をIE系とする。

II系……………いわゆる〈条痕紋系土器〉の連続である。おもにII系分布圏南部を占めて当初二枚貝条痕を特徴としたものをIS系、北部地域に分布し櫛条痕を特徴とするものをIN系とする。

III系……………いわゆる「瓜郷式」の連続である。

IV系……………いわゆる「凹線紋系土器」である。

V系……………いわゆる「近江系土器」の連続である。おそらく地理的細分を必要とする。

時期区分 これらの遺構から出土した土器はほぼ〈凹線紋系土器〉展開期に限定される。上述のSE03出土土器の上下2層を、それぞれ時期区分の標識として、下層を1期、上層を2期とする。しかし、後述するように2期の資料には新古の2相が観察できるので、これを2期a、2期bとして区分する。2期bは独立させることができる可能性の高いものであるが、大淵遺跡では不十分であった。

資料解説

1期

SE03 I系 太頸壺・細頸壺・円窓付壺・台付甕がある。

下層 太頸壺はいずれも櫛描直線紋で磨消紋を有する例は確認していない。196は口縁部のヨコ（図版32・33）ナデが顕著で、口唇部は凹面をなしている。頸部以下には波状紋→直線紋→斜格子紋→コンパス山形紋が施される。体部表面には籠目痕が観察できる。199は体部紋様は6・6の櫛三種で縦位直線のあと横に直線紋が施されている。櫛描紋帯間には研磨は施されない。

細頸壺は198がコンパス山形紋が施されている。直線紋下の波状紋はコンパス波状紋である。原体との接触点を交互に変えながらのコンパス動作が施紋の基本となっているようだ。197・201は口縁部だけでは時期の決定にとまどう資料である。200は体部上位の櫛描紋帯間に縦位波線を施すもので、紋様構成上珍しい。

円窓付壺の口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇部には凹面をなすような強いヨコナデ

が施されている。円窓部左側には下書き線が消されないでそのまま残っている。底部外面には木の葉痕が認められる。

甕はおそらく総て台付甕であろう。203・204は口唇部にハケメ刻みが施されている。指頭圧痕紋を有する例はここでは出土していない。209は口唇部に二枚貝刺突が施されている。210は体部外面がナデ仕上げである。211は口唇部の上下端にハケメ刻みが施されている。

Ⅲ系 太頸壺口縁部が1点出土している。211は口唇部円周4分割の位置にヘラ状工具による部分圧痕が施されている。頸部には不揃いだが条溝の深い櫛によるあまり整わない波状紋が施されている。

Ⅳ系 細頸壺・短頸壺・甕・片口鉢が出土している。

細頸壺には無紋と有紋がある。212は口縁部が強くヨコナデされ、体部上半はタタキ調整の後ハケメ調整され、下半は縦方向のケズリの後ハケメ調整されている。213は口縁部は欠損しているが体部は同様の調整がされている。215は口縁部に2条の凹線がある。216は口縁部が欠損している。体部には2×3の櫛Ⅲ種で直線紋と波状紋が施されている。色調は淡橙色で、他と異なる。短頸壺214は口縁部に2条の凹線、体部には2の倍数の櫛Ⅲ種による櫛描紋が施されている。

甕はいずれも体部外面にタタキ調整、内面にはケズリ調整が施されている。

SB27 I系 細頸壺・小形太頸壺・甕・鉢がある。細頸壺125は体部上半を櫛描直線紋で区画(図版27)した後下段に沈線で斜格子紋を施している。下半はミガキが施されてる。小型太頸壺127は体部紋様は上から、円形刺突→半円刺突→櫛描直線紋3条で間には指頭ナデが施されている。体部下半はミガキ調整が施されている。

甕は127がやや大型の甕で、体部外面の調整は縦ハケメの後斜めハケメが施されている。130は口唇部上端に刻みが施されている。131は体部外面調整こそI系の特徴である斜めハケメが施されているものの、口縁部は強いヨコナデで内面が凹面を形成し、しかも体部内面には縦ケズリが施されている。一見するといわゆる「見晴台式」の甕に類似するものである。混入であるかもしれない。

鉢は、129は口縁部のヨコナデが顕著で、口唇部と口縁部内面が凹面をなすほどである。

Ⅳ系 甕のみ出土している。体部外面の調整によって3種に区分できる。132・133はタタキ調整の後ハケメ調整、135・136は縦ハケメの後横ハケメ(直線紋)、134は両者の間でタタキ→縦ハケメ→横ハケメが施されている。

SK13 I系 太頸壺・細頸壺・甕・大形鉢がある。太頸壺169は口唇部にハケメ工具刻み、口(図版30)縁部内面に瘤状突起が4個一単位で施されている。元々はIE系固有の要素である。細頸壺170は頸部に沈線が施されておりこの時期の特徴を示している。大形鉢172・173は両者とも壺成形第2段階で成形を停止したもので口唇部の指頭圧痕紋が特徴的である。173は体部に斜格子紋が磨消線で施されて暗紋となっている。174は類例の余り無い大形鉢で、

口唇部には部分圧痕が施されている。

以上は I E 系であるが、1 点 I W 系が出土している。175 は体部上半の横ハケメ（直線紋）と内面の縦方向のユビナデが特徴的である。口唇部は、下端は連続した刻みであるが上端は円周 4 分割の位置に施され部分圧痕となっている。太頸壺 167 は口唇部下端の指圧痕が特徴的である。具体的な系譜関係は不明。I W 系の IV 系に変換したものかもしれない。

IV 系 細頸壺・太頸壺・甕がある。細頸壺 166 は口縁部に凹線 3 条、斜位櫛刺突紋 3 段を方向を変えて羽条にし、以下 2 × 4 の櫛 III 種によって直線紋と波状紋を交互に施し、最後に縦位直線を加えている。なお口縁部は右図のように一部欠損している。168 は台付甕の脚台である。この時期にあるとは思えない。混入であろう。

2 期 a

SE03 I 系 大形鉢がある。195 は、体部成形が壺成形第 2 段階で停止し甕と同じ口縁部を付加したものである。

(図版 31) IV 系 細頸壺・円窓付壺・甕・高杯・取っ手付鉢がある。

細頸壺 184 は口縁部に 2 条凹線、頸部には櫛描直線紋が施されている。口縁部下部にはタタキが観察できる。185 は直線的に開く口縁部に 2 条の凹線をめぐらし、体部は無紋である。残念ながら円窓部分は欠損しているが、口縁部にくり込み部分は無いので水差し形土器ではないであろう。

甕は台付甕であるかどうかの断定はできない。体部外面の調整・施紋から、3 種に区分できる。縦ハケメの後横ハケメ（直線紋）を施す 187、タタキ調整の後縦ハケメを施す 187・189、縦ハケメのあとタタキ調整を施す 188 である。

高杯は皿状杯部を有するものが確認できたのみで、鐔状口縁部を有する例は出土していない。190 は口縁部に 2 条の凹線をめぐらし、後にミガキ調整が施されている。杯部下部はケズリが施されているようである。脚部は、191・193 の端部はそれほど肥厚しないまま終わっているのに対し、192 は強いヨコナデが加えられやや拡張気味に終わっている。193 は上部に沈線が施されている。取っ手付鉢 195 は取っ手接合部の上部に、櫛による斜格子紋と円形浮紋が施されている。

SB06 周溝および柱穴出土以外を取り上げる。若干の個体を除きほとんど IV 系で占められる。

(図版 22・23) IV 系 太頸壺・細頸壺・甕・高杯などがある。

(図版 34・35) 太頸壺には単純口縁と受口状口縁がある。単純口縁のうち口唇部紋様が波状紋を基本とするものでは口縁部内面はハケメ工具による刺突紋が多用される傾向にある。凹線紋を基本とするものは 258 のみであるが口縁部内面には波状紋が施されている。なお 253・257 の口縁部内面には扇形紋が観察できる。受口状口縁では凹線紋のみの例が多いが、263 は波状紋、264 では円形刺突紋が施されている。頸部はハケメ工具連続圧痕、断面三角形突

帯、ハケメ工具連続圧痕突帯の3種が出土しているが、267は混入かもしれない。

細頸壺は袋状口縁6例のうちハケメ工具連続圧痕を2段施すのが5点で、1段は1点、18のような3段は含まれていない。261・262は受口状口縁を呈するものである。

甕41は口唇部がヨコナデで仕上げられており、やや凹面をなしている。46は横ハケメ（直線紋）と波状紋、47は受口状を成す口縁部の外面に波状紋、体部には横ハケメ（直線紋）が施されている。

高杯は罎状口縁の48と皿状杯部の275がある。275は凹線4条の下に波状紋が施されている。277は脚部上半に斜格子紋が施されている。

そのほか、276は台付鉢で羽状のハケメ工具連続圧痕と凹線を1条もつ。おそらく上部は34のようになるのであろう。274は鉢である。

Ⅲ系 281～285である。

SB35 I系 短頸壺・甕がある。151は紐孔があり無頸壺と共通する。口縁部は強くヨコナデ（図版28・29）され口唇部は凹面をなす。152は通有の甕である。IW系の甕154がある。

Ⅲ系 台付甕153がある。

Ⅳ系 細頸壺・台付甕がある。

細頸壺138は袋状口縁を呈し166と同型であるが頸部に簾状紋の施されている点が構成上異なり、櫛描紋も3・2・3の櫛Ⅲ種によって施されている。しかし、口縁部の櫛連続刺突紋は1段目と2段目が押し引き状で古い特徴を有する。139は口縁部に凹線が2条施され、140は無紋の体部にタタキ目が観察できる。これも古い特徴である。I系の存在を考えると混在かも知れない。

台付甕は低脚が主である。脚端部は141・146は面をなしており、単なる上げ底とは異なる。143は口縁部・体部上半の特徴がIW系甕に共通する。内面のケズリも不十分である。IW系の変換したものであろう。

148・149はこれまで類例の無い甕である。148は体部内面にケズリが観察でき口縁部の刻みもいくらか他と共通すると言えるが、149は口縁部は肥厚気味で強くヨコナデされ、体部ミガキの有無は不明である。外面にはハケメ工具による羽条の圧痕が施されている。体部下半にはタタキ目が観察できる。まるで149・148は原型と模型との関係のようでもある。

V系 155は受口状の口縁部をもち、全体に粗いハケメ調整が施され、刻みや紋様も同一工具で行われている。

2期b 資料的には極めて不十分である。

SB03 13は焼成前穿孔で、I系有孔鉢の変換したものと考えられる。17は台部に大形円孔をも（図版21）つ台付鉢で、杯部は大きく開く。凹線は杯部が10条、台部も5条と多条である。外面に

はタタキ調整痕が観察できる。杯部内面にはミガキが施されている。

SB11 65は系譜が不明である他はすべてIV系である。太頸壺は単純口縁が出土している。2期a(図版24・36)と差はない。63はおそらく細頸壺である。64はミガキの範囲が広い。299は細頸壺で、上から櫛描直線紋とハケメ工具連続圧痕の反復、波状紋、斜格子紋となり、紋様構成が複雑化している。

大淵遺跡出土土器の変遷について

I系 I系は1期には壺・甕・鉢など器種も多様で一応すべての器種がそろっている。しかし、紋様のには壺に磨消線紋の使用頻度が低く、阿弥陀寺遺跡とは様相が異なる。このことは大淵遺跡が〈凹線紋系土器〉出現期に成立するという点に関わるのであろう。つまり、阿弥陀寺遺跡では「II-2期」に盛行する磨消線紋系列が固有の伝統として継承されているのに対して、大淵遺跡ではそうした余地が無かったのである。同様のことは甕について言えそうで、これまでのところ指頭圧痕紋を有する例がほとんど認められていない。ただこうした点が同時期の系譜的な相違であるのか、あるいは多少の時期差を含むものであるかは実際明確ではない。2期には一部器種の残存があるようだが、基本的には頻度的に急激な低下を示す。

II系 1期ではIIN系が若干出土している。器種は深鉢と無頸壺である。SB05の246~248は口縁部内面の櫛刺突紋が点列状で典型的である。249は口縁部内面に櫛条痕(一部列点状をなす)が施され、犬山市上野遺跡など知られている類例の少ない資料である。同じ所から出土している251はII系深鉢がIV系に変換したものである。この系は2期以降も存在するが、大淵遺跡では確定したものとなっていない。

ところで、IIS系はすでに独自の存在ではなくなっており、ここで触れるものではないけれども、I系に現れた斜格子紋や頸部の隆起などのように本来I系固有ではない要素の取り扱いで問題となる。これらについては、阿弥陀寺遺跡報告で「B系統」(ここではIII系に相当する)としたが、どうもそうした理解では問題があると考えようになった。たとえば90・125・286では櫛描直線紋は区画帯的な用法であり、本来I系での用法とは異なるからである。共通した用法はIIS系の多重沈線帯による区画と斜格子紋の組合せしかない。そうなると、I系分布圏内において従属的に存続していたか、あるいはIV系の波及によって当地方の土器製作の場が不安定になったのを契機に表面化したかである。

III系 1期は壺は確認したが甕は不明確である。2期は壺・甕とも出土頻度が著しく高くなる。ほとんど搬入品と考えられるから、人的な交流を含む現象である可能性が高い。

IV系 太頸壺。受口状口縁例に大きな変化はない。単純口縁例は1期には口縁部内面紋は櫛による連続刺突紋がほとんどで、2期にはほとんどがハケメ工具連続圧痕に変わる。扇形紋は2期以降に盛行するのであろう。頸部紋様は、1期は断面三角形突帯は存続するのに対

し、ハケメ工具連続圧痕帯は2期以降器面に直接施される連続圧痕紋となる。

細頸壺。袋状口縁例は、1期には口縁部の凹線は2条程度で以下の羽状紋は櫛で施されていたのが、2期には凹線は3条以上となり羽状紋もハケメ工具連続圧痕となる。この羽状紋は以降段数を減少し、また圧痕の方向もそろえて羽状でなくなる例も現れる。最後には1段となる。こうした羽状紋の変化に連動して口縁部の形態も口径比を増す方向に変わる。体部紋様は複雑な構成が2期以降に出現するのは阿弥陀寺遺跡でも同様である。

甕。1期には台付甕は成立していない。平底か若干の上げ底が存在する。体部上半は横ハケメを特徴とするの、縦ハケメ→タタキを施すもの、タタキ→縦ハケメを施すものがある。2期は低脚と高脚の2者の台付甕が出現する。前者は上げ底の類型化?したもの、後者はI系台付甕からの変換であろう。そのほか、体部外面に波状紋を施すものや受口状口縁を有するものが現れる。2期b以降は台付甕が主流となる。

V系 2期に出現するが、IW系分布圏を經由したものかも知れない。出土頻度は高くない。
(石黒 立人)

参考文献

- 石黒立人 1990a「弥生時代の遺構と遺物」『阿弥陀寺遺跡』(叻愛知県埋蔵文化財センター
1990b「濃尾の弥生土器」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会

石 器

石 鏃 全体で16点出土している。内訳は有茎三角形6点・有茎五角形8点・柳葉形1点・不明1点となる。有茎三角形鏃は長さの長短により、大型のものと小型のものに分かれる。有茎五角形鏃の中には、818のように長さ5.48cmを測る長大なものがあり、側部が内湾し刃部の基部でやや突起状を呈する。また、819も基部付近が突出する。831は、先端に近いところが最大幅になるもので、基部が欠損している。

磨製石鏃は4点出土しているが、834と835は同一固体である可能性が高い。そうすると、有茎三角形2点・柳葉形1点となる。

磨製石鏃 大型蛤刃石斧は8点出土しており、840以外は全て欠損の部位がある。840についても、刃部は非常に磨滅しており、やや平坦にさえなっている。また、841は欠損側がよく磨かれており、砥石として転用されていたと思われる。

扁平片刃石斧は5点出土しており、843以外は部位のどこかに欠損部分がある。

叩き石 確実に叩き石と認定でき図示したものは8点であるが、その他叩打部を持つものは20点近くあり、さらに詳細に検討すれば増加する可能性がある。柱状5点・小型柱状1点・円球状1点・不定形1点がある。不定形なもの854は、側面は磨面がみられる。

台 石 長さ18cm・幅12.4cm・最大幅5.5cmを測るもので、SB12より出土している。上・下面が凹状になり磨痕がみられ、石皿・砥石としての機能が考えられる。(写真図版171)

0.21cmを測る。暗緑色をした凝灰岩である。836は一方が欠損しており、現長2.03cm・径0.24cm・孔径0.10cmを測る。褐色をした凝灰岩である。

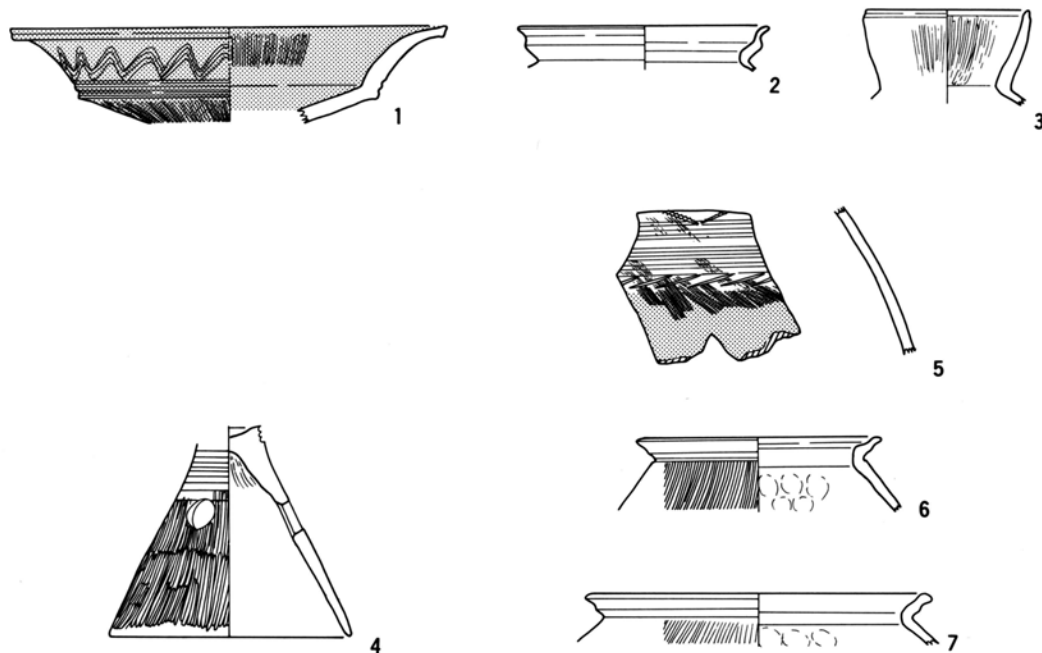
ガラス玉 中世の溝SD18より出土しており、当該期に下る可能性もあるが、その形態からみると弥生時代のものと思われる。淡青色を呈し、径0.43cm・厚さ0.27cm・孔径0.14cmを測る。(838)

弥生時代後期以降

SD01 第59図1の高杯は山中期通有の外反する杯部をもつもので、外反した杯部の下端に不揃いの原体で横線を巡らし、その上部に波状紋を施している。外・内面とも丹彩されている。2はS字状口縁甕Bにあたり、3はヒサゴ壺の口縁部となる。

その他 第59図の4・5は欠山式通有の土器であり、4は内弯する深い杯部をもつ高杯、5はパレススタイル壺の体部中位で、丹彩が施される。6・7はともに古墳時代中期の土器で、7はS字状口縁甕D類の松河戸式にあたるものである。

(宮腰 健司)



第59図 弥生時代後期以降出土土器 (1/4)

2. 古墳時代後期～平安時代中期

土 器

分 類 大きく分類すれば土師器・須恵器・灰釉陶器の3つに分かれる。各々の分類はさらに器種に分割され、器種の中でいくつかの型式に分かれるものについてはアルファベット順に名称をつけ、一般的名称として定着しているものはそのままちいた。(第60図)

土 師 器 煮炊具である甕・把手付甕・甌、食器である杯がある。

・甕

A 口頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、特に口縁端部は上方につまみあげられるようになるもの。口縁端部の形状によりさらにA1～A3類に分けられる。

B 口縁部がく字状に外反するもので、端部は丸い。単純口縁。

C 頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁端部は横位から下位の方向につまみだされる。口縁端部の形状によりさらにC1～C3類に分けられる。

D 頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁端部は外上方に延びるもの。

E 頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁部が大きく外反するもの。口縁端部は丸い。

F 頸部から口縁にかけて強いナデが施されるもので、口縁部が逆ハ字状に外に開くもの。小型品。

G 口縁部が強く外反し、荒いハケが外面及び口縁内面に施される。口縁部の違いによりG1～G3類に分けられる。

H 口縁部が水平になるぐらい外反するもので、外・内面ともナデ・イタナデが施される。

・把手付甕

上記の土師器甕に把手が付いたもの。分類は甕と同様とする。

・甌

逆ハ字状の円筒形の体部に把手が付き、底部に孔が開けられているもの。

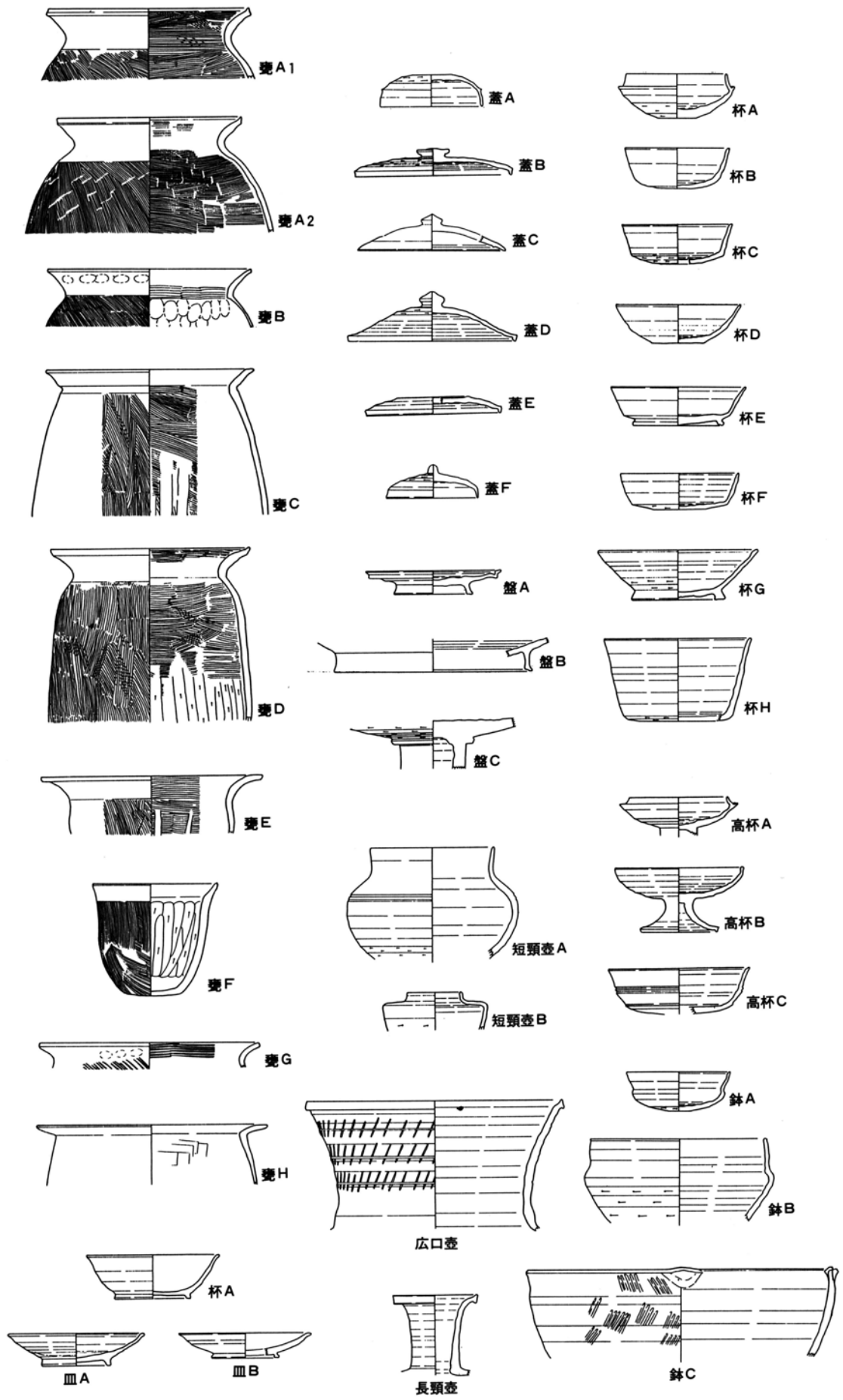
・杯

器高の低い皿状の形態をなすもので、ヘラミガキ・暗紋が施される。

須 恵 器 煮炊具である甌、食器である杯・甕・盤・鉢・高杯・甌・平瓶・貯蔵具である甕・広口壺・長頸壺・短頸壺・広口壺・提瓶がある。

・甌

A 逆ハ字状の円筒形の体部に牛角把手が付くもの。



第60圖 主要器種分類

- B 鉢の体部に半円状の把手が付くもの。
- ・杯
 - A 体部にかえり部と受部をもつ、古墳時代からの伝統的な杯。
 - B やや丸い体部をもつもので、底部は静止ナデか粗面のままになってい。
 - C 杯Bの底部外面にヘラケズリか施されたもの。
 - D 逆ハ字状にたちあがるやや深い体部をもつもので、底部がはっきりとしている。
 - E 箱型の体部をもつので、高台が付く。
 - F 杯Eの高台がないもので、底部は回転ヘラケズリが施される。
 - G 杯Dに高台が付くもの。
 - H 体部の器高が高く、深い箱型になるもの。
- ・蓋
 - A 天井部が丸い古墳時代からの伝統的な蓋。
 - B 端部が折り返されるもので、宝珠つまみが付く。
 - C 内面に受け部が付くもの。
 - D 器高が高く丸みをおび、やや外反して口縁部にいたるもの。宝珠つまみが付く。
 - E 蓋B・Dと同形態ですが、天井部が平たく、宝珠つまみが付かない。
 - F 端部が垂直に下がり、壺蓋になるもの。
- ・盤
 - A 浅い体部で、端部が折り返されたようになるもの。通常の高台が付く。
 - B 盤Aに高めの高台が付くもの。
 - C 盤Aに高杯の脚が付くもの。
- ・鉢
 - A 頸部が体部とあまり差がなく、偏平な体部に内弯する口縁部をもつもの。小型品。
 - B 頸部が体部とあまり差がなく、短い口縁部をもつもの。肩部が最大径になる。
- ・高杯
 - A 杯Aに脚が付くもの。
 - B 杯Bに脚が付くもの。
 - C 杯Bの杯部に沈線が巡るもの。
- ・甕

体部最大径が口縁部より大きく、タタキ成形されるもの。
- ・長頸壺

頸部が長く、口縁部にいくに従いゆるやかに外反するもの。頸部と体部の接合部は細い。
- ・短頸壺
 - A 体部に比べて、頸部が太く短いもの。
 - B 短頸壺Aに比べて頸部は締まり、肩部が張るもの。

・ 広口壺

体部に比べて、頸部が太く口縁部が大きく開くもの。

・ 提瓶

偏平な球形の体部側面に口縁部が付くもの。

灰釉陶器 食器である杯・皿がある。

・ 杯

A 内弯してたちあがる体部に丸く外反する口縁をもつもの。高台が付く。

・ 皿

A やや内弯する杯部をもつもの。高台が付く。

B 直線的な浅い杯部をもつもの。高台が付く。

SE09 須恵器

壺A・杯A・高杯A・C・平瓶・甕・甌A・短頸壺A・提瓶がある。蓋Aに分類した351は口縁の端部が外反するというやや特異な形態をもち、焼成も軟質で砂粒の多い白っぽい胎土をしている。口縁内面には使用時に生じたものかと思われる多くの剝離が認められる。これと同じ焼成・胎土をもつものが352で、杯Aに類似する。受け部は上方にまっすぐに延び、底部外面にはわずかな静止ヘラケズリがなされるのみで成形時のままになっている。杯Aである345～350は、受け部の立ち上がりに差があるものの、口径や調整方法などはほぼ同じものである。345と346の受け部端には使用痕と思われる欠損・磨滅が多くみられる。また、345には外・内面ともススが多量に付着していた。347の底部外面には並行して走る4本（うち最外のもの長い）の直線のヘラ記号がつけられている。高杯Aの353は上述した杯Aに脚がついたもので、355は高杯Bもしくは杯Bのどちらかであろう。高杯Cの359は2条の沈線が巡らされ、焼成が軟質で杯底部内面に木葉痕を残しており、同じく軟質の高杯脚357と同一個体である可能性がある。354は平瓶の口縁である。361は甕で体部外面に斜方向の平行タキと3条の沈線が施され、内面はユビ及びイタによるナデ調整がなされている。362は甌Aの体部上半。363・364は短頸壺Aにあたる。369は提瓶になる。

土師器

甕Aにあたるものばかりで、小型の369以外は大型のものになる。口縁端部の形態により、ヨコナデで内側につまみ上げるA1類（366～369）と上方につまみ上げるA2類（370～371）に分かれる。

SE28 杯A・杯B・杯E・高杯脚・甕・広口壺・鉢Bがある。372の杯Aは口径も狭く、立ち上がりも短い。373は杯Bで底部外面に静止ヘラケズリがなされ、T字状のヘラ記号がある。374は杯Bにあたり、底部外面に静止糸切りの痕跡がみられる。375は高杯Bの脚で、やや軟質である。377は短頸壺Aで、口縁部がやや内弯して立ち上がり、肩部付近まで回転ヘラケズリが施される。378は広口壺で、3条の横位の沈線で区切られた部分にそれぞれ縦位の沈線が施される。

土師器

甕A 1類(379~381)と甕A 2類(382)があり、全体に口縁部端面が狭くなっている。また、甕C 1類になるものとして383があり、口縁部がやや内弯気味になり、わずかに横方向にナデ上げられている。388の口縁はあまり外方に延びないが、甕Cになるか。385は甕Bになる。386・387は口縁部が大きく外方に広がる甕Eで、384も同類かと思われる。389は甗の口縁部である。

SE 3 1 須恵器

蓋A・杯A・甗がある。蓋Aの390~392は口径も大きく、天井部も丸い。杯Aの393・394は同形体をなし、口径も大きく器高い。395もよく似ているが、立ち上がり部が短い。396は甗で、注口が外に突出していない。肩部まで回転ヘラケズリがなされる。397の三方向に透穴をもつ脚を有するものは、脚付短頸壺であろうか。

土師器

甕A 1類(398・399)とA 2類(400)がほとんどを占めている。

SE 3 2 須恵器

蓋A・杯Aがある。蓋Aの401・402の天井部は丸く、403は平たくなっている。3点とも口径は大きく、自然釉の付着が多い。杯Aの404・405はほぼ同形で、体部1/2以上に回転ヘラケズリがなされている。口径は大きい。

土師器

甕A 1類(406・408)と甕A 2類(407・409)がほとんどを占める。甕A 1類の408は上方に強くナデ上げられるものであるが、408はそれが弱くなっている。410は長胴の甕の体部であり、外面のハケの中に、体部下方から上に向かって施され中位で折り返されるものがみられる。内面は横位のハケの後、下方から上方へのヘラケズリがなされている。

SK 1 2 須恵器

蓋A・杯Aがある。蓋Aは天井部がやや平たくなるものである。杯Aの中には、412のような口径の狭い小型のものもあり、大小の差がみられる。415は壺類の底部であろう。

土師器

甕A 1類(418・419・421)と甕A 2類(417)がほとんどを占める。全体に口縁端部の面は狭い。420は甗で、底部に半円形の大きな孔を二ヶ所もつ。また、体部下位には対面の位置に二ヶ所、焼成前穿孔の小孔がみられる。口縁部には強いヨコナデがなされ、体部外面には縦位のハケ、内面には横位のハケ後ユビナデが施される。把手は、ユビによる押圧のみで成形される。

SE 2 1 遺物は小片がわずかに出土しただけで、実測できたものは土師器甕A 2類(422)と甕底部(423・424)のみである。423・424は井戸最下層より立位の状態で出土している。

SE 1 3 須恵器

蓋B・杯A・高杯Bがある。蓋天井部外面2/3に回転ヘラケズリがなされる。杯Aは偏平な体部をもつもので、底部外面付近にわずかに回転ヘラケズリがなされるもの(427・

428) や成形時のままのもの (426) がある。

土師器

甕A 1類 (432・434) とA 2類 (430・431・433) がある。

SE06 把手付甕AのA 1類が出土している。口縁端部は内上方にナデ上げられ、偏平な体部を呈する。ユビ押圧のみで成形された2個の把手が対面に付く。

SE22 須恵器のみが出土する。436は杯Aで、偏平な体部をもち、体部外面2/3ら回転ヘラケズリを施している。437は杯C、438は杯E、440は平瓶の口縁部か。439は壺(短頸壺Bか)の高台と思われ、体部との接合面には、接合時につけたヘラによる条線が多数みられる。

SE23 須恵器

高杯Bの脚(441)、甕(442)が出土している。甕は注口が突出しているもので、体部上半にクシによる斜位の刺突がなされている。また、体部下半には静止ヘラケズリがなされる。

土師器

甕A 2類(443)がある。

SD94 器蓋(444)、杯A(445・446)がある。445の底部は丸みをおび、静止のナデ(ヘラ)が施される。446は偏平な杯部をもち、1/2程度回転ヘラケズリがなされる。

SX02 須恵器

蓋A・B、杯A・B・C、鉢a、高杯B、甕、広口壺がある。蓋A(448・449)は全体に丸みをおびて、小型のものとなっている。杯A(450)も小型化し、立ち上がり部も短い。452は偏平な体部に内湾する口縁部をもつもので、体部外面下半1/3に回転ヘラケズリが施される。456の広口壺は3条の沈線かせ横位に巡り、その上からヘラ及びイタによる斜位の刺突がなされる。458のは小型で、沈線で区切られた体部上半に斜位のクシによる刺突がなされている。体部下半には静止ヘラケズリが施される。

土師器

甕A 1類(463)と甕A 2類(464)、甕C 2類(461)、甕D(465・466)、把手付甕C 3類(462)がある。459と460については横方向のナデが口縁端部になされ、わずかに外方に引き延ばされており、甕Dの範疇に入るかもしれない。462は把手部が欠損しているおり、長胴の体部と横位に引き延ばされた口縁端部をもつ。全体に体部に丸みがなくなり、円筒状になる。

SE14 須恵器

蓋B、杯B・D・E、広口壺、甕がある。469・470の両杯とも底部外面には静止のナデ(ヘラによるものか)が施される。473は口径約59.4を測る大型の甕の口縁部である。

土師器

甕A 1類(474)と甕A 2類(475・476)がある。口縁端部が狭く、はっきりしなくなっている。

SK40 内面にかえりの付く須恵器蓋C(477)と、土師器甕A3類(478・479)がある。土師器甕の口縁部はく字状に折れ、それに伴いヨコナデが施される範囲狭くなっている。口縁端部はナデにより内向する面が作られる。

SD60 須恵器杯C(480)、平瓶(481)と土師器甕A3類(481)、把手付甕A3類(483)がある。

SK20 須恵器

蓋F、杯A、高杯Cがある。蓋F(484)は壺蓋になるもので、釣鐘状のつまみが付く。杯Aの485・486は小型で、かえり部も短い。高杯C(487・488)は、杯部が直線的になり、沈線が1条しか巡らない。

土師器

489~491はともに甕A3類となる。491は頸部のあまり締まらないものであり、体部内面にユビ及びビタによるナデがなされている。

SE25 須恵器

蓋B、杯B、鉢B・Cがある。492・493は直線的な体部をもつ杯Bで、底部外面が成形時のままになっている。492の底部外面には並行する直線のヘラ記号がある。495は壺底部かと思われ、底外面に放射状のヘラ記号がみられる。499は鉢Cで、口縁部に2条の沈線があり、体部外面に斜位の並行タタキが施される。内面は磨滅が激しい。

土師器

500と502は甕Bで、器壁が薄く、砂粒の多い胎土をもつ。501も同様な傾向をみせるが、口縁部が板状に外上方にのび広いという特徴をもち、甕E及び甕Hとの関連が考えられる。503は平底になる甕底部である。

SK10 須恵器

蓋B、杯B・E、短頸壺Aがある。505は器高が非常に高くなり、器種は不明である。杯Eの506の底部外面には静止ヘラケズリが施される。507の底部外面には、へ字状のヘラ記号と有機物(墨痕か)がみられる。短頸壺A(509)は、口縁端部が丸く肥厚し、底部外面に回転糸切り痕が残る。口縁部は、焼成時に変形し歪んでいる。

土師器

甕A3類(511)と甕B(510)がある。

SK11 513は須恵器壺底部で、下半に回転ヘラケズリが施される。514・515は土師器甕A2類になるもので、両者とも頸部が太く、514は体部が深鉢状を呈する。512は土師器甕底部で、外面はナデ(ユビか)が施され、底部外面に木葉痕がみられる。

SD41 須恵器

蓋B、杯A・B・E・F・H、短頸壺B、甕、鉢Cがある。杯Aである521は小型のもので、器高も低く、底外面にわずかに回転ヘラケズリが施される。杯Fの525は器壁が厚く、口縁端部もやや丸い。底外面には回転ヘラケズリが施される。526~530は杯Bで、底外面には静止のナデ及びヘラケズリがなされる。527は底部の粘土が横に肥厚し、

高台状になる。533は杯部が深くなる杯Hで、高台の有無は不明である。532は甗で、注口部がわずかに突出し、体部上半の沈線で区画された部分に、クシによる斜位の刺突がなされている。535の甗は、口縁端部が肥厚して丸く、斜位の並行タタキがなされている。537は鉢Cで、口縁端部を内方にナデ、一方向の片口を作っている。体部は並行タタキ後回転ナデがなされている。531は器種不明である。

土師器

538は杯でやや丸みを帯びた箱型の杯部をもち、口縁端部がヨコナデにより丸く肥厚する。外内面ともヘラミガキが施されるが、剥離が激しく詳細は不明である。また、杯部内面には下半に縦位の、上半には格子状の暗紋がなされる。539は甗A 2類、540は甗A 3類になる。器壁が薄く、砂粒の多い541は甗Bになる。甗Dである542・543は、口縁部が直線的になり端面がわずかみられる程度になる。

SE 2 6 須恵器蓋B (544) とやや杯部が丸みを帯びる杯E (545)、口縁端部上面がわずかに凹状になる土師器甗 (551) がある。

SE 2 9 546・547は須恵器の杯で、杯部が浅く口縁端部が鋭く、杯Dもしくは杯Gにあたるかと思われる。548は蓋B、549は杯E、550は器種不明である。

SD 7 2 552・553は、須恵器蓋Bになる。554は土師器甗で、口縁端部がナデにより外下方に延びる、甗C 3類にあたるものである。

SD 9 7 555～563は須恵器である。555・556は、須恵器蓋Dになる。557は長頸壺の口頸部で根口縁端部が上下に延びる。558は、高い脚をもつ盤Cになるもので、杯部と脚部の接合による突帯状がみられる。559・560は甗口頸部、562・563は壺底部・高台部にあたる。561は平瓦の端部で、淡橙色を呈する。内面には布目・縄痕がある。その他瓦片は5点出土する。

SD 4 9 須恵器

杯B・C・D・E・F・G、長頸壺、甗B、短頸壺Aがある。杯Fの564の底部外面には回転糸切りが施される。同じ器形の565には回転ヘラケズリがなされ、並行する2条のヘラ記号をもつ。566は杯BもしくはDで、567は底部外面に回転糸切り痕をもつ杯Dである。杯Gである569も底部外面に回転糸切り痕をもち、並行する2条のヘラ記号をみられる。572はユビ押圧のみで成形された半円環状の把手をもつ、甗Bである。575は短頸壺Aで、口縁端部が回転ナデにより外方に肥厚する。573は長頸壺の体部下半・高台部、574は短頸壺Bの体部下半か。

土師器

576は甗Fで、逆台形状を呈する体部と、強いヨコナデにとり外方に延びる単純口縁をもっている。外面は縦位・斜位のハケ、内面はヘラケズリが施される。

SK 0 6 全て須恵器である。577は器高が高く、内弯する蓋Dである。578～581・583は底部外面に回転ヘラケズリを施す杯Fになる。582・584は杯Dで、底部外面に回転糸切り痕がみられる。585は長頸壺の頸部、586は底部の広い杯G、587は盤Aになる。

SD 0 2 全て須恵器である。588・589は蓋D、590は杯F、591・592は杯E、593・594は盤A、

595は高台の高い盤Bになる。

SD90 須恵器

596は底部外面に回転糸切り痕のある杯D、597・598は杯Eになる。

土師器

602は、口縁部がく字状にゆるやかに外反し、外面に左上から右下にかけて、口縁内面には横位に条痕状の荒いハケが施される甕G1類になる。599～601甕Hで、口縁部が水平に直角に折れ、外・内面ともユビ及びビイタによる丁寧なナデで仕上げられている。603は土錘に似た円筒状の土製品で、被熱しており、自然釉が付着する。フィゴの口部になるか。

SE01 須恵器

604・605は杯部の浅い盤Aで、606は灰Eになる。607～609は底部外面に回転糸切り痕のある杯Dで、608は口縁に二ヶ所の欠損部があり、そこからススが垂れたような状態で杯部に付着しており、燈明具として用いられたと思われる。610は長頸壺の口頸部、611は水注の注口である。

土師器

612～614は甕G2類で、口縁部が段をもって屈曲する。器壁は厚く、外・内面とも荒いハケが施される。平底の615は、荒いハケをもち、甕Gの底部になるであろう。616は603と同様のものである。

SE10 617は灰釉陶器皿Aで、つけがけ釉が杯部になされる。618は須恵器長頸壺の体部下半・高台部となる。

SE24 619は灰釉陶器皿Bで、内面全体に釉がかかる。底部外面には回転ヘラケズリが施されており、「乃」が墨書される。620は内湾する杯部とわずかに外反する口縁部をもつ椀Aで、全体に釉がかかる。621・622は須恵器蓋D、623・624は長頸壺の口縁部にあたる。

SE27 625・626はそれぞれ小型・大型の杯釉陶器椀Aで、高台部が高くなっている。両者とも内面に釉がかかる。626はやや杯部の浅い灰釉陶器皿Aで、内面全体に釉がかかる。627は皿Bで、杯部1/2程度につけがけ釉がかかる。629・630は土師器甕G3類になる。

その他の土器

緑釉陶器 3点出土しており、全て杯である。862が一番残りがよく、杯釉陶器杯Aになる。写真図版7も同じ器種になると思われ、両者とも淡緑色の薄い釉がかけられている。写真図版6は中世の方形土坑SK94から出土したもので、口縁部にあたる。釉調は暗緑色を呈する。

製塩土器 知多式製塩土器の脚ばかり43点出土している。ユビ押圧で成形される大型のものと、ナデられる小型のものがあり、知多3・4類にあたる。(866～888)

土 錘 「Ⅶ-2、大淵遺跡出土の土錘」についてを、参照されたい。

その他 864は小片であるが円面硯の杯部、863は1/3片残存する盤Bの大型品で、包含層よりの出土である。865はSK37より横位の状態で出土している。ほぼ完形。

文字資料

木 簡 SD 89の上層より出土。木簡は下端にわずかに先に尖らせた痕跡がみられるが、その他は上端が折れ、左右も荒く割ったままで、裏面も剝離したままになっている。全体に墨痕は薄く、時間の経過とともに出土時よりも文字の判読がしにくくなっている。現況の長さは(225)×幅(18)×厚さ(6)mmで、木簡学会の型式番号の051型式「長方形の材の一端を尖らせたもの」か081型式「折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの」のどちらかであろう。積文としては、「□物□(部_カ) □□」が当てられる。(867)

土 器 856は60D区の包含層より出土したもので、須恵器系杯C及び杯Hの底部にヘラ状工具で「□月」と書かれている。855は中世のSD 100より出土したもので、甕及び壺の体部にヘラ状工具で「奈口□□□」と書かれる。

石 器

勾 玉 SB 42の南東隅柱穴の中位の壁際より出土したもので、暗茶褐色と白色の縞模様を呈する蛋白石である。(861)

紡 錘 車 包含層より2点、SK 10より1点出土している。そのうち859と860は無紋であるが、858は、下面と側面に中を斜格子紋で充填した鋸歯紋が沈線で施されている。また、孔内部には鉄芯が残存していた。石材は、全て滑石である。

木 製 品

下 駄 I期にあたるSE 09・31・32より連歯の下駄が出土している。SE 09出土の891は右足用で、右部と後部が欠損しているが、方形を呈するものと思われる。前部の紐孔と後部の紐孔1のみが残存しているが、その間隔はやや長い。892は完形のもので、足(指)痕がみられる。左足用。SE 31出土の889は右足用で、後部が欠けているものの2つの歯部と3つの紐孔は確認できる。また、表前部には足(指)痕がみられた。SE 32出土の890は縦2/3と前部が欠損しており、裏面の前部に前歯の痕跡が窺える。895はⅢ期にあたるSE 07にり出土している、小型の左足用のもので、出土時より歪みが激しく、前部の紐孔が2つみられる。

鎌 柄 I期のSE 32より出土したもので、やや「く」字状に折れる偏平な長方形の棒の先端に縦位に焼く2.5cmの切込みをいれ、刃が差し込めるようになっている。また、それとは反対側の先端は突起状に削り出されている。(893)

箸 I期のSE 32より出土したもので、長さ22cm・厚さ0.65×0.5cmのやや偏平に面取りされ、両端にいくほど細くなっている。(894)

折 敷 Ⅲ期の井戸SE 24の底部に敷かれた状態で出土したもので、上に二段の曲物が乗る。隅丸長方形の短部側が突出した形態をしており、1枚の板より削り出している。それに側板が乗るのであるが、長方形の形状にあわせて外側から若干削り込まれ、側板が動かないように、8ヶ所樹皮で綴じてある。また、曲物の痕跡が明瞭に残存している。(第42図)

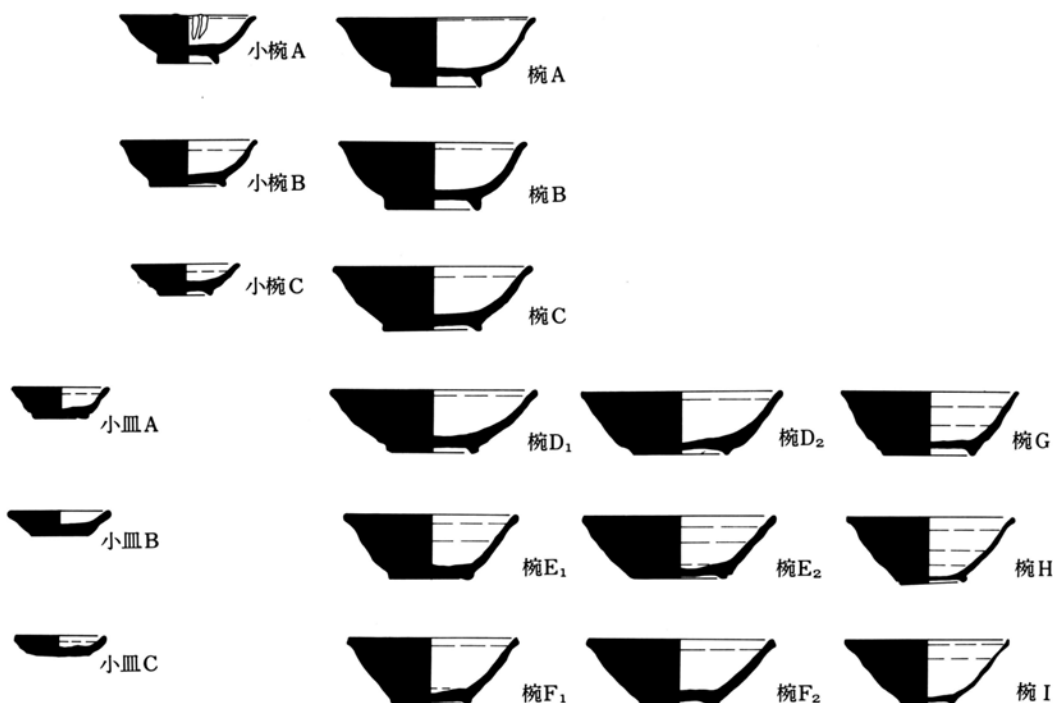
3. 平安時代後期～室町時代

土 器

平安時代後期～室町時代に属する土器・陶器は、量的にはあまり多数とはいえ、その大半が溝からの出土で占められている。ここでは、これらについて、遺構埋土中より出土したものを中心に説明を加えるわけであるが、周知のように今日これらの分類については様々な意見がみられるため、事前に混乱を避けるため、土器・陶器類について、若干の分類と用語の整理をおこなう。

種 類 土器・陶器の種類には、前者については土師器、後者については灰釉系陶器・施釉陶器がある。

器 種 土器の器種としては、杯・皿・甕・鍋・釜がある。これらについては、一般的な呼称に従うこととする。次に陶器についてであるが、施釉陶器については、やはり一般的に用いられるものに従う。最後に灰釉系陶器についてであるが、器種としては、碗・小皿・蓋・壺・甕・鉢・陶錘があるが、特に大淵遺跡におけるこの時代の土器・陶器のなかで量的に最も多い碗・皿類については、以下に示す分類をさらに加えることとする。この区分は具体的には、碗についてはまず、大・小にわけ、さらに大型の碗を9つに（A～I）、小型の碗を3つに（A～C）区分した。また、小皿については、3つの（A～C）区分した。



第61図 灰釉系陶器 碗・皿の分類

- 椀 A 器高が高く、器壁は薄い。仕上げが他に比べ、ていねいであることが特色。多くは灰釉を薄く口縁部～体部上方にツケガケすることを原則とする。形状は、体部が下方に丸味を持ち、全体に内湾ぎみで、口縁部は体部から外反し、丸く納められている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみは平坦である。高台は高く、内外面丁寧にナデ付けられる。端部はやや尖り、平面形は整円であるものが通例である。
- 椀 B 椀Aの形状をややにぶくした形態。仕上げはていねいである。形状は。体部が下方で丸味を持ち、内湾して口縁部に至る。口縁部は外反し、丸くおさめられている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみはほぼ平坦である。高台はやや高く。内外面ていねいにナデ付けられる。端部はやや丸く、平面形は整円である。
- 椀 C 口径・底径の割に器高がやや低く、全体に偏平で器壁はやや厚い。形状は、体部が下方で丸味を持ち、わずかに内湾して口縁部に至る。口縁部はやや外反し、丸くおさめられている。内面は、体部とみこみとの境が不明瞭で、みこみはほぼ平坦である。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形はややゆがむ整円で、端部には砂粒もしくはモミガラ of 圧痕を留めるのが通例である。
- 椀 D 砂粒を胎土の混和材として若干用いた、やや粗雑な胎土を用いることが特色。口径・底径の割に器高が低く、全体に偏平な形状である。器壁はやや厚い。口縁部の形状は基本的には丸くおさめられているが、外面にわずかに帯状の面を持つ傾向がある。仕上げはややラフで、このため外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は、体部とみこみの境が不明瞭で、みこみはややくぼむ。仕上げはややラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられるが、低くつぶれている。平面形は楕円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。
- なお、椀Dは、体部の形状からさらに二分できる。具体的には、体部が丸味を持ち、口縁部で外反するもの（D1）と、ほぼ直線的なもの（D2）である。
- 椀 E 砂粒を胎土の混和材として用いた粗雑な胎土を用いることが特色。ぬた痕が多く観察でき、器壁はやや厚い。口縁部の形状は、外面に帯状の面を持つ。端部はやや丸い。仕上げはややラフで、外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は。体部とみこみの境が比較的明瞭で、この部分がややくぼむものもみられる。仕上げはややラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。
- なお、椀Eは、形状からさらに二分できる。具体的には、体部下方にわずかに丸味を持ち、やや小振りなもの（E1）と、体部が直線的に延び、口径・底径の割に器高が低く、偏平な形状をとるもの（E2）である。
- 椀 F 砂粒を胎土の混和材として用いた、粗雑な胎土を用いることが特色。ぬた痕が多く観察でき、器壁は厚い。体部の形状は直線的である。口縁部の形状は、端部が尖り、外面に帯状の面を持つ。仕上げはラフで、外面の中央が浅くくぼむものもみられる。内面の形状は、体部とみこみの境が明瞭で、この部分が浅くくぼむものもみられる。仕上げはラフで

ある。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形はややゆがむ整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

なお、椀Fは、体部の立ち上がりの形状からさらに二分できる。具体的には、やや開くもの（F1）と、大きく開き、口径・底径の割に器高が低く、偏平な形状をとるもの（F2）である。

椀 G 砂粒がほとんどめだたない緻密で均質な胎土を用いることが特色。体部は下方にわずかに丸みを持ち、口縁部に至る。内面の形状は、体部とみこみの境が比較的明瞭で、みこみは平坦である。仕上げはていねい。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

椀 H 砂粒がほとんどめだたない緻密で均質な胎土を用いることが特色。器壁は薄い。体部はほぼ直線的で、口縁部でわずかに外反する。口縁部は仕上げがややラフなため、端部の中央が浅くくぼむものもみられる。口縁部は端部が尖り、外面が帯状に面を持つ。内面の形状は体部とみこみとの境で2～3mmの段を持つものが一般的。仕上げはラフである。高台は低く、内外面ナデ付けられる。平面形は整円だが、径が小さい。端部にはモミガラの圧痕を留めるのが通例である。

小 椀 椀A～Cをそのまま小型化したもので、詳細は小椀Aが椀Aに、小椀Bが椀Bに、小椀Cが椀Cにそれぞれ一致する。

小 皿 A 砂粒を胎土の混和材として若干用いたやや粗雑な胎土を用いることが特色。器壁はやや厚く、器高はやや高い。形状は体部がわずかに内湾し、口縁部は若干外反し丸くおさめる。平底で底部はやや突出する。

小 皿 B 砂粒を胎土の混和材として用いた粗雑な胎土を用いることが特色。器壁は厚い。平底。仕上げはややラフで、ぬた痕が多く観察できる。口縁部は偏平で、外面に帯状の面を持つ。端部はやや丸い。内面の形状は体部とみこみの境が明瞭で、この部分は浅くくぼむ。

小 皿 C 砂粒を胎土の混和材として若干用いた粗雑な胎土を用いることが特色。平底。仕上げはややラフで、ぬた痕が多く観察できる。口縁部は偏平で、外面に帯状の面を持つ。端部は尖る。内面の形状は体部とみこみの境が明瞭で、この部分は浅くくぼむ。

以上、灰釉系陶器の椀・皿類について、本項で用いる分類について説明を加えたわけである。この中で、椀G～Iについては他のものと使用胎土に大きな差異がみられ、生産地において、いわゆる「北部系」もしくは「均質手」と呼称される一群に属する。また、生産地では、これらとセットをなす小皿もみられるが、大淵遺跡においては確認されていない。なお、ここで用いる椀A～F、小椀A～C、小皿A～Cは、藤澤良祐氏の編年（藤澤1982）に対応させれば、椀A・小椀Aが2型式、椀B・小椀Bが3型式椀C・小椀Cが4型式、椀D・小皿Aが5型式、椀E・小皿Bが6型式、椀F・小皿Cが7型式にそれぞれあてはまり、椀G～I類については、田口昭二氏の編年（田口1973）に対応させれば、椀Hが、ほぼ白土原1号窯式～明和1号窯式、椀Iが、ほぼ大畑大洞4号窯式に該当している。

平安時代

- SE11 1～3は灰釉系陶器。1は小椀B。完形。高台はややゆがむが、仕上げはていねいで、みこみには使用痕が明瞭である。2も小椀B。1と合わせ口状になって出土している。完形。3か所にやや長い輪花がある。3は小椀B。底部1/2程度の破片で腰部より上方を欠く。高台はややゆがむ。みこみには使用痕が明瞭で、灰緑色の自然釉がかかる。
- SE16 4～10まで灰釉系陶器、11～17まで土師器である。4は椀B。完形。高台はややゆがむ。みこみに黒色ないし青紫色の付着物が認められる。5は椀B。口縁部を1/2程欠く。口縁部の仕上げはややラフでゆがむ。4か所にやや長い輪花がある。高台はややゆがみ、体部と接合がやや雑。みこみは使用痕が明瞭である。6は椀B。体部以下を欠く口縁部1/2程度の破片。仕上げはていねいである。口縁部にはやや長い輪花がある。4か所として図化した。体部外面に煤状のものが付着するが、二次的に比熱は受けてはいない。みこみには使用痕が明瞭である。7は椀BないしC。体部を欠く口縁部1/3程度の破片。口縁部にはやや長い輪花がある。4か所として図化した。みこみには使用痕が明瞭である。8は椀A。底部1/3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。9は椀B。底部1/4程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。10は小椀B。ほぼ完形。仕上げはていねいである。みこみには黒色の光沢を持つ付着物が認められるほか、使用痕が明瞭である。11は皿。大振りで、体部はやや内湾ぎみで口縁部にいたる。口縁部は丸みを帯びる。底部は平底となる。残存状況は口縁部2/3程欠く。0.3～0.5mm大の砂粒を含む胎土を使用している。ロクロまたは回転台使用で、外底部に回転糸切り痕を留める。口縁部内外面に煤状のものが付着するが、二次的に比熱は受けてはいない。みこみは使用痕により摩滅するが、いわゆる「コロシ」と呼ばれる指などで痕が観察できる。12はいわゆる「足高高台」を持つ杯で、完形。胎土は緻密で、仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台を使用するが、みこみと外底部、特に後者に多くぬた痕が観察でき。表面には焼成時に黒色した部分が若干認められる。13は「足高高台」片。杯部を欠く。白色の非常に緻密な胎土を使用する。仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台を使用し、外底部には回転糸切り痕を留める。みこみにはぬた痕が観察できるほか、煤状のものが付着する。14も「足高高台」片。やはり杯部を欠く。13に比較して器壁が薄く、やや小振りだが、胎土は緻密で、仕上げはていねいである。ロクロまたは回転台使用。15は甕。口縁部の小片で、いわゆる「清郷型甕」。0.3～1.5mm大の砂粒を含むやや粗雑な胎土を使用している。二次的な比熱を受ける。
- SE17 16～22は灰釉系陶器、23・24は土師器である。16は椀B。口縁部を1/3程度欠く。みこみには使用痕が明瞭で、仕上げはていねいである。17は椀B。体部を欠く口縁部1/4程度の破片。口縁部はややゆがむ。みこみには使用痕が明瞭である。18は椀A。底部片で体部より上方を欠く。高台はややゆがむ。みこみは青紫色の付着物が確認できるほか、使用痕が明瞭である。また、他の製品の高台端部が釉着するが、ここから外側に淡緑色の自

然釉が厚くかかる。釉着した高台端部は折り取ったままの粗面となっている。なお、他の製品の釉着は、高台端部にもみられるがこの部分については研磨により平滑化されている。また、外面には灰釉を施した痕跡も観察できるが、十分な発色はせず、白変している。19は小椀C。底部片で腰部より上方を欠く。高台はややゆがむ。外底部の回転糸切り痕は、なで消されている。みこみには使用痕が明瞭である。また、この部分には他の製品の高台端部が釉着し、ここから外側に淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみは使用痕が明瞭であるが、釉着した高台端部は折り取ったままの粗面となっている。20は耳皿で、耳部を欠く。高台はやや高い。外底部の回転糸切り痕は、なで消されている。みこみ及び体部には淡緑色の灰釉を施す。21・22は広口壺。胎土・焼成などの状況がよく一致し、同一個体と考えられる。21は、口縁部1/4程度の破片。頸部はやや太く、ラップ状に開き、口縁部で縁帯を形成する。外面及び口縁部上方には淡緑色の灰釉を施す。内面にはやや粗い布の圧痕を部分的に残す。22は、底部1/4程度の破片。底くがっしりとした高台と直線的な体部を有する。外面には淡緑色の灰釉をハケヌリするが、一部に発色不良が認められる。23は椀か。底部片で高台を有し、白色の非常に緻密な胎土を使用する。表面の摩滅が著しいが、ロクロまたは回転台を使用しているか。24は甕。口縁部の小片で、0.3~1.5mm大の砂粒を含むやや粗雑な胎土を使用している。二次的な比熱を受ける。

SK05 25~27は灰釉系陶器。25は椀D2。ほぼ完形。みこみには使用痕が明瞭である。また、ここには他の製品の高台端部が部分的に釉着し、この部分より外側に緑白色の自然釉が部分的にみられる。みこみには使用痕が明瞭で、釉着した高台端部は研磨により平滑化されている。26は椀D1。1/3程度の破片で、ひどくゆがむ。また、みこみには他の製品の高台端部が部分的に釉着し、この部分より外側に淡緑色の自然釉が部分的にみられるほか、使用痕が明瞭である。なお、釉着した高台端部は研磨により平滑化されている。また、煤状のものが付着するが、これは破面にまでおよぶ。なお、二次的な比熱は受けてはいない。27は小椀C、口縁部を3/4程度欠き、全体にややゆがむ。高台が部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。

SK74 28~33は灰釉系陶器。28は椀D1。完形。仕上げはていねいである。使用痕があまり認められない。29は椀C。ほぼ完形。内面には淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。30は椀Dか。体部以下を欠く口縁部1/4程度の破片。仕上げはていねいで、使用痕があまり認められない。31は椀D2。底部片で体部により上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。32は椀C。底部片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。33は椀C。底部1/2程度の破片。体部より上方を欠く。みこみには使用痕、ぬた痕が明瞭である。

鎌倉時代

SE04 34~39まで灰釉系陶器。34は椀E。みこみには使用痕が明瞭である。35は、1/5程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。36は椀H。底部片で腰部より上方を欠く。みこ

みには使用痕が明瞭である。外底部には墨書『清?』がみられる。37は小皿Cほぼ完形。口縁部付近に濃緑色の自然釉がかかる。全体に使用痕があまり認められない。38は小皿B。ほぼ完形。やや大振り、口縁部付近に部分的に濃緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。39は小皿C。口縁部を1/4程度欠く。口縁部及びみこみに濃緑色の自然釉が厚くかかる。使用痕が認められず、焼成時に釉着した窯壁片すら研磨を加えてはいない。

SE12 40は土師器皿。完形。胎土は緻密で、口縁部下方で屈曲し、口縁部は丸く納める。底部は平底となる。仕上げはていねいで、ロクロまたは回転台使用。外底部には回転糸切り痕を留める。口縁部内外面に煤状のものが付着するが、二次的は比熱は受けてはいない。みこみは使用痕により磨滅する。

SE15 41は椀F2。口縁部を2/3程度欠く。高台は部分的に欠落する。体部内面及び口縁部には淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。口縁部の一部には、煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、二次的な比熱はうけてはいない。42は椀E1。1/5程度の破片。体部内面及び口縁部には淡緑色の自然釉が厚くかかる。全体に使用痕があまり認められない。43は椀F1。1/3程度の破片。口縁部はややゆがみ、高台は部分的に欠落する。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。外底部には墨書がみられるが、文字は判読できない。44は椀E。底部片で体部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。外底部には墨書『上』がみられる。45は椀E。底部片で体部より上方を欠く。みこみは淡緑色の自然釉がかかるが、使用痕が明瞭である。46は小皿A。完形。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみは黒色の光沢を持つ付着物が認められるほか、使用痕が明瞭である。47は小皿C。口縁部を1/5程度欠く。口縁部及びみこみの一部に濃緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。

SE18 48~50まで灰釉系陶器、51・52は土師器である。48は椀F2。1/5程度の破片。全体にややゆがむ。内面に煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。49は椀E。底部1/2程度の破片で体部より上方を欠く。内面に煤状のものが付着するほか、みこみには使用痕が明瞭である。50は小皿C。1/2程度の破片。ややゆがみ、みこみには使用痕が明瞭である。51は皿。器壁は薄く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となる。残存状況は、口縁部を2/3程度欠く。0.3~0.5mm大の砂粒を含む胎土を使用している。ロクロまたは回転台使用で、外底部には回転糸切り痕を留める。みこみには使用痕により磨滅するが、いわゆる「コロシ」と呼ばれる指などで痕が確認できる。52は土師器皿。器壁はやや厚く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となる。残存状況は、2/3程度。胎土は緻密であるが、ややゆがむ。

SE20 53~55まで灰釉系陶器、56・57は土師器である。53は椀D。底部片で体部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。みこみは煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭であ

る。54は椀H。底部1/3程度の破片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。55は小皿A。1/5程度の破片で、みこみには使用痕が明瞭である。56は鍋で、いわゆる「伊勢型鍋」。口縁部の小片である。形態は頸部が短く外反する口縁部で、折り曲げにより、受け口状を呈する。外面には煤が付着する。57は甕。口縁部の小片で、太く短い口縁部を有する。口縁部は直角に屈曲する。胎土は0.3~1.5mmの砂粒を含み、やや粗い。外面には煤が付着し、二次的な比熱も若干受る。

- SK19 58は陶鍾。上方に鈕を有する分銅形を呈する。鈕部上面、肩部、底部を除き縦方向のケズリ調整による。側面には淡緑色の自然釉がかかる。体部は部分的に欠けるが、これは使用痕と考えられる。重量は、現状で88.2gだが、これを比重により完形品の重量を計算すると108.0gとなる。
- SK77 59~61は灰釉系陶器。59は小皿C。やや大振りで、完形。体部内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。60は小皿C。完形。やや大振りで、口縁部付近に部分的に淡緑色の自然釉がかかる。使用痕が認められず、焼成時に着着した窯壁片や、長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。61は壺。肩部より上方を欠く。形態は、丸みを帯びた体部を有し、底部は平底。体部には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。また、体部下方には他の製品の一部が有着しているが、研磨を加えている。なお、底部には使用痕が明瞭である。
- SK78 62・63は灰釉系陶器。62は椀F 1。底部片で腰部より上方を欠く。高台は部分的に欠落する。全体に使用痕があまり認められない。63は椀D。底部片で腰部より上方を欠く。全体に使用痕があまり認められない。
- SK144 64~66は灰釉系陶器。64は椀D。底部1/3程度の破片で、腰部より上方を欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕が明瞭である。65は椀E 1。底部1/2程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。66は小皿B。1/2程度の破片で、みこみには使用痕が明瞭である。
- SD05 67~69は灰釉系陶器。67は椀G。底部片で体部より上方を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。68は椀E。底部片で体部より上方を欠く。体部内面には部分的に濃緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕がみられる。69は椀D。底部片で体部より上方を欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。
- SD15 70~81は灰釉系陶器、82~85は土師器である。70は椀D 2。1/3程度の破片。口縁部はややゆがむ。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。71は椀E 1。1/5程度の破片。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。72は椀C。底部片で口縁部を欠く。体部はゆがむ。内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには煤状のものが付着するほか、使用痕がみられる。73は椀C。底部片で体部を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。74は椀C。底部2/3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭であるほか、部分的に淡緑色の自然釉がかかる。75は

椀D 1。やはり底部2/3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。76は椀C。底部片で口縁部を欠く。みこみには煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、使用痕が明瞭である。79は椀E 2。底部1/2程度の破片。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。80は鉢。底部1/4程度の破片。腰部がやや張る体部に高い高台を持つ。底部は胎土の練のが甘く、焼成時に気泡を生じる。体部内面には部分的に緑白色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が非常に明瞭である。81は小皿A。完形で、ややゆがむ。体部内面には部分的に濃緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。82は小皿。口縁部をわずかに残存させる。胎土は0.3mm大の砂粒のほか、シャモットを若干を含む。体部は内湾し、口縁部は丸く納める。底部は平底となる。仕上げはていねいで、ロクロまたは回転台使用。外底部には回転糸切り痕を留める。83は小皿。1/3程度の破片。胎土は0.3mm大の砂粒をふくむが、緻密。体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となるが、体部との境が不明瞭。84は小皿。1/5程度の破片。胎土は0.5mm大の砂粒をふくむ。器壁は薄く、体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となるが、体部との境は不明瞭。85は小皿で、いわゆる「柱状高台」を持つ。底部片で体部より上方を欠く。底部は平底で突出する。86は鍋。底部を欠く。ややつぶれる球形の体部に、短く外反する知恵を有する。口縁部は折り曲げにより、玉縁状を呈する。外面には煤が付着し、二次的に比熱を受ける。

SD 4 3 87~98は灰釉系陶器。87は椀E 1。口縁部を1/3程度欠く。体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。高台は部分的に欠落する。みこみには使用痕が明瞭である。88は椀E 1。口縁部を3/4程度欠く。口縁部外面には部分的に灰緑色の自然釉がかかる。みこみには使用痕が明瞭である。焼成時に釉着した窯壁片が研磨を加えず残存する。89は椀F 1。口縁部を2/3程度欠く。体部はゆがむ。口縁部および体部内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。高台は部分的に欠落する。使用痕が認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。90は椀H。1/3程度の破片、口縁部はゆがむ。淡緑色の自然釉が、口縁部には部分的に、体部内面にはまばらにかかる。みこみには使用痕が明瞭である。91は椀E 1。底部欠く口縁部1/4程度の破片。内面には部分的に白緑色の自然釉がかかるほか、使用痕が明瞭である。92は椀I。体部以下を欠く口縁部1/4程度の破片。体部は胎土の練のが甘く、焼成時に気泡を生じる。小振り、内面には部分的に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められない。93は椀C。底部片で口縁部を欠く。体部はゆがみ、高台は部分的に欠落する。焼成はやや甘く、使用痕があまり認められない。94は小皿C。1/5程度の破片。使用痕があまり認められない。95は小皿B。口縁部を1/3程度欠く。内面には部分的に灰緑色の自然釉がまばらにかかるほか、みこみには使用痕が明瞭である。96は鉢。底部欠く口縁部1/5程度の破片。体部は直線的に口縁部いたる。口縁部は丸く納めるが、ゆがむ。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかるほか、使用痕が明瞭である。97は壺。肩部位下を

欠く1/5程度の破片。肩部からやや短く弧を描き口縁部にいたる。口縁部上方は幅2mm程度沈線状にくぼむ。肩部内面を除き淡緑色の自然釉がかかるが、一部は剥落する。98は壺。いわゆる三筋壺。体部の破片で、上部には2本一組の沈線が巡る。

- SD50 99~122まで灰釉系陶器、123が施釉陶器、125~127まで土師器である。99は椀D2。口縁部を1/3程度欠く。みこみには使用痕が明瞭である。口縁部の一部には、煤状のものが付着するが、これは破面にまで及ぶ。なお、二次的な比熱は受けてはいない。100は椀E1。口縁部を1/3程度欠く。口縁部の一部には淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕が明瞭である。101は椀F1。口縁部を1/4程度欠く。口縁部はややゆがむ。胎土の練りがやや甘く、焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕がみられる。102は椀F1。1/4程度の破片。高台は部分的に欠落する。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。103は椀F1。1/4程度の破片。高台は部分的に欠落する。内面には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。内面には使用痕が明瞭である。104は椀F2。1/4程度の破片。使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。外底部に墨書をもつ可能性があるが、欠落部分が大きく判断できない。105は椀H。1/4程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。106は椀H。口縁部を1/3程度欠く。全体にぬた痕が多い。みこみには淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められず、ぬたの盛り上がりすら研磨を加えてはいない。107は椀I。1/3程度の破片。口縁部はややゆがむ。胎土の練りがやや甘く、焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕があまり認められず、ぬたの盛り上がりすら研磨を加えてはいない。108は椀E。口縁部1/4程度の破片で底部を欠く。109は椀E。口縁部1/4程度の破片で底部を欠く。やや小振り。全体に淡緑色の自然釉がまばらにかかる。使用痕があまり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。110は椀H。口縁部1/4程度の破片で底部を欠く。内面には使用痕が明瞭である。111は小皿B。完形。口縁部はややゆがむ。胎土の練りがやや甘く。焼成時に気泡を生じる。みこみには使用痕が明瞭である。112は小皿B。全体にゆがむ。みこみには使用痕が明瞭である。113は小皿B。完形。みこみには使用痕が明瞭である。114は小皿B。完形。焼成がやや甘い。みこみには使用痕が明瞭である。115は小皿C。全体にひどくゆがむ。使用痕があり認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。116・117は蓋。いずれも本来は生産地において窯道具として用いられるもの。傘形を呈し、天井部は平坦で、上面に回転糸切り痕を留める。いずれも使用痕は認められず、116には、焼成時に付着した窯壁すら研磨を加えてはいない。118は鉢。口縁部1/5程度の破片で底部を欠く。口縁部には淡緑色の自然釉がまばらにかかる。内面には使用痕が明瞭である。119は鉢。底部1/3程度の破片で、口縁部を欠く。みこみには使用痕が明瞭である。120は壺。いわゆる三筋壺。体部の破片で、上部には2本一組の沈線が巡る。121は壺。底部1/5程度の破片で体部より上方を欠く。底部は平底となる。底部の内面および破面には黒色の光沢を持つ付着物が認められる。122は杯。口縁

部を欠く1/4程度の破片。高く、緩やかに外反する高台と、丸みを帯びた杯部を持ち、形状は12~14に類似するの。みこみと高台端部には濃緑色の自然釉がかかる。使用痕はあまり認められない。123は卸皿。1/5程度の破片。やや内湾する体部と玉縁部の口縁部を持つ。底部は平底となる。みこみは卸目と、これを取り巻く沈線を施す。全体に淡緑色の灰釉をハケヌリする。卸目には使用痕はあまり認められない。124は皿。いわゆる「柱状高台」を持つ底部片で、体部より上方を欠く。底部は平底で突出する。胎土は03mm大の砂粒や、シャモットなどを含む。表面の摩滅が著しく詳細は判断できない。125・126鍋で、いわゆる「伊勢型」。いずれも口縁部の小片。形態は頸部が短く外反する口縁部で、折り曲げにより受け口状を呈する。外面には一部煤が付着する。127は釜。口縁部の小片。やや内湾する体部に口縁部直下に突帯を持つ。外面にはハケメ調整の痕跡を留めるほか、煤が付着する。

なお、SD-50からは、図化しなかったがこのほか若干の貿易陶磁片が出土している。

SD63 128~131は灰釉系陶器、132は施釉陶器。128は椀E1。1/3程度の破片。みこみには使用痕が明瞭である。129は椀G。1/3程度の破片。内面には淡緑色の自然釉が部分的に認められるほか、みこみには使用痕が明瞭である。130は椀I。1/5程度の破片。内面には淡緑色の自然釉が部分的に認められる。使用痕しが認められず、焼成時に釉着した窯壁片すら研磨を加えてはいない。131は椀F。口縁部1/5程度の破片。底部を欠く。内面および口縁部には、淡緑色の自然釉がかかる。使用痕が認められず、焼成時に生じた長石の噴き出しすら研磨を加えてはいない。132は卸皿。1/5程度の破片で、やや内湾する体部に平坦な口縁部を持つ。底部は平底となる。みこみには篋による卸皿を持つが、使用痕はあまり認められない。全体に淡緑色の灰釉をハケヌリする。

SD59 133・134は灰釉系陶器。133は椀F2。底部片で口縁部を欠く。内面には部分的に濃緑色の自然釉がまばらにかかる。みこみには使用痕はあまりみめられない。134は椀F。底部1/3程度の破片。内面には一部白変する淡緑色の自然釉が厚くかかる。みこみには使用痕はあまり認められない。高台には部分的に煤状のものが付着する。

室町時代

SK17 135・136は施釉陶器。135は天目茶椀。口縁部1/4程度の破片で、底部を欠く。体部から丸みを持ち、口縁部直下で立ち上がる形状。外面下方を除き、前面に鉛色の鉄釉を施す。136は緑釉皿。完形。体部はやや内湾ぎみに口縁部にいたる。口縁部は丸く納める。底部は平底となる。口縁部には淡緑色の灰釉をツケガケする。みこみには使用痕が明瞭である。

(池本 正明)

注

- 1 灰釉系陶器の概念は、(池本正明「猿投窯の「山茶椀」-灰釉系陶器について-『マージナル』10 愛知考古学談話会 1990・池本正明「奥三河の灰釉系陶器 灰釉系陶器について2」

『考古学フォーラム』1 愛知考古学談話会 1990)による。

- 2 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ 瀬戸市歴史民俗資料館 1982
- 3 田口昭二 『美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗』 多治見市立精華小学校 1973

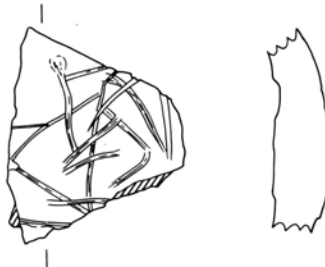
その他の土器

ヘラ記号 SD15より出土した土器片で、常滑産の壺（下部の沈線からみると三筋壺か）の肩部に先端部が割れている軟弱な原体で施紋される。施紋順序はまず対面するく字状を描いて方形部を作り、その間に縦位の沈線を引き、その後左上から右下に向かう二本の沈線、右上から左下に向かう5本の沈線・下部の横位の沈線・右側の縦位の沈線の順になる。（第62図）

土製品

加工円盤 土器の破片の側面を打ち欠くことにより円盤状の形態を作り出しているもので、総数73点出土している。その内、灰釉系陶器の高台部を使ったものが37点あり、3～4cm程度の小型のもの（767～784）と6～7cm程度の大型のもの（785～791）に分かれる。大型のものの中には、785のような小皿の底部を使用したものも2点みられる。体部を使ったものは17点あり、灰釉系陶器の碗・鉢・常滑産の壺（795）、鉄釉のかけられたもの（798～801、799は播鉢）、天目茶碗（807）等、多様なものが出土している。また、須恵器を使ったものが15点みられた（810～817）。これらの遺物のうち遺構から検出されたものは全て鎌倉時代以降の遺構からの出土であり、確実に古代に遡る資料は見いだせなかった。ため、加工が施された時期は12世紀以降であると考えたい。また、土師器を加工したものも4点出土しているが（808・809）、これらはおそらく古代の甕の体部であり、加工時期は須恵器と同じく鎌倉期以降と思われる。使用部位は、杯・碗の高台・底部が多いが、宝珠つまみを打ち欠くもの（814～817）が特徴的である。

（宮腰 健司）



第62図 ヘラ記号を有する壺（1/2）

V. 考察 1



V. 考 察 1

1. 弥生中期土器にみる複数の〈系〉 その2

— 大淵遺跡並行期を中心として —

石黒立人

2. 大淵遺跡出土の土錘について

宮腰健司・古橋佳子

1. 弥生中期土器にみる複数の〈系〉 その2

— 大淵遺跡並行期を中心として —

はじめに

すでに我々は、伊勢湾地方の弥生中期土器について、それが複数の〈系〉によって構成され、しかもそれぞれが独自の動きをしつつも相互作用しながら全体的な動きを形成して推移するものであるという視点を提示した(石黒 1990 a, 1990 b, 1990 c)。その場合の相互作用は、いちおうは同一水準で行われるものであると考えているが、しかしそれも大淵遺跡成立以前であり、大淵遺跡成立以後の時期においてはそれぞれの〈系〉も急激な変化をきたし、その存在様態を大きく変えることになる。

こうした変化の要因には〈凹線紋系土器〉があるわけだが、〈凹線紋系土器〉に関してはこれまで余り深く議論されることはなかった。私も「外来系」としてくくるのみで、その内容にまであまり深く立ち入らなかった。阿弥陀寺遺跡報告(勸愛知県埋蔵文化財センター1990(石黒1990 a))では、多少見通しめいたことをするしはしたが、あくまで課題の提示にとどまるものであった。従って、ここではすでに提示した見通しの検討をするとともに、この時期の集落および文化要素全般の動向をにらみながら〈凹線紋系土器〉を含めた複数の〈系〉に関しての具体像を結んでみたいと考える。

なお、〈系〉区分については本文での規定に準じる。

1. 大淵遺跡と周辺の遺跡

大淵遺跡の北ほぼ0.5kmには甚目寺町阿弥陀寺遺跡、北西約1.5kmには甚目寺町森南遺跡が存在する。そして北東約5kmには一市3町にまたがる朝日遺跡が存在する。朝日遺跡を除いては一応比較に足る資料が提示されているので、それらとの比較を行いながら当該期の様相について概観しておこう。

森南遺跡(甚目寺町教育委員会 1990)ではSK59とされた貝殻廃棄を伴う大形の土坑からまとまった一群が出土している。報告では、上層、中層、下層の3層に区分されている。このうち中層土器群は上下層をつなぐ漸移的な様相を示し、資料的な混在が認められる。従って、中層を除いて上層と下層を基準とするのが良さそうである。

下層はI系の組成的な安定とIV系との共存状態を典型的に示し、上層はI系の組成が崩壊し存在しても断片的となってIV系とⅢ系の共存が特徴的になるという、それぞれ大淵遺跡における1期、2期aの特徴を共有している。ほかに参考となる遺構は若干存在するが、概ね大淵遺跡の2期aまででおさまるようである。

阿弥陀寺遺跡では居住域を取り巻く環濠からそれぞれまとまった一群が出土している。提示されている時期区分によれば、南部地区においては内側2条の環濠出土土器群がI系が組成的に安定したままIV系と共存する傾向を示す「Ⅲ-1期」、もっとも外側の一群は「Ⅲ-2期」、北部地区においては外側2条が「Ⅲ-1期」、居住域に内接する環濠出土

土器群がⅠ系の組成的安定からⅣ系に台付甕が成立し始める段階である「Ⅲ－１期」から「Ⅲ－２期」の資料が出土している。

そのほか、方形周溝墓溝内や住居跡廃棄、土坑などからも比較的良好な資料が得られている。ここでも、「Ⅲ－１期」ではⅠ系が組成的に安定して存在しⅣ系と共存、「Ⅲ－２期」になるとⅠ系が断片的となってⅣ系とⅢ系の共存が特徴的になるという傾向が確認できる。以上の年代を対比すると次のようになる。

中期分区 ⁽¹⁾	森南遺跡	大淵遺跡	阿弥陀寺遺跡
4－1	SK 5 9 下層	1 期	Ⅲ－１期
4－2	SK 5 9 上層	2 期 a	Ⅲ－２期
4－3	×	2 期 b △	Ⅲ－３期 △

* ×：認められない，△：少量で不安定。

ところで阿弥陀寺遺跡で設定した「Ⅲ－３期」は上述のように大淵遺跡の２期bに相当した内容である。それは一応独立させてはあるものの決して安定したものでなく、遺構数・土器の出土量とも極めて少ないのである。この時期（中期４－３）は、確認できない森南遺跡は当然として大淵遺跡・阿弥陀寺遺跡を通してその不安定さは特徴的でさえある。このことが、遺跡の存続期間に関わることなのか、あるいは遺跡の遺存状況に関わることなのかは大きな問題であるけれども、私はそれを尾張地方南西部低湿地帯における集落の衰微という共通した現象と考えたい。

このように考えるのは、名古屋台地以東において上記遺跡で衰微傾向を示す時期に対応するかのようにならに遺跡の増加・定着が認められるからである。

2. 大淵遺跡と東方の地域

名古屋台地では弥生時代中期を通じて遺跡分布が希薄である中で、遺跡の増加するのは中期４－１以降である〈凹線紋系土器〉展開期であり、しかもその最初期はまとまった資料が少ない。古沢町遺跡（名古屋市教育委員会 1966）などで採集されているが断片的だし、「外土居式」の標準資料も詳細は不明である。報告された遺跡資料では、例えば瑞穂遺跡（名古屋市教育委員会 1984）の住居跡は中期４－２、方形周溝墓資料は中期４－３である。

高蔵遺跡はその広い遺跡範囲の中で、環濠の一部と考えることのできそうな「E地点濠状遺構」（瓜郷遺跡調査会 1963）と呼ばれた部分の存在から比較的遡る（中期３には確實遡り、中期２まで遡る可能性がある）安定した遺跡ではないかと考えられる⁽²⁾が、こうした痕跡は少ないのが現状である。

知多半島では位置的にその付け根部分に当たる知多市細身遺跡（知多市教育委員会 1980－84）で中期４－１相当のⅠ系土器群がまとまって出土している。それに対して本来この

地域が主たる分布圏と考えられてきたⅢ系（「獅子懸式」と呼称されている）は中期4-2相当が主であり、両者には時期差が認められる。しかも重要なのは、Ⅰ系土器群の組成的安定とともに紋様には大淵遺跡や森南遺跡では出土頻度のきわめて低い磨消線紋が認められることで、阿弥陀寺遺跡の「Ⅱ-2b期」との近似性が注目されるのである。Ⅳ系の主力がどちらに対応するのか確定できないが、このことは尾張地方でのⅠ系とⅣ系の関係を考える上で示唆的であるだけでなく、後述の岡島遺跡（（財）愛知県埋蔵文化財センター1990）のあり方を考える上でも示唆的である。

矢作川下流域の西尾市岡島遺跡では弥生時代中期を通じて遺跡が形成されているが、中期4-1のまとまった資料としてはSD25出土土器群がある。ここでは、Ⅲ系は当然として、Ⅰ系とⅣ系が出土している。Ⅰ系は細頸壺・台付甕があり、細頸壺には磨消線紋が認められる。台付甕はⅠ系そのものであり、両者の存在は上述の細身遺跡を経由させると理解し易いものとなる。岡島遺跡では中期4-2になるとⅢ系甕はほとんど台付甕となるが、Ⅰ系台付甕との技術的な共通性は無い。これはⅠ系の台付甕が表現的側面にのみ影響を与えたからであろう。Ⅳ系はこの時期はまだ断片的で尾張地方とは様相が異なる。Ⅲ系は尾張地方でのⅠ系のような急激な衰退は遂げないで漸移的に変化していくようである。しかし、結局は最後に比率が逆転してⅣ系が主体を占めるようになる。

知立市天神遺跡（知立市教育委員会 1985.86）は岡島遺跡とは異なり中期4以後に形成される遺跡で、ある意味で大淵遺跡と似通った形成を見せる遺跡であるが、ここでは、近接する小針遺跡（知立市教育委員会 1976）がほぼⅢ系で占められるのとは異なり、Ⅳ系の頻度が極めて高い。Ⅳ系壺には体部が稜を持つほどに強く屈曲し外面にミガキを施すものがあり、中期4-3に相当する。組成的には安定した様相を示している。台付甕の中にはⅢ系からⅣ系への変換もあるようで相互作用は包括的変換の完了に向かっている感がある。

豊橋市橋良遺跡では住居跡と方形周溝墓が検出されている。第13号竪穴住居跡出土土器にはⅠ系台付甕のかなり変形したもの（第8回東海埋蔵文化財研究会1990『伊勢湾地方の弥生時代中期をめぐる諸問題』資料集：P105-43）があり、中期4-1のⅠ系波及から時期的に下がる資料ではないかと考えられる。おそらく遡っても中期4-2ぐらいであろう。また在来系土器と考えられるものには第1号竪穴住居跡出土土器（前掲書：P104-36・37）のようにかなり東方的な様相を見せるものがあり、炉縁石の存在とあわせて今後検討の余地を残すものである。方形周溝墓資料では、当然住居跡よりは新しく中期4-3に相当するけれども、一部には第2号方形周溝墓資料（前掲書：P103-31）のようにさらに下がるのではなかと考えられるものもある。

中期区分	尾張南西部	名古屋台地・知多半島	三河西部	三河東部
4-1	Ⅳ系◎Ⅰ系◎	Ⅰ系◎Ⅳ系△	Ⅰ系◎Ⅳ系△	？
4-2	Ⅳ系◎Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系△Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系◎
4-3	Ⅳ系△	Ⅳ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系◎

3. 〈凹線紋系土器〉あるいはIV系土器の地域差

IV系土器は上述のように広範囲に展開する。それらがすべて同一の起源を有するものでないことは改めて述べるまでもないことであるが、一応ここで整理しておこう。

この諸特徴は伊勢湾地方西岸部と東岸部、あるいは北部と南部というように大きく区分できる。

伊勢湾地方西岸部

いわゆる伊勢地方は、東岸部と極めて緊密な関係を示す四日市市周辺の北部地域平野部、ほとんどV系分布圏として見なすことのできる鈴鹿市から亀山市にかけての北部地域内陸山麓部、V系および大和地方との関係を示す津市周辺の中中部地域、伊賀地方南部（名張）を經由して大和地方との緊密な関係を示す松坂市・伊勢市周辺の南部地域というように区分できる（鈴木克彦 1990：前掲書所収）。

北部地域を代表する永井遺跡（四日市市教育委員会 1972）は、SX74・75という方形周溝墓出土土器で、低脚台付甕の存在からおおむね中期4-2以後に位置づけられる。包含層資料では中期4-1に相当する資料も出土している。ほとんど東岸部的特徴の延長である。

中部地域・南部地域では北部地域と異なり、甕に台付甕が分布しないだけでなく、技術的にも体部内面のケズリ手法が認められない。壺の紋様構成は簾状紋など差異が目だつ。さらに南部地域になると鳥居本遺跡（前掲書 所収）のように水差し形土器が存在し、畿内地方への傾斜を強める。

このように相互に差を示す4地区に区分できるわけであるが、IV系の系譜は伊勢湾東岸部に共通する一系統、大和地方經由の一系統で整理できる。伊賀地方北部を經由しての琵琶湖地方（近江地方）南東部との関係は、V系に関しては言えても、IV系の伝達ルートとしてそれほど太いパイプであったかどうかは今後の検討に委ねる必要がある。かつては鈴鹿峠越えルートを考えていたが、この地域を占めるV系の独自性の強さは分布上の連鎖を遮断するかの感があり、中期3までは媒介的だが中期4では閉鎖的になると考えたほうがよさそうである。

伊勢湾地方東岸部

IV系の特徴はなんと言っても出現期から認められる甕の内面ケズリ手法である。これは西岸部のIV系と明確に区分する指標である。そして台付甕の存在。これもI系台付甕からの変換として尾張地方南西部で独自に発現した個性で、中期4-2以降の東岸部IV系甕を規定する要件となる。

IV系成立期である中期4-1の形質的・表現的屬性および組成の共通する地域を伊勢湾地方の外部に求めると、最も近接するのは琵琶湖地方北東部（米原町・近江町・長浜市周辺）である。〈凹線紋系土器〉が尾張地方で成立したものでは無い以上、琵琶湖地方北東部からの波及を考えるのが妥当である。伊勢湾西岸部の永井遺跡の土器群も尾張地方南西

部だけでなく琵琶湖地方北東部からの直接波及を考える必要もある。

このような伊勢湾東岸部との関連が考えられる琵琶湖地方北東部であるけれども、さらにそこへの〈凹線紋系土器〉の波及はまた如何なる経路で行われたのかという点については、また新たな課題となる。現状では内面ケズリ甕の分布など検討の余地を残すようであるが、波及経路の微細な検討は湖上交通の独自性などもあり、陸上での細かな連鎖を追及しても追いきれない可能性がある。

いずれにしても、IV系は形質的属性にしる表現的属性にしる属性段階での離散性はIII系成立期のように顕著であるから、そうした属性の統合された枠組みが構築された地域の特定を今後進めなければならない。

伊勢湾東岸部においてIV系は中期4-2になると、甕の体部外面に波状紋が加えられたり、また口縁部が微妙に受口状口縁を呈するものが出現する。大淵遺跡では体部外面にハケメ工具による羽状連続圧痕が施されるものも出土している。壺では、中期4-1の細頸壺口縁部外面や太頸壺口縁部内面の櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋となる。こうしたハケメ工具連続羽状圧痕紋は、壺に限らず高杯や台付鉢にも認められる紋様手法であり、それが単に櫛刺突羽状紋の変化したものと看することはできない。もともと櫛描紋手法に刺突紋は存在するが、それが主要な紋様手法となることは畿内地方中心にも認められない現象である。

原体の差と時間的な隔絶さを無視するならば、刺突紋手法は前期には日本海側地方で特徴的であり、中期になると近畿地方の日本海側地方だけでなく北陸地方にも散見されるようになる。こうしてここで言うV系でも刺突紋は顕著である。いま、琵琶湖地方のIV系を眺めるとそこにおけるハケメ工具連続羽状圧痕紋の分布は北半部においてやや濃いのであり、それと甕の内面ケズリとあわせて考えるなら日本海側地方との関連が強まった結果として理解できる余地がある。

ところで、V系でも受口状口縁壺の口縁部外面の紋様としてハケメ工具連続羽状圧痕紋が認められることについては触れたけれども、これはIV系における様相ほど普遍性はなく受口状口縁壺に限っての部分使用であるので一応無視できると考えるが、甕体部外面の波状紋は刺突紋が加わらないとはいえ直線紋を組み合わせる例もあるので、なお属性の起源が収束するかどうか検討の余地がある。

尾張地方ではIV系は斉一性が高く、そこに地域差は認められない。知多半島以東への波及期においてようやく時期的な差が顕在化する。

現状では三河地方の様相が完全には明らかとなっていないけれども、岡島遺跡の土器を参考に考えてみよう。

岡島遺跡では甕はすでに台付甕となっており、時期的には中期4-3に相当すると考えられる。体部外面にはタタキ調整、内面にはケズリ調整が施され一見尾張地方のIV系台付甕と同じ様であるが、実際にはタタキ調整の傾きが尾張地方では左上がりであるのに対し岡島遺跡資料中には右上がりという逆方向の例があるのである。これは中期2のI系を

原型とするⅢ系の甕にも言えることであるが、なぜか鏡像のように反転するのである。技術的には同一であるが、その具体的製作工程における所作に於て異なるのである。このことはタタキ調整痕が表現的屬性とはなっていないことを示しているであろう。

4. II系の消息

〈条痕紋系土器〉であるII系は、中期2にII S系とII N系に分岐する。後者は以降も継続して後期まで残存するようであるが、前者は中期3以降の消息が明確となっていない。明確ではないという事実は、朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡など尾張地方南西部の遺跡群にあってのことであり、本来の分布圏での事実ではないので、なお確定的ではない。しかし、少なくとも中期2まではその存在は明確であったから、それが不明確となることは、II S系固有の分布圏がI系との相互作用によって不安定化したか、I系分布圏の拡大によって統合された可能性はある。特に、I系において中期3に成立する磨消ハケメ手法が、本来I系櫛描紋の変化系列からは生じ得ない要素であることを考えると、それがII S系から参入した要素である可能性も考慮しなければならない。つまり、研磨を加えた無紋帯がI系、II S系両者には存在するが、I系の変化は無紋帯と櫛描紋帯の幅狭化による多重化であり、そのなかで後者が欠落して磨消線紋となるのである。これに対し磨消ハケメ帯にはそうした傾向は希薄である。多重化はほとんど認められないのである。

磨消ハケメ帯は、櫛描紋に関わると言うよりは、非櫛描紋としての性格を強く示しているものであり、それは櫛描紋系土器への傾斜が著しいⅢ系ではありえないし、I系と分布圏の重複するII S系に起源があるとする方が納得しやすいと考える。

このようなII S系のI系との融合的变化のなかで、中期4になって新たに表面化するのが、第63図に提示した土器群である。これらについては、阿弥陀寺遺跡の報告で「B系統」（ここで言うところのⅢ系）との「折衷型」としてくくった。Ⅲ系が固有の特徴をもって体系的に存在し、しかも体制化し、尾張地方南西部へも搬入品として多数流入するという状況において、上述の点とも関わってここであげた土器群にはⅢ系との共通性があるとは言えないのではないかと、思い直すに至ったからである。

686・1374・1365・1168・1のように頸部に認められる隆起とそこに施された斜格子紋やヘラ描羽状紋は、Ⅲ系で主要な紋様として使用されるのは中期2か中期4-2以降であり中期3では衰退するから、中期3での存在が一部でも認められるII S系要素の存続したものと考える方が妥当なのではないかと思うのである。

このような微細な要素への注目、体系とは無関係な個別の要素に対する過剰な反応であるという意見があるかも知れない。しかし、個別の要素が断片化するの分布上のまとまりがなくなって一定の組合せ（シンタクス）が崩壊したときであり、それに対しこれらは分布上も限定されまた紋様的には頸部の隆起というI系固有ではない特徴とそれに組み合わせる紋様という一定の関係が保持されているのである。そして、特に重要視すべきはそうした特徴に関わると考えられる資料が伊勢湾西岸部でも散見されることである。

この点で第63図の1はおもしろい資料である。南部地域で出土したものであるが、①口縁部から頸部にかけては北部地域的な特徴を有し、②体部は磨消線紋が施され尾張南西部的な特徴が顕著である。そして③頸部には隆起と斜格子紋が施されている。

西岸部のI系内においては③のような特徴が、決して頻度は高いわけではないがⅢ系やV系にはつながらない要素として広い範囲で認められるのである。これに関しては、西岸部のそれを固有の情報保持の場があると言うことは困難であるけれども、逆に保持の場として尾張地方があると考えられることはできるのであり、そこに強く表面化することはない連続した場を想定したいのである。

こうした意味で、305・664・16・210のような連弧紋も同様に重視する必要があると考えるものである。連弧紋は元々ⅡS系固有の紋様であり、それがⅢ系の主紋様として伝わるという経緯がある。しかし、Ⅲ系の変遷過程のなかで連弧紋は櫛描紋化していくのであり、ここで挙げたような磨消線紋風の連弧紋とはならない。磨消線紋風であることはI系の磨消線紋との関わりであろうが、勝川遺跡例16のように二枚貝刺突紋による連弧紋の存在は、それも体部上半の紋様が磨消線紋の横帯構成であることを見るなら、中期2に存在した二枚貝刺突連弧紋壺からの系譜を強く示唆しないではおかないのである。

これら紋様がただ断片として、単なる意匠の選択肢を構成するものに過ぎないのであればそれほど重要視する必要もないし、そうであれば重要視ではなく過大評価ともなる。それについては、それら資料の分布状況の重視、その紋様構成（シンタクス）へ上のパターンや系譜上の近接さなどを判断材料とするという立場によって、固有性を認めることに問題はなと考える。

今後こうした事例が着実に増加することを期待するしか現在の我々には許されていないが、Ⅱ系の固有性はそれが分岐して伝統を明確に保持するにⅡN系だけでなく、I系に引き付けられていくⅡS系にも認めることができると考えておきたい。そして、それは中期4という時期にあって、一旦はI系の枠にはめ込まれたⅡS系にも、それが系譜的に存続していたが故に、独自の動きを許すことになったのだと考えたい。もちろん、これらの事例はあくまで土器に限定されていることであり、それが集団の行動そのものに対応するわけではない。が、土器の日常的な使用という生活資料としての実用的機能ではなく、儀礼などのような非日常的な場における使用というような非実用的機能としての象徴的役割（伝統の持続）を認めることが可能ならばなら、という思いが強くなるのである⁽³⁾。

5. 中期4の社会

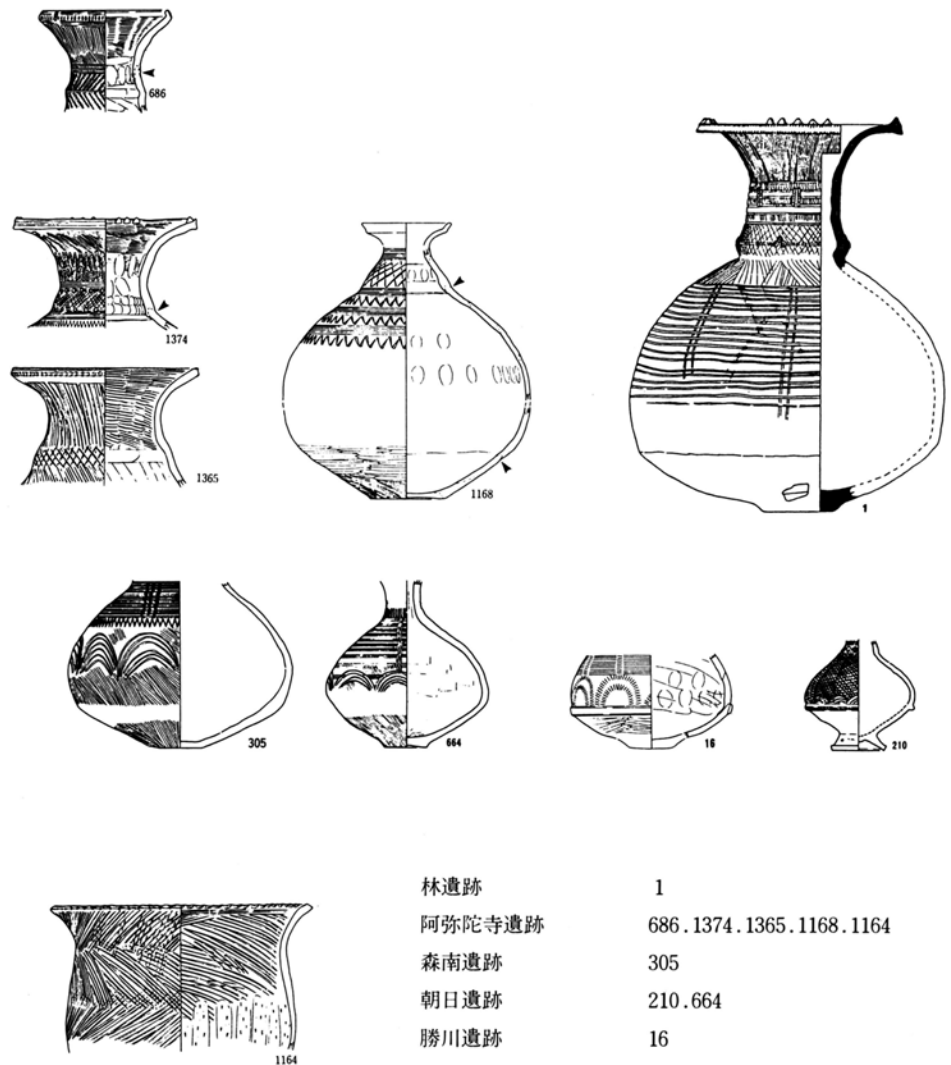
中期4は外来系としてのⅣ系と在来系としての諸系の相互関係の中で、最終的にはⅣ系主導の体制が形成されていくという、土器においてはI系からⅣ系への交代の時期である。遺跡の展開に関しても、それ以前とは異なり形成・衰退が短期間で起こり極めて流動性の高いものとなっている。この高い流動性がある意味で斉一性を形成する基盤になっているともいえる。

中期4-1では大洲遺跡・阿弥陀寺遺跡・森南遺跡で見られるようにI系とIV系との一遺跡内での共存という現象が生じる。この背景は、生産体制の共存であるのか、消費類型における共存であるのか、なお確定していないけれども、こうした共存現象はIV系の波及する地域では共通して観察できるのであり、ある意味で弥生時代前期の〈遠賀川系土器〉波及期とも共通するものである。

両者とも、伊勢湾地方にとって外部要素であり、異質な体系であることによって、すぐさま在地化することなく独自の系として表層的に分布圏を拡大するという現象を経過する。

このことは琵琶湖地方でも同様である。いわゆる「近江系土器」(ここで言うV系に相当する)が独自性を強めるのもIV系の波及期で、北部と南部の地域差は別にしてこの時期には低地平野部と高地内陸部の相違も解消されるようである。

まさに、基層としての〈在来系〉と表層としての〈外来系〉であり、両者が一遺跡、一地域において二層構造を形成するのである。そして、この二層構造は相互作用における強



林遺跡	1
阿弥陀寺遺跡	686.1374.1365.1168.1164
森南遺跡	305
朝日遺跡	210.664
勝川遺跡	16

第63図 II系土器の消息

弱の発現からみて、IV系が上位にそれ以外が下位に位置することによって、結果的にはIV系が全体化して以後の時代の方向を決定することになる。

ところで、このような土器に現れた変化は、社会としてはどのようなであろうか。社会は基本的には不可視的な関係体であり、考古学的に把握することはきわめて難しい。遺跡配置論が社会論と同一レベルで考えられてはいるけれども、遺跡の配置が社会的に規定されたものであることを言うためには、①その配置が相互規定されたものであることを示さなければならない、②それぞれの遺跡の継続性が内的連続性を有したものであることを示さなければならない、③一定の範囲（境界）の存在が問題にされ示されなければならない。つまり、対象とする遺跡は定住集団が形成したものでなくてはならないし、そうした遺跡のネットワークが関係体の現象面の一端としての遺跡の空間的配置であることを証明しなければならない。従って、それによって描かれる得るのは定住農耕民社会であり、おそらく伊勢湾地方の一部を占めるであろう定住性の乏しい集団の社会は把握できないことになる。ということは、それによって描かれた社会は一面的であることになる。もちろん時代の主要な部分は定住農耕民社会によって形成されるであろうし、弥生時代以降の社会的趨勢が定住農耕民社会によって規定されていくことからそれは間違った方法ではない。しかし、間違っていないが十分ではないのではなからうか。列島の弥生時代以降の文化がすべてそれによって一色になるとは考えられないのである。これでは地域の個性を等閑視することになると考える。

社会を考えるについては処理すべき問題が多い中で、まず中期4の考古学的事実を整理するなら、①短期的な遺跡形成が顕著となる。②伝統的集落はその姿を変える。③IV系土器の分布圏について言えば、山間部も含めて地形環境における農耕不適地を阻害要因としないであらゆる地域に浸透する。④墓制、住居構造、石器などに大きな変化が生じる。など、画期としての様相が際だっている。①と③は構成する集団の移動性が非常に高いことを示している。あるいはIV系を中心としての周辺部の情報伝達が活発化すると見なすこともできる。④は伝統性の喪失、すなわち外部からの文化的圧力が強くそれによって変質させられたことを示す。この外部からの圧力とは、端的な表現が環濠の廃絶・埋没であろう。それはおそらく武力を伴うものであったろう。

このような画期的な様相の卓越する時期の社会は、まさに不安定なものであり、全体としてくることができるようなものではないだろう。〇〇社会というような固有の枠を有しない、実態は個々の集落単位でまとまってしまっているようなものであると考える。その端的な表現は関東のモザイク的な囲郭集落の分布状況であろう。一旦まとまったかに見えたものではあるが、実際は外的な圧力に対して十分に求心力の働く場がなく、離散してしまっただけを示すと考える。

社会とは、一定の空間的範囲において存在する集団の相互依存関係を表現する用語であるなら、中期4は以前の社会が崩壊して新しく構築されつつある時期として、新たな社会の築かれる時期、つまり変成期として把握する必要があると考える。

この変成期に、尾張地方を含めた伊勢湾地方は大きな社会的・文化的圧力をこうむり、一部は東方へと逃れ、他は新しい枠にからめとられている。新しい枠は、なお未完成であり、再度の構築を必要とするけれども、そのために固有の伝統は崩壊し、新たな容貌をみせることになるのである。

(石黒 立人)

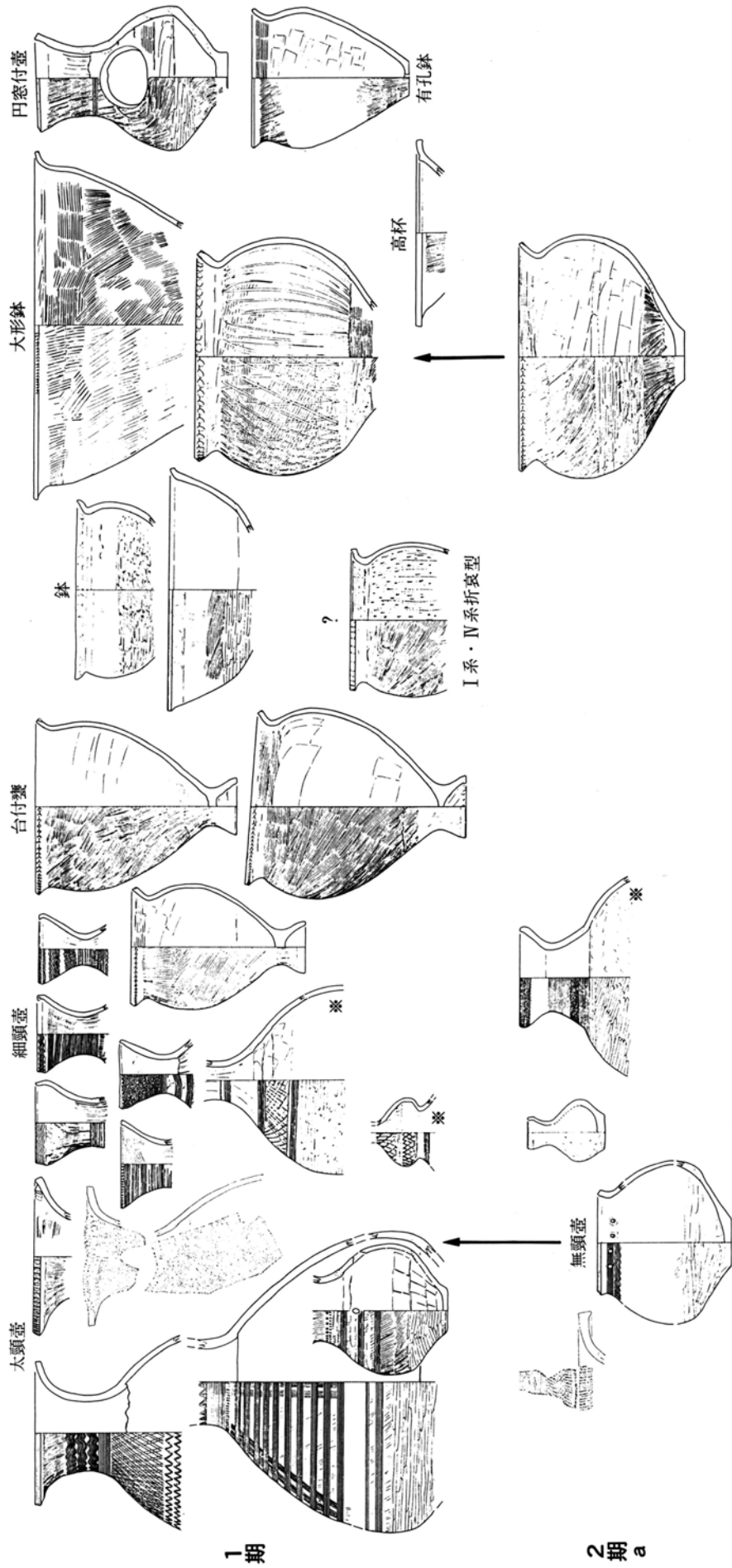
註

- (1) 私はこれまでいくつかの時期区分表記を使用してきた。ここでの区分「中期4」は次の文献による。1986「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書 86」『第7回 三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学談話会他。

しかし、そこでは中期4を「1段階」、「2段階」というように段階区分した。それに対してここでは、「段階」そのものの規定も問題と考え、単に序列としての1～3に改めている。

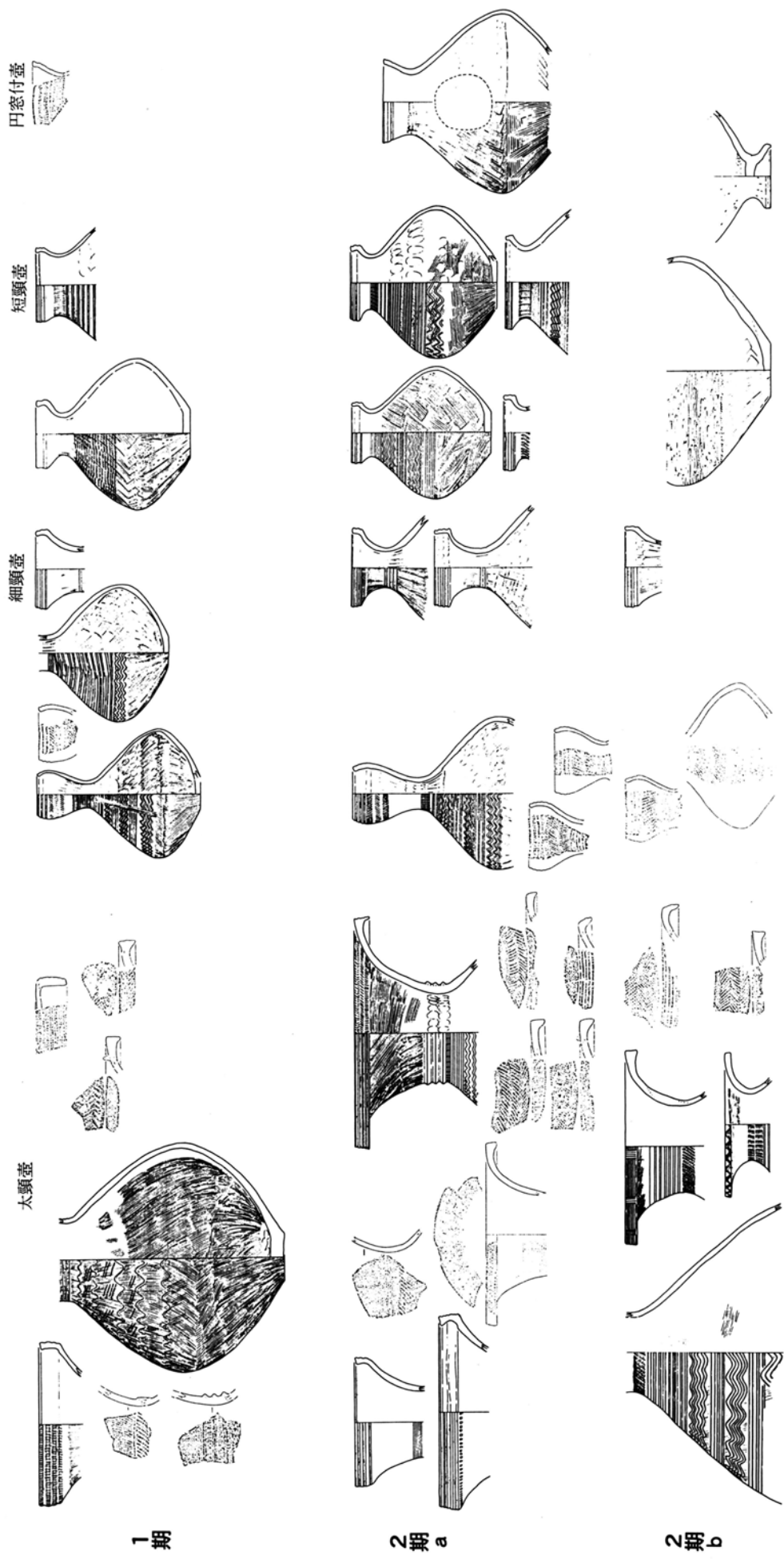
弥生時代の時期区分については特に「こうあるべきだ」、「こうすべきだ」というような考えは持っていない。その時点での説明の簡便さ、対象との関係において最も適合的と思えるものであればよいと考えている。いずれにしても区分は便宜的なものである。

- (2) 高蔵遺跡を含めて名古屋台地の諸遺跡は平野部の遺跡にも増して問題を内包している。それは、これまで調査例が少ないということではなく、地形的に余り水田可耕地が望めないと想定されるのに弥生時代前期から遺跡が形成されるという、単純な水田農耕社会一元論では理解できない側面を有するからである。その意味で、弥生時代前期ではなく、以後にも環濠集落が形成されていることが明らかとなれば、弥生社会の理解に対し寄与するところは大きいのではないかという思いがある。同様のことは知多半島に展開する諸遺跡についても言える。
- (3) II系（特にII N系）については、それがマイナーだから注視するのではなく、「弥生時代とは何であるのか」という問いにおいてはメジャーな存在だからである。現状ではそれほど開発の及ばない地域、というよりそれゆえに埋蔵文化財に対する対応が遅れている地域が主要分布圏であるという現状にあって、現在把握できる資料から語り得る部分は少ない。ほとんど想像である。



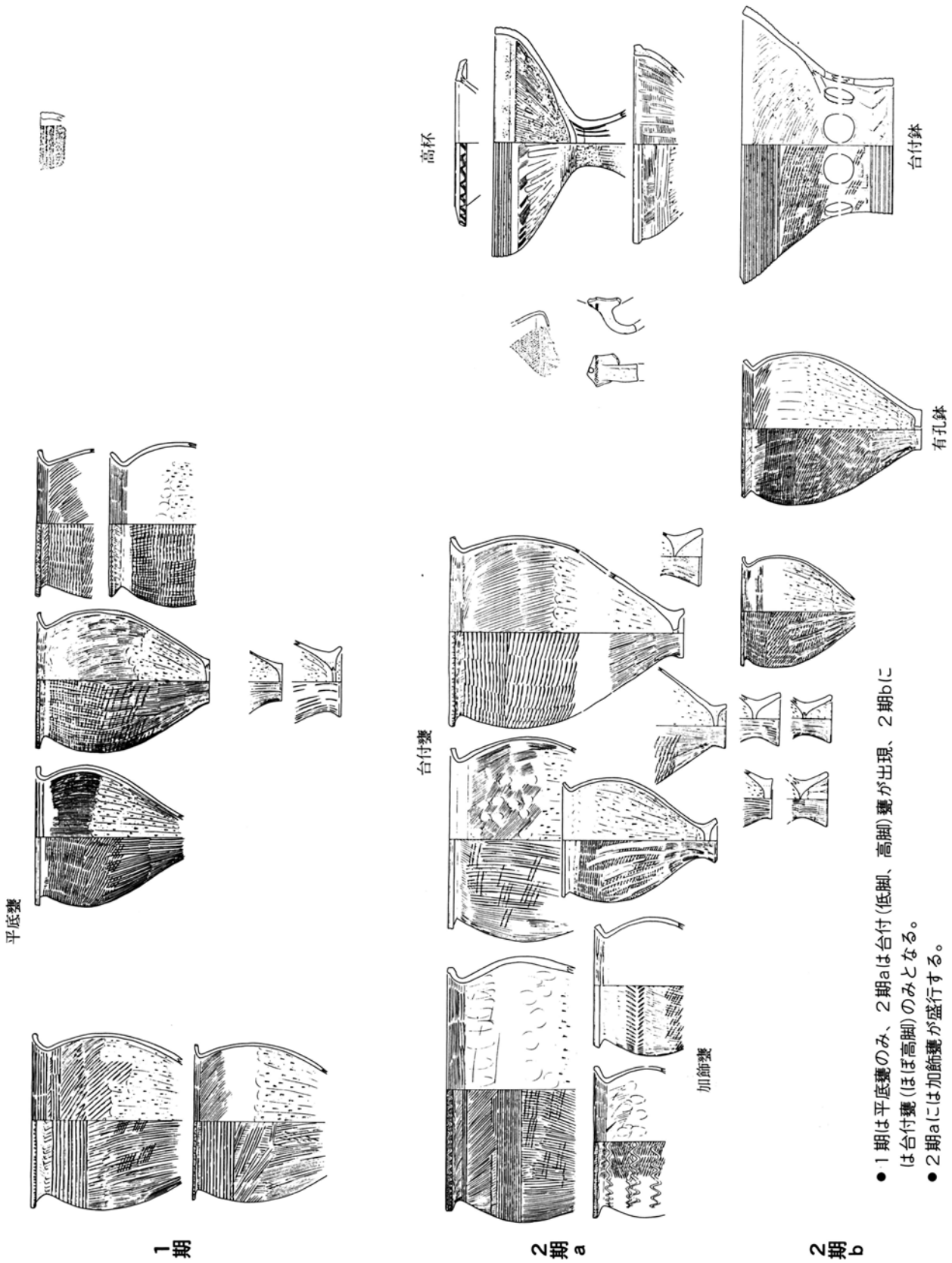
- 1期は組成が安定している。
- 2期aは断片的である。
- 2期bには存在しない。
- *はII系との関わりがあると考えられるもの。

第64図 I E系



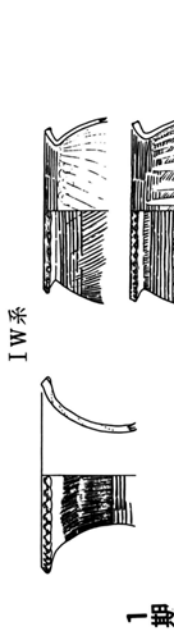
- 1期は太頭壺頸部ハケメ工具連続圧痕紋突帯・口縁部内面櫛刺突羽状紋、細頸壺口縁部櫛刺突羽状紋が特徴的。
- 2期は櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋に変わる。太頭壺頸部の突帯は直接施紋のハケメ工具連続圧痕紋に変わる。
- 2期bは細頸壺口縁部羽状紋が変形あるいは段数が1段となる。

第 65 図 IV 系

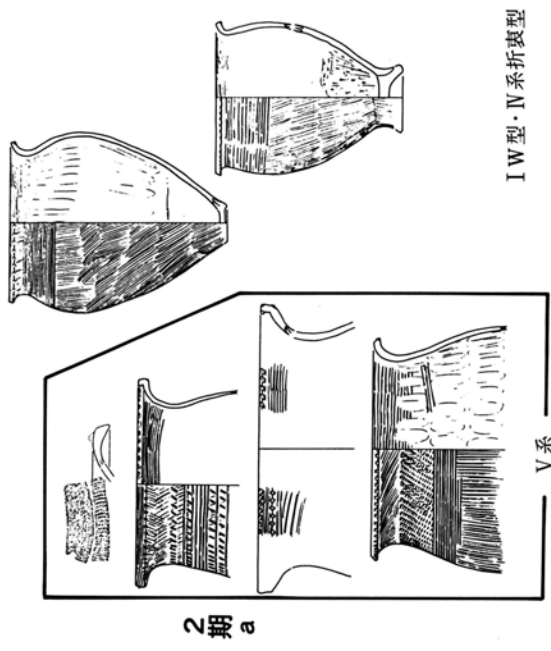
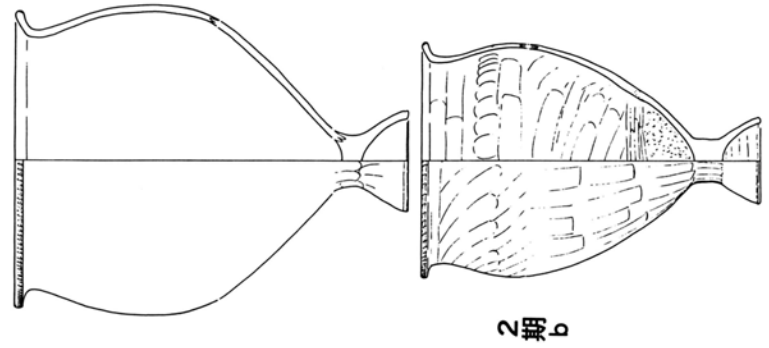


● 1期は平底甕のみ、2期aは台付(低脚、高脚)甕が出現、2期bには台付甕(ほぼ高脚)のみとなる。
 ● 2期aには加飾甕が盛行する。

第66図 IV系



1期



I W型・IV系折衷型

V系

- I W系は壺に個性がある。
- 2期aはIII系の流入が目立つ。
- II N系は1期・2期とも少量存在する。
- V系は2期aで出現する。IV系加飾壺と関係あるかもしれない。

2. 大淵遺跡出土の土錘について

はじめに

大淵遺跡で出土した土錘は総数318点を数える。その全てを占める管状土錘は従来より漁網用とされており、河口地帯の低地部に立地する同遺跡の生業及び生活の一端を考える上で重要な位置にあると思われる。また、県内の古代遺跡でこのようにまとまった量が出土することは希少な例であるため、若干の統計的な処理をもとに、土錘の分類・製作・使用状況について考え、今後同様の環境を有する遺跡から出土する土錘の基礎データとしたい。

時期 出土土錘のうち121点については、時期が明らかとなっている。109の1点のみが竪穴住居S B 51より出土しており、弥生時代中期にあたる。また、31点が鎌倉～室町時代の溝・井戸・柵列ピット埋土内より出土しており、形態Cの須恵質のもの3点については、中世に下る可能性が考えられる。他の形態A及び形態Bについては、中世遺構の土器の出土状態が、90%以上古代の遺物で占められるという状況があり、中世の土錘についてど



のようなものがあるかははっきりしていないが、形態・胎土からみて混入第88図 弥生時代の土錘と考えたほうがよいと思われる。さらに、大淵Ⅲ期に属するものがまったくみられなかったが、これは遺跡の性格の推移を考える上で重要なことと思われ、後述したい。

大淵Ⅰ-1期では17点、Ⅰ-2期48点、Ⅰ-3期8点出土しているが、この中で一括性が高いものをあげるとすれば、SK41の17点（うち埋土中6点）と若干問題は残るもののSE28があるのみで、その他は確実性に乏しく、前述したように後掘された遺構に混入している可能性も考えられる。ただし、その形態からみて弥生期のもが多量に入ってきている確率は少ないものと思われる。そのため、数量的な問題もありⅠ期を細かくみることは意味があまり無く、時間的に幅はあるがⅠ期をまとめて扱い、Ⅱ期と比較してみたい。まず形態をみると、Ⅰ期の73点のうち形態Aが66点を占め、形態Cが6点、形態Bは1点のみとなっている。Ⅱ期のも16点のうち形態Aが10点、形態Bが4点、形態Cが2点あり、Ⅰ期に比べてひとつの形態に集中しない傾向があり、特に形態Bがその割合を増しているのが目につく。次に重量の問題であるが、Ⅰ期の形態Aの完形品で50.5g～109.0gの間に33点分布し（1点201.9gのものがある）、うち20点が65g～85gに集中する。一方、Ⅱ期の形態Aは46.4g～86.6gとⅠ期に比べてやや軽めの分布を示し、ばらつき気味である。また、形態Bは23.2g～62.4gと軽い領域に落ち着く。形態Cについては、両時期ともにあまり差はない。

分類 大淵遺跡の土錘318点は、すべて中心に貫通孔をもつ管状土錘であり、その他の形状のものはみられない。しかしその形態にはいくつかの特徴がみられ、その共通性によって3形態(形態A・B・Cとした)に分類することが可能と思われる。また同形態中においてもさらに細かく形態や端部の状態によって分類することができるようである。

以下に分類の結果を示す。

形態 形態A (第71~74図)

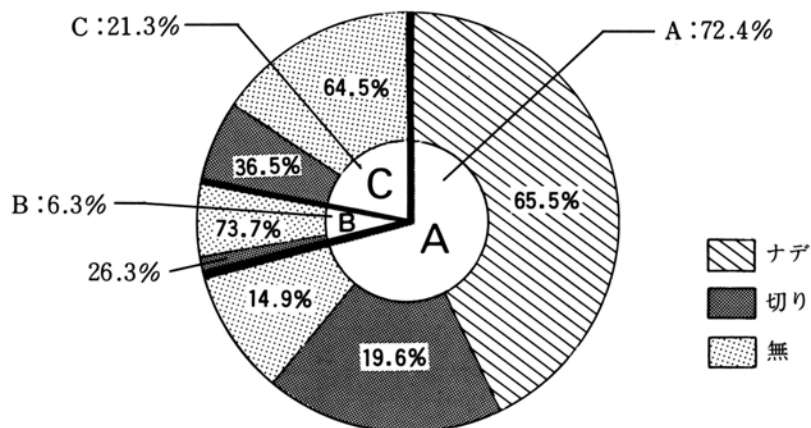
229点。まっすぐな円筒形を特徴とする。大部分が比較的大型のもの(A₁)で、ごく少数きわめて小型のもの(A₂)がみられる。すべて土師質で、細かい砂粒を少し含む、淡褐色~淡橙色の胎土をもつ。

A₁: 221点。長さ50.2~93.5mm、径27.7~46.6mm、孔径8.4~21.5mm、重量42.5~201.9gであり、3形態のうちで最も大きい。ほぼ定型的な形をしているが、両端の面(土錘の厚み)の状態からさらに細分することができると思われる。すなわち、

- ・端部をヘラ状のもので切ってそのままの面をもつもの41点(「切り」第71図1~32)、
- ・切った面の角をなでてなめらかにしているもの136点(「ナデ」第72図47~第74図144)、
- ・端面をもたないもの28点(「無」第74図145~160)の3種類で(不明17点)、ナデの状態のものが最も多いが、これは他の形態にはみられないもので、形態Aの特徴といえるであろう。

A₂: 7点。長さ27.2~46.4mm、径14.8~22.0mm、孔径4.0~8.1mm、重量5.7~27.8gと小型でサイズ的には後述のC形態の方に近いが、円筒形のためA形態に組み入れた。大型のものとの中間的な大きさのものも1点みられる(第72図46)。端面にはやはり切り(1点)。ナデ(2点)、無(3点)の3種類ともがみられる(不明1点)。

A₁A₂とも製作時の指圧痕を顕著に残し、特に調整はなされていないものが大部分を占めているが、A₁には、タタキの痕が残っているもの(第71図35~38)、ハケ目の入っているもの(第71図33、34)、丁寧なナデが行われているもの(第71図39)が、ごく少数例外的にみられる。



第3表 端面処理状況表

形態B (第75図161~178)

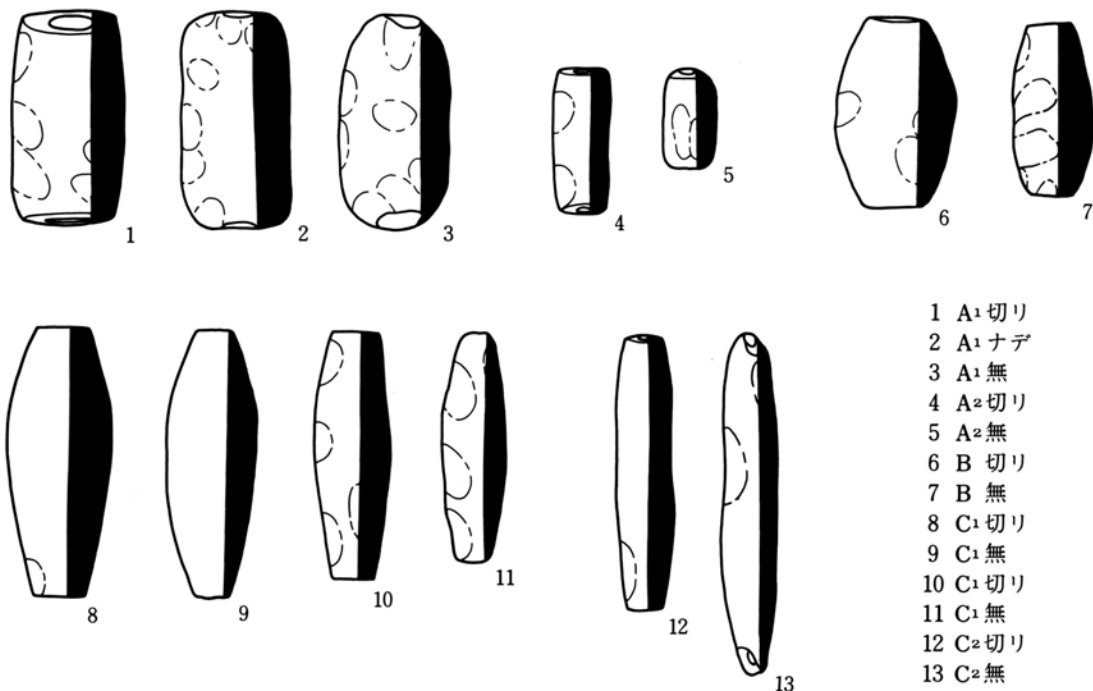
20点。中央部に最大径をもつそろばん珠状の紡錘形を特徴とする。すべて土師質。やや粗い砂粒を含み、茶褐色~黒褐色の胎土をもつ。焼成は、やや軟~良好。長さ41.3~68.5mm、径22.3~34.7mm、孔径4.4~12.9mm、重量23.2~67.0g。端面の状態は、「切り」4点(第75図161~164)「無」15点(第75図167~178)の2種類(不明1点)。Bの「無」の大きめのものにはA₁の「無」との区別が難しいものもある。指圧痕を残し、特に調整はなされていない。

形態C (第75図179~229)

67点。細長い紡錘形を特徴とする。この形態はバリエーションに富み、丸みの強いもの(C₁)と長細いもの(C₂)とに大きく二分されるが、それぞれの中でも細かく分かれている。C₁: 58点。細長い紡錘形で、土師質と須恵質(21点)とがある。丸みの強い比較的太めのもの(須恵質が多い、第75図179~184、189~201)と、それよりもやや細めで小型のもの(第75図185~188、202~221)とも分かれるようである。土師質のものは、黄褐色~茶褐色で、細かい砂粒を含んだり、指圧痕を顕著に残しがちであるが、須恵質のものは、灰白色で胎土は精良で、概してなめらかにナデである。長さ41.4~72.0mm、径10.2~24.5mm、孔径3.3~7.0mm、重量4.9~35.5g。端面は、「切り」20点(第75図179~188)と「無」29点(第75図189~221)。

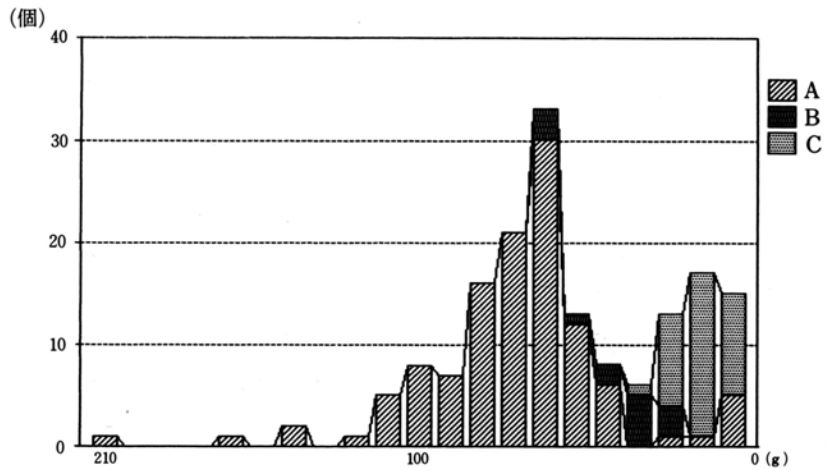
C₂: 9点。やや長めで非常に細いもの。すべて土師質。細かい砂粒を含み、白色、黄褐色、淡橙色など様々な色をもつ。長さ9.3~63.3mm、径5.9~15.4mm、孔径1.4~5.4mm、重量0.8~9.8g。端面は「無」がほとんど(8点、第75図223~229)で、「切り」が1点(第75図222)。みな指圧痕が顕著。

形態による分類は以上の通りで、この形態の差異は、製作法の違いから、あるいは使用法の違いから生じるものと思われる。



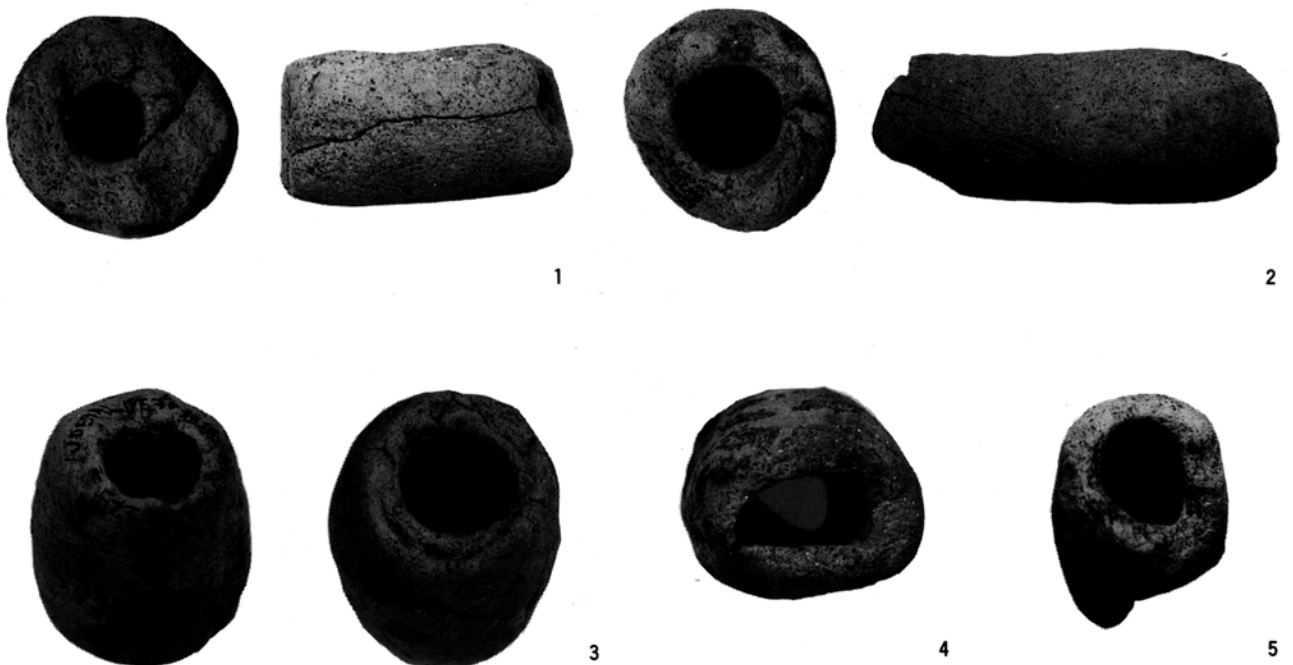
- 1 A₁ 切り
- 2 A₁ ナデ
- 3 A₁ 無
- 4 A₂ 切り
- 5 A₂ 無
- 6 B 切り
- 7 B 無
- 8 C₁ 切り
- 9 C₁ 無
- 10 C₁ 切り
- 11 C₁ 無
- 12 C₂ 切り
- 13 C₂ 無

第69図 土錘分類模式図



第4表 形態別重量分布表

重量 次に、網を沈めるものとしての土錘にとって最も重要な属性である重量に注目してみる。ほぼ完形で重量を考慮できると思われるもの167点で、4.1~201.9gという広がりを見せるが、120gを超えるようなものはごく少数で、50~80gのものが最も多くみられる。第4、5表は、重量分布を形態でも分けて表したもので、これらから形態と特定重量との結びつきをみることができると思われる。すなわち、形態Aは40~210gの重い部分を占め、形態Cが30g以下の軽い部分、そして形態Bが20~50gと二者の中間の部分を含んでいる。また形態Aは、さらに細かく、A₂にあたる5~15g、Aで最も多くみられる50~80g、その次に多い80~100g、それ以上という分布をみることができるようである。長さ、孔径と重量の関係は必ずしもはっきりしたものではなく、長いものが重い傾向にあるのは確かであるが、短くても厚みがあって重いというものもみられるのである。また端面の状態と重量の相関関係もはっきりしない。



第70図 製作法のわかる土錘

製作法 土錘の製作法は、土錘自身に残されている製作時の痕跡と思われるものから、おおよその方法を推測することができる。

- ・粘土を棒状のものに巻きつける。この巻いた状態のわかる土錘はしばしばみられ、そのつなぎめにおいて欠損がおきたりひびがはいったりしている（第70図1、2）。
- ・巻いた粘土を指や手の平で成形する。この時の指圧痕はほとんどの土錘に残っており、普通はそれだけしか行わないが、一部のものは、タタキを行っている。
- ・端面の処理は、面つまり厚みを中心の棒まで握りつぶしてしまえば、分類での「無」の状態になり、ヘラ状の道具で切ってしまうと「切り」となり、さらに丁寧に切ったものの角をナデで面取りすれば「ナデ」になる。この作り方から考えると、おそらく「無」は短い棒に粘土をつけ1つ1つ作ったと思われる。「切り」と「ナデ」は、長い棒に長く粘土を巻きつけ作ったとも考えられるが、やはり1つ1つ作って切ったものではないだろうか。切り口からみて、まだ少し柔らかさの残っている時に切断したと思われる。
- ・芯の棒を抜く。孔内面にしばしばこの時の痕跡の線が残っており、少し回しながら抜いたことがわかるものもある（第70図5）。砂粒の動きから、やはりまだ柔らかさの残る時に行われているようである。抜いたときはみ出した粘土が、そのまま残っているものもあり、中へ戻すように孔内へナデているものもある（第70図3）。また棒を抜いた後、さらに握り直すように形を整えることも行われたようで、孔内に絞ったような線が残っているものや形のゆがんでしまったものもある（第70図4）。
- ・しばらく乾燥させた後、焼きあげられた。この時の火の当たり具合で、一部に黒斑の入ったものがある。

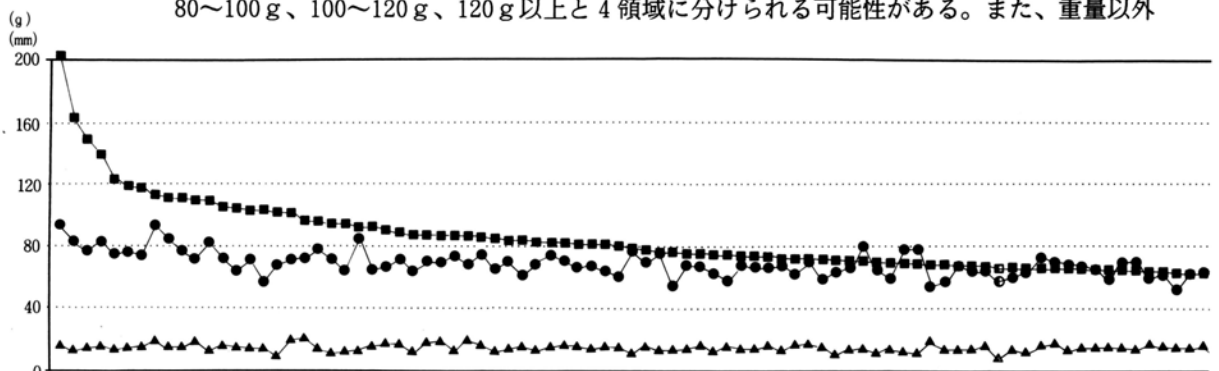
ま と め

このように、大淵遺跡出土の土錘の傾向をみてきたが、そこから窺える問題点について以下に述べてみたい。

弥生時代から古墳時代後期にかけての基本的な変遷と分類については、和田晴吾氏の論考⁽¹⁾で明かであるが、その中で量的に発展することで画期となると述べられている古墳時代後期後葉以降については、各地で不明な点が多い。また、管状土錘の基本的な分類については和田氏のa～eという五つの分類に示されているかと思われるが、そこからさらに細分を行う場合に、主な属性である重量・長さ・幅（周囲径）・孔径・形態・胎土の中で、どこに重きをおくかによって分類の基準が違ってきており、様々な“タイプ”を生む原因になっている。その中で特に着眼されるのが、重量・形態・長さの三属性である。これらはおそらく不可分な関係で相互に関連しあっているのであろうが、土錘を製作するうえで長さが最も比重を占めるとは考えにくく、重量の同じものでも長さにはかなり大きなばらつきがみられる。大淵遺跡の資料で例をあげると、256（長さ75.5mm・径33.3mm・孔径14.1mm・重量76.1g）、283（長さ54.4mm・径35.7mm・孔径14.1mm・重量75.9g）、105

(長さ76.9mm・径33.5mm・孔径11.7mm・重量78.6g)を比較すると、同孔径で重量が同じ場合には、長さとは反比例の関係にあり、孔径が違うが、長さ・径・重量が同じなのは、器厚を厚くするからである。また別の視点がみると、62(長さ57.1mm・径33.2mm・孔径15.5mm・重量56.6g)と52(長さ80.0mm・径33.4mm・孔径15.4mm・重量71.1g)では、同径の原体に同じ厚さで粘土を巻くが、長さが違うために重量に差がでてきている。さらに、5(長さ80.0mm・径33.4mm・孔径15.4mm・重量71.1g)と215(長さ82.1mm・径41.8mm・孔径15.4mm・重量140.0g)を比べた場合、同径の原体に同じ長さで粘土を巻くが、粘土の厚さを変えることにより重量を違えている。つまり、製作のところで述べたが、型押し成形ではなく粘土を何らかの原体に巻き付けるかもしくは貼り付け、主に指ナデ・押圧で調整する当時の成形方法では、網の目の大きさを決定する“型”のようなものを使って常に厳密な計測値をもって多量に製作することは難しく、製作者が経験的に認識している“土鍾”に似ていればよしとするか、同じ重さで同形態ならば長さ・粘土の厚さ・原体の太さはそんなには問題ではないというような常識が製作時にあったものと思われる。また、第3表でみるように形態A₁の中でも孔径にはバラティがあり、粘土を巻き付ける原体に統一があったとは考えにくく、漁労網への装着方法からみても縄の太さによって幾種類も用意されていたとも思えない。このようにみえてくると土鍾の分類を行う場合、「網鍾たる土鍾の役割とは、漁網を水中に沈めたり、あるいは浮子と併用されて、沈降力と浮力によって漁網を水中に直立させたりする点にある。したがって、重量という要素は、土鍾のもつ属性のなかで、最も重要な要素にほかならない。」という和田氏の指摘⁽¹⁾が示すとおり、重量が大きな要素となり、次に伝統的に継承され受け継がれている形態が大きな比重を占めるであろう。別の見方をすれば、ある魚種の捕獲を目的とした網とそれに装着する鍾を製作しようとする場合、形・重さが製作者の意図とするところになり、粘土を巻き付ける原体の太細や長さの長短・粘土の量は上記の二つの目的に沿って随時調節されていたものと思われる。

今回の分類では、まず第4表のように形態で分け、重量の分布と重ね合わせた。この結果、形態のところでも前述したが両要素には関連性があることが窺えた。形態Aの中でのA₁では、重量は漸移的に推移し明確な変換点は見いだせず細分はしなかったが、50~80g、80~100g、100~120g、120g以上と4領域に分けられる可能性がある。また、重量以外



第5表 土鍾計測グラフ

の属性については、あまり規則性がみられなかったが、端部調整について、ナデを施すものが70~90gの範囲にはなく、重いものと軽いものの2つのグループになる傾向がある。A₂については、数が少なく形態Aの中に入れてが、今後別形態になる可能性が高い。形態Bについては、まとまった形態・重量分布を示し、砂粒を多く含む胎土で暗褐色を呈するものがほとんどである。形態Cについては、細長い紡錘形を示すC₁とさらに長さが長くなったC₂に分かれる。形態C₁はやや重く須恵質のものを含み、形態C₂は軽く砂質の強い胎土を示すという特徴があり、将来的に2つのグループに分かれる可能性がある。以上のように分類については、さらに細分が可能であるが、そのことにより混乱をひきおこすというおそれもあったため、今回は大枠のものだけにとどめ、今後のまとまった資料の増加を待ちたいと思う。

形態と重量分布が密接な関係にあり、同時に記述したため、やや混乱してしまったきらいがあるが、両者の関連からグループ分けを行うと下記のようなになる。

Aグループ———形態A₁

Bグループ———形態B

Cグループ———形態C₁・形態C₂・形態A₂

次に、これらの土錘がどのような漁労に使われ、どの種類の魚を捕獲していたかという問題であるが、これには、一つの網で数十から数百の単位で用いられる錘が遺跡では多くても数百の数しか出土しないこと、当時の遺跡環境（特に海や河川がどこにあり、どのような状況にあったのか）が正確に把握できていないということが大きな障害になっており、復元は困難なことである。そのため、現在行われている網漁労の資料を参考に推測してみたい。網の種類については、第6表に示したもの⁽²⁾が一般的に認められているものと思われ、これを基にしたい。農商務省水産局編纂『日本水産捕採誌』⁽³⁾と金田禎之『日本漁具・漁法図説』⁽⁴⁾より錘の重さのわかるものから平均的な値をだし、この重量値を先ほどの土錘の形態分類にあてはめると下記のようなになる。

掩網類—11~15g（特に投網）

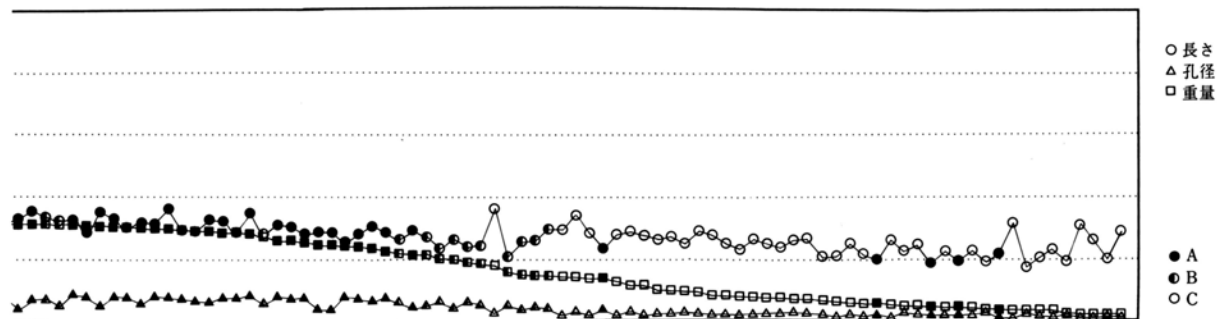
Cグループ

刺網類—3.8~225g

Bグループ

（20~100gのものが多い）

曳網類—75~1200g



(地曳網—75.0~112.5g)

(船曳網—1000g前後~数kg)

Aグループ

旋網類—75~150g

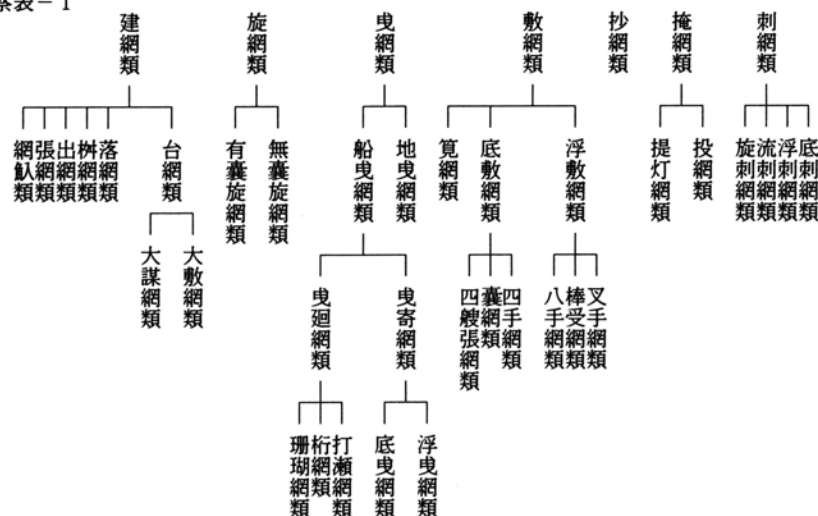
建網類—75~500g

漁労条件の違いがあるため、一概にこの値を使うことは問題があり、偏差は極めて大きいと思われるが、およその傾向は示していると考え、Cグループ⁽⁵⁾については、海岸部の遺跡・内陸部の遺跡とも出土するが、その占める比率は圧倒的に後者に多い。内陸部にある古墳時代~平安時代にかけての豊田市梅坪遺跡⁽⁶⁾では、計測された741点のほとんどがCグループにあたり、河川で使用されていたことがわかる。遺跡付近の河口で行われた掩網(投網か⁽⁷⁾)か小型船による簡単な曳網・旋網・刺網が考えられる。Bグループについては類例は少なく、大阪湾周辺・遠江で僅かにみられるのみで、本県では一宮市清郷遺跡⁽⁸⁾で出土している。河口及び沿岸部で使用された刺網類に用いられたのであろうか⁽⁹⁾。次に、最も一般的であるAグループであるが、このグループに属するものは山間部では出土せず、内陸部でも志貴野遺跡⁽¹⁰⁾のような大河川の近くの遺跡で使用されているようである。つまり流量の多い河川か海を対象に作られたものと思われ、沿岸部や内湾で行われる刺網類・曳網類・旋網類⁽¹¹⁾・建網類が測定される。

以上、大淵遺跡出土の土錘の分析と推定の域をでない用途について述べてきた。この結果を遺跡に即して考えると、大淵Ⅰ期にあたる6世紀後半から7世紀にかけては、一定の形態・重量をもつ土錘をある程度の量必要とするような「計画的な漁労」が行われており、大淵Ⅱ期にあたる7世紀後半から8世紀前半には、形態Bの本格的な出現にみられる形態の分化や重量の分化がみられ、漁労の様相が若干変わってきているようである。その後、大淵Ⅲ期にあたる9世紀前半以降には規模の大きな漁労がおこなわれた様子はみられない。

(宮腰健司・古橋佳子)

考察表-1



第6表 魚網の種類(注7による)

註

- (1) 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』1982
- (2) 高瀬増男『網漁具—資料一般—』1977を基にした。
- (3) 洪澤敬三『日本水産捕採誌』農商務省水産局1910の復刻版1983による。
- (4) 金田禎之『日本漁具・漁法図説』1977
- (5) 形態Cについては管玉を模したものであるという見解（辰巳 均『下滝遺跡』浜松市遺跡調査会1985）もあり、祭祠の場で使用された可能性も十分あるが、使用痕があるものが多いことや、漁網の一単位を思わず129点の形態Cの土錘を同一土坑より出土した例（島根県教育委員会『前立山遺跡』）もあり、基本的には網錘でよいと思う。
- (6) 杉浦裕幸「豊田市梅坪遺跡出土管状土錘の分類」『三河考古 第3号』1990
- (7) 投網については、日本学士員日本科学史刊行会『明治前日本漁業技術史』では江戸中期以降の比較的新しい漁法とされている。
- (8) 澄田正一ほか『新編一宮市史 資料編四』1974
- (9) 小澤一弘氏の御教示によると、17世紀から19世紀にかけての名古屋城三の丸遺跡（愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡 I』1990）においては形態のBのものがみられる。
- (10) 愛知県埋蔵文化財センター『志貴野遺跡・小島遺跡』1990
小澤一弘「木曾川中流域のマス漁とウナギ漁」『民具マンスリー』第17巻9号 1984
- (11) (7)の文献によると旋網は比較的沖合いの漁労であるとされている。

参考文献

- 秋山高志ほか『図録・山漁村生活史事典』1981
- 青森県立郷土館『青森県民俗資料図録第2集 青森県の漁具』1975
- 尼崎市教育委員会『尼崎市金楽寺貝塚 II』1982
- 石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告 II』1988
- 折井ほか『南中部の生業2 漁業・諸識』1982
- 京都府立総合資料館『京都府の民具 3. 漁業』1979
- 財団法人東海水産科学協会・海の博物館『三重県水産図説』1883の復刻版1985
- 静岡県教育委員会『浜名湖における漁撈習俗 I』静岡県文化財調査報告書第30集98
- 鳥羽市教育委員会『鳥羽蟹遺跡 第2次発掘調査報告』1987
- 埋蔵文化財研究会第19回研究集会資料『海の生産用具』1986
- 渡辺 誠『縄文時代の漁業』1973

第7表土錘計測表

(遺構番号は旧番のままである。単位はmm・g)

番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
1	58TP4		(63.0)			(22.3)	土師質	A		ユビ押圧	
2	58TP4		(24.0)		5.9	(5.4)	土師質	C		ユビ押圧	
3	58TP5		67.0	37.5	16.7	(75.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
4	58TP5		66.8	34.2	15.8	(50.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
5	58TP5		80.0	33.4	15.4	71.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-129
6	58TP6	SE01	70.2	35.8	16.8	81.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-130
7	58TP6	SE01	63.8	39.8	15.7	104.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 6
8	58TP6	SE01	82.0	40.7	13.7	109.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-139
9	58TP6	SE01	(47.0)	22.2	7.1	(20.6)	須恵質	C	切り	ナデ	75-180
10	58TP6	SE01	70.7	32.9	18.1	65.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 7
11	58TP6	SE01	63.5	35.3	16.8	62.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 58
12	58TP6	SE01	54.7	19.8	6.4	20.1	須恵質	C	切り	ナデ	75-181
13	58TP6	SE01	59.7	34.8	15.8	60.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 8
14	58TP6	SE01	52.8	31.0	14.8	(41.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 47
15	58TP6	SE01	57.3			(43.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 1
16	58TP6	SE01	61.4	35.9	15.5	83.1	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 9
17	58TP6	SE01	59.9	33.0	16.5	(41.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 59
18	58TP6	SE01	67.7	32.8	15.5	65.2	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 60
19	58TP6	SE01	66.9	35.3	17.0	(62.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	71- 10
20	58TP6	SE01	(21.5)	9.3	3.7	(1.3)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-223
21	58TP6		(70.0)	33.6	15.6	(45.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 61
22	58TP7		72.3	32.6	16.7	66.4	土師質	A	無	ユビ押圧	
23	58TP10		(38.3)	18.3	6.8	(9.8)	土師質	C	ナデ	ユビ押圧	75-202
24	58TP10		(39.3)	27.3	8.8	(13.6)	土師質	B			
25	58TP12		72.0	24.5	6.4	35.5	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-179
26	58TP12		46.4	32.9	13.2	39.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-165
27	59A	IVE4o SK09	(62.9)	38.4	16.9	(60.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 62
28	59A	IVE4o SK14	(58.7)	35.0	15.3	(48.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 63
29	59A	IVE3p・q SK16	70.1	38.0	18.1	72.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 64
30	59A	IVE4n SK19	73.0	35.0	13.6	86.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 65
31	59A	IVE4n SK19	67.1	30.7	18.6	(48.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 66
32	59A	IVE4n SK19	(53.6)	36.0	17.7	(46.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 67
33	59A	IVE4o SK19	61.0	34.7	16.8	(56.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 68
34	59A	IVE4o SK19	(56.8)	37.4	16.9	(53.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 69
35	59A	IVE4o SK19	76.8	34.0	16.1	(60.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 70
36	59A	IVE4n SK19	54.9	36.0	15.6	50.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 48
37	59A	IVE4n SK19	(60.8)	40.1	17.6	(57.3)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-145
38	59A	IVE4o SK19	(63.5)	34.0	13.4	(44.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 71
39	59A	IVE4o SK19	(50.2)	33.3	14.1	(36.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 49
40	59A	IVE4o SK19	(49.1)	36.0	15.4	(40.0)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-146
41	59A	IVE4o SK19	(69.2)	36.0	15.4	(51.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 72
42	59A	IVE4n SK19	(55.4)	32.3	14.8	(38.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 73
43	59A	IVE4n SK19	73.3	40.0	16.0	(75.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-147
44	59A	IVE4n SK19	63.0	38.1		(48.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 74
45	59A	IVE4n SK19	69.0	35.1	15.5	(42.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 75
46	59A	IVE4n SK19	(60.4)			(27.7)	土師質	A		ユビ押圧	
47	59A	IVE6n SK26	71.6	35.6	16.7	(61.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 11
48	59A	IVE6n 検出	56.4	15.4	5.4	(9.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-203
49	59A	IVE5h 検出	(33.7)	15.0	6.9	(5.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-224
50	59A	IVE3p 検出	64.8	39.8	16.0	92.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
51	59A	IVE4o 検出	68.4	35.5	13.8	72.9	土師質	A	無	ユビ押圧	74-148
52	59AL	IVE5o 検出	63.0	35.6	15.8	(64.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	
53	59AL	IVE2o 検出	65.2	36.9	16.3	60.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-149
54	59AL	IVE3o 検出	55.6	33.7	14.9	47.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
55	59A	IVE9n 検出	57.6	20.9	7.0	23.3	須恵質	C	切り	ナデ	

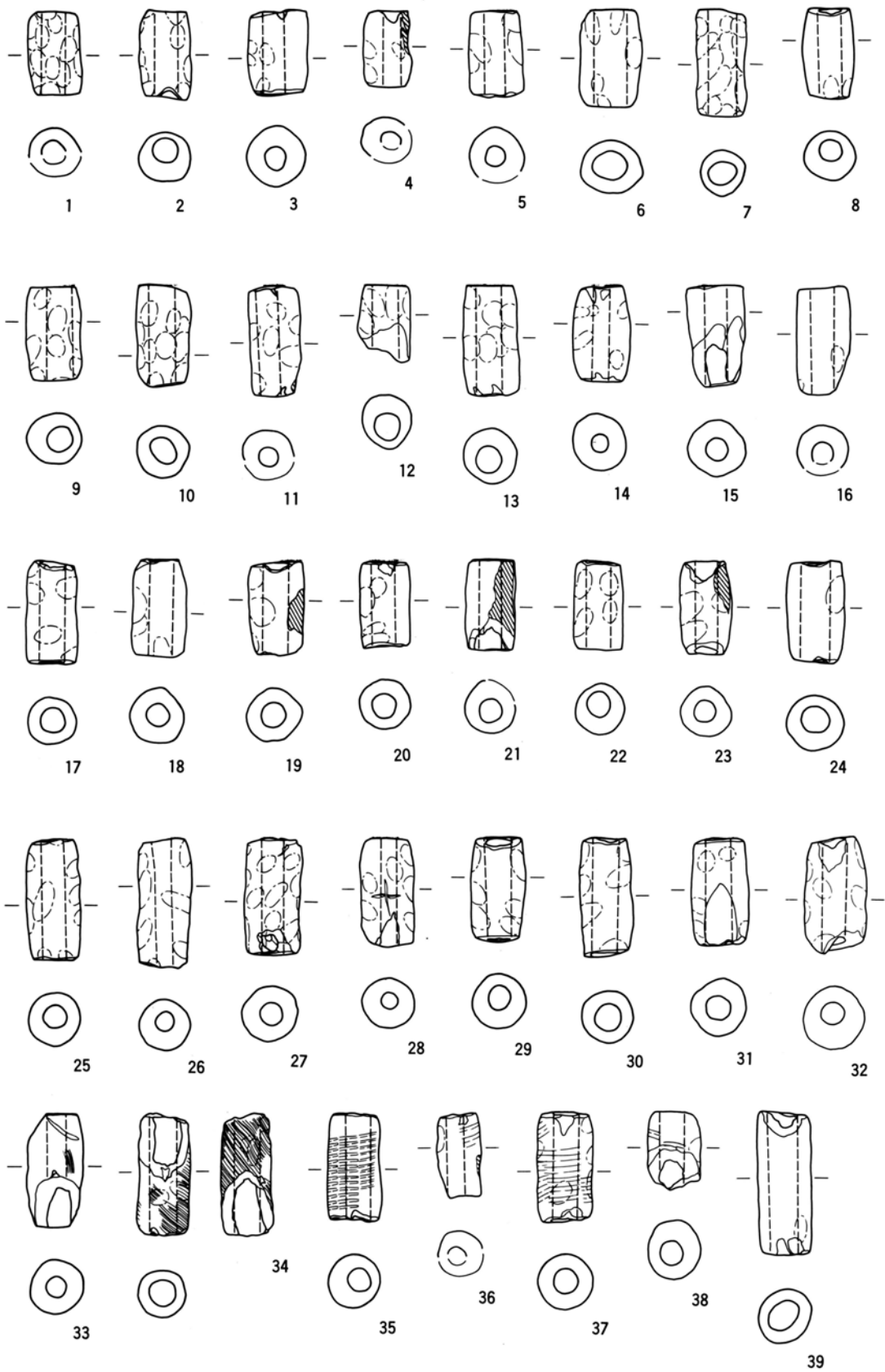
番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
56	59B	検出	58.8	35.0	16.4	(51.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
57	59B	検出	42.9	17.6	6.8	(10.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-189
58	59B	IVE18j SE02	66.0	34.2	15.7	65.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72-76
59	59B	IVE18j SE02	(21.0)		9.4	(6.6)	土師質	B	切り	ナデ	75-161
60	59B	検出	47.8	20.5	6.4	15.4	須恵質	C	無	ナデ	75-190
61	59B	検出	(65.1)	37.1	16.2	(41.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
62	59B	IVE17i 検出	57.1	33.2	15.5	56.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-2
63	59B	IVE17i 検出	38.7	15.1	6.0	8.4	土師質	C	無	ナデ	75-191
64	59B	IVE18k SK37	68.5	36.0	15.0	75.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72-77
65	59B	IVE18k SK01	67.0	36.6	17.3	75.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72-78
66	59B	IVE18k SK01	(54.0)		18.0	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-79
67	59B	IVE17k SK01中	(52.4)	36.1	16.0	(55.9)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-12
68	59B	IVE17k SK01中	78.3	32.7	13.6	69.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-131
69	59B	IVE16k SK45	(45.7)	34.7	15.8	(43.6)	土師質	A	ナデ	ナデ	75-80
70	59B	IVE17k SK01粹	52.2	16.9	3.4	11.4	土師質	C	無	ユビ押圧	75-204
71	59C	検出	71.7	40.7	19.0	109.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-140
72	59C	検出	68.5			(51.8)	土師質	A		ユビ押圧	
73	59C	検出	71.7	38.4	16.2	104.8	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-13
74	59C	VE3i SK14	48.3	30.0	12.5	37.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-166
75	59C	VE3i SK21	(51.5)	32.3	13.2	(33.0)	土師質	A		ユビ押圧	
76	59D	VE9f SK11	71.8	40.0	15.0	103.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72-81
77	59E	南サブトレ	(29.4)	9.4	4.3	(1.4)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-225
78	59F	表土	56.5	42.9	15.0	102.8	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-3
79	59F	検出	40.1	14.5	4.6	(6.8)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-205
80	59F	検出	(26.0)			(7.4)	土師質	?		ユビ押圧	
81	59G	SK08	77.9	35.0	14.9	95.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-25
82	59G	検出	84.1	35.4	15.3	110.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-26
83	59G	検出	76.6	36.2	15.5	(95.4)	土師質	A	切り	ハケ・ナデ	71-33
84	59G	検出	65.3	34.5	17.5	68.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-82
85	59G	検出	63.8	38.1	12.9	87.2	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-14
86	59G	検出	(61.0)			(30.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
87	59G	検出	(51.0)			(30.1)	土師質	A	無	ユビ押圧	
88	59G	検出	(39.2)	22.4	6.3	(16.6)	須恵質	C	切り	ナデ	
89	59G	検出	(34.3)			(14.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
90	59G	表土	(50.9)			(9.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
91	59G	検出	52.6	31.8	12.9	43.3	土師質	B	無	ユビ押圧	75-167
92	60A1	III E18j SK152	93.5	38.6	19.4	112.9	土師質	A	ナデ	ナデ	71-39
93	60A1	III E16k SK166	70.8	36.7	17.4	88.1	土師質	A	ナデ	T後ナデ	71-35
94	60A1	III E19j SK167	(77.0)	41.2	17.0	(80.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-159
95	60A1	III E18k SK173	59.8	36.6	17.5	63.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	73-83
96	60A1	III E17i SK368	(56.4)			(26.0)	土師質	A	ナデ	T後ナデ	71-36
97	60A2	IVE2i SE07	(61.5)	38.3	12.3	(73.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-84
98	60A2	IVE6k SK03	92.9	46.6	16.6	201.9	土師質	A	無	ユビ押圧	74-160
99	60B1	III E18i SD02	(68.6)	38.0		(44.9)	土師質	A		ユビ押圧	
100	60B1	SD03下層	64.5	35.4	17.0	(58.9)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-150
101	60B1	III E16i SK71	(50.9)	31.0	14.3	(42.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-85
102	60B2	III E20m SK07	(38.6)	(39.6)	(17.4)	(25.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-86
103	60C2	IVE9i SD01	74.9	36.6	17.3	85.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71-27
104	60C2	IVE5H SD13	52.6	18.3	6.7	15.1	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-193
105	60C2	SE01	76.9	33.5	11.7	78.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-132
106	60C2	IVE4h SK01上	(72.3)	35.6	18.5	(46.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-87
107	60C2	IVE2h SK264	(9.3)	5.9	1.4	(0.8)	土師質	C		ユビ押圧	75-226
108	60C2	IVE7g SD16	(74.2)	38.2	16.9	(87.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-141
109	60C3	IVE6h SB02	56.3	17.8	5.4	17.3	土師質	C	無	ユビ押圧	
110	60D	南壁サブトレ	46.2	16.8	6.0	10.4	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-210
111	60D	検出	82.9	40.3	13.0	162.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-142
112	60D	検出	(38.3)			(8.4)	土師質			ユビ押圧	

番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
113	60D	検出	(60.8)			(16.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	
114	60D	検出									
115	60D	検出	59.4			(47.6)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
116	60D	IVE 9e SD01上	(44.3)			(12.7)	土師質	A		ユビ押圧	
117	60D	IVE 9c SD01上	78.2	36.1	12.7	(54.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-151
118	60D	IVE 9c SD01上	57.1	15.3	4.5	(9.8)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-206
119	60D	SD01上層	40.3	11.4	4.2	4.9	土師質	C	無	ユビ押圧	75-207
120	60D	IVE 9e SD01上	52.3	31.5	9.3	39.5	土師質	B	無	ユビ押圧	75-168
121	60D	IVE 10e SD01下	56.1	20.6	4.9	25.3	須恵質	C	切り	ヘラ削り	75-183
122	60D	IVE 10e SD01下	(51.8)		14.3	(19.2)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-152
123	60D	IVE 9e SD01下	78.6	32.0	12.6	69.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-133
124	60D	IVE 6c SD02	69.0	31.5	14.8	68.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 88
125	60D	IVE 5d SD02上	78.7	32.3	17.8	(50.1)	土師質	A	切り	ハケ	71- 34
126	60D	SK05	(21.5)		4.2		土師質	C	無	ユビ押圧	75-208
127	60D	SK07	(35.4)			(13.1)	土師質	A		ユビ押圧	
128	60D	SK07	(25.2)			(6.0)	土師質	A	無	ユビ押圧	
129	60D	P13柱痕	38.4	11.6	3.9	5.1	土師質	C		ユビ押圧	75-209
130	60D	P20掘り方	67.3	35.3	9.7	101.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 89
131	60D	P20掘り方	71.0	35.0	11.8	94.3	土師質	A	切り	ユビ押圧	
132	60D	表土	62.0	33.0	10.6	(45.1)	土師質	B	無	ユビ押圧	75-169
133	60D	表土	44.5	17.0	5.8	(12.0)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-195
134	60E	IVD14b 検出	(32.2)	13.4	4.0	(4.9)	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-211
135	60E	IVD16a 検出	(60.7)			(27.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
136	60E	IVD16b 検出	(54.4)	26.0	6.3	(26.6)	土師質	C	切り	ユビ押圧	
137	60E	IVD16b 検出	(35.6)	17.9	3.8	(6.2)	土師質	C	無	ユビ押圧	
138	60E	IVD16b 検出	(37.1)			(10.8)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
139	60E	IVD17a 検出	(47.2)		12.5	(14.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
140	60E	IVD15b.c 検出	58.9	32.3	9.8	67.0	土師質	B	無	ユビ押圧	75-170
141	60E	SE03上層	69.4	30.9	10.5	60.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 99
142	60E	SD01上	57.1	9.3	2.6	4.1	土師質	C	無	ユビ押圧	75-227
143	60E	SD01上	61.6	25.9	7.8	(31.9)	土師質	B	無	ユビ押圧	75-171
144	60E	SD01上	67.2	32.5	13.7	82.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 29
145	60E	IVD15b SD01	76.2	37.0	13.6	(80.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 90
146	60E	SD01下層	57.5	37.4	13.7	(62.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 92
147	60E	SD01下層	72.3	33.1	15.3	59.0	土師質	A	無	ユビ押圧	74-153
148	60E	SD02サブトレ内	65.7	32.8	12.7	70.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 93
149	60E	SD02サブトレ内	70.0	34.6	16.6	77.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-134
150	60E	SD02	69.6	37.8	18.2	87.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-135
151	60E	SD02サブトレ内	71.9	41.0	21.5	96.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-136
152	60E	SD02下層	66.9	35.4	17.0	73.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 94
153	60E	SD03	68.7	40.4	19.4	86.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 95
154	60E	IVD19t SD03	62.7	36.3	16.0	59.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 96
155	60E	SD03上層	(55.8)	33.2	16.1	(41.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 97
156	60E	17a SK48	50.8		11.6	(34.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 4
157	60E	SX01 C群	58.3	35.6	14.7	68.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-100
158	60E	SX01 C群	62.0	35.1	16.2	63.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-101
159	60E	SX01 C群	57.9	33.0	14.7	58.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-102
160	60E	SX01 C群	64.3	34.7	15.1	68.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-154
161	60E	SX01 D群	67.0	33.7	14.8	71.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-103
162	60E	IVE17a 検出	65.4	35.2	12.5	85.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
163	60E	IVE17a 検出	61.7	9.7	2.4	5.0	土師質	C	無	ユビ押圧	75-228
164	60E	IVE17a 検出	63.3	11.2	2.4	7.5	土師質	C	無	ユビ押圧	75-229
165	60E	IVE18t 検出	56.5	30.3	15.2	44.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
166	60E	IVE18a 検出	65.3	31.2	12.7	57.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
167	60E	IVE18a 検出	58.8	38.2	16.5	75.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
168	60E	IVE19b 検出	50.5	19.2	5.7	17.2	土師質	C	無	ユビ押圧	75-196
169	60E	表土	63.5	35.1	13.1	75.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	

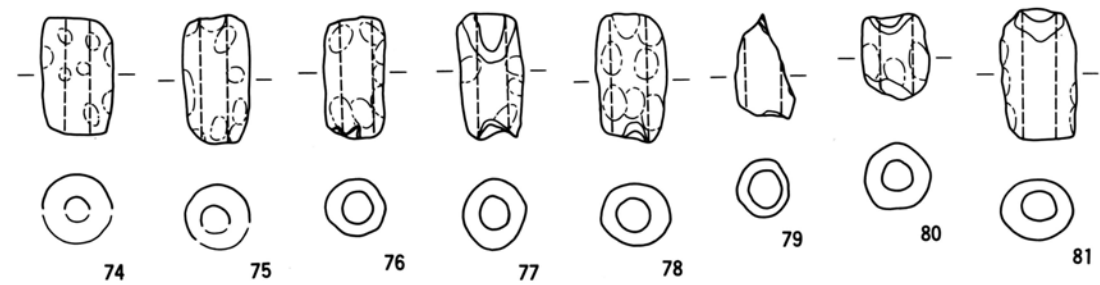
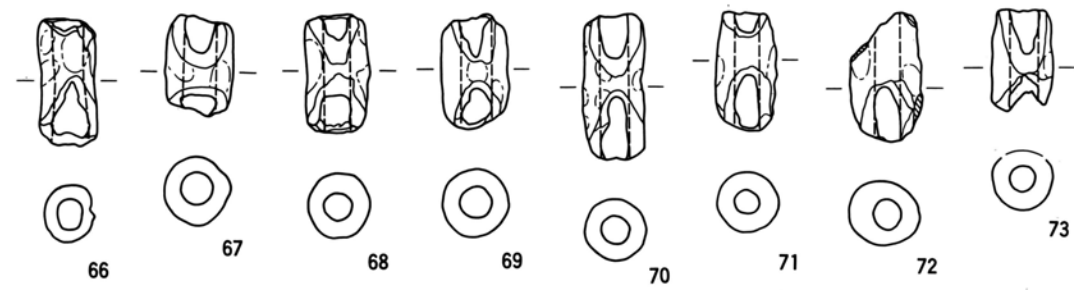
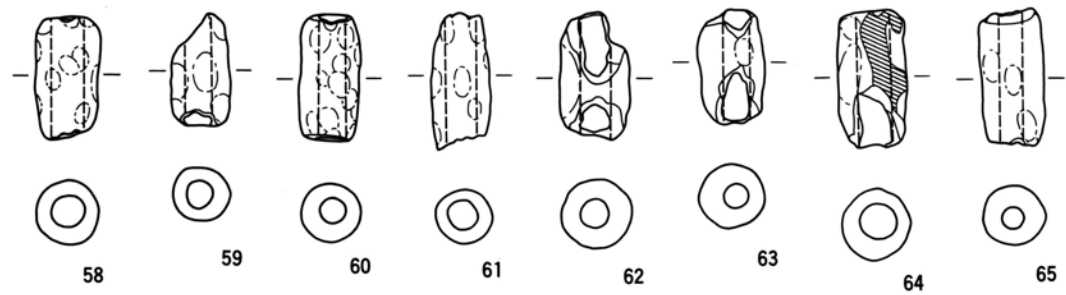
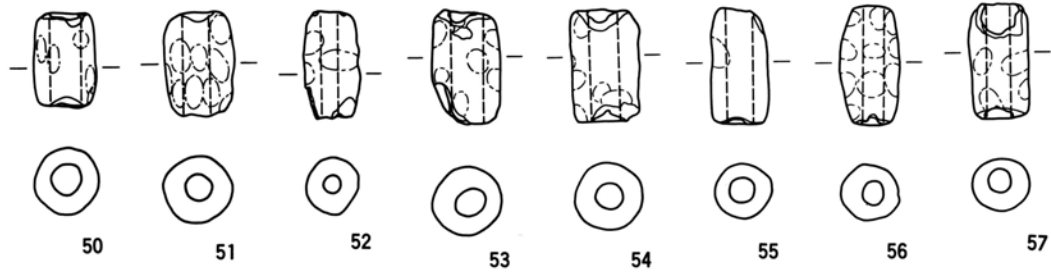
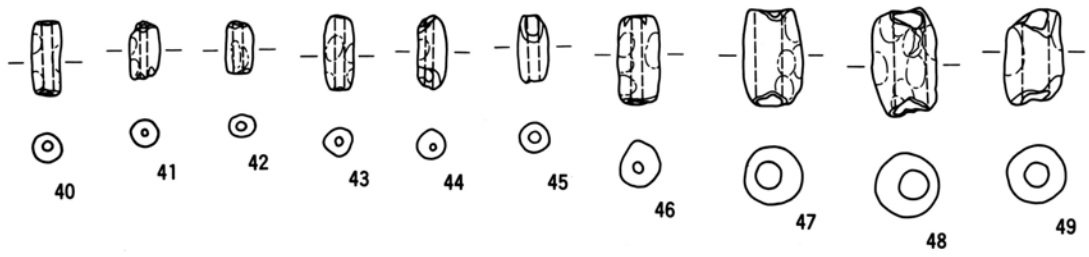
番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
170	60F	IVE14j SD10	68.7	29.7	10.7	(57.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-105
171	60F	SE01	51.2	12.9	5.3	(14.0)	須恵質	C		ナデ?	75-212
172	60F	IVE16h SD01下	59.0	21.4	5.0	28.3	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-184
173	60F	IVE16h SD01下	71.2	36.0	19.6	101.1	土師質	A	切り	T後ナデ	71- 37
174	60F	IVE14d SK25	67.5	36.8	14.5	81.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-106
175	60F	IVE14d SK27	70.2	33.3	14.9	64.7	土師質	A	無	ユビ押圧	74-156
176	60F	IVE14d SK28	(30.8)	(39.0)	13.1	(35.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-107
177	60F	IVE13.4f SK45	45.5	13.7	4.6	8.9	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-185
178	60F	SK83	74.7	38.7	14.4	123.3	土師質	A	無	ユビ押圧	74-157
179	60F	P16	(61.7)	27.1	13.3	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-108
180	60F	P325	(51.2)			(17.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-109
181	60F	P704	61.0	35.0	15.0	66.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 53
182	60F	検出	65.4	32.1	17.7	62.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-110
183	60F	検出	53.1	19.2	5.4	16.1	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-186
184	60F	検出	75.9	39.5	15.8	110.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
185	60F	IVD14d 検出	46.4	22.0	8.1	27.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 46
186	60F	IVD16g 検出	(49.4)	33.1	12.9	(36.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
187	60F	IVD16h 検出	56.1	35.6	13.0	69.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 5
188	60F	IVD17g 検出	50.4	21.7	6.7	20.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
189	60F	IVD17g 検出	50.0	19.0	5.8	15.8	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-213
190	60F	IVD17g 検出	68.6	33.8	16.8	55.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-111
191	60F	IVD18g 検出	39.9	19.4	4.5	(15.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	
192	60F	IVD14d 検出	61.3	35.9	15.8	79.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-112
193	60F	IVD14e 検出	65.7	35.1	16.1	(60.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
194	60F	IVD14f 検出	(46.1)	37.7	17.4	(54.0)	土師質	A	切り	T後ナデ	71- 38
195	60F	IVD17c 検出	(31.7)	19.4	4.0	(7.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 41
196	60F	IVD17d 検出	38.2	16.3	5.0	9.7	土師質	A	無	ユビ押圧	72-198
197	60F	IVD18f 検出	50.5	18.3	5.7	12.7	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
198	60F	IVD19e 検出	75.4	41.3	14.9	118.5	土師質	A	無	ユビ押圧	71- 28
199	60F	表土	(88.2)	(35.1)	(13.2)	(58.3)	土師質	A		ユビ押圧	
200	60F	表土	(42.2)	35.0	14.2	(42.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
201	60F	表土	(36.7)	34.6	15.9	(31.1)	土師質	A		ユビ押圧	
202	60F	表土	66.5	35.1	15.9	81.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-113
203	60F	表土	(44.6)	14.8	5.3	(8.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-214
204	60F	表土	57.8	19.5	6.0	18.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
205	60F	表土	49.8	15.9	5.6	10.3	土師質	C	無	ユビ押圧	75-215
206	60F	表土	52.0	20.8	6.0	20.4	須恵質	C	無	ユビ押圧	75-199
207	60F	表土	(57.5)			(30.4)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
208	60F	表土	(57.1)			(18.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
209	60F	表土	(29.9)			(3.6)	土師質	C	無	ユビ押圧	
210	60F	表土	(39.7)		14.3	(17.4)	土師質	A		ユビ押圧	
211	60F	表土	(62.0)		16.8	(38.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
212	60F	表土	69.7	32.4	13.9	(80.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-114
213	60G	VD1r 検出	(54.3)	41.4	16.1	(82.8)	土師質	A	無	ユビ押圧	
214	60G	VD3t 検出	61.9	34.7	15.2	62.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-143
215	60G	VD2a 検出	82.1	41.8	15.4	140.0	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
216	60G	表土	(46.0)			(15.8)	土師質	A		ユビ押圧	
217	60G	VD1t SD01	64.5	37.2	14.8	(69.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 15
218	60G	VD4s SD05下	41.9	17.1	4.2	13.5	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-187
219	60G	VD4q 検出	68.5	23.3	7.1	28.2	土師質	A	無	ユビ押圧	
220	60G	VD3r 検出	(27.2)	14.8	4.6	(5.7)	土師質	A	無	ユビ押圧	72- 42
221	60G	表土	59.8	35.8	15.9	72.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 54
222	60G	表土	74.1	33.2	16.1	82.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 30
223	60G	表土	83.9	34.9	13.3	92.1	土師質	A	無	ユビ押圧	
224	60G	表土	(68.4)	33.6	14.6	(58.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
225	60I	SK03	(60.5)	47.1	17.6	(103.3)	土師質	A	無	ユビ押圧	74-158
226	60I	南壁トレンチ	59.2	25.1	9.1	29.6	土師質	B	無	ユビ押圧	75-172

番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
227	60I		(54.2)	32.6	14.3	(48.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
228	60I		64.7	36.0	16.0	80.9	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 18
229	60I		56.0	34.7	11.7	54.1	土師質	B	無	ユビ押圧	75-173
230	60I	VD8r検出	59.7	34.5	15.9	65.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 19
231	60I	表土	(53.9)	20.6	8.6	(19.9)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-201
232	60J	VE SD01	51.6	25.8	9.9	29.6	土師質	B	無	ユビ押圧	75-174
233	60J	SD11	63.8	38.4	12.9	94.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-125
234	60J	SD17	(32.2)	15.5	3.5	(6.7)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-219
235	60J	SD19	55.1	33.6	19.5	68.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 20
236	60J	SK08上層	(30.2)			(10.3)	土師質	A		ユビ押圧	
237	60J	SK26	(32.9)	16.1	5.3	(8.5)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-220
238	60J	SK36	(42.8)	32.3	11.1	(45.0)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-126
239	60J	SK45	69.3	33.6	14.4	65.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-127
240	60J	SK51	55.3			(25.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
241	60J	VE6c 検出	69.5	34.1	15.6	64.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-128
242	60J	VE10d 検出	53.8	29.9	10.2	42.4	土師質	B	無	ユビ押圧	75-175
243	60J	西トレンチ	41.3	28.7	11.5	31.1	土師質	B	無	ユビ押圧	75-176
244	60J	検出	(49.1)			(25.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
245	60J	検出	46.6	13.9	3.3	7.3	土師質	C	無	ユビ押圧	75-218
246	60J	検出	(59.3)	36.8	14.8	(62.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
247	60J	表土	58.9	34.0	14.6	(53.7)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 21
248	60J	表土	56.8	32.0	15.9	61.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 22
249	60J	検出	(61.9)	34.0	18.1	(58.8)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
250	60J	検出	53.2	18.2	6.3	15.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
251	60K	検出	64.3	33.7	11.9	72.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	75-221
252	60K	VD13q SD01	65.9	29.8	9.0	62.4	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-162
253	60K	VD1 r SD01	(41.2)	(20.5)	4.3	(12.1)	土師質	C	切り	ユビ押圧	75-188
254	60K	VD14q SK56	45.3	16.0	5.2	9.6	土師質	C	無	ユビ押圧	
255	60K	Ⅱ期直上	46.1	25.1	10.6	(19.6)	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-163
256	60K	VD12r 北壁トレンチ	75.5	33.3	14.1	76.1	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-138
257	60K	VD12q 北壁トレンチ	60.0	34.0	14.6	70.2	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 23
258	60K	表土	65.8	37.6	17.8	90.0	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 24
259	60K	VD15s SK16	64.4	30.5	11.0	62.4	土師質	B	切り	ユビ押圧	75-164
260	60L	VD13a SD04埋土	48.7	29.4	11.3	36.4	土師質	B	無	ユビ押圧	75-177
261	60L	VE16c 検出	(48.8)	20.6	6.0	(18.1)	須恵質	C		ユビ押圧	
262	60L	検出	(38.4)			(8.6)	土師質	C	切り	ユビ押圧	
263	60L	VE12・13c 検出	50.7	26.2	8.2	29.9	土師質	B	無	ユビ押圧	75-178
264	60E	IVE14b SD01	(49.3)	37.3	15.3	(51.7)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 91
265	60E	SD04上層	57.3	31.9	13.5	57.6	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73- 98
266	60E	SD04	55.5	22.3	4.7	23.2	土師質	C	無	ユビ押圧	75-194
267	60H	SD01下層	(49.8)	35.4	15.9	(26.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-115
268	60H	SD01	66.3	35.6	16.0	(65.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-116
269	60H	SD11	70.4	34.2	14.1	(51.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 16
270	60H	SD301	60.3	31.4	14.5	51.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 55
271	60H	SD301	40.2	16.1	4.4	11.7	土師質	A	切り	ユビ押圧	72- 40
272	60H	SD305	70.3	34.6	15.0	62.4	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 17
273	60H	VD2c SE303下面	63.5	30.8	11.8	59.5	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 56
274	60H	VE1f SE301	(45.3)	33.1	13.1	(28.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-117
275	60H	VE3b SK13	60.5	30.4	13.0	46.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 57
276	60H	VE3b SK13	(66.2)	37.4	16.1	(75.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-118
277	60H	VE3b SK13	50.2	(34.3)	16.6	48.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 50
278	60H	SK301	67.9	37.5	19.9	86.1	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 31
279	60H	SK301	(38.6)			(11.4)	土師質	A	切り	ユビ押圧	
280	60H	SK301	(59.5)	37.9	13.2	(37.2)	土師質	A		ユビ押圧	
281	60H	VD2c SE303下面	67.6	35.7	15.2	(67.3)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-119
282	60H	SK305	62.8	35.0	17.5	72.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-120
283	60H	VE4e SK306	54.4	35.7	14.1	75.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 51

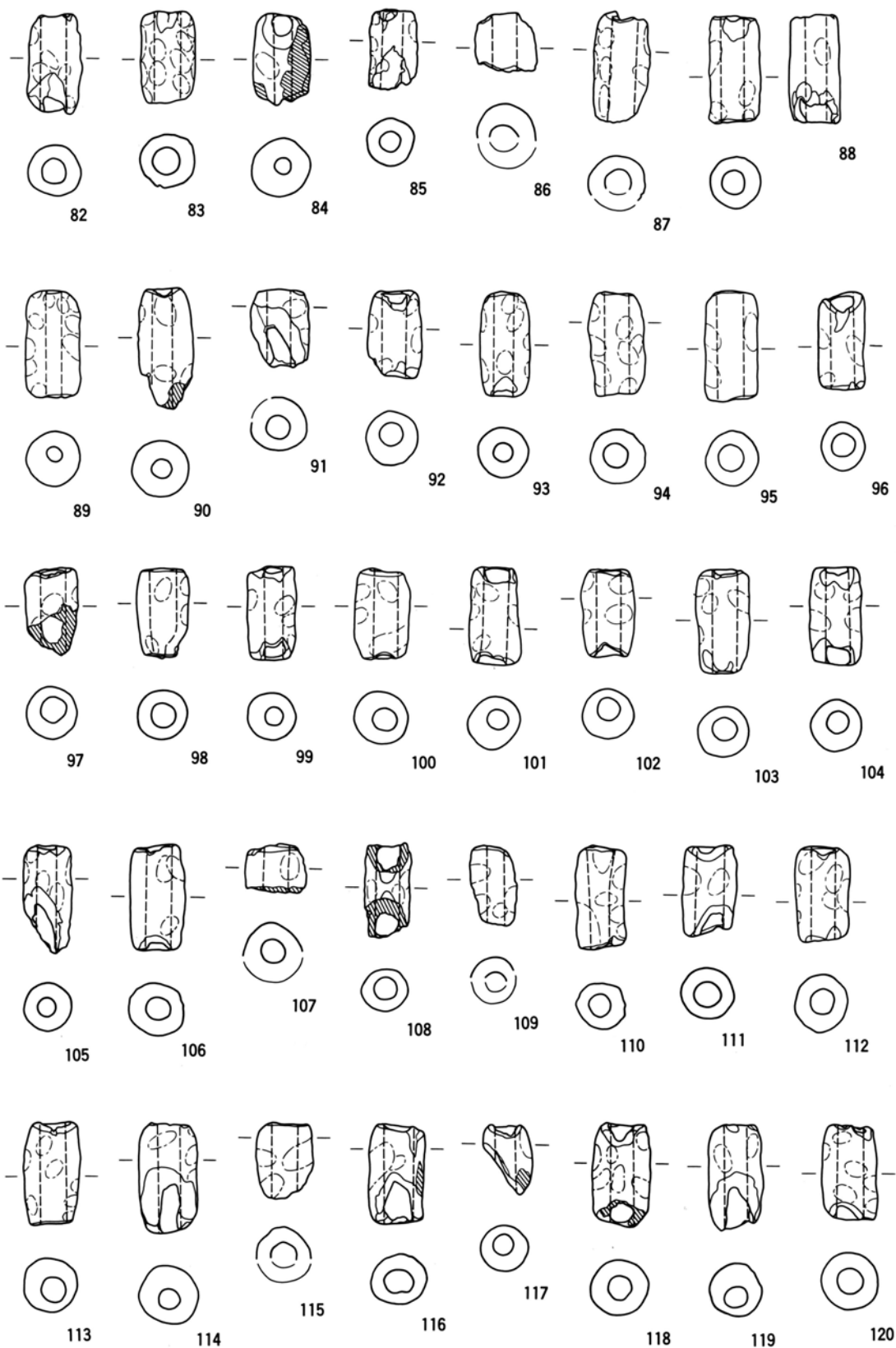
番号	調査区	遺構	長さ	径	孔径	重量	焼成	形態	端面	調整	図版番号
284	60H	VE4e SK320	69.4	35.5	14.4	83.2	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-137
285	60H	VE4e SK320	76.8	42.1	14.7	149.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-144
286	60H	VD3d P387	43.5	14.5	3.5	7.7	土師質	C	無	ユビ押圧	75-216
287	60H	VE4d P400	(48.4)	32.1	15.2	(41.5)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-121
288	60H	VE4d P448	67.4	35.0	14.8	74.3	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-122
289	60H	検出	(68.6)	38.0	16.4	(70.1)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
290	60H	検出	72.8	34.0	16.3	66.6	土師質	A	無	ユビ押圧	
291	60H	検出	58.0	33.6	14.4	(60.6)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
292	60H	IVE3e 検出	61.4	34.9	16.3	51.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
293	60H	VE1a 検出	39.3	16.0	4.7	9.4	土師質	A		ユビ押圧	72- 44
294	60H	VE4c 検出	35.3	16.6	5.6	7.5	土師質	A	無	ユビ押圧	72- 45
295	60H	2e 検出	(75.2)	(37.9)	(13.4)	(50.9)	土師質	A		ユビ押圧	
296	60H	2e 検出	41.4	16.3	5.6	13.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	
297	60H	VE4c 検出	(54.5)	37.8	14.0	(65.2)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
298	60H	3t 検出	(51.2)			(22.0)	土師質	A		ユビ押圧	
299	60H	3e 検出	(34.1)	(37.2)	(13.8)	(18.6)	土師質	A		ユビ押圧	
300	60H	3e 検出	41.4	13.9	3.7	7.4	土師質	C	無	ユビ押圧	75-217
301	60H	4t 検出	52.6	36.4	15.3	62.8	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
302	60H	検出	66.7	33.2	12.8	(40.9)	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	
303	60H	検出	73.8	40.0	15.5	117.6	土師質	A	切り	ユビ押圧	71- 32
304	60H	表土	43.8	17.4	4.3	12.1	土師質	C	切り	ユビ押圧	
305	60H	表土	(40.5)	19.1	5.7	(13.4)	土師質	C	無	ユビ押圧	75-200
306	60H	表土	52.1	10.2	2.2	5.0	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-222
307	60H	表土	66.6	32.6	14.7	62.4	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	74-123
308	60H	表土	(45.9)			(18.3)	土師質	B		ユビ押圧	
309	60H	表土	66.7	35.8	15.1	73.7	土師質	C	ナデ	ユビ押圧	74-124
310	60H	表土	57.4	27.7	10.1	42.5	土師質	C	無	ユビ押圧	
311	60H	表土	(37.9)			(9.9)	土師質	B		ユビ押圧	
312	60E	SX01 C群	63.6	34.1	14.8	57.0	土師質	A	無	ユビ押圧	74-155
313	60E	SX01 C群	64.5	33.7	13.4	66.7	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	73-104
314	60A1	III E18k SD03	56.5	29.3	8.4	48.9	土師質	A	ナデ	ユビ押圧	72- 52
315	60A2	IVE3j SD04	(36.5)	19.8	8.3	(13.1)	土師質	C		ユビ押圧	75-192
316	60B2	IVE4m SE01	56.8	22.3	4.4	27.9	須恵質	C	切り	ユビ押圧	75-182
317	60B2	IVE4m SE01	(48.7)	(23.2)	5.6	(16.3)	土師質	B	切り	ユビ押圧	
318	60F	SE03	46.3	17.9	4.9	16.4	土師質	C		ユビ押圧	75-197



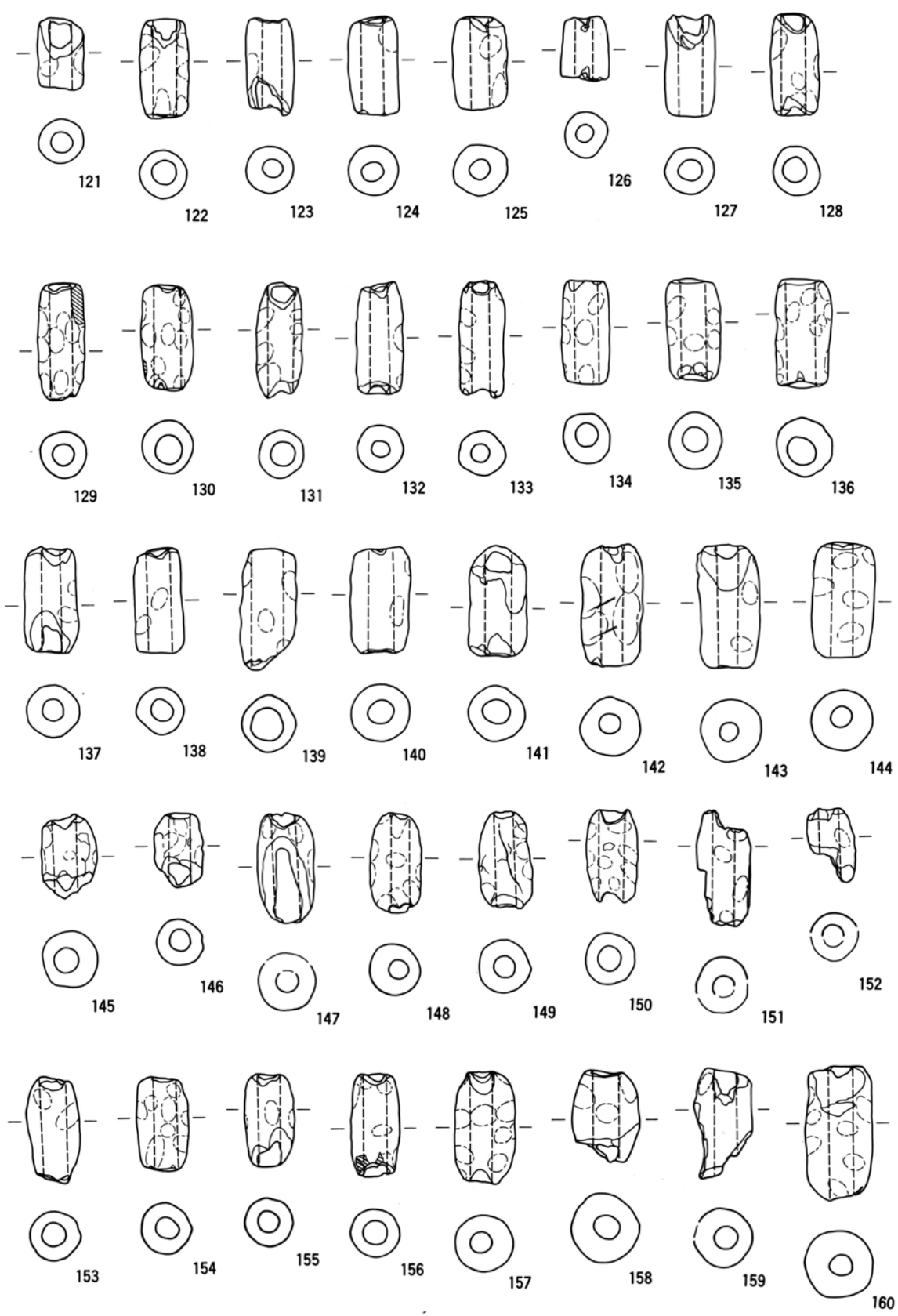
第71図 大洲遺跡出土土鍾(1) (1/4)



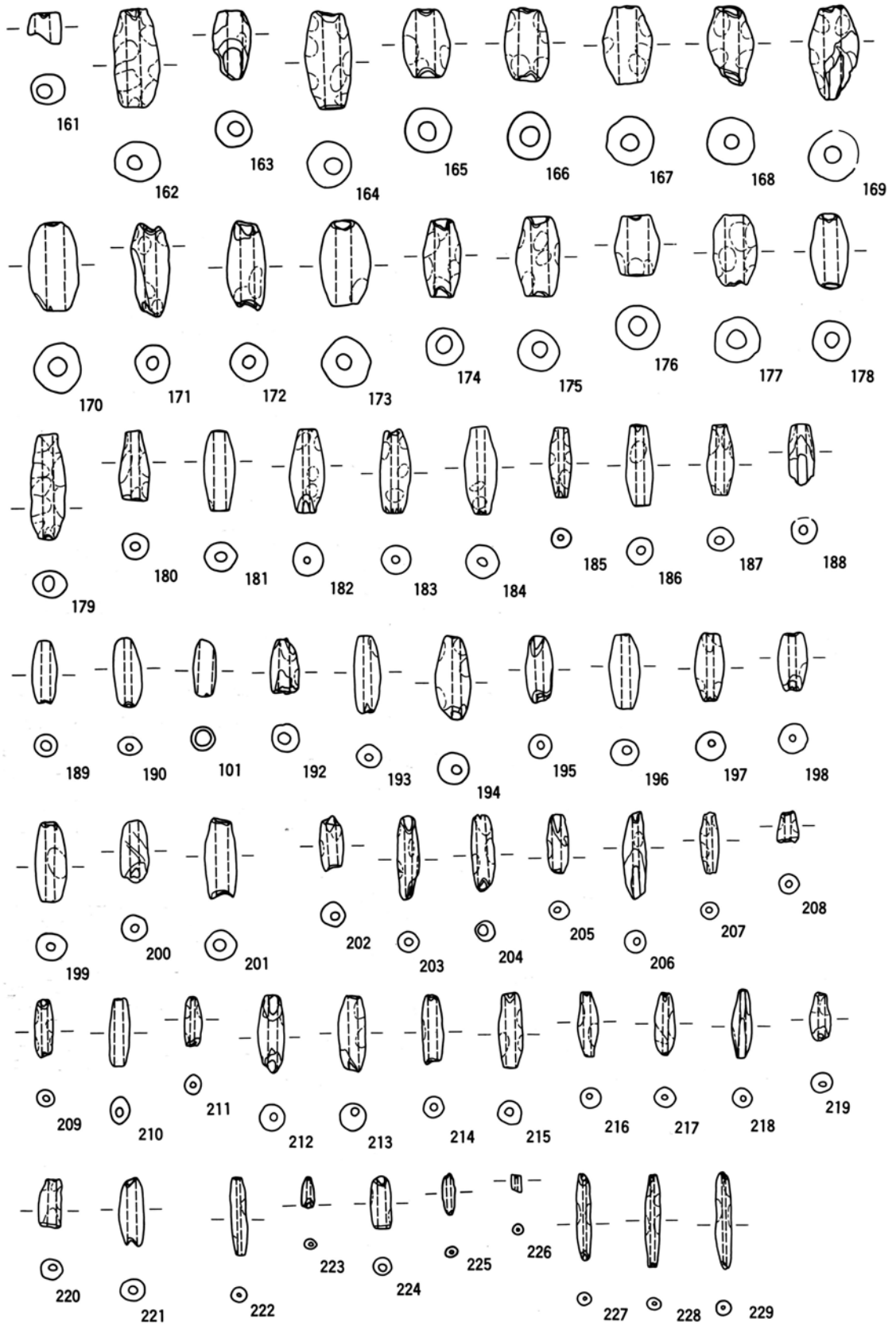
第72図 大淵遺跡出土土錘(2) (1 / 4)



第73圖 大淵遺跡出土土鍾(3) (1/4)



第74図 大洲遺跡出土土錘(4) (1 / 4)



第75圖 大湖遺跡出土土錘(5) (1/4)

VI. 考察2



VI. 考察 2

1. 大淵遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

三辻 利一

2. 大淵遺跡から検出された珪藻遺骸について

森 勇一・前田 弘子

1. 大淵遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

1. はじめに

名古屋市内には古墳時代の初めから平安時代に至るまで古代全時代を通して須恵器を生産した猿投窯跡群がある。したがって、名古屋市周辺のほとんどの遺跡には猿投窯跡群産の須恵器が供給されていた可能性は強い。この点で、大阪陶器窯群とその周辺の遺跡との関係に類似している。しかし、大阪陶器窯群周辺では最近、小阪遺跡や大庭寺遺跡の須恵器に比べて、若干、胎土が異なる須恵器が伏尾遺跡で検出された。勿論、両者ともRb-Sr分布図上で大阪陶器窯領域に分布するのであるが、その分布位置が少し偏在しており、このことから胎土が異なることが見つげられた。これらが、それぞれ、どの窯の製品に対応するのか、目下、検索中である。同様に、猿投窯群周辺の遺跡出土須恵器の胎土にも、若干、質の異なる須恵器が見つかるかもしれない。このような観点から、大淵遺跡出土須恵器の蛍光X線分析が行われた。

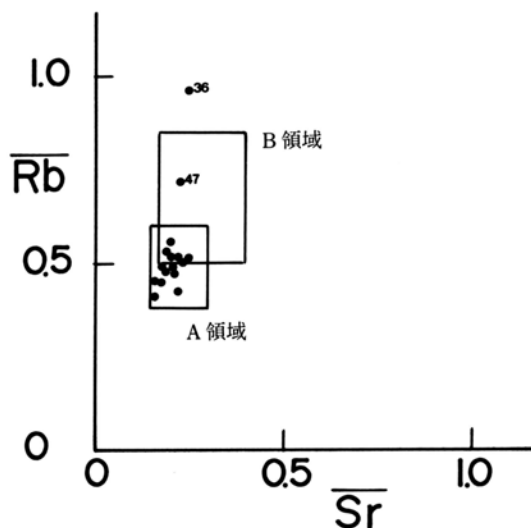
2. 分析方法

須恵器片はすべて表面を研磨して付着物を除去し、所謂、胎土を取り出してタングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）の中で、200メッシュ程度に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力を加えてプレスし、直径2cm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成した。このような処理方法をとるのは粉末試料をできるだけ均質化することと、蛍光X線分析の測定は相対測定であるので、測定試料のX線源、検出器に対する幾何学的条件を一定にするためである。定量分析の標準試料には岩石標準試料JT-1（群馬県産の花崗岩類）を使用した。そのため、分析値はJG-1による標準比値で表示した。この方法をとると、この研究では多くのメリットがある。蛍光X線強度の測定には2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した。Tiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。

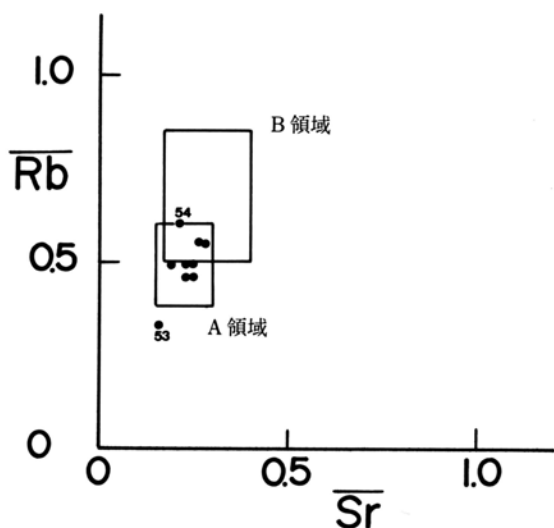
3. 分析結果

全資料の分析値は表にまとめてある。この表から、例外なく、全試料にはCa、Sr量が少ないことがわかる。これは猿投窯群の須恵器の化学特性の一つである。したがって、これら2因子は試料の分類にはほとんど役に立たないことがわかる。しかし、K、Rb、Fe因子にはある程度のばらつきが表から認められる。そこで、須恵器の地域差をよく表示することで知られるRb-Sr分布図上で今回分析した試料の分類ができるかどうかを調べてみるとことにした。各年代ごとに分けてRb-Sr分布図を作成した。

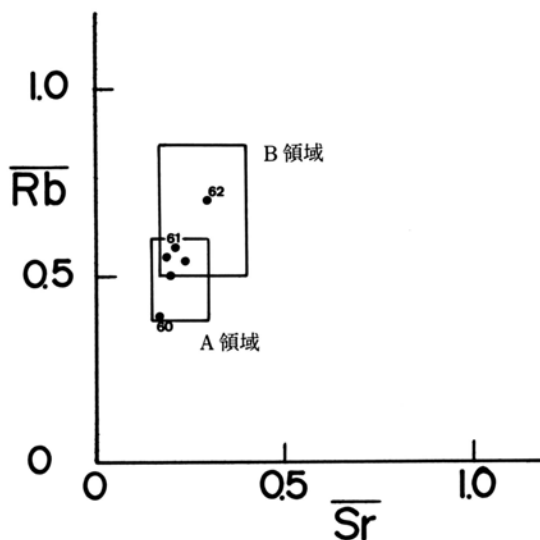
第76図には6C後～7C前と推定される須恵器のRb-Sr分布図を示す。全時代を通してRb-Sr



第76図 6 C後～7 C前の須恵器のRb-Sr分布図



第77図 7 C前の須恵器のRb-Sr分布図



第78図 7 C後の須恵器のRb-Sr分布図

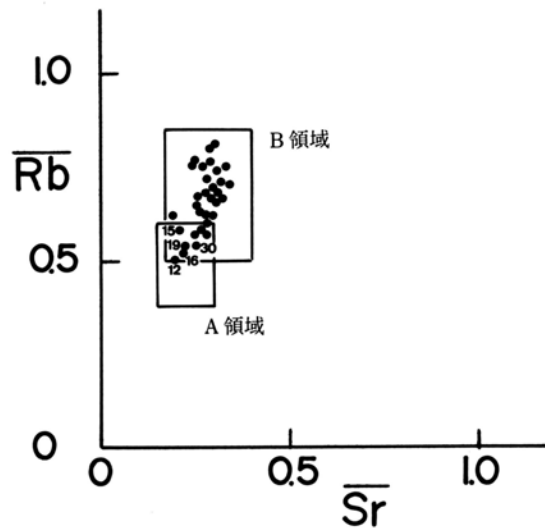
分布図を眺めると、Rb量によってほぼ、2群に分類できそうなので、Rb量の少ないグループをA群、逆に、多いグループをB群としてみた。そして、A群とみられる須恵器をすべて包含するようにしてA群領域を、また、同様にして、B群領域を設定した。勿論、これらの領域は定性的な意味しかもないが、定性的にでも分類できるかどうかを直截的にみる上に役に立つ。そこで、第76図をみると、大部分のものはA群領域に分布することがわかる。No.36、47の2点のみはK、Rb量が多く、他の須恵器とは胎土が異なる。第77図には7C前と推定される須恵器のRb-Sr分布図を示す。ほとんどすべてがA群領域に分布し、第76図と比較すると、これらは6C後～7C前の多くの須恵器と同じ胎土をもつことがわかる。第78図には7C後と推定される須恵器のRb-Sr分布図を示す。No.62を除いて他はすべてA群である。このように、6C後から7C後に至るまでの須恵器はほとんどが同じ胎土をもっており、同じ窯の製品であることを示唆している。

これに対し、8C後～9C初と推定される須恵器のRb-Sr分布図を第79図に示す。7C代までのものとは違い、すべてがRb量が比較的多く、B群領域に分布することがわかる。ただ、No.12、15、16、19、30などはA、B両群が重なる重複領域に分布し、どちらに帰属するか判断し難い。ただ、全体として眺めると、よくまとまってB群領域に分布することがわかる。第80図には10C代の須恵器のRb-Sr分布図を示す。10C代のものもすべて、まとまってB群領域に分布する。第81図には11C代の須恵器のRb-Sr分布図を示す。11C代のものもすべてB群領域に分布する。なお、K、Ca、Rb、Sr因子を使ってク

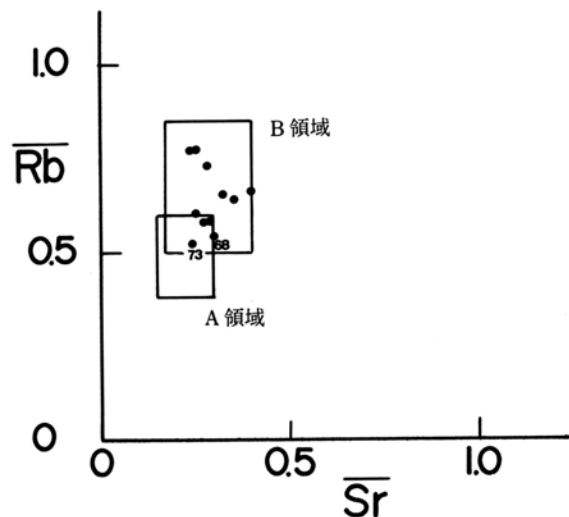
ラスタ分析を行ったが、最短距離法を使っても、最長距離法を使っても、Rb-Sr分布図上での分類ほどきれいには分かれなかった。そのため、デンドログラムは省略した。Rb-Sr分布図上での分類がうまくできたのは、年代ごとに区切って分布図を作成したことによると思われる。

以上の結果から、大洲遺跡の古い須恵器のほとんどがA群領域に分布し、9C以後の新しい時期の須恵器はB群領域に分布し、須恵器の供給源（窯）が時代によって変わったことが判明した。これらを一括してK-Rb相関図上にプロットしたのが第82図である。K因子とRb因子の間には正の相関性があることがわかる。そして、一部は重複領域に分布するものの、6C後～7C後の須恵器は左下半分のK、Rb量がより少ない領域に分析し、また、9C以後の新しい須恵器は右上半分のK、Rb量がより多い領域に分布することがわかる。A、B群とも猿投窯群的性格をもっているため、その産地は猿投窯群内にあると筆者は考えている。このことは逆に、猿投窯群は2群に分割できる可能性があることを示す。

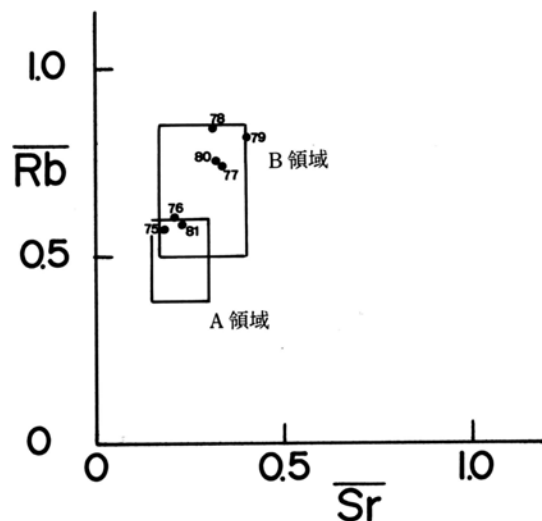
Fe因子にも年代的にみて変化がみられる。第83図にFe因子を比較してある。6C後～7C後の須恵器では、K、Rb因子同様、Fe因子でも差は認められない。ところが、9C代から、10、11C代へと年代が下がるにつれて次第にFe量が少なくなることがわかる。このことは若しかしたら、灰釉陶器が出現することと関係があるのかもしれない。胎土にFe量が少なく、白い素地になると美しく施釉できる。灰釉陶器にはことごとくFe量が少ないことがこれまでの分析データからわかっている。したがって、猿投



第79図 8C後～9C初の須恵器のRb-Sr分布図



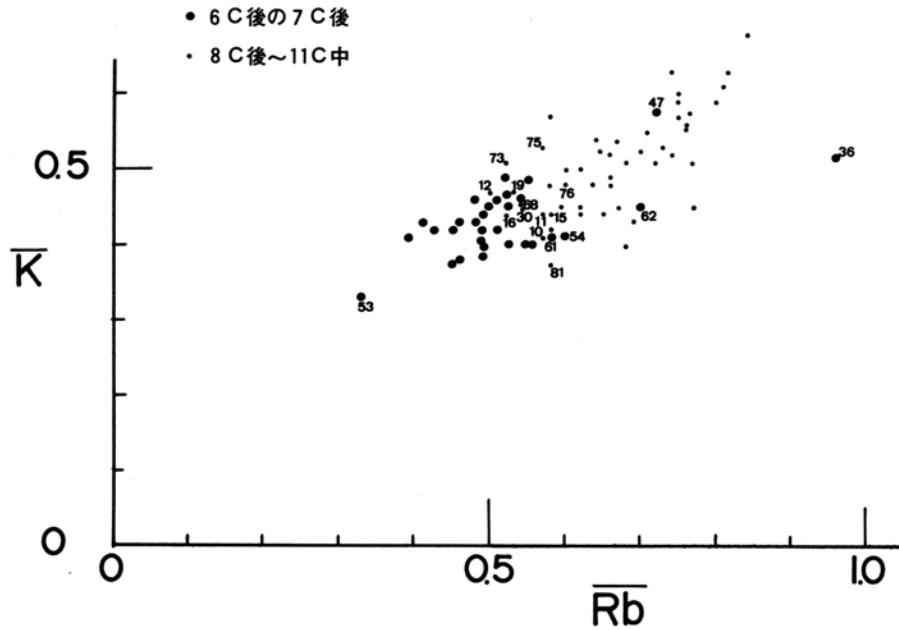
第80図 10C前の須恵器のRb-Sr分布図



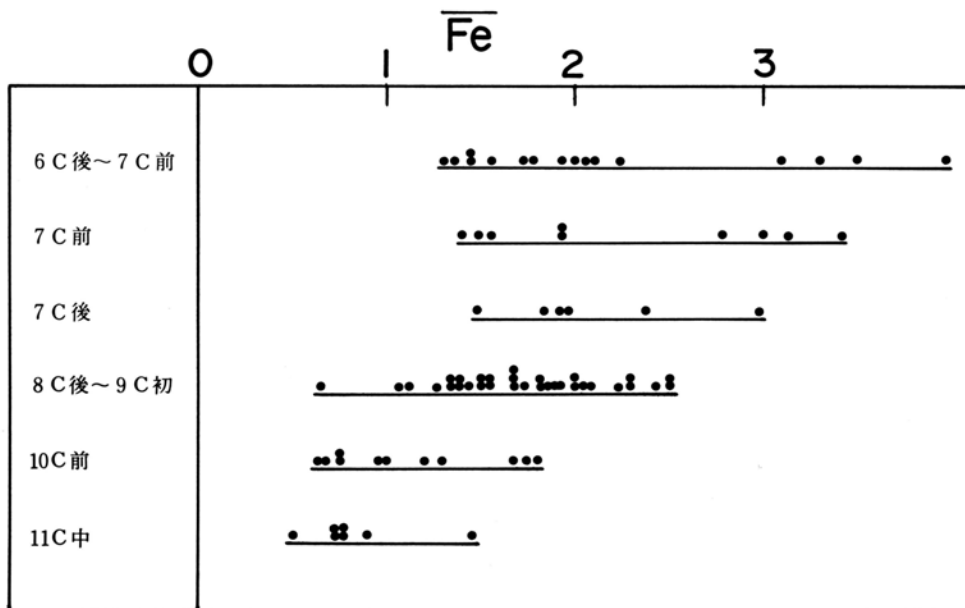
第81図 11C中の須恵器のRb-Sr分布図

群内でも年代が下がるにつれて、Fe量の少ない白い粘土を選択的に求めていったことを第83図は示しているのかもしれない。このことはいずれ、猿投窯群内の須恵器の分析データを年代ごとに分けて整理していけば明らかになることと思う。

以上の結果、大阪陶邑群の場合と同様、周辺の遺跡出土須恵器の分析データの比較から、猿投群の中でも、胎土からみて須恵器を分類できる可能性が出て来た。



第82図 大洲遺跡出土須恵器のK-Rb相関図



第83図 Fe因子の比較

時代	No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	時代	No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
8C後 9C初	1	杯	0.402	0.135	0.654	0.684	0.311	7C前	42	杯	0.405	0.047	1.47	0.487	0.214
	2	"	0.503	0.110	1.92	0.623	0.303		43	甕	0.432	0.060	1.73	0.481	0.211
	3	"	0.553	0.097	1.69	0.708	0.317		44	"	0.423	0.056	3.11	0.454	0.171
	4	"	0.574	0.050	1.39	0.765	0.247		45	"	0.492	0.069	2.24	0.520	0.217
	5	"	0.588	0.080	1.82	0.802	0.290		46	"	0.460	0.092	1.78	0.571	0.230
	6	"	0.519	0.088	1.90	0.737	0.311		47	"	0.575	0.120	3.97	0.719	0.227
	7	"	0.561	0.039	1.36	0.764	0.247		48	"	0.457	0.060	1.40	0.487	0.226
	8	"	0.525	0.090	2.23	0.645	0.256		49	蓋	0.422	0.060	1.40	0.487	0.226
	9	"	0.537	0.067	1.85	0.669	0.262		50	"	0.443	0.066	1.49	0.487	0.240
	10	"	0.408	0.072	1.81	0.571	0.248		51	杯	0.399	0.123	2.78	0.551	0.275
	11	"	0.436	0.115	2.51	0.571	0.276		52	"	0.404	0.052	1.93	0.493	0.194
	12	"	0.466	0.069	1.70	0.501	0.202		53	"	0.332	0.052	3.42	0.331	0.164
	13	"	0.477	0.071	1.69	0.635	0.264		54	甕	0.412	0.055	1.55	0.497	0.212
	14	"	0.436	0.032	2.09	0.616	0.192		55	"	0.384	0.106	1.95	0.460	0.253
	15	"	0.441	0.068	2.29	0.581	0.214		56	壺	0.428	0.094	3.14	0.460	0.232
	16	甕	0.436	0.051	1.55	0.519	0.222		57	甕	0.485	0.115	2.98	0.554	0.277
17	"	0.593	0.079	1.39	0.750	0.269	7C後	58	杯	0.398	0.041	1.96	0.551	0.185	
18	"	0.507	0.107	1.57	0.681	0.277		59	"	0.463	0.084	2.38	0.539	0.236	
19	"	0.469	0.072	2.02	0.530	0.221		60	"	0.412	0.068	2.98	0.387	0.170	
20	"	0.611	0.076	1.37	0.807	0.296		61	壺	0.410	0.076	1.93	0.582	0.213	
21	"	0.556	0.081	1.51	0.763	0.287		62	"	0.449	0.124	1.48	0.698	0.301	
22	"	0.491	0.104	1.12	0.665	0.323		63	甕	0.447	0.045	1.84	0.497	0.201	
23	"	0.450	0.082	1.07	0.670	0.290		10C前	64	"	0.534	0.081	0.643	0.733	0.279
24	"	0.451	0.097	2.43	0.623	0.276	65		"	0.454	0.062	0.678	0.773	0.236	
25	"	0.424	0.092	2.29	0.578	0.266	66		"	0.510	0.062	0.758	0.773	0.248	
26	蓋	0.481	0.098	1.43	0.660	0.310	67		"	0.501	0.097	1.75	0.597	0.252	
27	"	0.445	0.088	1.51	0.597	0.276	68		壺	0.455	0.188	1.21	0.542	0.303	
28	"	0.513	0.066	1.27	0.717	0.278	69		甕	0.524	0.162	1.01	0.659	0.396	
29	"	0.427	0.121	2.06	0.687	0.302	70		"	0.477	0.122	1.30	0.578	0.271	
30	"	0.448	0.094	2.48	0.535	0.252	71		杯	0.442	0.153	0.775	0.647	0.322	
31	"	0.603	0.118	1.99	0.754	0.336	72		"	0.539	0.142	1.68	0.639	0.354	
32	"	0.526	0.165	1.73	0.703	0.339	73		"	0.512	0.102	1.79	0.523	0.242	
6C後 7C前	33	"	0.450	0.045	2.07	0.526	0.185	11C	74	甕	0.565	0.078	0.991	0.582	0.275
	34	"	0.465	0.048	2.10	0.523	0.199		75	杯	0.530	0.089	0.510	0.569	0.182
	35	"	0.398	0.053	1.98	0.555	0.202		76	"	0.483	0.074	0.770	0.603	0.214
	36	"	0.513	0.053	1.56	0.959	0.250		77	"	0.628	0.184	0.747	0.738	0.335
	37	杯	0.424	0.060	1.45	0.509	0.248		78	"	0.678	0.068	0.768	0.838	0.308
	38	"	0.421	0.104	3.31	0.425	0.225		79	"	0.635	0.257	0.896	0.815	0.402
	39	"	0.385	0.045	1.30	0.490	0.183		80	"	0.574	0.159	0.773	0.750	0.321
	40	"	0.428	0.041	1.36	0.411	0.164		81	甕	0.375	0.057	1.46	0.577	0.231
	41	"	0.374	0.041	1.93	0.451	0.175								

第8表 大洲遺跡出土須恵器蛍光X線分析データ

2. 大淵遺跡から検出された珪藻遺骸について

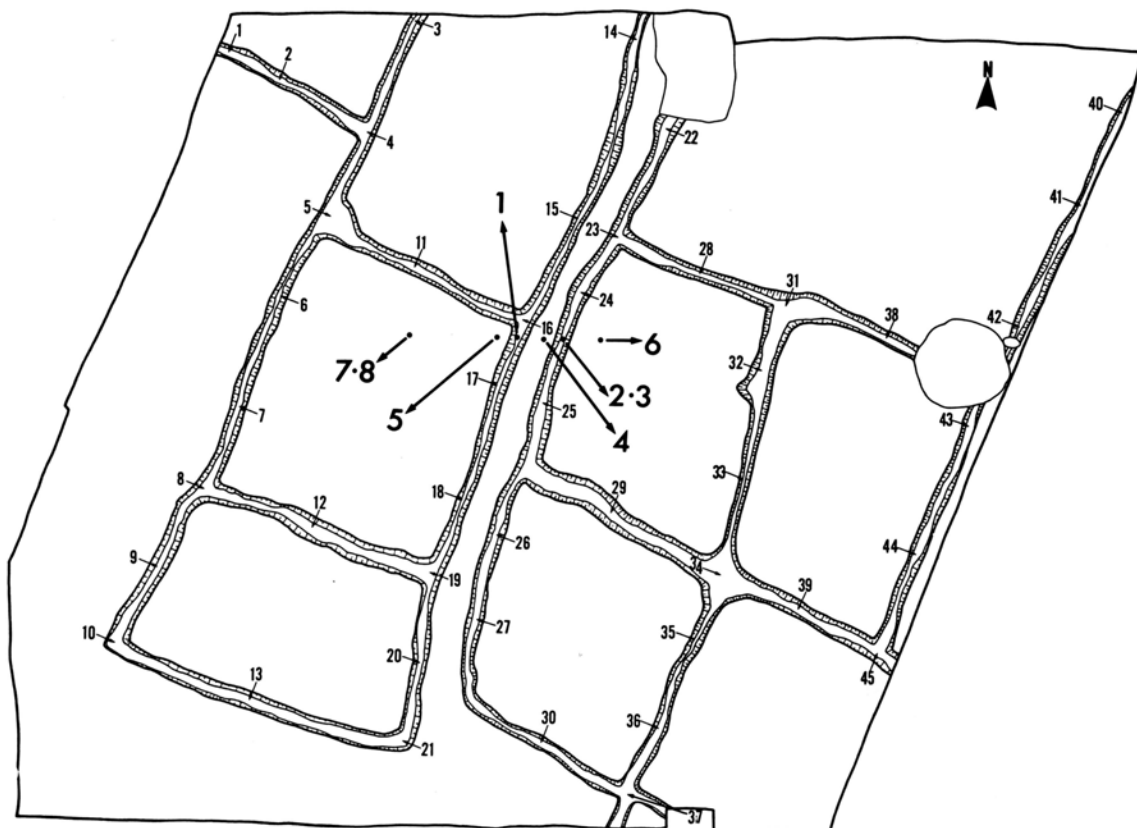
1. はじめに

1984・1985年度に実施された愛知県海部郡甚目寺町大淵遺跡の発掘調査に際して、一辺5～6mの方形区画（弥生時代中期～古墳時代中期）の溝、および方形区画の基盤層中より採取された試料の珪藻分析を実施し、遺構の性格や遺跡基盤層の堆積過程などについて知見を得ることができたので、その概要をここに報告する。

2. 試料の採取と処理

大淵遺跡は、濃尾平野の中央部からやや東よりの氾濫平野南端部に位置する標高0～1mの低湿性遺跡といえる。出土した遺物や遺構などによって、弥生時代中期、および古墳時代～室町時代にわたる複合遺跡であることが明らかになった。

分析を行ったのは、60F区の方形区画をめぐる溝中より3試料（試料1～3）、60F区方形区画下位の地層中より4試料（試料4～7）および古代の包含層中より1試料（試料8）の計8試料である。採取した試料の標高は、試料1～3については-0.13～-0.34m、試料4～7については-0.10～-0.14m、試料8は+0.30mである。試料の採取位置図は第84図に示した。



第84図 試料採取位置図

試料の分析にあたって、乾燥重量1 gをトールピーカー（300ml）にとり、過酸化水素水（35%）を加えて約5分間煮沸し、有機物の分解と漂白を行った。つぎに岩片を除去し、水洗を4～5回くり返しながら同時に比重選別を行った。このようにして得られた試料をピペットでとり、カバーガラス上に広げて乾燥させた。次に封入剤（和光純薬製マウントメディア）をスライドガラスに滴下したのち、試料を塗布したカバーガラスをかぶせ、加熱後、永久プレパラートとした。プレパラートはそれぞれの試料について5枚ずつ作成した。

検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定するよう努めたが、試料中に含まれる珪藻殻が少ない場合には、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。

珪藻の分類と生態的特性などは、Hustedt (1930, 1927-1966), Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988), Hendey (1964), Patrick and Reimer (1966, 1975) などによった。

3. 分析結果

試料中より出現した珪藻遺骸24属81種（2変種を含む）計800個体のリストを第9表に示した。出現した珪藻は、いずれの試料においても淡水生種のみで海～汽水生種はまったく認められなかった。pHについては好アルカリ～不定性種、水流性についてはそのほとんどが不定性種で占められた。また、珪藻の生態性については付着生種（61%）で大半が占められ、底生種（38%）がそれについだ。浮遊生の種群の出現率は1%にも満たなかった。

試料中に含有される珪藻殻数は全体に少なく、見いだされた珪藻殻も破損したものが多かった。種組成では、全体を通して好アルカリ・水流不定性で付着生種の*Synedra ulna*（15%）、同じく好アルカリ・水流不定性で付着生種の*Cocconeis placentula* var. *euglypta*（9.8%、基本種を含む）、*Gomphonema clevei*（6.5%）や、好アルカリ・水流不定性で好気性珪藻として知られる*Hantzschia amphioxys*（7.6%）、pH不定・真止水性で好気性種の*Pinnularia subcapitata*（6%）などが目だった。

属組成では、全体に底生の*Pinnularia*属（18.1%）、付着生の*Synedra*属（16.4%）・*Cymbella*属（8.9%）・*Gomphonema*属（13.5%）などが多く出現した。

試料別にみると、試料1～3では*Pinnularia*属や*Navicula*属・*Neidium*属などの底生の種群（51%）が、試料4～7では*Synedra ulna*をはじめとした*Synedra*属、*Cymbella*属・*Gomphonema*属などの付着生の種群（71%）が多く出現している。試料8は珪藻遺骸の出現率ももっとも低く、とくに目だつ種も認められなかった。

4. 考 察

珪藻の分析結果に加えて試料の土色・粒径などの諸性質から、大淵遺跡における弥生時代中期～古墳時代中期の頃（考古遺物による）の方形区画の成因やその埋積過程等について検討を加える。

方形区画をめぐる溝中の試料（試料1～3）と、方形区画基盤層（試料4～7）および古代の包含

層中の試料（試料8）をくらべてみると、1～8のすべての試料とも「暗～淡灰褐色砂質シルト層」といべきものにあたり、土質のうえでは両者にはとくに明瞭な差異は認められなかった。これら砂質シルトは、甚目寺町周辺の沖積低地一帯では、後背湿地や小河川の河道内部・沼沢地などにしばしば見られ、現在では水田土壌としても盛んに利用されているものにあっている。

珪藻の分析結果では、溝中の試料では底生種の出現率（51%）が付着生種（49%）をいくぶん上回ったのに対して、基盤層中の試料では底生種の出現率はわずか29%に過ぎずその大部分が付着生種（71%）で占められた。また、溝中の試料では水の干上がった地表面などをはじめ、水流の影響を直接受けなくても生活することができる「陸生珪藻」が21%も出現している。その結果、試料1～3が真に溝に堆積した地層中から採取されたものであるとすれば、この溝の堆積環境としては次のようなものである可能性が考えられる。

- (1) 底生の種群が付着生の種群より多いことから、溝の水深は浅くて、流速も小さい。そして、溝の周囲や溝側面には挺水植物や沈水植物などの水生植物がほとんど繁殖していなかったことが考えられる。
- (2) 溝中から見いだされた珪藻遺骸のなかに、富栄養水域や水質汚濁に耐性があるとされる種群の出現率が比較的少ないことから、方形区画における土地利用は短期間かつ小規模なものであったと考えられるが、それがどのような利用形態であったのか推定することは現状では難しい。
- (3) 陸生珪藻の出現率が比較的高いこと、および珪藻の含有殻数がきわめて少ないことから、その溝には水は年間を通じて短い期間しか存在しなかったか、さもなければこの溝の機能した期間が短かったことが推定される。
- (4) 珪藻殻片に完形殻が少なく破壊殻片が多数を占めることから、これら溝中の堆積物そのものも方形区画の基盤層と同様、他所から移動して運び込まれた二次化石であるか、あるいはそれらが混入している可能性が考えられるが、このことは土層の堆積状況等を詳細に観察し総合的に判断する必要があり、分析試料のみから判断することは困難である。

なお、方形区画基盤層の試料4～7では、珪藻の含有殻数が乏しく破壊殻片が全体の57%にも達すること、一般に流水の影響下に生息する付着生種群の出現率が73%もみられたこと、また陸生珪藻がわずかに13%しか認められなかったことなどから、試料中の珪藻殻は明らかに異地性の珪藻遺骸と考えられ、遺跡の基盤層を構成する砂質シルト層は、弥生時代中期を遡る河川性の水流によって運ばれた堆積物であろうと推定される。

古代の包含層である試料8では、珪藻の含有殻数が著しく少ないうえに、付着生の*Cymbella*属の種群がまったく認められないことから、流水の影響の乏しい環境下で堆積した地層であると考えてよい。

しかし、これらの推定はいずれも珪藻分析等を利用した乏しい情報をもとに考察したものであり、今後、大洲遺跡周辺の遺跡基盤層や遺構埋土などを詳細に観察し分析することによって、正しい古環境復元に努めていきたい。

（森 勇一・前田弘子）

第9表 大淵遺跡から産出した珪藻遺骸のリスト

() 内は破壊された珪藻殻片数

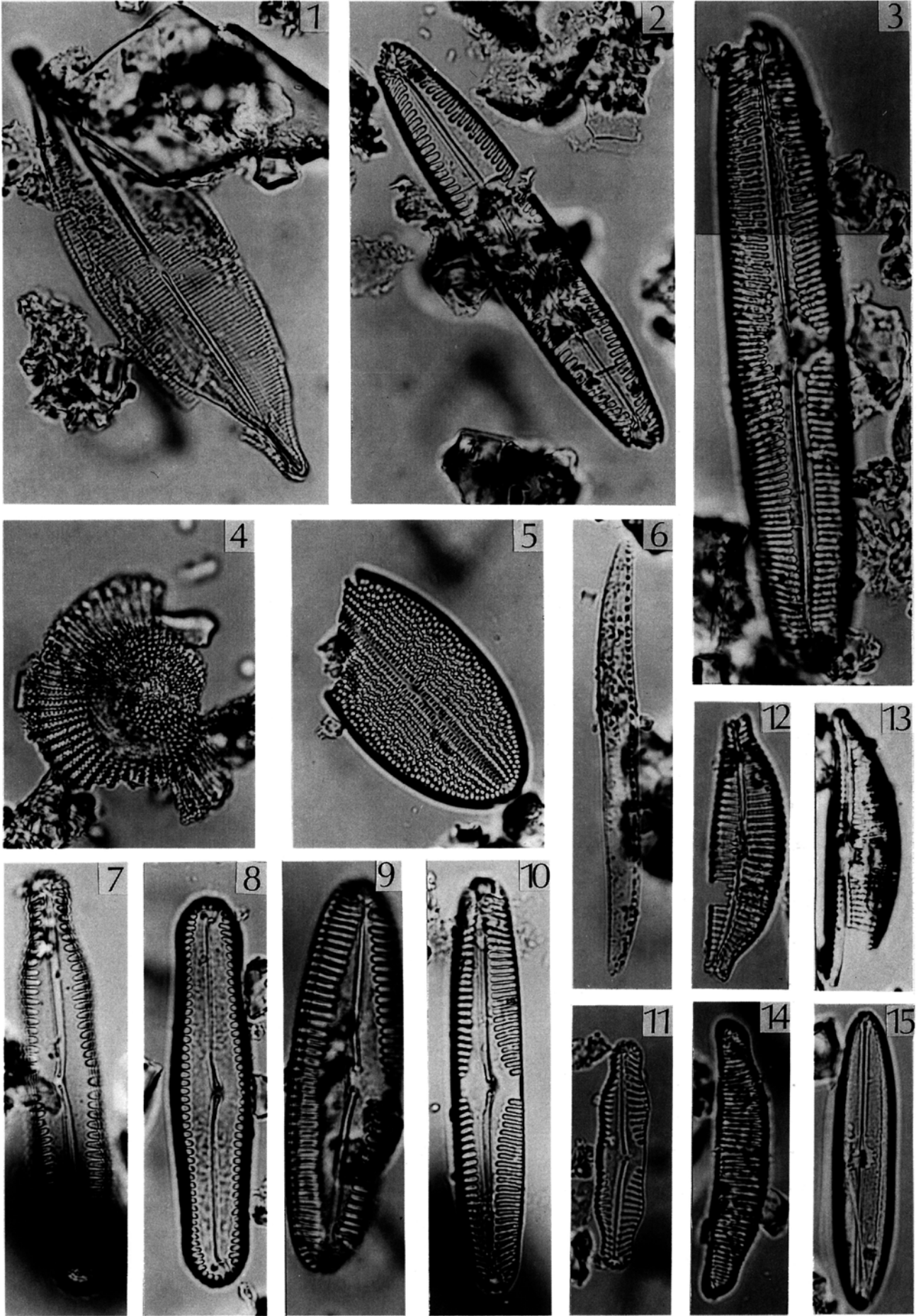
Species	pH	Curr.	Ecol.	1	2	3	4	5	6	7	8	TOTAL
<i>Achnanthes brevipes</i> Agardh	Alph	?	Epip		1 (1)	2 (2)		2 (2)	1 (1)		1 (1)	7 (7)
<i>Achnanthes lanceolata</i> Brebisson	Alph	Ind	Epip			1				1		2
<i>Achnanthes linearis</i> W. Smith	Ind	Ind	Epip		1				1 (1)			2 (1)
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i> (Ehr.) Cleve	Alph	Ind	Bent	1	3 (1)	3	1	2				12 (3)
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Alph	Ind	Bent	3	3 (1)		1	1	3 (2)			12 (3)
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Acph	Ind	Bent	1								1
<i>Cocconeis diminuta</i> Pantocsek	Albi	Ind	Epip		1 (1)							1 (1)
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehrenberg)	Alph	Ind	Epip			1 (1)	2	1 (1)		5 (3)		9 (5)
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>englypta</i> (Ehr.) Cleve	Alph	Ind	Epip	2 (2)	3	10 (9)	15 (8)	8 (3)	9 (7)	17 (11)	5 (5)	69 (45)
<i>Cyclotella stelligera</i> Cl. u. Grunow	?	Libi	Plan				1 (1)					1 (1)
<i>Cymbella cuspidata</i> Kützting	Alph	Ind	Epip		2 (1)	1						3 (1)
<i>Cymbella helvetica</i> Kützting	Ind	Ind	Epip					3 (3)				3 (3)
<i>Cymbella leptoceros</i> (Ehr.) Grunow	Ind	Liph	Epip				1 (1)		3 (2)	2 (1)		6 (4)
<i>Cymbella minuta</i> Ravenhorst	Ind	R-ph	Epip	4	7 (4)	3 (2)	1	4 (1)	2	2		23 (7)
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ind	Ind	Epip	2			1	1				4
<i>Cymbella perpusilla</i> Cleve	Ind	R-ph	Epip							1 (1)		1 (1)
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ind	Libi	Epip				1					2
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunow					1							1
<i>Cymbella tumida</i> (Breb.) V. Heurck	Acph	Ind	Epip	1 (1)	2 (2)		1	1	1 (1)	2		8 (4)
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ind	Ind	Epip		1 (1)		6 (5)	3 (3)	2	7 (6)		19 (15)
<i>Diatoma vulgare</i> Bory	Alph	Ind	Epip				1			1		2
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	Ind	Ind	Bent	2	1 (1)							3 (1)
<i>Epithemia zebra</i> (Ehr.) Kützting	Alph	Ind	Epip	4 (3)	6 (5)	5 (5)	5 (3)	7 (4)	10 (10)	7 (5)	3 (2)	47 (37)
<i>Eunotia flexuosa</i> Kützting	Acph	Ind	Epip	1 (1)	2 (1)		1	1 (1)		1 (1)		6 (4)
<i>Eunotia pectinialis</i> (Kütz.) Rabenhorst	Acph	Ind	Epip	3 (1)	5 (2)		1	1	4 (3)	4 (3)	2 (1)	20 (10)
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Acph	Ind	Epip					2 (2)	1			3 (2)
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Alph	Ind	Epip	1								1
<i>Frustulia vulgaris</i> Thwaites	Ind	Ind	Epip							1		1
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	1	1	1					1	4
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Alph	Liph	Epip	3 (1)	4 (2)	6 (2)	8 (4)	6 (5)	8 (3)	15 (6)	2	52 (23)
<i>Gomphonema constrictum</i> Ehrenberg	Alph	Ind	Epip	1								1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ind	Liph	Epip	1	2	2 (1)	1		2 (1)	2 (1)		10 (3)
<i>Gomphonema lanceolatum</i> Ehrenberg	Alph	Ind	Epip		2 (2)		1	2				5 (2)
<i>Gomphonema olivaceum</i> (Lyng.) Kützting	Alph	Ind	Epip			4			3			7
<i>Gomphonema parvulum</i> (Kütz.) Kützting	Ind	R-ph	Epip	2	7 (5)	2 (1)	4 (1)	7 (2)	2 (1)	3 (2)	1	28 (12)
<i>Gomphonema subtile</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Epip	1								1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Alph	Ind	Bent	7 (5)	11 (7)	12 (9)	7 (6)	5 (3)	7 (5)	9 (6)	3 (2)	61 (43)
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1 (1)							1	2 (1)
<i>Navicula cuspidata</i> (Kütz.) Kützting	Alph	Ind	Bent	1	2 (1)					1 (1)		5 (2)
<i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralls	Alph	R-bi	Bent	2 (1)	2	1	1	1			1	9 (1)
<i>Navicula goeppertiana</i> (Bleisch) H. L. Smith	Ind	Ind	Bent					1 (1)				1 (1)
<i>Navicula mutica</i> Kützting	Ind	Ind	Bent	1 (1)	4 (1)		1		1			7 (2)
<i>Navicula oppugnata</i> Hustedt	Alph	Ind	Bent							1 (1)		1 (1)
<i>Navicula pupula</i> Kützting	Ind	Ind	Bent		2		1		1 (1)			4 (1)
<i>Navicula radiosa</i> Kützting	Ind	Ind	Bent		2 (1)							2 (1)
<i>Navicula viridula</i> (Kütz.) Ehrenberg	Alph	R-ph	Bent	1								1
<i>Neidium affine</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Libi	Bent	1								1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ind	Ind	Bent		1		1					2
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.) Cleve	?	?	Bent	2 (1)				1	1			4 (1)
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ind	Liph	Bent	3	4 (3)	2 (2)					3 (1)	12 (6)
<i>Nitzschia ignorata</i> Krasske	?	?	?	2					1			3
<i>Nitzschia linearis</i> W. Smith	Alph	R-bi	Bent		2 (1)							2 (1)
<i>Nitzschia obtusa</i> W. Smith	Alph	?	Bent		1							1
<i>Nitzschia palea</i> (Kütz.) W. Smith	Ind	Ind	Bent	1								1
<i>Nitzschia romana</i> Grunow	Alph	Ind	Bent	1					1			2
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> Rabenhorst	Ind	Ind	Bent		1							1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1	3 (3)	1		1	1	1	2 (2)	10 (5)
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Acph	Ind	Bent					1		1	1	3
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Acph	Ind	Bent						1			1
<i>Pinnularia divergentissima</i> (Grun.) Cleve	Acph	Ind	Bent						2 (1)			2 (1)
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Acph	Ind	Bent								1	1
<i>Pinnularia hemiptera</i> (Kütz.) Cleve	Acph	Libi	Bent	1	3 (1)	4 (1)		3 (3)	7 (5)		1	19 (10)
<i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	3 (1)	2 (2)	2 (1)	2	3 (2)	5 (3)	2		19 (9)
<i>Pinnularia major</i> Kützting	Acph	Ind	Bent	3 (3)								3 (3)
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Acph	Ind	Bent	2 (1)	3 (2)		2 (1)		4 (3)	1		12 (7)
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ind	R-ph	Bent						1			1
<i>Pinnularia stomatophora</i> Grunow	Acph	Ind	Bent	2 (2)	3 (2)		1					6 (4)
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ind	Libi	Bent	7 (4)	15 (10)	6 (3)	3	2 (1)	10 (3)	4 (1)	1 (1)	48 (23)
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ind	Ind	Bent	1 (1)	9 (6)	3 (2)	1	2 (1)	1	2 (1)		19 (11)
<i>Rhoicosphenia curvata</i> (Kütz.) Grunow	Alph	Ind	Epip			1		1				1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Ehr.) O. Müller	Alph	Ind	Epip			1				1		2
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Alph	Ind	Epip	2 (1)	1 (1)	2 (1)	1 (1)			2 (2)		8 (6)
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ind	Ind	Bent	1								1
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent		4 (1)	2 (1)		1	1		2	10 (2)
<i>Steppanodiscus astraea</i> (Ehr.) Grunow	Albi	Liph	Plan									1
<i>Surirella elegans</i> Ehrenberg	Ind	Ind	Bent		1							1
<i>Surirella linearis</i> W. Smith	Alph	Ind	Bent					1				1
<i>Surirella ovata</i> Kützting	Alph	Ind	Bent					1				1
<i>Synedra rumpens</i> Kützting	Ind	Liph	Epip						1			1
<i>Synedra ulna</i> (Nitz.) Ehrenberg	Alph	Ind	Epip	12 (12)	13 (13)	14 (14)	12 (9)	15 (14)	16 (15)	32 (32)	7 (7)	121 (116)
<i>Synedra vaucheriae</i> Kützting	Alph	R-ph	Epip	1 (1)		2 (2)	3 (2)		1 (1)	1		9 (6)
TOTAL				93 (44)	143 (84)	95 (61)	90 (42)	91 (52)	119 (69)	129 (84)	40 (22)	800 (457)

生態種凡例

pH (pH spectra)	水流性 (Current spectra)	生態性 (Ecology)
Albi : Alkalibiontic forms (真アルカリ性種)	Libi : Limnobiontic forms (真正水性種)	Bent : Benthonic forms (底生種)
Alph : Alkaliphilous forms (好アルカリ性種)	Liph : Limnophilous forms (好止水性種)	Epip : Epiphytic forms (付着生種)
Ind : Indifferent forms (不定性種)	Ind : Indifferent forms (不定性種)	Plan : Planktonic forms (浮遊生種)
Acph : Acidophilous forms (好酸性種)	R-ph : Rheophilous forms (好流水性種)	? : Unknown (不明種)
Acbi : Acidobiontic forms (真酸性種)	R-bi : Rheobiontic forms (真流水性種)	
? : Unknown (不明種)	? : Unknown (不明種)	

文 献

- Cholnoky, B.J. (1968), Die Okologie der Diatomeen Binnengewässern. Cramer, Germany. 699p.
- Hendey, N.I. (1964), An introductory Account of the smaller algae of British coastal waters. Part V : *Bacillariophyceae (diatom)*. Her Majesty's Stationary Office, London, 317p.
- Hustedt, F. (1930), Bacillariophyta, *Die Süßwasser Flora Mitteleuropas*, 10, G. Fischer, Jena, 466p.
- Hustedt, F. (1937-1938), Systematische und Okologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra. nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. *Arch. Hydrobiol., Suppl.*, 15, 131-177.
- Hustedt, F. (1927-1966), Die Kieselalgen Deutschland, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. *Kryptogamen Flora von Deutschland*, Teil 1~3, Leipzig, W. Deutschland. 920p, 845p, 816p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986-1988), Bacillariophyceae. Teil 1, Teil 2, *Pascher A. Süßwasserflora von Mitteleuropa*. 876p, 596p.
- 森 勇一 (1989), 町田遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡報告書, 64-73.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1989), 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和63年度), 76-91.
- 森 勇一 (1990), 遺跡の立地および地理的環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集, 阿弥陀寺遺跡報告書, 4-5.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990 a), 愛知県岡島遺跡における珪藻遺骸群集. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集, 岡島遺跡報告書, 43-47.
- 森 勇一・伊藤隆彦 (1990 a), 清洲城下町遺跡の中堀から検出された珪藻遺骸 (付・昆虫遺体). 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集, 清洲城下町遺跡報告書, 103-108.
- 森 勇一・伊藤隆彦・永草康次・楯真美子 (1990), 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成. 愛知県埋蔵文化財センター年報 (平成元年度). 65-84.
- Patrick, R. and C. W. Reimer (1966-1975), The Diatoms of the United States. *Monogr. Acad. Nat. Sci. Philadelphia*, no. 13, Philadelphia, 688p., 213p.
- 海津正倫 (1988), 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化. 名古屋大学文学部研究論集, 285-303.
- 大淵遺跡産の珪藻遺骸の顕微鏡写真
1. *Navicula cuspidata* (Kütz.) Kützing
 2. *Pinnularia stomatophora* Grunow
 3. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg
 4. *Stephanodiscus astraea* (Ehr.) Grunow
 5. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Gleve
 6. *Nitzschia ignorata* Krasske
 7. *Pinnularia interrupta* W. Smith
 8. *Pinnularia acrosphaeria* Rabenhorst
 9. *Pinnularia hemiptera* (Kütz.) Rabenhorst



第85图 大洲遗迹出土珩藻遗骸写真

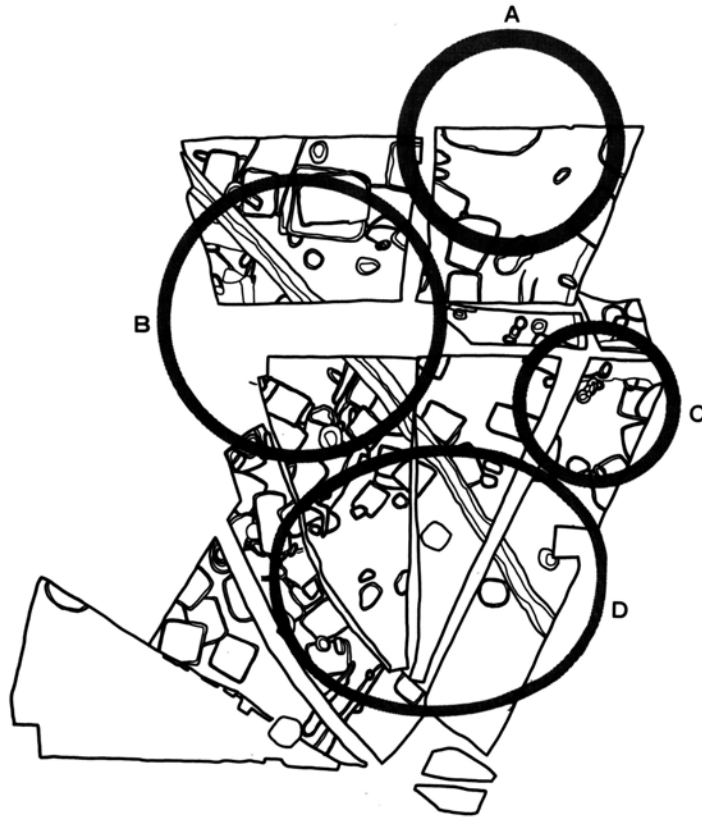
Ⅶ. まとめ

弥生時代

時期 IV. 遺物のところでも触れていたが、大淵遺跡の弥生時代の主要な時期は凹線紋系土器の展開とほぼ重なっている。この凹線紋系の時期は、上・下層に分かれて遺物の出土したSE01資料を基準として1・2期に分けることができ、さらに2期が新・古に分かれる。また、I～V系統の中で中心となるものは、I系（朝日式・貝田町式系）とIV系（凹線紋系）であり、2期以降にⅢ系・V系がはいるようになる。特にⅢ系の混入頻度は高く、ほとんどが搬入品と考えられることからみても、Ⅲ系分布圏である三河・知多との交流が活発であったことが窺われる。Ⅱ系については、出土数が極めて少ない。さらに、I系の変化の仕方についても、貝田町式の影響を残したまま凹線紋系土器群を受け入れている阿弥陀寺遺跡とは異なり、大淵遺跡の土器群は凹線紋系の強い影響のもとに成立している。このことが、拠点集落と短期集落の差にあるのか、若干の時間のズレにあるのかは今後の問題となろう。

集落 凹線紋系土器の時期には52軒の竪穴住居・3基の井戸・50基を上回る土坑が検出されており、遺構は遺跡北側の標高の高い部分に集中して作られている。竪穴住居は、単独で検出されたものもあるが、通常建て替えも含めて3回程度の切り合いが確認されており、特に60A₁区と60C₂区付近に幾度も作られている。また第86図にあるようにまったく住居が建てられない部分が少なくとも3～4ヶ所あり、その無住居地域の周囲を弧を描くような住居が占地する傾向がみられる。この無住居地域の中の、Aエリアには穿孔土製円盤を出土した大型土坑SK10、Dエリアには円形に近い隅丸方形という当遺跡内では特殊な形態を示すSB35や円窓付土器を出土したSE03、さらにSK53もSK10と同様のものである可能性があり、特異な空間であった可能性が高い。

次に集落としての性格を考える場合、谷地形を挟んで北接する阿弥陀寺遺跡の存在が大きく関わってくる。阿弥陀寺遺跡は貝田町式期前半には環濠をもった集落として成立するが、高蔵式期には衰退し、山中式期に再び環濠が掘削されている。また、北東に位置する拠点集落である朝日遺跡では、高蔵式期には環濠が掘削されず、生活域が不明瞭になり、方形周溝墓の構築規範もこの時期に大きく変化することがわかっている。大淵遺跡はこれらの大規模な〈囲郭集落〉が衰退・混乱する時期である高蔵式期に成立し、若干は次期にまで続くものの、生活空間としての役割はその一時期で終わってしまうようである。一方、阿弥陀寺遺跡の北西に位置する森南遺跡は阿弥陀寺遺跡とほぼ同期間にわたって遺跡が存続するが、環濠は有さず、調査面積の関係で確実なことは言えないが、高蔵式期における明瞭な衰退はみられないようである。遺跡のタイプとしては明らかにこの森南遺跡に類似しており、近隣



第86図 弥生時代遺構図

の〈囲郭集落〉が凸線紋系土器の波及という変化に遭遇し混乱した時期に、それらの拠点的な集落と密接な関係をもって成立し、その平常化とともに遺跡が営まれなくなるのであろう。尾張部の遺跡をみても、高蔵式期に始まる遺跡が多数あり、特に平野部においては短期間しか存続しない例が多くみられ、この時期に広い地域で大きな変革があったことが想定される。

方形区画 60F区・59B区にかけて検出された溝で仕切られた方形区画遺構は、溝内出土の遺物が小片でかつ少なく、時期を決定するにいたらなかったが、周囲より貝田町式期以前の遺物が出土しないことと溝が古墳時代後期の遺構に切られることから、弥生時代中期～古墳時代中期に属するものであると考えられる。性格についての考察は、自然科学的分析を十分に行わなかったこともあってさらに難しく、唯一実施したVI-2.の珪藻分析では、溝は浅くて水流が乏しく、短期間しか水流がないか利用されていない、二次堆積物が埋土となっている可能性があるという結果が述べられており、土層の観察からも水が流れていたとは思えなかった。このことは、これらの溝が灌漑や排水のために掘削されたものではないことを示している。区画の規模や低い位置に作られていることからみても、当然水田跡という推定がなされるであろうし、近年宮城県富沢遺跡の調査などで、このような溝で区切られた直線的な区画を水田跡の可能性のあるものとされている。また、溝が畦畔をつくるためのものであるならば、珪藻分析で言われる二次堆積物があるべきである。このようなことから、この方形区画は水田の床土や畦畔が総て削平された状態のものであると推定したい。

中期以降 弥生時代中期の居住域を横切るように、北西から南東にかけて走るSD01は掘削時期についての確実な資料は得られなかった。ただ、切り合い関係にある全ての竪穴住居よりも新しくなること、中・上層の砂層より弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土していることからみて、弥生時代中期でも新しい時期か後期に掘削され、古墳時代前期にかけて埋没するものと思われる。また、後期以降の土器は古代～中世の遺物に混じって出土することが多く、その分布は60A₁区・60B₁区に集中している。このことから、古墳時代後期以降の削平で消失してしまったが、調査区北側に該当期の遺構があったことが想定でき、SD01が何らかの役割を果たしているものと考えられる。

古墳時代後期以降

執筆の都合上、遺構・遺物とも古墳時代後期～平安時代中期、平安時代後期～室町時代という分けかたで記述してきたが、遺跡の連続性を考えると、両者を同時に述べるほうが混乱が少ないと考え、以後第9表時期区分に従い説明をしていきたい。また、主要遺構との対応関係も同表に示した。

時期区分 大洲遺跡の古墳時代後期以降を土器によって区分すると大きくI～IV期に分けられる。

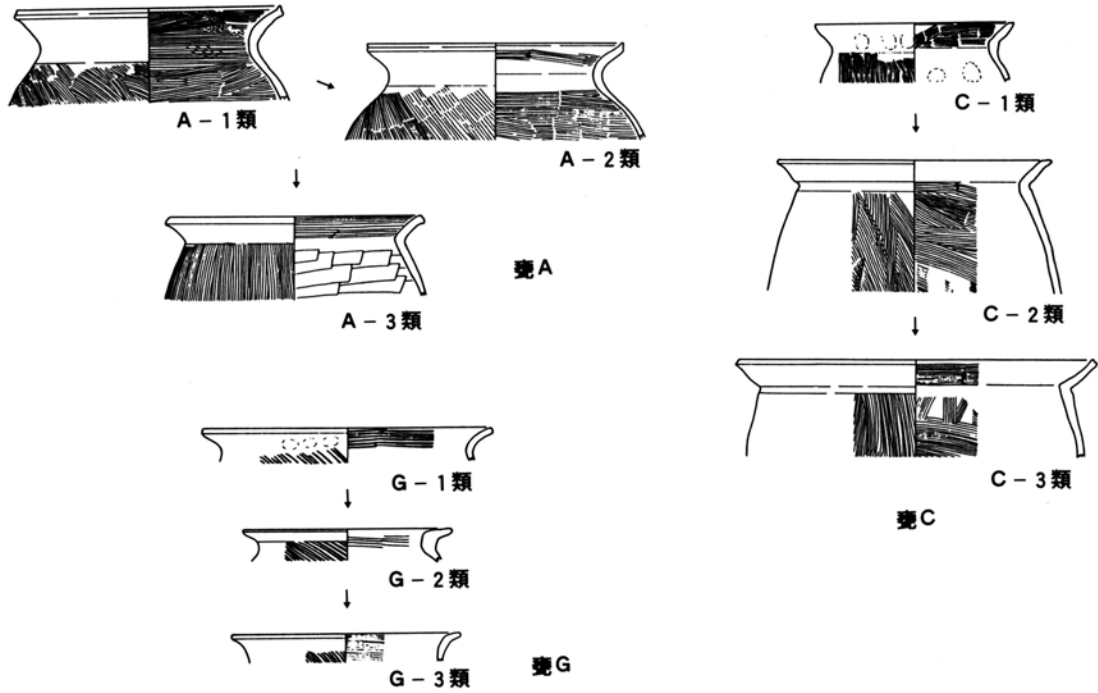
I期 煮炊具である土師器甕A1・A2類が用いられている時期。煮炊具が全器種の40%以上を占める。食器は古墳時代から続く須恵器杯A・Bが主なものとなる。

1 煮炊具はほとんどが土師器甕Aで、口縁端部をナデ上げるA1類・A2類で占められる。食器は須恵器杯Aと蓋Aの組み合わせとなる。

2 煮炊具の土師器甕AはA2類が主体となり、土師器甕C1・C2類・Eが新たにみられる。食器の須恵器杯Aと蓋Aは以前として残るが、蓋Bと杯Eの割合が増加する。

	I				II		III		IV	V	VI
	1	2	3	4	1	2	1	2			
SE	06・09 23・31 32・33	13・14 22・28		25	26・29		01	10・24	11・16 17	04・12 15・20	
SK	125	20 118	40	108		06・90			05・74	19・77 78・144	171
SD		94	60	41	72	48・49 97				05・15 43・50 59・63	
SX		01									

第10表 古墳時代後期以降時期別主要遺構



第87図 土師器甕細分類 (1/6)

Ⅱ期 煮炊具である土師器甕A 3類・Bが用いられている時期。食器は須恵器杯A・蓋Aの組み合わせがみられなくなり、須恵器杯E・蓋B・Cが主流となる。

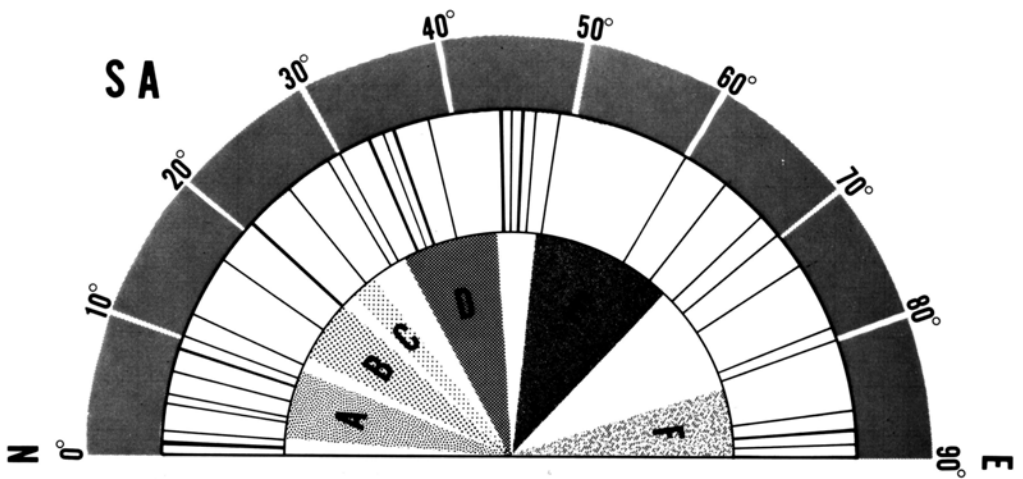
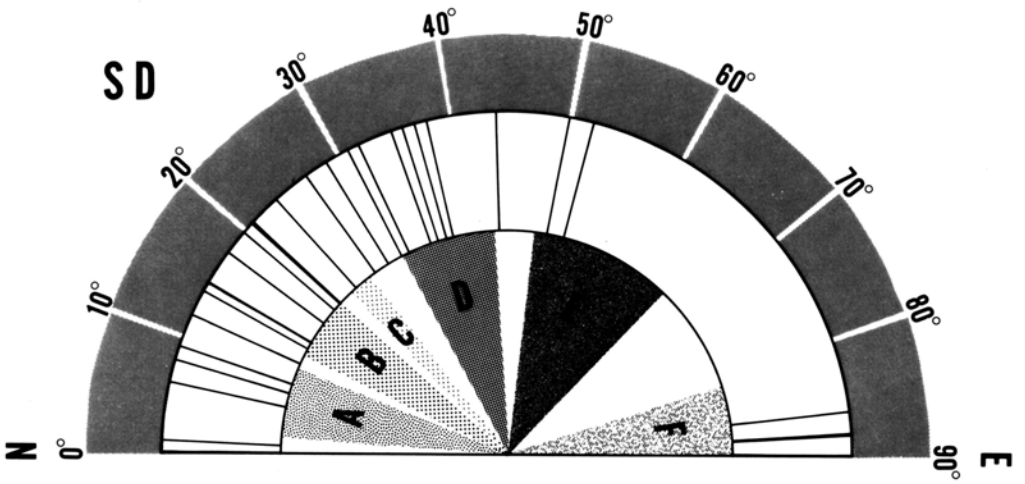
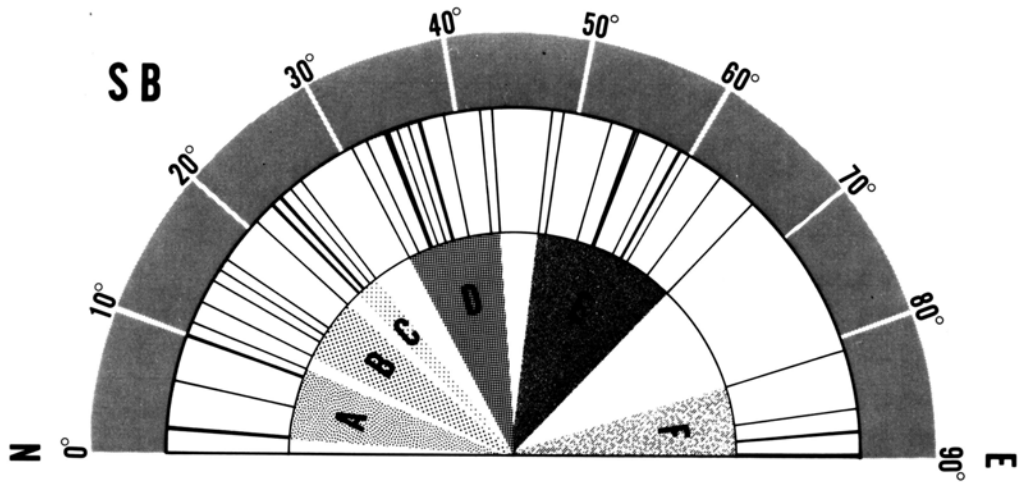
- 1 煮炊具の土師器甕AはA 3類が主体となる。食器は蓋B・Cと杯Eが主なものとなる。
- 2 煮炊具は土師器甕A 3類が少なくなり甕Bが多くなる。食器は須恵器蓋とBが杯Eが主体となり、杯Fもみられる。

Ⅲ期 煮炊具である土師器甕G・Hが用いられる時期。煮炊具が全器種の10%以下となる。食器は蓋Dが主流となり、盤Aに代表される盤や金属器写しの器種が現れる。

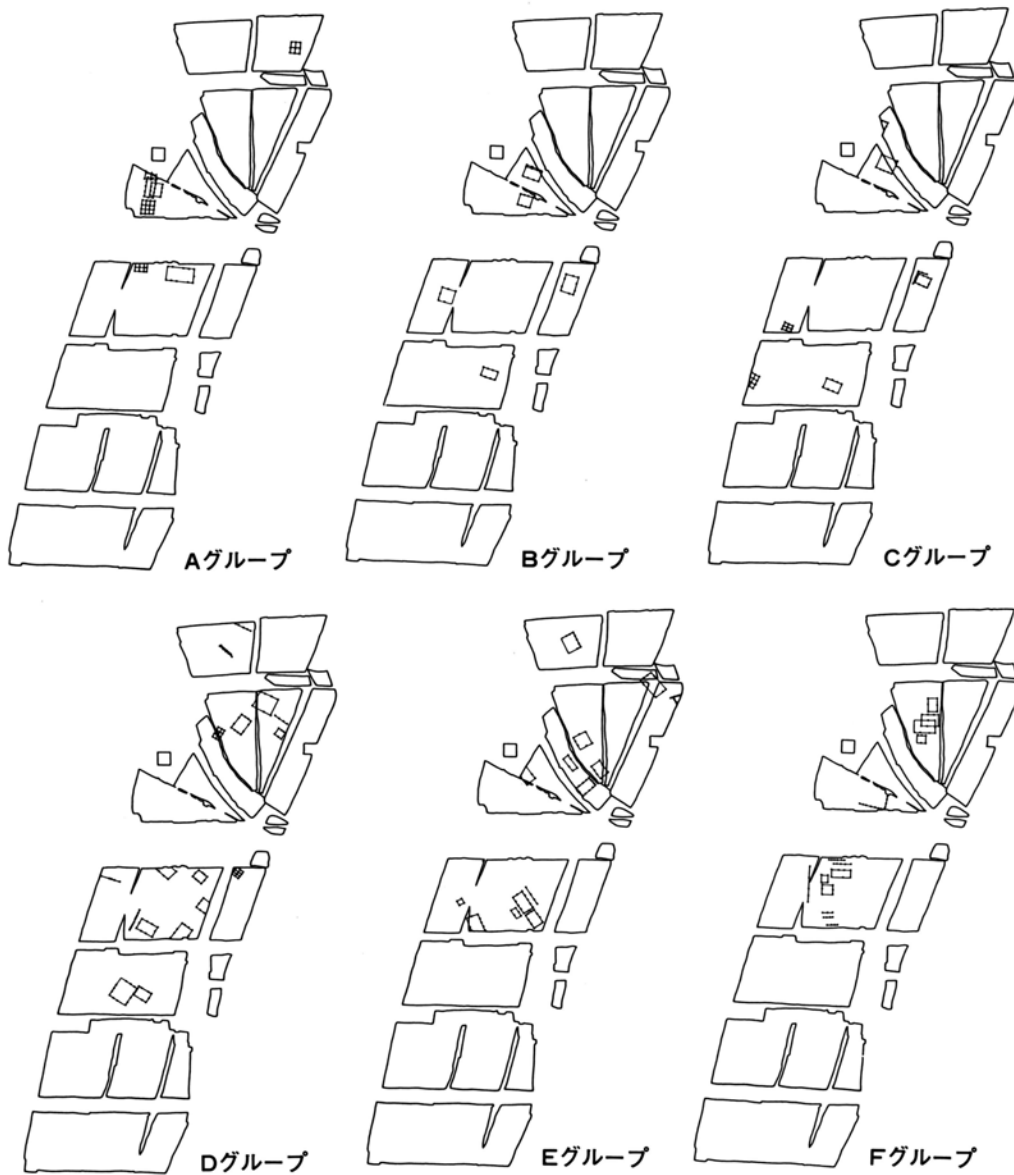
- 1 煮炊具は土師器甕F・HとG 1類がみられる。食器は定型化した須恵器蓋Dと器高の深い盤A・直線的にのびる体部をもつ杯D・Fが主流となる。
- 2 煮炊具は土師器甕G 2類となる。食器は器高の浅い杯Dとやや内弯して碗状を呈する杯Dとなる。

Ⅳ期 煮炊具は土師器甕G 3類となり、全器種に占める割合は5%以下となる。食器には灰釉陶器が加わり、灰釉陶器碗Aや皿A・Bがみられる。

Ⅴ期 灰釉系陶器が使われ始める時期。灰釉系陶器碗A～D、小碗、「足高台」杯、土師器碗などの多様な器種がみられる。



第88図 主要遺構軸線方位グラフ



第89図 グループ別掘立柱建物

VI期 灰釉系陶器のいわゆる「山茶碗」が用いられる時期。灰釉系陶器碗D～I、小皿A～Cが主流となる時期。

VII期 大窯で生産された施釉陶器がみられる時期。

この各時期を生産地の窯様式をもとに年代を与えると、I期-H-44～H-50（6世紀末～7世紀前半）、II期-I-17～I-41（7世紀後半）、III期-O-10～IG-78（8世紀後半～9世紀初）。IV期-K-90～O-53（10世紀前半）、V期-百代寺窯式（11世紀中頃）、VI期-13世紀、VII-15世紀となる。

集 落 大淵遺跡のI期からVII期末は約900年という長期間にわたっており、集落も当然幾度かの建て替えがあったはずであるが、この時期の住居形態である掘立柱建物では時期の決定や切り合い関係を把握することは難しく、変遷を追うことは困難を伴う。ただ、多くの当

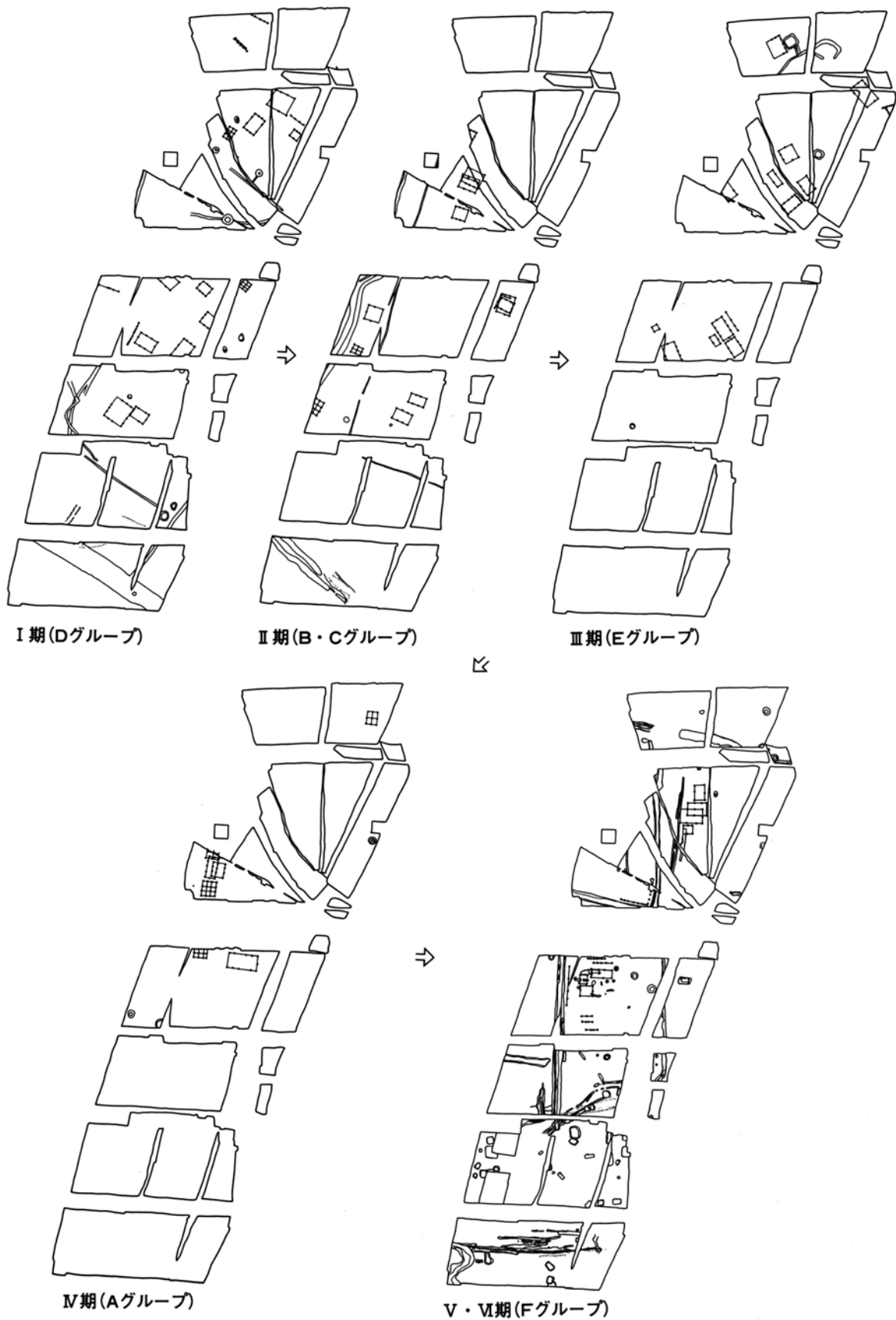
該期の集落の事例では、掘立柱建物だけで構成される建物群は、おおむね軸線を合わせながら作られていくという傾向が認められており、これにより大淵遺跡の掘立柱建物・柵・溝の軸線をみると、第88図のようになる。この中で最もはっきりとしたまとまりがみられるのが掘立柱建物で（第89図）、切り合い関係を考慮すると、A～Fの6グループに分かれる。溝も掘立柱建物ほどではないが、4グループ程度に分かれ、それぞれB・C、D、E、Fグループに対応する。柵についても、いくつかのグルーピングが可能であるが、掘立柱建物のそれとはうまく対応しない。

さらにこの掘立柱建物と溝のグループがどのような順序でつくられていったかということであるが、まず①調査区南側を何度も掘り返されながら走る溝群は、自然地形の制約を受けるためか、各溝ともほぼ同方向をむき、I期からIII期までの遺物が出土することからみて、この軸線方向の溝が長期間にわたって使用されていたことが考えられる。逆にいえば、最も古い軸線方向がこの方向である可能性がある。②Cグループ→Dグループという切り合いがみられる。③EグループにはいるS B37の柱穴内よりIII期の杯Eが出土している。④III期の井戸S E01と隣接するS B01と関連するような場所に位置する。⑤Fグループの掘立柱建物は包含層上面で検出が可能である。⑥S B23はS D43に切られている、の条件をもとにA～Fの順序を想定してみると、第90図のようになる。これをまとめると下記のようなになる。

1. 南側の溝群の軸線方向にあわせるように、Dグループが作られる。掘立柱建物は北・中・南の3グループに分かれ、北と中のグループには総柱建物がみられる。その居住域を区切るように、西にS D58、南にS D82、東にS D94が走る。
2. 南S D53を基準にCグループが作られる。1と同じく北・中・南の3グループに分かれるが、通常の掘立柱建物はS D53の東側、総柱建物は西側という配置になる。
3. 2を踏襲するように、Bグループが作られ、S D53の西側にも通常の掘立柱建物がみられる。
4. Eグループが作られるが、建物の軸線方位に大きな変化がみられる。1と同じく北・中・南の3グループに分かれるが、総柱建物はみられない。
5. Aグループが作られる。掘立柱建物と総柱建物という組み合わせで、中央部に集中し、北に一棟総柱建物がみられる。
6. ほぼ南北方向を向くFグループが南・北の2グループに作られ、それを囲むように南北・東西の軸線方位をもつ溝が走る。

これを土器からみた時期区分にあてはめると、I期-Dグループ、II期-C・B期グループ、III期-Eグループ、IV・V期-Aグループ、VI期-Fグループと考えられ、II期とIII期、IV・V期とVI期の間に大きな画期があることがわかる。

I・II期 大淵遺跡の性格を考える場合、官衙や寺院といった大規模な計画的な建物群としてとらえることは難しい。かといって清洲城下町遺跡や名古屋城三の丸遺跡でみられた竪穴住居と掘立柱建物で構成される自然集落的な様相とも違っており、I期の6世紀末より建物は



第90図 主要遺構変遷図

掘立柱建物しかみられない。このようなありかたは明らかに畿内的な様相を強くもっていると言え、「ナデ上ゲ」を特徴とした甕Aが分布する範囲は畿内、伊勢、尾張、中・西美濃地域であり、特に長胴甕との折衷型が多くみられるのは、近江以東である。つまり大渕遺跡の成立は畿内と強い結び付きをもって現れ、その主体は、阿部義平氏が（『官衙』1989ニューサイエンス社）述べられている「地方の在地豪族総が大化改新時に評造になど任命されるまで、自らの由来や職掌を各自が主張したことがみえ、国造や評造以外にも有力者が在地におったことは確実である」中の「有力者」がそれにあたるであろう。また、一定の規格をもった土鍾を用いた計画的な漁労の存在も、遺跡が官衙的な性格でなく、地域に密着していることを窺わせる。そして、7世紀後半の基目寺や法性寺等の古代寺院の建立後にⅡ期とⅢ期の画期がみられるが、これはその「有力者」官編成に組み入れられ、寺を中心として居住体形に変化したためではないかと思われる。次に遺跡が営まれるⅢ期の8世紀後半は、全国的に私有地を伴う新田開発が盛んに行われる時期であり、遺跡の居住者は新たな開発を行うため、再び旧地に居住地を求めたことになる。ただ、遺構配置等をみると、これらの進出も計画的に行われたものである可能性が高い。また、Ⅲ期以降は土鍾が全くみられなくなり、村落の生活構造がⅠ・Ⅱ期とは変わってきていることが指摘できる。さらに、そのⅢ・Ⅳ期にみられる、荒いハケを施す甕Gの分布は、尾張、三河、遠江、南・中信となっており、生産地である尾張を中心とした灰釉陶器の流通ルートと深く関わっているものと考えられる。

Ⅲ・Ⅵ期

V・Ⅵ期 V期の遺跡の様相については、井戸が3基検出されているだけで、居住地域の検出はできなかった。

Ⅵ期は、13世紀前後に濃尾平野全域にみられる、溝を用いて居住域や墓域を区画する集落形態を示す。この中世集落には、溝方位がほぼ南北を向く土田遺跡や阿弥陀寺遺跡のようなタイプと自然地形に合わせたように不整方向に来る森南遺跡のようなタイプがみられる。大渕遺跡は明らかに前者のタイプで、東西方向の溝間の距離が北から62m、68m、62m、南北方向の溝間の距離が36mで、前者のタイプの30～40mを測る溝間距離とも一致する。ただ、居住域と墓域を不整方向の溝や柵列で区切る例は他には無く、新たな知見を加えたといえよう。また、方形土坑に切り合いがあることや軸線に二方向あること、溝出土の遺物に時間巾があることからみて、Ⅵ期はさらに二時期に分かれる可能性がある。

遺 構

下 面

SB 竪穴住居

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧 番 号
01	500	392	0	60A ₁ SB06
02	556	436	9	60A ₁ SB05
03	—	570	3	60A ₁ SB08
04	—	750	-16	60A ₁ SB10
05	1036	868	-7	60A ₁ SB04
06	(820)	420	7	60A ₁ SB03
07	592	—	7	60A ₁ SB01
08	—	516	14	60A ₁ SB07
09	—	318	45	60A ₁ SK100
10	(668)	428	4	60A ₁ SK259 60B ₁ SB03
11	652	492	-6	60B ₁ SB04
12	—	372	7	60C ₁ SB01 60B ₁ SB05
13	—	—	-3	60B ₁ SB02
14	640	—	12	60B ₁ SB01
15	372	—	6	60C ₁ SB02 60B ₂ SB05
16	448~644	364	-1~9	60A ₂ SB301 304・305
17	—	372	2	60A ₂ SB302
18	(516)	392	-4	60A ₂ SB303
19	—	—	6	60A ₂ SB306
20	—	316	5	60A ₂ SB307
21	388	336	4	60A ₂ SB308
22	—	384	-1	60A ₂ SB313・309
23	—	420 476	-4 -9	60A ₂ SB310・312
24	(400)	(368)	-7	60A ₂ SB311 60B ₂ SB01
25	336	276	-6	60A ₂ SB314
26	—	328	8	60B ₂ SB02
27	460	352	4	60B ₁ SB06
28	484	—	-13	60B ₂ SB07
29	—	332	-7	60B ₂ SB06
30	356	—	9	59A SB01
31	—	—	2	59A SB04
32	—	—	11	59A SB02
33	(544)	—	-7	59A SB06
34	—	444	1	59A SB03
35	336	312	-29	59A SB07
36	396	360	-4	60C ₂ SB14
37	—	—	-12	60C ₂ SB12
38	472	—	-13	60C ₂ SB15
39	768	360	-15	60C ₂ SB08
40	396	—	-5	60C ₂ SB09
41	—	(452)	-16	60C ₂ SB06
42	—	—	-20	60C ₂ SB06
43	—	—	-19	60C ₂ SB04
44	328	320	-10	60C ₂ (IVE6i)
45	—	420	-8	60C ₂ SB03
46	476	408	-9	60C ₂ SB02
47	348	—	-22	60C ₂ SB01
48	488	—	-17	60C ₃ SB01
49	536	412	-19	60C ₃ SB03

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧 番 号
50	516	480	-22	60C ₃ SB05
51	584	—	-18	60C ₃ SB02
52	468	460	-20	60C ₃ SB06

SK 土坑

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧 番 号
01	258	198	-28	60A ₁ SK209
02	(252)	136	22	60A ₁ SK207
03	328	236	-4	60A ₁ SK451
04	—	—	12	60A ₁ SK520
05	162	108	-1	60A ₁ SK426
06	214	—	6	60A ₁ SK374
07	252	186	-28	60A ₁ SK314
08	148	—	10	60B ₁ SK107
09	108	—	9	60B ₁ SK108
10	(1164)	—	-6	60B ₂ SX01
11	210	92	20	60B ₁ SK04
12	224	—	2	60B ₁ SK125
13	508	256	4	60B ₁ SK72
14	120	106	-23	60B ₁ SK130
15	—	116	-16	60B ₁ SK108
16	130	110	-74	60C ₁ SK29
17	128	74	-3	60C ₁ SK24
18	(150)	100	-14	60C ₁ SK42
19	170	128	-81	60C ₁ SK41
20	176	164	-89	60C ₁ SK16
21	—	235	2	59F SK02
22	—	130	2	59F SD01
23	—	—	0	59F SK03
24	284	198	-10	60A ₂ SK350
25	162	118	-36	60A ₂ SK383
26	298	240	-40	60A ₂ SK351
27	—	136	-20	60A ₂ SK354
28	154	134	-22	60A ₂ SK363
29	152	140	-8	60A ₂ SK364
30	122	96	-19	60A ₂ SK368
31	180	110	-13	60A ₂ SK374
32	316	(220)	-29	60A ₂ SK376
33	290	—	-24	60A ₂ SK378
34	162	106	9	60B ₂ SK302
35	198	82	0	60B ₂ SK363
36	130	100	-4	60B ₂ SK305
37	224	106	-12	60B ₂ SK317
38	178	130	-14	60B ₂ SK307
39	160	100	-34	59A SK28
40	—	115	-22	59A SK15-4
41	—	100	-26	59A SK15-3
42	145	—	-20	59A SK15-2
43	145	140	-29.5	59A SK15-1
44	—	195	34	59A SK15
45	(160)	110	-29.5	59A SK32
46	—	—	-37	60C ₂ SK285

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
47	164	138	-51	60C ₂ SK290・352
48	118	94	-19	60C ₂ SK317
49	180	152	-42	60C ₂ SK330
50	196	106	-22	60C ₂ SK322
51	120	88	-12	60C ₂ SK353
52	194	112	0	60C ₂ SK368
53	—	—	-24	60D SK11

SD 溝

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	190~300		-59~-41	60A ₁ SD11・60A ₂ SD303 60B ₂ SD301・59A SD03
02	110~140		-9~-3	60A ₂ SD301
03	100~140		-15~-5	60C ₂ ・C ₃ SD18
04	75~170		-14~-5	60C ₂ ・C ₃ SD19

SE 井戸

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	406	—	-175	60C ₃ SE01
02	340	—	-171	60C ₂ SE02
03	280	195	-150.5	59A SE02

上 面

SB 掘立柱建物

遺構番号	規 模 (cm)		方 向
01	5間 630	(2間 250)	N-59°-E
02	2間 450	2間 350	N-2°-E
03	(5間? 840)	(3間 501)	N-59°-E
04	3間 400	2間 300	N-34°-E
05	3間 720	1間? 610	N-25°-E
06	2間 520	1間 350	N-81°-E
07	3間? 610	3間 430	N-35°-E
08	3間 660	1間 450	N-86°-E
09	3間? 770	2間? 510	N-88°-E
10	3間? 510	2間 490	N-63°-E
11	2間 310	2間 300	N-88°-E
12	3間 600	(1間 380)	N-55°-E
13	2間 330	1間 280	N-36°-E
14	(3間? 350)	(2間? 350)	N-24°-E
15	2間? 600	1間 220	N-55°-E
16	3間? 600	2間 380	N-53°-E
17	4間 650	2間 480	N-23°-E
18	3間 640	2間 420 500	N-21°-E
19	(2間 350)	1間? 400	N-48°-E
20	(1間 230)	2間 430	N-10°-E
21	4間 760	2間 350	N-11°-E
22	3間 520	1間 400	N-10°-E
23	3間 520	3間 450	N-6°-E
24	3間 500	2間? 420	N-15°-E
25	2間? 530	2間 500	N-16°-E
26	1間 215	1間 190	N-49°-E
27	2間 360	2間 300	N-26°-E
28	3間 420	(2間 300)	N-2°-E
29	(2間? 440)	1間 400	N-43°-E
30	3間 725	1間 275	N-90°-E
31	1間 280	1間 235	N-90°-E
32	2間? 440	2間 375	N-90°-E
33	5間 1200	2間? 520	N-3°-E
34	2間 430	2間 360	N-42°-E
35	4間 800	2間 440	N-67°-E
36	3間 660	2間 440	N-31°-E
37 a	4間 770	2間 440	N-58°-E
37 b	2間 370	1間 200	N-55°-E

遺構番号	規 模 (cm)		方 向
38	3間 550	3間? 420	N-60°-E
39	(3間 680)	3間 480	N-39°-E
40	(2間 360)	3間 450	N-37°-E
41	3間 335	2間 325	N-37°-E
42	3間 500	2間 360	N-23°-E
43	3間 640	2間 500	N-13°-E
44	3間 500	(2間 300)	N-25°-E
45	5間? 760	4間? 720	N-34°-E
46	3間 500	2間 480	N-34°-E
47	3間 620	1間 370	N-24°-E
48	3間 550	1間 300	N-17°-E

SA 櫓

遺構番号	規 模 (cm)		方 向
01	5間 730		N-25°-E
02	3間 530		N-49°-E
03	4間 650		N-46°-E
04	3間 550		N-33°-E
05	(4間 435)		N-68°-E
06	(3間 300)		N-64°-E
07	5間 940		N-33°-E
08	(3間 460)		N-12°-E
09	4間? 940		N-10°-E
10	3間? 765		N-17°-E
11	4間? 1360		N-4°-E
12	5間 610		N-90°-E
13	7間? 830		N-29°-E
14	2間 340		N-88°-E
15	2間 360		N-4°-E
16	2間 400		N-88°-E
17	3間? 730		N-5°-E
18	3間 680		N-47°-E
19	? 540		N-60°-E
20	1800		N-73°-E
21	1370		N-80°-E
22	1200		N-79°-E
23	(10間? 740)		N-34°-E
24	(10間? 720)		N-35°-E

遺構番号	規模 (cm)	方向
25	11間 820	N-35°-E
26	(6間 410)	N-44°-E
27	2間 125	N-7°-E
28	(4間 285)	N-4°-E
29	(4間? 275)	N-1°-E
30	(3間 250)	N-45°-E
31	? 1120	?
32	? 980	N-2°-E
33	13間? 1030	N-2°-E
34	12間 960	N-86°-E
35	9間 640	N-44°-E
36	8間 570	N-38°-E
37	4間 280	N-70°-E
38	7間 480	N-46°-E
39	(5間 350)	N-30°-E
40	(6間? 400)	N-1°-E
41	(? 300+180+180 660)	N-89°-E
43 a	2間 360	N-21°-E
43 b	2間 480	N-21°-E
42	4間 660	N-1°-E

SK 土坑

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
01	224	82	39	60A ₁ SK51
02	268	214	15	60A ₁ SK141
03	89	—	14	60A ₁ SK305
04	184	156	46	60A ₁ SK58
05	166	132	41	60A ₁ SK59
06	—	172	29	60A ₁ SK96
07	186	98	16	60A ₁ SK109
08	196	126	38	60A ₁ SK110
09	(236)	174	-6	60A ₁ SK315
10	—	98	10	60A ₁ SK323
11	128	110	35	60A ₁ SK158
12	—	170	5	60B ₁ SK71
13	175	140	17	60B ₁ SK14
14	180	160	6	60B ₁ SK01
15	264	120	-2	60B ₁ SK68
16	216	160	6	60B ₁ SK45
17	265	80	17	60B ₁ SK39
18	—	120	16	60B ₁ SK28
19	119	90	8	60A ₂ SK23
20	380	105	5	60A ₂ SK13
21	510	380	29	60A ₂ SK78
22	400	236	12	60A ₂ SK39
23	296	194	27	60A ₂ SK79
24	166	106	16	60A ₂ SK88
25	326	180	28	60A ₂ SK76
26	298	170	28	60A ₂ SK72
27	120	80	5	60A ₂ SK97
28	120	90	-15	60A ₂ SK217
29	100	82	21	60A ₂ SK230
30	—	140	21	60A ₂ SK231
31	—	100	20	60A ₂ SK249
32	—	160	17	60B ₂ SK181
33	244	88	13	60B ₂ SK31 *131
34	186	130	-32/-13	60B ₂ SK69

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
35	—	118	-19	60B ₂ SD01
36	212	140	-20	60B ₂ SK118
37	85	64	9	60B ₂ SK117
38	(480)	(300)	33	59A SK03
39	210	130	26	59A SK12
40	145	140	20.5	59A SK16
41	—	215	25	59A SK17
42	—	152	31	59A SK13
43	—	195	19/23	59A SK19
44	245	—	-15	59A SK27
45	186	168	7	59A SK22
46	—	—	10	59A SK21
47	170	135	11	59A SK23
48	168	130	8	59A SK20
49	325	125	-42.5	59A SK35
50	(174)	100	-27	59A SK36
51	(160)	70	-34	60C ₂ SK241
52	107	52	-25	60C ₂ SK49
53	216	160	-82	60C ₂ SK38
54	140	92	-13	60C ₂ SK45・46
55	180	—	8	60C ₂ SK13
56	173	68	6	60C ₂ SK76
57	213	71	-34	60C ₂ SK89・87
58	135	94	-25	60C ₂ SK93
59	—	140	-7	60C ₂ SK146
60	—	—	-9	60D SK03
61	200	—	-23	60D SK01
62	(142)	—	-30	60D SK09
63	130	111	-39	59G SK01
64	130	86	-28	59G SK02
65	—	—	-33	59G SK05
66	116	110	-53	59G SK10
67	156	108	-32	59G SK14
68	—	168	-31	59G SK15
69	(220)	—	-43	58T P.3 SK01
70	—	100	-15	60E SK33
71	100	70	-23	60E SK40
72	144	84	-18	60E SK46
73	152	84	-21	60E SK48
74	1000	240	-48	60E SD04
75	212	75	-51	60E SK78
76	244	194	-32	60F SK95
77	145	120	-58	60F SK24
78	680	170	-10	60F SD01
79	130	100	-19	60F SK05
80	164	125	-12	60F SK33
81	110	92	-27	60F SK02
82	170	122	-7	60F SK09
83	108	100	-71	60F SK19
84	110	92	-37	60F SK13
85	162	116	-31	60F SK55
86	180	124	-16	60F SK44
87	388	98	-22	60F SK39
88	—	95	-15	60F SK73
89	212	—	-61	60F SK69
90	362	100	-51	60F SD11
91	132	97	-22	60F SK83
92	136	94	-25	60F SK88
93	108	98	-17	60F SK85

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号	新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
94	445	240	-101/-59	59B SK62 58T.P4 SK04	152	144	118	-37	60J SK19
95	121	—	-16	59B SK42	153	178	96	-53	60J SK05
96	310	(100)	-20	59B SK38	154	(230)	(122)	-44	60J SK02
97	(132)	96	-22	59B SK37	155	192	162	-42	60J SK28
98	154	90	-12	59B SK22	156	118	80	-49/-53	60J SK32
99	114	114	-29	60G SK05	157	243	140	-80	60J SK43
100	198	173	-78	60G SK13	158	—	—	-89	59D SK05
101	—	(189)	-46	58T.P5 SK05	159	365	—	-75	59D SK01
102	120	82	-54	58T.P5 SK01	160	(470)	—	-67	59D SK02
103	141	87	-52	58T.P5 SK02	161	180	125	-60	59D SK16
104	—	—	-61	60G SK32	162	100	98	-31	59D SK15
105	138	100	-32	60G SK54	163	205	190	-72.5	59D SK04
106	155	95	-26	60G SK58	164	300	175	-70	59D SK03
107	325	235	-46	60G SK74	165	—	110	-33.5	59D SK08
108	150	146	-40	60H SK313	166	150	73	-54	58T.P10 SK01
109	164	142	-37	60H SK301	167	232	76	-52	60K SK77
110	220	100	-16	60H SK05	168	—	226	-66	60K SD13
111	262	254	-49	60H SK03	169	182	164	-106	60K SK78
112	300	—	-55	60H SK04	170	(420)	230	35	60K SK60
113	204	170	-64	60H SK06	171	(445)	240	-65	60K SK46
114	230	(196)	-64	60H SK07	172	182	148	-16	60K SK71
115	114	112	-35	60H SK308	173	108	67	-33	60L SK413
116	216	206	-38	60H SK306	174	140	—	-16	60L SK06
117	164	—	-32	60H SK320	175	224	79	-40	60L
118	(246)	152	-35	60H SK305	176	530	210	-40	60L SK404
119	170	120	-51	60H SK304	177	334	196	-79	60L SK11
120	—	164	-39	60H SK307	178	130	70	-61	60L SK402
121	108	100	-81.7	59C SK02	179	262	230	-89	60L SK12
122	80	70	-17	59C SK05	180	—	278	-53	60L SK13
123	82	75	-54	59C SK04	181	—	150	-39	59E SK01
124	140	105	-46	59C SK11	182	—	—	-45	59E
125	305	—	-48.5	59C SK20					
126	175	120	-52.5	59C SK18					
127	110	75	-24.7	59C SK01					
128	175	130	-35	59C SK13					
129	160	100	-65.5	59C SK21					
130	—	95	-25	59C SK16					
131	(210)	189	-24	59C SK14					
132	—	120	-68	59C SK22					
133	254	250	-83	60I SK01					
134	138	114	-53	60I SK02					
135	430	414	-71	60I SK03					
136	238	184	-104	60I SK07					
137	166	150	-88	60I SK39					
138	284	—	-65	60I SK27					
139	—	—	-66	60I SK04					
140	222	202	-114	60I SK28					
141	164	92	-76	60I SK34					
142	540	370	-40	60I SK14					
143	152	128	-57	60I SK35					
144	—	155	-80	60J SK48					
145	(120)	94	-46	60J SK13					
146	124	82	-25	60J SK59					
147	128	82	-57	60J SK49					
148	—	152	-41	60J SK15					
149	140	66	-56	60J SK26					
150	180	162	-108	60J SK07					
151	—	160	-27	60J SK17					

SE 井戸									
新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号					
01	458	424	-157.2	60A ₁	SEO2 (SK95)				
02	320	250	18 -11	60A ₁	SK167 (SE01)				
03	288	250	-41	60B ₁	SE01				
04	—	—	-152	60B ₁	SE02				
05	—	(233)	-145	59F	SK04				
06	126	112	-67	60A ₂	SE07				
07	134	118	-48	60A ₂	SE01				
08	240	214	-93	60A ₂	SE02				
09	240	228	-180?	60A ₂	SE03				
10	330	310	-120	60B ₂	SE01				
11	—	290	-155.5	59A	SE03				
12	95	90	-68	59A	SE04				
13	210	202	-161	60C ₂	SE01				
14	372	350	-124	60D	SE01				
15	210	—	-130.5	60E	SE02				
16	235	220	-127	60E	SE01				
17	—	—	-128	60F	SE05				
18	172	150	-141	60F	SE01				
19	256	234	-92	60F	SE02				
20	320	(302)	-124	60F	SE03				
21	—	—	-135	59B	SK57				
22	258	200	-136.5	59B	SE01				

新番号	長径 (cm)	短径 (cm)	底面レベル (cm)	旧番号
23	185	158	-128	59B SE02
24	190	172	-90	60G SK80 60H SE304
25	154	142	-107	60H SE303
26	95	91	-61	60H SE01
27	232	202	-119	60H SE302
28	222	—	(-120)	58T.P6 SE01 SK04
29	430	—	-139	60H SE301
30	202	162	-144	60I SE01
31	255	215	-109	59D SE02
32	330	(310)	-181	59D SE01
33	140	115	-137	59E SE01

SD 溝

新番号	幅(cm)	底面レベル (cm)	主方向	旧番号
01	58	47		60A ₁ SD02 SK04
02	52	7		" SD12
03	50	12		" SD13
04	100	9		" SD14
05	82	6		" SK429
06	24	47		" SD10
07	85	33		" SD12
08	55	38		" SD06
09	80	37		" SD07
10	60~140	20~44	N-52°-E	60A ₁ SD05・8・11 60B ₁ SD01
11	315	43	N-0°-E	60A ₁ SK173 60B ₁ SD10
12	42	45		" SD03 ?
13	85	34~44		60B ₁ SD02
14	80	-49		59F SD02
15	170	-56~0		60A ₂ SD15 60C ₂ SD13 60C ₃ SD06 60D SD04
16	165	23		60A ₂ SD02
17	48	29		" SD03
18	55	9~26	N-6°-E	60A ₂ SD04 60C ₂ SD16 60C ₃ SD12
19	35	25		60A ₂ SD05
20	25	23		" SD07
21	43	30		" SD08
22	120	18	N-9°-E	60A ₂ SD09
23	90	20		" SD13 SD15
24	50	19		" SD11
25	85	22		" SD10
26	60	17	N-35°-E	60A ₂ SD12 59A SD01 60C ₂ SD06・SD09
27	47	22		60C ₂ SD14
28	40	16		" SD11
29	30	15		" SD17
30	40	19		" SD04
31	51	19		60C ₂ SD03 60C ₃ SD09
32	80	-19~17	N-1°-E	60C ₂ SD01 60C ₃ SD08 60D SD10
33	50	1~11	N-88°-E	60C ₃ SD01

新番号	幅(cm)	底面レベル (cm)	主方向	旧番号
34	60	2~19		" SD04
35	60	-25~-6		" SD05
36	75	-10		" SD03
37	80	1~11		" SD02
38	60	-29~-6		" SD10
39	50	-4~12		60C ₃ SD11 60C ₂ SD15 60D SD05
40	35	-22		" SD02
41	100	-47~-36	N-15°-E	" SD06
42	50	-23	N-14°-E	" SD01
43	250	-52~-45	N-15°-E	60D SD01
44	—	-24		59G SD01
45	150	-33		SD02
46	—	-24		SD03
47	—	-41~-23	N-20°-E	60E SD06 SD02
48	34~74	-18~-9		" SD05
49	100~180	-57~-22	N-24°-E	60E SD04,03 60G SD02
50	250	-71~-45	N-0°-E	60E SD01 60H SD01
51	55	-11~-5		60E SD09
52	40	-23		" SD07
53	35	-35~-27		60F SD06
54	55	-23		" SD04
55	80~160	-18~-12	N-88°-E	60F SD10 59B SD01 59C SD01
56	40~62	-16		59B SD02
57	68~150	-25~-8		60G SD07
58	92~140	-40~-19	N-21°-E	" SD06
59	250	-47~-37	N-8°-E	" SD01
60	60~130	-67~-29		" SD05
61	45	-36~-23		60H SD310
62	40	-37~-29		" SD309
63	220	-109~-91	N-0°-E	60H SD10 60J SD16
64	90	-18~-9		60H SD11
65	70	-18~-11		" SD18
66	80	-10~-5		" SK04
67	50~90	-22~-9		" SD03
68	10~80	-25~-6		60H SD05・07・08・09 60J SD20
69	55	-14		60H SD06
70	70	-18		" SD301
71	40~110	-45~-13		60H SD302・305・306 60J SD20
72	100	-46~-39		" SD304 60J SK21 SK47,SD19
73	35	-21~-11		59C SD02
74	80	-29		SD07
75	85~128	-40~-21		SD03
76	35	-24		SD04
77	46	-23		SD05
78	—	-78		60I SD10
79	26~50	-547~-29	N-18°-E	60J SD14,13,02 59D SD02
80	50	-35		60J SD15
81	50	-24~-13		" SD11
82	60	-39~-26	N-32°-E	60I SD05 60J SD03 58T.P7 SD02
83	70	-49~-32		60I SD07

新番号	幅(cm)	底面レベル (cm)	主方向	旧番号	号
84	60~130	-36~-28		〃	SD04
85	40	-61		60I	SD17
86	—	-68		〃	SD31
87	40	-80~-64		〃	SD15
88	45	-34~-23		〃	SD16
89	30	-37~-28		60J	SD09
90	40	-36~-29			SD08
91	30	-29~-23			SD01
92	45~90	-41~-29			SD06
93	40~82	-46.5	N-29°-E	58TP8	SD01
94	105	-39	N-36°-E	58TP10	SD01
				59E	SD04
				60L	SD16
				59D	SD01
95	60~150	-49~-44	N-38°-E	60I	SD32
				60K	SD20
96	100	-37~-21	N-27°-E	60K	SD05
97	140	-32~-24	N-44°-E	〃	SD01
98	120~220	-91~-70	N-37°-E	〃	SD02
					SD12
99	120	-30~-20		〃	SD08
100	210~400	-114~-68		〃	SD06
101	55~75	-44~-24	N-90°-E	60K	SD04
				60L	SD04
102	40	-33~-17		60L	SD07
103	—	-33~-21	N-88°-E	60K	SD09
				60L	SD09
104	55~145	-39~-16	N-90°-E	60K	SD07
				60L	SD05
105	120~150	-84~-67	N-90°-E	60K	SD10
				60L	SD03
106	30~60	-41~-21	N-86°-E	60L	SD01
				59E	SD01
107	80	-48~-36		60K	SD23
108	50~80	-47~-38		〃	SK64
109	50~80	-40~-33		60L	SD14
					SK07
110	25~70	-28~-18		〃	SD15
111	90~140	-24~-16		〃	SD02
112	50	-41~-31		〃	SD08
113	45~80	-44~-37		〃	
114	60~155	-63~-54		59E	SD02
115	65~100	-42~-29		〃	SD05
116	(730)	—	N-31°-E	59E	SD06
				60L	SD13
117	200	-33~-23		60I	SD01

遺 物

土器

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
1	60A ₁ -E-1	太頸壺	20.2	—	—	—	下SB01
2	60A ₁ -E-2	甕	22.0	22.4	—	—	下SB01
3	60A ₁ -E-3	高杯	15.7	—	—	—	下SB01
4	60A ₁ -E-4	甕	21.3	—	—	—	下SB01
5	60A ₁ -E-5	甕	23.0	—	—	—	下SB01
6	60A ₁ -E-6	細頸壺	10.0	—	—	—	下SB02
7	60A ₁ -E-7	細頸壺	10.5	—	—	—	下SB02
8	60A ₁ -E-8	細頸壺	14.2	—	—	—	下SB02
9	60A ₁ -E-9	甕	—	—	5.7	—	下SB02
10	60A ₁ -E-10	甕	—	—	6.7	—	下SB02
11	60A ₁ -E-11	甕	—	—	7.5	—	下SB02
12	60A ₁ -E-12	太頸壺	25.8	—	—	—	下SB03
13	60A ₁ -E-13	甕	18.8	21.6	5.6	25.1	下SB03
14	60A ₁ -E-14	甕	—	—	7.6	—	下SB03
15	60A ₁ -E-15	甕	—	—	7.6	—	下SB03
16	60A ₁ -E-16	甕	—	—	5.7	—	下SB03
17	60A ₁ -E-17	鉢	37.2	—	19.1	21.1	下SB03
18	60A ₁ -E-18	太頸壺	—	—	48.4	—	下SB05
19	60A ₁ -E-19	太頸壺	—	—	(40.0)	—	下SB05
20	60A ₁ -E-20	太頸壺	19.7	—	—	—	下SB05
21	60A ₁ -E-18	細頸壺	11.2	—	—	—	下SB05
22	60A ₁ -E-22	高杯	15.8	—	—	—	下SB05
23	60A ₁ -E-23	甕	—	—	7.0	—	下SB05
24	60A ₁ -E-24	甕	—	—	7.0	—	下SB05
25	60A ₁ -E-25	甕	—	—	8.4	—	下SB05
26	60A ₁ -E-26	甕	—	—	7.6	—	下SB05
27	60A ₁ -E-27	甕	—	—	8.5	—	下SB05
28	60A ₁ -E-28	甕	—	—	6.8	—	下SB05
29	60A ₁ -E-29	甕	—	—	9.0	—	下SB05
30	60A ₁ -E-30	高杯	25.7	—	—	—	下SB05
31	60A ₁ -E-31	高杯	27.6	—	—	—	下SB05
32	60A ₁ -E-32	太頸壺	19.6	—	—	—	下SB05
33	60A ₁ -E-33	甕	(30.8)	—	—	—	下SB05
34	60A ₁ -E-34	鉢	13.0	—	—	—	下SB06
35	60A ₁ -E-35	太頸壺	16.0	—	—	—	下SB06
36	60A ₁ -E-36	甕	—	—	7.4	—	下SB06
37	60A ₁ -E-37	甕	—	—	10.7	—	下SB06
38	60A ₁ -E-38	高杯	—	—	12.5	—	下SB06
39	60A ₁ -E-39	甕	—	—	8.5	—	下SB06
40	60A ₁ -E-40	細頸壺	25.3	—	—	—	下SB06
41	60A ₁ -E-41	甕	25.2	28.8	—	—	下SB06
42	60A ₁ -E-42	甕	—	—	6.6	—	下SB06
43	60A ₁ -E-43	甕	—	—	8.4	—	下SB06
44	60A ₁ -E-44	甕	—	—	7.0	—	下SB06
45	60A ₁ -E-45	甕	—	—	6.1	—	下SB06
46	60A ₁ -E-46	甕	—	—	—	—	下SB06
47	60A ₁ -E-47	甕	34.2	36.4	—	—	下SB06
48	60A ₁ -E-48	高杯	17.6	—	—	—	下SB06
49	60A ₁ -E-49	鉢	—	—	10.0	—	下SB06
50	60A ₁ -E-50	甕	(17.3)	—	—	—	下SB06
51	60A ₁ -E-51	細頸壺	7.2	—	—	—	下SB08
52	60A ₁ -E-52	甕	29.1	—	6.7	—	下SB08
53	60A ₁ -E-53	甕	19.5	—	—	—	下SB08
54	60A ₁ -E-54	甕	6.6	—	—	—	下SB08
55	60B ₁ -E-1	甕	21.0	—	—	—	60B ₁ 検出
56	60B ₁ -E-2	細頸壺	9.6	—	—	—	下SB10
57	60B ₁ -E-3	細頸壺	17.0	—	—	—	下SB10
58	60B ₁ -E-4	高杯	—	—	14.6	—	下SB10
59	60B ₁ -E-5	ミニチュア	4.0	8.0	4.5	7.2	下SB10
60	60B ₁ -E-6	太頸壺	—	36.4	—	—	下SB10
61	60B ₁ -E-7	甕	—	—	72.	—	下SB10
62	60B ₁ -E-8	甕	15.6	—	—	—	下SB10
63	60B ₁ -E-9	太頸壺	—	—	8.4	—	下SB11
64	60B ₁ -E-10	壺	—	30.4	7.0	—	下SB11
65	60B ₁ -E-11	甕	15.2	—	—	—	下SB11
66	60B ₁ -E-12	ミニチュア	3.1	5.0	2.9	7.2	下SB11
67	60B ₁ -E-13	細頸壺	25.2	—	—	—	下SB12
68	60B ₁ -E-14	細頸壺	10.1	—	—	—	下SB12
69	60B ₁ -E-15	太頸壺	17.4	—	—	—	下SB12
70	60B ₁ -E-16	ミニチュア	5.0	—	3.2	5.8	下SB12
71	60B ₁ -E-17	高杯	31.2	—	—	—	下SB12
72	60B ₁ -E-18	高杯	20.8	—	—	—	下SB12
73	60B ₁ -E-19	壺	—	—	5.2	—	下SB12
74	60B ₁ -E-20	甕	22.0	—	—	—	下SB12
75	60B ₁ -E-21	甕	20.6	—	—	—	下SB12
76	60B ₁ -E-22	甕	20.7	—	—	—	下SB12
77	60B ₁ -E-23	甕	18.6	—	—	—	下SB12
78	60B ₁ -E-24	甕	—	—	6.8	—	下SB12
79	60B ₁ -E-25	甕	17.6	—	—	—	下SB14
80	60B ₁ -E-26	細頸壺	9.8	—	—	—	下SB14
81	60B ₁ -E-27	壺	—	—	9.5	—	下SB14
82	60B ₁ -E-28	甕	—	—	7.6	—	下SB14
83	60B ₁ -E-29	甕	15.8	17.6	5.2	21.6	下SB14
84	60B ₁ -E-30	太頸壺	12.4	—	—	—	下SB14
85	60A ₂ -E-1	短頸壺	12.2	—	—	—	下SB20
86	60A ₂ -E-2	甕	—	—	5.9	—	下SB20
87	60A ₂ -E-3	甕	28.1	—	—	—	下SB20
88	60A ₂ -E-4	甕	21.6	—	—	—	下SB20
89	60A ₂ -E-5	甕	—	—	6.0	—	下SB20
90	60A ₂ -E-6	特殊壺	—	8.8	—	—	下SB21
91	60A ₂ -E-7	甕	22.0	—	—	—	下SB21
92	60A ₂ -E-8	甕	24.6	—	—	—	下SB21
93	60A ₂ -E-9	甕	—	—	7.4	—	下SB21
94	60A ₂ -E-10	甕	—	—	6.7	—	下SB21
95	60A ₂ -E-11	甕	—	—	8.7	—	下SB21
96	60A ₂ -E-12	甕	—	—	6.8	—	下SB21
97	60A ₂ -E-13	甕	22.6	—	—	—	下SB21
98	60A ₂ -E-14	甕	—	—	8.3	—	下SB21
99	60A ₂ -E-15	甕	—	—	10.1	—	下SB21
100	60A ₂ -E-16	鉢	14.0	—	6.5	6.7	下SB21
101	60A ₂ -E-17	甕	19.4	—	—	—	下SB21
102	60A ₂ -E-18	甕	25.0	—	—	—	下SB21
103	60A ₂ -E-19	甕	24.2	—	—	—	下SB21
104	60A ₂ -E-20	甕	—	—	9.4	—	下SB21
105	60A ₂ -E-21	細頸壺	9.4	—	—	—	下SB21
106	60A ₂ -E-22	太頸壺	30.4	—	6.4	—	下SB21
107	60A ₂ -E-23	甕	—	—	—	—	下SB21
108	60A ₂ -E-24	甕	24.0	—	—	—	下SB21
109	60A ₂ -E-25	甕	20.2	—	—	—	下SB21
110	60A ₂ -E-26	甕	32.4	—	—	—	下SB21

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点	番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
111	60A ₂ -E-27	甕	—	—	5.3	—	下SB21	170	60B ₁ -E-37	細頸壺	10.2	—	—	—	下SK13
112	60A ₂ -E-28	甕	17.0	—	—	—	下SB21	171	60B ₁ -E-38	甕	22.2	—	—	—	下SK13
113	60A ₂ -E-29	短頸壺	7.9	17.6	5.2	18.4	下SB22	172	60B ₁ -E-39	鉢	22.8	—	—	—	下SK13
114	60A ₂ -E-30	把手	—	—	—	—	下SB22	173	60B ₁ -E-40	鉢	26.2	30.6	—	—	下SK13
115	60A ₂ -E-31	甕	29.4	—	—	—	下SB22	174	60B ₁ -E-41	鉢	44.5	—	—	—	下SK13
116	60A ₂ -E-32	甕	—	—	6.9	—	下SB22	175	60B ₁ -E-42	甕	18.8	—	—	—	下SK13
117	60A ₂ -E-33	甕	—	—	6.2	—	下SB22	176	60A ₂ -E-39	甕	17.0	—	—	—	下SK26
118	60A ₂ -E-34	甕	17.0	—	—	—	下SB22	177	60A ₂ -E-40	鉢	29.4	—	—	—	下SK26
119	60A ₂ -E-35	甕	26.6	—	—	—	下SB22	178	60A ₂ -E-41	甕	—	—	9.0	—	下SK26
120	60A ₂ -E-36	短頸壺	11.0	17.4	—	—	下SB23	179	60A ₂ -E-42	甕	—	—	6.2	—	下SK26
121	60A ₂ -E-37	甕	16.2	—	—	—	下SB23	180	60C ₂ -E-2	短頸壺	9.3	20.0	—	(19.3)	下SE02
122	60A ₂ -E-38	甕	16.4	—	—	—	下SB24	181	60C ₂ -E-3	高杯	32.0	—	—	—	下SE02
123	60B ₂ -E-1	鉢	31.0	—	—	—	下SB26	182	60C ₂ -E-4	甕	19.6	—	—	—	下SE02
124	60B ₂ -E-2	甕	28.6	—	—	—	下SB26	183	60C ₂ -E-5	甕	18.0	—	—	—	下SE02
125	60B ₂ -E-3	細頸壺	—	24.4	—	—	下SB27	184	59A-E-24	細頸壺	10.6	—	—	—	下SE03
126	60B ₂ -E-4	太頸壺	17.0	—	4.8	—	下SB27	185	59A-E-36	円窓付壺	11.2	24.6	—	—	下SE03
127	60B ₂ -E-5	甕	27.9	—	—	—	下SB27	186	59A-E-17	甕	18.5	—	—	—	下SE03
128	60B ₂ -E-6	鉢	23.0	—	—	—	下SB27	187	59A-E-26	甕	20.8	—	—	—	下SE03
129	60B ₂ -E-7	鉢	27.4	—	—	—	下SB27	188	59A-E-262	甕	17.8	—	—	—	下SE03
130	60B ₂ -E-8	甕	13.3	—	—	—	下SB27	189	59A-E-25	甕	18.4	—	—	—	下SE03
131	60B ₂ -E-9	甕	18.1	—	—	—	下SB27	190	59A-E-28	高杯	27.6	—	—	—	下SE03
132	60B ₂ -E-10	甕	21.0	—	—	—	下SB27	191	59A-E-30	高杯	—	—	14.5	—	下SE03
133	60B ₂ -E-11	甕	22.7	—	—	—	下SB27	192	59A-E-29	高杯	—	—	15.0	—	下SE03
134	60B ₂ -E-12	甕	22.6	—	—	—	下SB27	193	59A-E-23	高杯	—	—	12.8	—	下SE03
135	60B ₂ -E-13	甕	16.7	—	—	—	下SB27	194	59A-E-15	把手	—	—	—	—	下SE03
136	60B ₂ -E-14	甕	19.2	—	—	—	下SB27	195	59A-E-49	鉢	29.0	31.2	6.2	21.2	下SE03
137	60B ₁ -E-31	土製品	—	4.4	—	—	下SK10	196	59A-E-48	太頸壺	18.4	—	—	—	下SE03
138	59A-E-125	細頸壺	6.8	20.6	—	—	下SB35	197	59A-E-34	細頸壺	8.6	—	—	—	下SE03
139	59A-E-119	細頸壺	10.4	—	—	—	下SB35	198	59A-E-108	細頸壺	—	14.4	3.6	—	下SE03
140	59A-E-124	細頸壺	—	23.2	6.8	—	下SB35	199	59A-E-52	太頸壺	—	38.2	—	—	下SE03
141	59A-E-130	甕	20.7	23.2	6.6	(28.4)	下SB35	200	59A-E-51	細頸壺	—	25.6	5.2	—	下SE03
142	59A-E-117	甕	21.0	—	—	—	下SB35	201	59A-E-20	細頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
143	59A-E-186	甕	15.9	—	—	—	下SB35	202	59A-E-50	円窓付壺	11.5	18.8	6.3	24.4	下SE03
144	59A-E-128	甕	—	—	9.0	—	下SB35	203	59A-E-55	甕	22.2	—	7.4	25.6	下SE03
145	59A-E-120	甕	—	—	6.2	—	下SB35	204	59A-E-35	甕	14.5	—	6.5	22.1	下SE03
146	59A-E-131	甕	26.2	—	6.8	(32.7)	下SB35	205	59A-E-37	甕	—	—	6.7	—	下SE03
147	59A-E-129	甕	34.0	—	—	—	下SB35	206	59A-E-18	甕	—	—	11.4	—	下SE03
148	59A-E-123	甕	17.0	—	—	—	下SB35	207	59A-E-39	甕	23.8	—	—	—	下SE03
149	59A-E-122	甕	16.6	—	—	—	下SB35	208	59A-E-54	甕	—	—	8.1	—	下SE03
150	59A-E-11	細頸壺	8.6	—	—	—	下SB35	209	59A-E-31	甕	23.0	—	—	—	下SE03
151	59A-E-127	短頸壺	12.5	20.8	6.0	(17.0)	下SB35	210	59A-E-27	甕	22.8	—	—	—	下SE03
152	59A-E-116	甕	19.9	—	—	—	下SB35	211	59A-E-38	甕	23.4	—	—	—	下SE03
153	59A-E-132	甕	31.4	—	10.8	—	下SB35	212	59A-E-43	細頸壺	8.8	20.0	6.2	20.6	下SE03
154	59A-E-115	甕	16.9	—	19.2	—	下SB35	213	59A-E-41	細頸壺	—	19.8	7.0	—	下SE03
155	59A-E-126	甕	22.0	—	—	—	下SB35	214	59A-E-19	短頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
156	60C ₂ -E-1	甕	22.0	24.4	27.5	—	下SK47	215	59A-E-33	細頸壺	10.0	—	—	—	下SE03
157	60B ₂ -E-15	甕	22.6	—	—	—	下SK35	216	59A-E-42	細頸壺	—	18.6	4.0	—	下SE03
158	60B ₁ -E-32	甕	24.6	—	8.3	(36.0)	下SK12	217	59A-E-32	甕	19.8	—	—	—	下SE03
159	60A ₁ -E-55	太頸壺	19.0	—	—	—	下SK03	218	59A-E-56	甕	24.0	—	—	—	下SE03
160	60A ₁ -E-56	太頸壺	11.0	—	—	—	下SK03	219	59A-E-53	甕	19.0	—	6.2	24.2	下SE03
161	60A ₁ -E-57	甕	—	—	7.0	—	下SK03	220	59A-E-14	鉢	10.4	—	5.0	5.8	下SE03
162	60A ₁ -E-58	甕	—	—	9.7	—	下SK03	221	59A-E-16	太頸壺	17.0	—	—	—	下SE03
163	60A ₁ -E-59	太頸壺	30.4	—	—	—	下SK03	222	59A-E-40	甕	17.6	—	4.2	20.2	下SE03
164	60A ₁ -E-60	甕	—	—	7.2	—	下SK03	223	60B ₂ -E-16	高杯	37.6	—	—	—	下SD01
165	60A ₁ -E-61	甕	—	—	6.2	—	下SK03	224	59A-E-65	高杯	23.7	—	—	—	下SD01
166	60B ₁ -E-33	細頸壺	5.5	17.2	4.0	21.6	下SK13	225	59A-E-62	甕	—	—	10.8	—	下SD01
167	60B ₁ -E-34	太頸壺	19.6	—	—	—	下SK13	226	59A-E-63	細頸壺	9.6	—	—	—	下SD01
168	60B ₁ -E-35	甕	—	—	7.6	—	下SK13	227	60A ₁ -E-62	壺	—	—	—	—	下SB01
169	60B ₁ -E-36	太頸壺	19.6	—	—	—	下SK13	228	60A ₁ -E-63	壺	—	—	—	—	下SB01

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点	番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
229	60A ₁ -E-64	壺	—	—	—	—	下SB01	288	60A ₁ -E-123	細頸壺	6.8	—	—	—	下SB07
230	60A ₁ -E-65	壺	—	—	—	—	下SB01	289	60A ₁ -E-124	甗	—	—	—	—	下SB08
231	60A ₁ -E-66	甗	—	—	—	—	下SB01	290	60A ₁ -E-125	細頸壺	12.0	—	—	—	下SB08
232	60A ₁ -E-28	太頸壺	—	—	—	—	下SB02	291	60A ₁ -E-126	太頸壺	—	—	—	—	下SB08
233	60A ₁ -E-68	細頸壺	8.0	—	14.5	—	下SB02	292	60A ₁ -E-127	鉢	—	—	—	—	下SB08
234	60A ₁ -E-69	鉢	—	—	—	—	下SB02	293	60A ₁ -E-128	甗	—	—	—	—	下SB08
235	60A ₁ -E-70	細頸壺	—	—	—	—	下SB02	294	60A ₁ -E-129	甗	—	—	—	—	下SB08
236	60A ₁ -E-71	壺	—	—	—	—	下SB02	295	60A ₁ -E-130	太頸壺	20.0	—	—	—	下SB08
237	60A ₁ -E-72	太頸壺	—	—	—	—	下SB02	296	60B ₁ -E-43	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
238	60A ₁ -E-73	壺	—	—	—	—	下SB02	297	60B ₁ -E-44	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
239	60A ₁ -E-74	甗	—	—	—	—	下SB03	298	60B ₁ -E-45	太頸壺	—	—	—	—	下SB11
240	60A ₁ -E-75	壺	—	—	—	—	下SB03	299	60B ₁ -E-46	細頸壺	—	—	—	—	下SB11
241	60A ₁ -E-76	甗	—	—	7.6	—	下SB03	300	60B ₁ -E-47	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
242	60A ₁ -E-77	甗	—	—	—	—	下SB03	301	60B ₁ -E-48	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
243	60A ₁ -E-78	甗	—	—	—	—	下SB05	302	60B ₁ -E-49	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
244	60A ₁ -E-79	甗	—	—	—	—	下SB05	303	60B ₁ -E-50	太頸壺	17.8	—	—	—	下SB12
245	60A ₁ -E-80	甗	—	—	—	—	下SB05	304	60B ₁ -E-51	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
246	60A ₁ -E-81	甗	—	—	—	—	下SB05	305	60B ₁ -E-52	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
247	60A ₁ -E-82	甗	—	—	—	—	下SB05	306	60B ₁ -E-53	太頸壺	—	—	—	—	下SB12
248	60A ₁ -E-83	甗	—	—	—	—	下SB05	307	60B ₁ -E-54	太頸壺	—	—	—	—	下SB13
249	60A ₁ -E-84	鉢	—	—	—	—	下SB05	308	60B ₁ -E-55	甗	27.0	—	—	—	下SB13
250	60A ₁ -E-85	太頸壺	—	—	—	—	下SB05	309	60B ₁ -E-56	太頸壺	—	—	—	—	下SB13
251	60A ₁ -E-86	甗	—	—	—	—	下SB05	310	60B ₁ -E-57	甗	—	—	—	—	下SB13
252	60A ₁ -E-87	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	311	60B ₁ -E-58	細頸壺	8.0	—	—	—	下SB14
253	60A ₁ -E-88	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	312	60C ₁ -E-1	壺	—	—	—	—	下SB15
254	60A ₁ -E-89	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	313	60C ₂ -E-1	壺	—	—	—	—	下SB50
255	60A ₁ -E-90	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	314	60A ₂ -E-43	太頸壺	—	—	—	—	下SB20
256	60A ₁ -E-91	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	315	60A ₂ -E-44	高杯	—	—	—	—	下SB20
257	60A ₁ -E-92	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	316	60A ₂ -E-45	甗	—	—	—	—	下SB20
258	60A ₁ -E-93	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	317	60A ₂ -E-46	甗	—	—	—	—	下SB20
259	60A ₁ -E-94	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	318	60A ₂ -E-47	壺	—	—	—	—	下SB20
260	60A ₁ -E-95	細頸壺	20.6	—	—	—	下SB06	319	60A ₂ -E-48	太頸壺	—	—	—	—	下SB21
261	60A ₁ -E-96	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	320	60A ₂ -E-49	壺	—	—	—	—	下SB21
262	60A ₁ -E-97	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	321	60A ₂ -E-50	壺	—	—	—	—	下SB21
263	60A ₁ -E-98	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	322	60A ₂ -E-51	壺	—	—	—	—	下SB21
264	60A ₁ -E-99	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	323	60A ₂ -E-52	壺	—	—	—	—	下SB22
265	60A ₁ -E-100	壺	—	—	—	—	下SB06	324	60A ₂ -E-53	壺	—	—	—	—	下SB22
266	60A ₁ -E-101	壺	—	—	—	—	下SB06	325	60B ₂ -E-17	細頸壺	5.8	—	—	—	下SB26
267	60A ₁ -E-102	壺	—	—	—	—	下SB06	326	60B ₂ -E-18	細頸壺	7.9	—	—	—	下SB26
268	60A ₁ -E-103	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	327	60A ₁ -E-131	太頸壺	—	—	—	—	下SK01
269	60A ₁ -E-104	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	328	60A ₂ -E-54	太頸壺	24.0	—	—	—	下SB24
270	60A ₁ -E-105	細頸壺	8.8	—	—	—	下SB06	329	60A ₂ -E-55	太頸壺	—	—	—	—	下SB24
271	60A ₁ -E-106	細頸壺	8.3	—	—	—	下SB06	330	60A ₁ -E-132	壺	—	—	—	—	下SK03
272	60A ₁ -E-107	細頸壺	8.3	—	—	—	下SB06	331	60A ₁ -E-133	壺	—	—	—	—	下SK03
273	60A ₁ -E-108	細頸壺	7.8	—	—	—	下SB06	332	60A ₁ -E-134	壺	—	—	—	—	下SK03
274	60A ₁ -E-109	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	333	60A ₁ -E-135	壺	—	—	—	—	下SK03
275	60A ₁ -E-110	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	334	60A ₁ -E-136	壺	—	—	—	—	下SK03
276	60A ₁ -E-111	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	335	60B ₁ -E-59	細頸壺	18.0	—	—	—	下SK13
277	60A ₁ -E-112	高杯	—	—	—	—	下SB06	336	60B ₁ -E-60	細頸壺	—	—	—	—	下SK13
278	60A ₁ -E-113	甗	—	—	6.4	—	下SB06	337	60A ₂ -E-56	高杯	—	—	—	—	下SK36
279	60A ₁ -E-114	甗	—	—	6.3	—	下SB06	338	60B ₂ -E-19	細頸壺	34.0	—	—	—	下SK26
280	60A ₁ -E-115	甗	—	—	6.1	—	下SB06	339	60A ₂ -E-57	短頸壺	—	—	—	—	60A ₂ 検出
281	60A ₁ -E-116	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	340	60A ₂ -E-58	壺	—	—	—	—	60A ₂ 検出
282	60A ₁ -E-117	壺	—	—	—	—	下SB06	341	60A ₂ -E-59	壺	—	—	—	—	60A ₂ 検出
283	60A ₁ -E-118	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	342	60A ₂ -E-60	壺	—	—	—	—	60A ₂ 検出
284	60A ₁ -E-119	太頸壺	—	—	—	—	下SB06	343	60A ₂ -E-61	蓋	10.7	—	—	—	上SE09
285	60A ₁ -E-120	細頸壺	—	—	—	—	下SB06	344	60A ₂ -E-62	蓋	11.5	—	—	(3.7)	上SE09
286	60A ₁ -E-121	壺	—	—	—	—	下SB07	345	60A ₂ -E-63	杯	10.6	12.4	4.0	4.7	上SE09
287	60A ₁ -E-122	太頸壺	—	—	—	—	下SB07	346	60A ₂ -E-64	杯	10.3	12.6	3.6	4.7	上SE09

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点	番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
347	60A ₂ -E-65	杯	10.4	12.6	5.2	3.9	上SE09	405	59D-E-13	杯	10.0	11.8	2.1	4.6	上SE32
348	60A ₂ -E-66	杯	10.4	12.6	3.6	4.7	上SE09	406	59D-E-9	甕	15.6	—	—	—	上SE32
349	60A ₂ -E-67	杯	9.6	11.8	3.8	3.8	上SE09	407	59D-E-16	甕	15.5	—	—	—	上SE32
350	60A ₂ -E-68	杯	11.6	14.0	5.0	4.2	上SE09	408	59D-E-18	甕	19.1	—	—	—	上SE32
351	60A ₂ -E-69	蓋	13.2	—	—	—	上SE09	409	59D-E-17	甕	15.5	—	—	—	上SE32
352	60A ₂ -E-70	杯	—	14.0	9.2	—	上SE09	410	59D-E-10	甕	—	—	—	—	上SE32
353	60A ₂ -E-71	高杯	10.8	—	12.6	—	上SE09	411	59C-E-18	蓋	12.2	—	—	(3.7)	上SK135
354	60A ₂ -E-72	平瓶	2.6	—	—	—	上SE09	412	59C-E-15	杯	9.3	11.0	4.9	3.1	上SK135
355	60A ₂ -E-73	高杯	10.8	—	—	—	上SE09	413	59C-E-16	杯	9.9	11.6	3.5	4.1	上SK135
356	60A ₂ -E-74	高杯	—	—	9.8	—	上SE09	414	59C-E-17	杯	12.5	14.2	5.2	5.0	上SK135
357	60A ₂ -E-75	高杯	—	—	10.9	—	上SE09	415	59C-E-20	壺	—	—	(4.5)	—	上SK135
358	60A ₂ -E-76	高杯	14.8	—	—	—	上SE09	416	59C-E-19	杯	10.4	12.6	—	—	上SK135
359	60A ₂ -E-77	高杯	15.2	—	—	—	上SE09	417	59C-E-21	甕	15.6	—	—	—	上SK135
360	60A ₂ -E-78	高杯	12.7	—	—	—	上SE09	418	59C-E-23	甕	20.0	—	—	—	上SK135
361	60A ₂ -E-79	甕	13.6	27.6	—	—	上SE09	419	59C-E-22	甕	16.8	—	—	—	上SK135
362	60A ₂ -E-80	甕	25.8	—	—	—	上SE09	420	59C-E-26	甕	24.5	32.0	12.6	30.0	上SK135
363	60A ₂ -E-81	短頸壺	13.1	18.0	—	—	上SE09	421	59C-E-25	甕	20.0	—	—	—	上SK135
364	60A ₂ -E-82	短頸壺	—	15.2	4.2	—	上SE09	422	59B-E-46	甕	17.4	—	—	—	上SE21
365	60A ₂ -E-99	提瓶	19.4	37.6	—	48.8	上SE09	423	59B-E-24	甕	—	—	—	—	上SE21
366	60A ₂ -E-83	甕	25.2	—	—	—	上SE09	424	59B-E-25	甕	—	—	—	—	上SE21
367	60A ₂ -E-84	甕	21.0	—	—	—	上SE09	425	60C ₂ -E-6	蓋	14.0	—	—	2.0	上SE13
368	60A ₂ -E-86	甕	16.0	—	—	—	上SE09	426	60C ₂ -E-7	杯	9.3	10.6	5.0	3.2	上SE13
369	60A ₂ -E-87	甕	19.4	—	—	—	上SE09	427	60C ₂ -E-8	杯	7.6	10.0	3.4	3.5	上SE13
370	60A ₂ -E-88	甕	19.2	—	—	—	上SE09	428	60C ₂ -E-9	杯	8.9	11.2	6.0	2.8	上SE13
371	60A ₂ -E-89	甕	20.4	—	—	—	上SE09	429	60C ₂ -E-10	高杯	11.5	—	8.5	7.7	上SE13
372	58-E-109	杯	8.8	10.2	5.1	2.6	上SE28	430	60C ₂ -E-11	甕	15.6	17.8	—	18.3	上SE13
373	58-E-114	杯	11.0	—	4.3	4.4	上SE28	431	60C ₂ -E-12	甕	13.8	15.8	—	16.4	上SE13
374	58-E-112	杯	13.2	—	5.3	4.1	上SE28	432	60C ₂ -E-13	甕	17.3	—	—	—	上SE13
375	58-E-108	高杯	—	—	10.7	—	上SE28	433	60C ₂ -E-14	甕	18.7	—	—	—	上SE13
376	58-E-119	甕	18.2	—	—	—	上SE28	434	60C ₂ -E-15	甕	22.1	—	—	—	上SE13
377	58-E-111	短頸壺	18.5	20.0	—	—	上SE28	435	60A ₂ -E-90	甕	32.0	40.2	—	—	上SE06
378	58-E-116	広口壺	29.6	—	—	—	上SE28	436	59B-E-35	杯	11.5	13.2	6.7	(3.5)	上SE22
379	58-E-110	甕	22.0	—	—	—	上SE28	437	59B-E-50	杯	10.0	—	7.1	2.7	上SE22
380	58-E-132	甕	16.3	—	—	—	上SE28	438	59B-E-49	杯	—	—	11.6	—	上SE22
381	58-E-123	甕	16.4	—	—	—	上SE28	439	59B-E-29	壺	—	—	13.7	—	上SE22
382	58-E-128	甕	17.1	—	—	—	上SE28	440	59B-E-41	鉢	14.7	—	—	—	上SE22
383	58-E-117	甕	16.0	—	—	—	上SE28	441	59B-E-5	高杯	—	—	9.2	—	上SE23
384	58-E-118	甕	22.2	—	—	—	上SE28	442	59B-E-26	隸	—	9.4	—	—	上SE23
385	58-E-115	甕	20.0	—	—	—	上SE28	443	59B-E-51	甕	20.0	—	—	—	上SE23
386	58-E-113	甕	23.3	—	—	—	上SE28	444	59D-E-7	蓋	10.4	—	—	—	上SD94
387	58-E-120	甕	15.1	—	—	—	上SE28	445	59D-E-8	杯	12.3	14.0	6.0	4.0	上SD94
388	58-E-129	甕	20.6	—	—	—	上SE28	446	58-E-205	杯	14.0	16.2	8.0	4.3	上SD94
389	58-E-122	甕	21.0	—	—	—	上SE28	447	59E-E-1	杯	11.0	12.8	—	(4.5)	上SE33
390	59D-E-29	蓋	11.5	—	—	(4.0)	上SE31	448	60E-E-1	蓋	10.0	—	—	3.6	上SX01
391	59D-E-27	蓋	11.3	—	—	4.2	上SE31	449	60E-E-2	蓋	9.1	—	—	4.5	上SX01
392	59D-E-19	蓋	11.0	—	—	4.1	上SE31	450	60E-E-3	杯	8.6	10.6	3.8	3.0	上SX01
393	59D-E-22	杯	10.4	12.2	5.0	4.5	上SE31	451	60E-E-4	高杯	13.5	—	7.9	7.0	上SX01
394	59D-E-23	杯	10.4	12.0	4.0	4.1	上SE31	452	60E-E-5	鉢	10.9	—	2.5	4.2	上SX01
395	59D-E-21	杯	11.9	14.2	5.0	4.5	上SE31	453	60E-E-6	杯	10.0	—	3.6	3.5	上SX01
396	59D-E-26	隸	—	8.8	—	—	上SE31	454	60E-E-7	蓋	14.3	—	—	2.9	上SX01
397	59D-E-24	壺	—	—	—	—	上SE31	455	60E-E-8	杯	11.0	—	3.8	4.3	上SX01
398	59D-E-25	甕	17.8	—	—	—	上SE31	456	60E-E-9	広口壺	27.0	—	—	—	上SX01
399	59D-E-28	甕	19.9	—	—	—	上SE31	457	60E-E-10	杯	10.7	—	5.4	4.2	上SX01
400	59D-E-20	甕	16.2	—	—	—	上SE31	458	60E-E-11	隸	—	7.1	—	—	上SX01
401	59D-E-15	蓋	12.0	—	—	(3.9)	上SE32	459	60E-E-12	甕	21.2	—	—	—	上SX01
402	59D-E-11	蓋	11.8	—	—	(4.0)	上SE32	460	60E-E-13	甕	18.6	—	—	—	上SX01
403	59D-E-14	蓋	11.4	—	—	3.5	上SE32	461	60E-E-14	甕	22.0	25.0	—	—	上SX01
404	59D-E-12	杯	9.2	10.8	5.0	4.2	上SE32	462	60E-E-15	甕	24.3	—	—	—	上SX01

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点	番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
463	60E-E-16	甕	17.4	—	—	—	上SX01	523	60D-E-18	杯	15.8	—	11.6	4.4	上SD41
464	60E-E-17	甕	16.0	—	—	—	上SX01	524	60D-E-19	杯	15.2	—	10.7	4.1	上SD41
465	60E-E-18	甕	18.0	—	—	—	上SX01	525	60D-E-20	杯	16.2	—	11.7	3.8	上SD41
466	60E-E-19	甕	20.9	—	—	—	上SX01	526	60D-E-21	杯	12.8	—	6.8	3.9	上SD41
467	60D-E-1	蓋	—	—	—	—	上SE14	527	60D-E-22	杯	9.8	—	6.2	2.9	上SD41
468	60D-E-2	蓋	22.0	—	—	—	上SE14	528	60D-E-23	杯	12.4	—	5.5	4.4	上SD41
469	60D-E-3	杯	13.0	—	7.4	3.2	上SE14	529	60D-E-24	杯	12.0	—	5.4	(4.8)	上SD41
470	60D-E-4	杯	11.0	—	—	(4.5)	上SE14	530	60D-E-25	杯	10.8	—	4.0	4.3	上SD41
471	60D-E-5	杯	—	—	13.3	—	上SE14	531	60D-E-26	杯	—	—	7.8	—	上SD41
472	60D-E-6	甕	25.8	—	—	—	上SE14	532	60D-E-27	罍	—	9.0	—	—	上SD41
473	60D-E-7	甕	59.4	—	—	—	上SE14	533	60D-E-28	杯	15.5	—	10.8	—	上SD41
474	60D-E-8	甕	13.4	—	—	—	上SE14	534	60D-E-29	高杯	—	—	9.9	—	上SD41
475	60D-E-9	甕	(13.6)	—	—	—	上SE14	535	60D-E-30	甕	18.3	—	—	—	上SD41
476	60D-E-10	蓋	(14.7)	—	—	—	上SE14	536	60D-E-31	短頸壺	5.6	11.0	—	—	上SD41
477	59A-E-74	甕	(15.6)	—	—	—	上SK40	537	60D-E-32	鉢	32.4	—	—	—	上SD41
478	59A-E-76	蓋	20.2	—	—	—	上SK40	538	60D-E-33	杯	18.4	—	13.0	4.5	上SD41
479	59A-E-77	甕	20.7	—	—	—	上SK40	539	60D-E-34	甕	15.2	—	—	—	上SD41
480	60G-E-1	杯	12.0	—	5.7	4.0	上SD60	540	60D-E-35	甕	21.4	—	—	—	上SD41
481	60G-E-2	甕	18.9	—	—	—	上SD60	541	60D-E-36	甕	25.9	—	—	—	上SD41
482	60G-E-3	甕	29.7	—	—	—	上SD60	542	60D-E-37	甕	25.7	—	—	—	上SD41
483	60G-E-4	甕	26.3	35.0	—	—	上SD60	543	60D-E-38	甕	24.3	—	—	—	上SD41
484	60A ₂ -E-91	蓋	9.6	—	—	3.6	上SK20	544	60H-E-25	蓋	18.6	—	—	—	上SE26
485	60A ₂ -E-92	杯	(10.3)(12.4)	—	—	—	上SK20	545	60H-E-26	杯	16.7	—	13.6	3.8	上SE26
486	60A ₂ -E-93	杯	9.7	11.4	—	—	上SK20	546	60H-E-27	甕	26.0	—	—	—	上SE26
487	60A ₂ -E-94	高杯	14.2	—	—	—	上SK20	547	60H-E-28	杯	15.6	—	—	—	上SE29
488	60A ₂ -E-95	高杯	—	14.2	—	—	上SK20	548	60H-E-29	杯	19.8	—	—	—	上SE29
489	60A ₂ -E-96	甕	14.5	—	—	—	上SK20	549	60H-E-30	蓋	13.4	—	—	—	上SE29
490	60A ₂ -E-97	甕	22.0	—	—	—	上SK20	550	60H-E-31	杯	—	—	11.0	—	上SE29
491	60A ₂ -E-98	甕	29.9	—	—	—	上SK20	551	60H-E-32	提瓶	11.6	—	—	—	上SE29
492	60H-E-1	杯	11.0	—	4.1	4.5	上SE25	552	60H-E-33	蓋	15.2	—	—	3.45	上SD72
493	60H-E-2	杯	12.2	—	—	—	上SE25	553	60H-E-34	蓋	18.1	—	—	—	上SD72
494	60H-E-3	鉢	15.2	—	—	—	上SE25	554	60H-E-35	甕	28.4	—	—	—	上SD72
495	60H-E-4	壺	—	—	—	—	上SE25	555	60K-E-1	蓋	—	—	—	—	上SD97
496	60H-E-5	蓋	15.5	—	—	—	上SE25	556	60K-E-2	蓋	18.8	—	—	—	上SD97
497	60H-E-6	蓋	15.2	—	—	—	上SE25	557	60K-E-3	長頸壺	7.0	—	—	—	上SD97
498	60H-E-7	杯	15.8	—	11.3	4.2	上SE25	558	60K-E-4	盤	—	—	—	—	上SD97
499	60H-E-8	甕	31.4	—	—	—	上SE25	559	60K-E-5	甕	21.8	—	—	—	上SD97
500	60H-E-9	甕	21.6	—	—	—	上SE25	560	60K-E-6	甕	17.0	—	—	—	上SD97
501	60H-E-10	甕	22.4	—	—	—	上SE25	561	60K-E-7	瓦	—	8.4	—	2.6	上SD97
502	60H-E-11	甕	16.0	—	—	—	上SE25	562	60K-E-8	長頸壺	—	—	9.8	—	上SD97
503	60H-E-12	甕	17.0	—	—	—	上SE25	563	60K-E-9	長頸壺	—	—	8.0	—	上SD97
504	60H-E-13	蓋	16.5	—	—	—	上SK108	564	60E-E-20	杯	12.0	—	4.9	3.7	上SD49
505	60H-E-14	蓋	17.2	—	—	—	上SK108	565	60E-E-21	杯	12.7	—	6.5	3.7	上SD49
506	60H-E-15	杯	15.0	—	10.9	4.2	上SK108	566	60E-E-22	杯	14.7	—	7.0	4.0	上SD49
507	60H-E-16	杯	15.6	—	11.4	4.0	上SK108	567	60E-E-23	杯	12.5	—	4.4	4.4	上SD49
508	60H-E-17	杯	11.6	—	5.6	3.6	上SK108	568	60E-E-24	杯	10.0	—	8.0	3.9	上SD49
509	60H-E-18	短頸壺	8.0	14.2	7.1	12.2	上SK108	569	60E-E-25	杯	17.0	—	10.0	5.3	上SD49
510	60H-E-19	甕	20.7	—	—	—	上SK108	570	60E-E-26	杯	20.6	—	15.8	4.0	上SD49
511	60H-E-20	甕	29.4	—	—	—	上SK108	571	60E-E-27	杯	9.0	—	—	—	上SD49
512	60H-E-21	壺	—	—	6.0	—	上SK118	572	60E-E-28	甕	32.2	37.4	—	—	上SD49
513	60H-E-22	壺	—	—	8.2	—	上SK118	573	60E-E-29	長頸壺	—	—	8.8	—	上SD49
514	60H-E-23	甕	29.2	—	—	—	上SK118	574	60E-E-30	壺	—	—	5.6	—	上SD49
515	60H-E-24	甕	30.8	—	—	—	上SK118	575	60E-E-31	短頸壺	14.6	16.4	—	—	上SD49
516	60D-E-11	蓋	16.8	—	—	3.5	上SD41	576	60E-E-32	甕	13.1	—	5.5	11.9	上SD49
517	60D-E-12	蓋	14.8	—	—	3.0	上SD41	577	60A ₁ -E-137	蓋	17.6	—	—	5.2	上SK06
518	60D-E-13	蓋	17.2	—	—	4.3	上SD41	578	60A ₁ -E-138	杯	12.5	—	5.5	3.9	上SK06
519	60D-E-14	蓋	14.5	—	—	3.4	上SD41	579	60A ₁ -E-139	杯	13.4	—	7.0	4.2	上SK06
520	60D-E-15	蓋	16.3	—	—	—	上SD41	580	60A ₁ -E-140	杯	12.0	—	6.8	3.9	上SK06
521	60D-E-16	杯	8.7	10.6	2.5	3.3	上SD41	581	60A ₁ -E-141	杯	12.6	—	7.6	3.7	上SK06
522	60D-E-17	杯	14.2	—	9.6	4.0	上SD41	582	60A ₁ -E-142	杯	12.3	—	6.8	4.4	上SK06

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点	番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
583	60A ₁ -E-143	杯	11.4	—	6.3	4.0	上SK06	642	60E-E-41	杯	10.3	—	6.9	4.6	上SE16
584	60A ₁ -E-144	杯	11.7	—	6.3	3.5	上SK06	643	60E-E-42	杯	—	—	7.8	—	上SE16
585	60A ₁ -E-145	長頸壺	—	—	—	—	上SK06	644	60E-E-43	杯	—	—	6.5	—	上SE16
586	60A ₁ -E-146	杯	15.6	—	—	—	上SK06	645	60E-E-44	甕	—	—	—	—	上SE16
587	60A ₁ -E-147	盤	16.4	—	8.4	3.1	上SK06	646	60E-E-45	椀	14.9	—	7.2	5.4	上SE17
588	60K-E-107	蓋	—	—	—	—	上SD98	647	60E-E-46	椀	15.2	—	—	—	上SE17
589	60K-E-11	蓋	15.5	—	—	—	上SD98	648	60E-E-47	椀	—	—	6.8	—	上SE17
590	60K-E-12	杯	12.0	—	6.5	4.0	上SD98	649	60E-E-48	椀	—	—	4.9	—	上SE17
591	60K-E-13	杯	—	—	10.6	—	上SD98	650	60E-E-49	耳皿	—	—	5.0	—	上SE17
592	60K-E-14	杯	15.2	—	11.8	4.9	上SD98	651	60E-E-50	広口瓶	20.8	—	—	—	上SE17
593	60K-E-15	盤	13.2	—	9.3	2.7	上SD98	652	60E-E-51	広口瓶	—	—	18.4	—	上SE17
594	60K-E-16	盤	15.7	—	—	—	上SD98	653	60E-E-52	甕	—	—	—	—	上SE17
595	60K-E-17	盤	—	—	20.8	—	上SD98	654	60E-E-53	椀	—	—	—	—	上SE17
596	60F-E-1	杯	13.1	—	6.8	4.0	上SK90	655	60A ₁ -E-161	椀	16.0	—	7.6	5.1	上SK05
597	60F-E-2	杯	13.6	—	10.1	4.1	上SK90	656	60A ₁ -E-162	椀	16.4	—	6.6	5.1	上SK05
598	60F-E-3	杯	13.4	—	9.7	3.6	上SK90	657	60A ₁ -E-163	椀	8.4	—	4.1	2.6	上SK05
599	60F-E-4	甕	24.4	—	—	—	上SK90	658	60E-E-54	椀	15.1	—	7.0	5.0	上SD49
600	60F-E-5	甕	26.6	—	—	—	上SK90	659	60E-E-55	椀	15.7	—	7.7	5.1	上SD49
601	60F-E-6	甕	26.0	—	—	—	上SK90	660	60E-E-56	椀	17.1	—	—	—	上SD49
602	60F-E-7	甕	23.1	—	—	—	上SK90	661	60E-E-57	椀	—	—	8.3	—	上SD49
603	60F-E-8	土製品	—	6.2	—	1.2	上SK90	662	60E-E-58	椀	—	—	7.2	—	上SD49
604	60A ₁ -E-148	盤	14.2	—	7.5	2.7	上SE01	663	60E-E-59	椀	—	—	8.2	—	上SD49
605	60A ₁ -E-149	盤	14.3	—	8.3	2.4	上SE01	664	60B ₁ -E-59	椀	18.6	—	5.9	4.54	上SE04
606	60A ₁ -E-150	杯	—	—	10.4	—	上SE01	665	60B ₁ -E-60	椀	14.4	—	6.7	5.0	上SE04
607	60A ₁ -E-151	杯	10.5	—	6.2	3.3	上SE01	666	60B ₁ -E-61	椀	—	—	5.6	—	上SE04
608	60A ₁ -E-152	杯	11.2	—	4.1	4.1	上SE01	667	60B ₁ -E-62	皿	7.2	—	5.2	1.5	上SE04
609	60A ₁ -E-153	杯	12.3	—	5.7	4.1	上SE01	668	60B ₁ -E-63	皿	8.0	—	4.8	1.8	上SE04
610	60A ₁ -E-154	長頸壺	7.3	—	—	—	上SE01	669	60B ₁ -E-64	皿	7.2	—	4.3	1.4	上SE04
611	60A ₁ -E-155	水注	—	4.0	—	2.0	上SE01	670	59A-E-61	皿	9.6	—	4.4	1.4	上SE12
612	60A ₁ -E-156	甕	15.6	—	—	—	上SE01	671	60E-E-105	椀	14.6	—	7.1	5.1	上SE15
613	60A ₁ -E-157	甕	16.6	—	—	—	上SE01	672	60E-E-106	椀	12.9	—	5.7	4.6	上SE15
614	60A ₁ -E-158	甕	22.2	—	—	—	上SE01	673	60E-E-107	椀	13.4	—	6.0	5.3	上SE15
615	60A ₁ -E-159	甕	—	—	8.2	—	上SE01	674	60E-E-108	椀	—	—	6.5	—	上SE15
616	60A ₁ -E-160	土製品	—	3.6	—	1.3	上SE01	675	60E-E-109	椀	—	—	6.6	—	上SE15
617	60B ₂ -E-20	皿	14.2	—	7.4	3.5	上SE10	676	60E-E-110	皿	7.4	—	3.7	2.1	上SE15
618	60B ₂ -E-21	長頸壺	—	17.0	8.5	—	上SE10	677	60E-E-111	皿	7.1	—	5.1	1.7	上SE15
619	60H-E-36	皿	15.3	—	8.1	2.3	上SE24	678	60F-E-9	椀	14.9	—	6.1	5.2	上SE18
620	60H-E-37	椀	13.9	—	8.0	4.7	上SE24	679	60F-E-10	椀	—	—	6.7	—	上SE18
621	60H-E-38	蓋	14.2	—	—	—	上SE24	680	60F-E-11	皿	7.7	—	4.8	1.5	上SE18
622	60H-E-39	蓋	14.1	—	—	—	上SE24	681	60F-E-12	皿	11.2	—	4.9	2.6	上SE18
623	60H-E-40	長頸壺	8.9	—	—	—	上SE24	682	60F-E-13	皿	7.3	—	5.0	1.7	上SE18
624	60H-E-41	蓋	10.4	—	—	—	上SE24	683	60F-E-14	椀	—	—	7.4	—	上SE20
625	60H-E-42	椀	11.0	—	5.8	3.9	上SE27	684	60F-E-15	椀	—	—	4.9	—	上SE20
626	60H-E-43	椀	14.8	—	6.9	6.3	上SE27	685	60F-E-16	皿	7.1	—	4.3	(1.7)	上SE20
627	60H-E-44	皿	14.0	—	7.2	2.7	上SE27	686	60F-E-17	鍋	—	—	—	—	上SE20
628	60H-E-45	皿	10.8	—	—	—	上SE27	687	60F-E-18	甕	22.9	—	—	—	上SE20
629	60H-E-46	甕	19.4	—	—	—	上SE27	688	60A ₂ -E-100	陶錘	—	2.1	—	2.8	上SK19
630	60H-E-47	甕	18.2	—	—	—	上SE27	689	60F-E-19	皿	7.7	—	5.2	1.8	上SK77
631	59A-E-58	椀	10.3	—	5.4	3.2	上SE11	690	60F-E-20	皿	7.9	—	5.2	1.8	上SK77
632	59A-E-57	椀	10.5	—	5.1	3.2	上SE11	691	60F-E-21	壺	—	—	10.6	—	上SK77
633	59A-E-59	椀	—	—	5.7	—	上SE11	692	60F-E-22	椀	—	—	5.1	—	上SK78
634	60E-E-33	椀	15.8	—	6.1	5.7	上SE16	693	60F-E-23	椀	—	—	5.7	—	上SK78
635	60E-E-34	椀	15.4	—	7.3	5.0	上SE16	694	60J-E-1	椀	—	—	8.4	—	上SK144
636	60E-E-35	椀	16.6	—	—	—	上SE16	695	60J-E-2	椀	—	—	5.6	—	上SK144
637	60E-E-36	椀	14.2	—	—	—	上SE16	696	60J-E-3	皿	8.2	—	5.0	1.5	上SK144
638	60E-E-37	椀	—	—	6.9	—	上SE16	697	60A ₁ -E-164	椀	—	—	7.2	—	上SD05
639	60E-E-38	椀	—	—	6.7	—	上SE16	698	60A ₁ -E-165	椀	—	—	6.3	—	上SD05
640	60E-E-39	椀	10.6	—	5.-	3.7	上SE16	699	60A ₁ -E-166	椀	—	—	7.7	—	上SD05
641	60E-E-40	皿	15.2	—	6.4	4.3	上SE16	700	60C ₂ -E-16	椀	16.0	—	6.9	5.4	上SD15

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
701	60C ₂ -E-17	椀	13.2	—	5.1	5.8	上SD15
702	60C ₂ -E-18	椀	—	—	6.9	—	上SD15
703	60C ₂ -E-19	椀	—	—	7.1	—	上SD15
704	60C ₂ -E-20	椀	—	—	6.8	—	上SD15
705	60C ₂ -E-21	椀	—	—	7.0	—	上SD15
706	60C ₂ -E-22	椀	—	—	7.0	—	上SD15
707	60C ₂ -E-23	椀	—	—	6.8	—	上SD15
708	60C ₂ -E-24	椀	—	—	6.0	—	上SD15
709	60C ₂ -E-25	椀	—	—	7.2	—	上SD15
710	60C ₂ -E-26	鉢	—	—	13.3	—	上SD15
711	60C ₂ -E-27	皿	7.6	—	4.1	2.6	上SD15
712	60C ₂ -E-28	皿	7.8	—	4.7	1.9	上SD15
713	60C ₂ -E-29	皿	9.2	—	5.5	1.7	上SD15
714	60C ₂ -E-30	皿	8.6	—	4.5	2.2	上SD15
715	60C ₂ -E-31	皿	—	—	3.3	—	上SD15
716	60C ₂ -E-32	鍋	20.8	28.6	—	—	上SD15
717	60D-E-39	椀	14.7	—	6.8	5.1	上SD43
718	60D-E-40	椀	13.9	—	6.5	5.2	上SD43
719	60D-E-41	椀	14.0	—	6.0	5.6	上SD43
720	60D-E-42	椀	15.4	—	5.7	5.2	上SD43
721	60D-E-43	椀	14.8	—	—	—	上SD43
722	60D-E-44	椀	12.5	—	—	—	上SD43
723	60D-E-45	椀	—	—	7.7	—	上SD43
724	60D-E-46	皿	7.1	—	4.5	1.7	上SD43
725	60D-E-47	皿	7.5	—	4.0	1.7	上SD43
726	60D-E-48	鉢	28.2	—	—	—	上SD43
727	60D-E-49	壺	20.2	—	—	—	上SD43
728	60D-E-50	壺	—	—	—	—	上SD43
729	60E-E-60	椀	15.4	—	7.2	5.1	上SD50
730	60E-E-61	椀	13.6	—	5.9	5.2	上SD50
731	60E-E-62	椀	13.6	—	6.3	4.9	上SD50
732	60E-E-63	椀	14.8	—	6.4	5.6	上SD50
733	60E-E-64	椀	13.4	—	6.4	5.9	上SD50
734	60E-E-65	椀	13.8	—	7.0	5.3	上SD50
735	60E-E-66	椀	15.4	—	6.7	5.4	上SD50
736	60E-E-67	椀	13.2	—	5.0	5.4	上SD50
737	60E-E-68	椀	13.1	—	3.8	5.1	上SD50
738	60E-E-69	椀	12.9	—	—	—	上SD50
739	60E-E-70	椀	14.6	—	—	—	上SD50
740	60E-E-71	椀	14.2	—	—	—	上SD50
741	60E-E-72	皿	7.9	—	4.4	2.0	上SD50
742	60E-E-73	皿	7.9	—	4.6	1.9	上SD50
743	60E-E-74	皿	7.7	—	4.6	1.8	上SD50
744	60E-E-75	皿	7.5	—	3.9	1.9	上SD50
745	60E-E-76	皿	7.7	—	4.6	1.5	上SD50
746	60E-E-77	蓋	—	—	4.8	—	上SD50
747	60E-E-78	蓋	—	—	4.1	—	上SD50
748	60E-E-79	鉢	13.1	—	—	—	上SD50
749	60E-E-80	鉢	—	—	14.0	—	上SD50
750	60E-E-81	壺	—	—	—	—	上SD50
751	60E-E-82	壺	—	—	11.8	—	上SD50
752	60E-E-83	杯	—	—	5.1	—	上SD50
753	60E-E-84	卸皿	14.7	—	10.0	4.4	上SD50
754	60E-E-85	皿	—	—	3.4	—	上SD50
755	60E-E-86	鍋	—	—	—	—	上SD50
756	60E-E-87	鍋	—	—	—	—	上SD50
757	60E-E-88	釜	—	—	—	—	上SD50
758	60J-E-4	椀	14.8	—	6.5	5.9	上SD63
759	60J-E-5	椀	14.2	—	7.0	5.1	上SD63

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
760	60J-E-6	椀	12.8	—	4.0	5.3	上SD63
761	60J-E-7	椀	14.4	—	—	—	上SD63
762	60J-E-8	卸皿	17.7	—	14.8	3.6	上SD63
763	60G-E-5	椀	—	—	8.2	—	上SD59
764	60G-E-6	椀	—	—	7.5	—	上SD59
765	60K-E-18	天目	13.0	—	—	—	上SK171
766	60K-E-19	皿	9.8	—	4.8	2.5	上SK171
855	60K-E-20	甕	—	5.6	—	—	上SD100
856	60D-E-58	杯	—	—	10.3	—	60D検出

加工円盤

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
767	60F-E-24	3.65	3.13	13.1	上SE20
768	60F-E-25	2.93	2.54	12.0	上SE20
769	60D-E-51	2.92	2.12	11.5	上SE14
770	60D-E-52	2.73	2.33	11.9	60D検出
771	60E-E-89	2.64	2.78	10.1	上SE50
772	60E-E-90	3.12	2.24	10.5	上SE50
773	60E-E-91	2.85	2.53	11.9	上SE50
774	60E-E-92	2.12	1.90	7.0	上SE50
775	60E-E-93	2.58	2.24	9.4	上SE50
776	60E-E-94	2.19	1.82	7.0	上SE50
777	60J-E-9	3.24	2.85	11.1	上SK144
778	60E-E-95	3.91	2.79	15.4	60E検出
779	60E-E-96	1.87	2.44	7.9	60E検出
780	60E-E-97	2.0	2.14	5.8	60E検出
781	60E-E-98	2.53	2.55	11.2	60E検出
782	60G-E-7	3.65	2.77	9.8	60G検出
783	60G-E-8	3.04	2.75	12.1	60G検出
784	60H-E-48	1.93	1.95	3.3	60H検出
785	60D-E-53	4.87	5.55	41.7	上SD43
786	60J-E-10	4.62	4.39	22.5	上SD63
787	60J-E-11	4.04	3.55	17.7	上SD63
788	60D-E-54	4.54	3.83	20.4	60D検出
789	60E-E-99	4.15	3.38	18.0	60E検出
790	60G-E-9	5.12	4.20	29.4	60G検出
791	60H-E-49	4.22	3.90	20.9	60H検出
792	60D-E-55	1.85	2.08	7.2	60D検出
793	60E-E-100	2.18	2.68	4.4	上SD50
794	59C-E-37	2.28	2.19	5.4	上SD55
795	60F-E-26	2.01	1.97	11.5	上SE19
796	60J-E-12	2.64	3.05	14.1	上SK144
797	60J-E-13	2.20	2.69	14.3	上SK144
798	60H-E-50	2.10	1.98	7.3	60H検出
799	60E-E-101	2.40	2.47	7.2	60E検出
800	60L-E-1	2.18	1.68	5.0	60L検出
801	60D-E-56	1.98	1.88	4.4	60D検出
802	60E-E-102	2.52	2.39	7.8	60E検出
803	60F-E-27	2.69	2.89	10.7	60F検出
804	60F-E-28	2.25	2.66	7.5	60F検出
805	60H-E-51	2.63	3.44	9.8	60H検出
806	60K-E-20	3.03	3.07	8.6	60K検出
807	60J-E-14	4.12	4.03	20.8	60J検出
808	60C ₂ -E-33	3.77	4.01	15.4	上SD15
809	60J-E-15	3.17	3.44	8.9	60J検出
810	60E-E-103	2.98	2.48	13.0	上SE16
811	60E-E-104	2.75	2.30	10.9	上SE16

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
812	60D-E-57	3.47	3.06	10.4	60D検出
813	60G-E-10	3.17	3.12	10.4	60G検出
814	60G-E-11	3.40	2.76	14.4	60G検出
815	60G-E-12	3.49	3.17	10.6	60G検出
816	60G-E-13	5.67	4.04	26.0	60G検出
817	60G-E-14	5.53	4.0	24.1	60G検出

石器

番号	登録番号	長径	短径	重量	出土地点
818	60A ₁ -S-1	5.48	1.29	3.23	60A ₁ 検出
819	60B ₁ -S-1	3.44	1.61	2.68	SK13
820	60B ₁ -S-2	3.44	1.66	2.80	60B ₁ 検出
821	60B ₁ -S-3	3.57	1.40	2.20	60B ₁ 検出
822	60F-S-1	(3.09)	1.42	2.28	60F検出
823	60A ₁ -S-2	(2.69)	1.09	1.80	60A ₁ 検出
824	60A ₂ -S-1	3.27	1.15	2.14	60A ₂ 検出
825	60B ₁ -S-1	(2.31)	1.30	0.92	60B ₂ 検出
826	60A ₁ -S-3	2.30	1.57	1.50	60A ₁ SK10
827	60A ₁ -S-4	2.82	1.61	2.11	下SK10
828	60B ₁ -S-4	3.47	1.24	1.82	下SB13
829	59C-S-2	3.14	1.37	1.46	59C検出
830	59A-S-2	3.41	1.28	2.41	59ASK02
831	59B ₁ -S-2	(3.80)	1.15	2.36	59B検出
832	60A ₁ -S-5	4.60	1.54	3.21	60A ₁ 検出
833	60A ₁ -S-6	(3.54)	1.77	2.04	下SB05
834	60C ₂ -S-1	(1.81)	(1.66)	1.29	下SK46
835	60A ₁ -S-7	(2.67)	1.94	2.99	60A ₁ 検出
836	60A ₁ -S-8	(2.03)	0.24	0.18	60A ₁ 検出
837	60A ₁ -S-9	1.99	0.68	1.60	60A ₁ 検出
838	60A ₂ -S-2	0.43	0.27	0.08	上SD18
839	60B ₁ -S-5	(12.87)	6.27	644	60B ₁ 検出
840	59A-S-5	14.43	6.72	566	59A検出
841	60K-S-1	11.08	3.20	60.14	上SD100
842	60B ₁ -S-6	3.77	2.73	13.8	60B ₁ 検出
843	60B ₂ -S-2	4.34	3.62	28.6	60B ₂ 検出
844	60B ₁ -S-7	4.63	3.26	25.2	60B ₁ 検出
845	60A ₁ -S-10	5.08	2.74	25.4	下SB04
846	59A-S-3	6.70	(3.00)	41.0	59ASK02
847	60A ₂ -S-3	11.33	5.44	346	下SB22
848	60A ₁ -S-11	10.17	4.62	236	60A ₁ 検出
849	60A ₂ -S-4	9.07	4.63	2848	上SE09
850	60E-S-1	8.30	3.30	107	上SD50
851	60B ₁ -S-8	11.20	4.61	190	上SK13
852	60B ₁ -S-9	7.10	5.42	218	下SB13
853	60A ₁ -S-12	7.97	4.13	128	60A ₁ 検出
854	60B ₁ -S-10	16.15	9.95	1135	SB12

製埴土器

番号	登録番号	タテ(cm)	ヨコ(cm)	遺構番号
867	60B ₂ -E-22	(5.76)	1.59	SE10
868	59B-E-52	(3.48)	1.66	SE22
869	59B-E-33	(3.47)	1.19	"
870	59A-E-262	(4.12)	1.87	SK49
871	60C ₃ -E-34	(3.49)	1.60	SK57
872	58-P-68	(4.73)	1.64	58T.P ₄ 検出
873	60F-E-29	(3.34)	0.88	60F0SD11
874	60A ₂ -E-100	(3.56)	1.45	SE09

番号	登録番号	タテ(cm)	ヨコ(cm)	遺構番号
875	59A-E-263	4.83	1.49	59AP113
876	59A-E-211	7.40	1.25	59A検出
877	59A-E-216	(5.38)	1.55	59A検出
878	59A-E-212	6.98	1.59	59A検出
879	59A-E-219	(6.46)	1.68	59AL検出
880	60C ₃ -E-2	(5.59)	1.63	60C ₃ AD13
881	59B-E-8	5.84	1.61	59B検出
882	60G-E-15	(7.13)	1.94	SD59
883	60G-E-15	-	-	"
884	60E-E-112	(3.19)	1.19	60E0表土'
885	59B-E-45	(3.46)	1.26	59B0SK53
886	58-P-158	(3.48)	(1.22)	58BT.P6検出
887	60H-E-52	(3.47)	1.16	60BH0検出 I
888	60F-E-29	(3.40)	1.14	SD55
889	60J-E-8	3.65	1.19	60J検出

木製品

番号	登録番号	タテ(cm)	ヨコ(cm)	厚さ(g)	遺構番号
889	59D-W-2	(21.65)	11.27	3.63	SE31
890	60A ₂ -W-2	(18.10)	(8.10)	3.70	SE09
891	60A ₂ -W-3	18.25	8.81	1.88	SE09
892	59D-W-4	34.90	1.81	1.41	SE32
893	59D-W-3	21.82	0.58	0.47	SE32
894	60A ₂ -W-1	14.15	6.35	2.25	SE07
895	60K-W-1	21.80	1.75	0.66	SD98
896	60H-W-1	54.60	42.20	5.60	SE24

挿図

土器

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
59-1	60A ₁ -E-167	高杯	23.2	-	-	-	上SD10
-2	60A ₁ -E-168	甕	13.2	-	-	-	上SD10
-3	60B ₂ -E-23	ヒサゴ壺	8.6	-	-	-	下SD01
-4	60B ₁ -E-65	高杯	12.8	-	-	-	下SE03
-5	60B ₁ -E-66	壺	-	-	-	-	上SE03
-6	60A ₁ -E-169	甕	13.0	-	-	-	上SD01
-7	60A ₁ -E-170	甕	18.4	-	-	-	上SD09
62-1	60C ₂ -E-34	甕	-	-	-	-	上SD15

特殊遺物・その他

番号	登録番号	器種	口径	最大径	底径	器高	出土地点
855	60K-E-29	甕	-	-	-	-	上SD100
856	60D-E-74	椀	-	-	(20.2)	-	60D検出
857	60K-W-2	木簡	-	1.8	-	22.5	上SD98
858	60H-S-1	紡錘車	-	8.1	-	3.0	60H検出
859	60F-S-1	紡錘車	-	6.8	-	1.6	60F検出
860	60H-S-2	紡錘車	-	-	-	-	上SK108
861	59B-S-2	勾玉	-	3.9	-	-	上SB42
862	60E-E-25	長頸壺	4.4	7.2	4.6	10.2	上SK37
863	60E-E-144	椀	-	-	11.0	-	60F検出
864	60G-E-22	平瓶	5.4	9.2	-	9.2	上SD60
865	59A-E-255	硯	(26.3)	-	-	-	59A検出

土 錘

番号	登録番号	番号	登録番号	番号	登録番号	番号	登録番号
71-1	58-P-142	-59	58-P-144	-117	60H-E-60	-175	60J-E-23
-2	59B-E-7	-60	58-P-145	-118	60H-E-62	-176	60J-E-24
-3	59F-E-1	-61	58-P-149	-119	60H-E-65	-177	60L-E-2
-4	60E-E-130	-62	59A-E-68	-120	60H-E-66	-178	60L-E-3
-5	60F-E-45	-63	59A-E-69	74-121	60H-E-71	-179	58-P-212
-6	58-P-134	-64	59A-E-75	-122	60H-E-72	-180	58-P-136
-7	58-P-137	-65	59A-E-80	-123	60H-E-79	-181	58-P-139
-8	58-P-140	-66	59A-E-81	-124	60H-E-80	-182	60B ₂ -E-24
-9	58-P-143	-67	59A-E-82	-125	60J-E-16	-183	60D-E-64
-10	58-P-146	-68	59A-E-83	-126	60J-E-20	-184	60F-E-32
-11	59A-E-98	-69	59A-E-84	-127	60J-E-21	-185	60F-E-37
-12	59B-E-30	-70	59A-E-85	-128	60J-E-22	-186	60F-E-43
-13	59C-E-13	-71	59A-E-88	-129	58-P-86	-187	60G-E-18
-14	59G-E-5	-72	59A-E-91	-130	58-P-133	-188	60K-E-23
-15	60G-E-17	-73	59A-E-92	-131	59B-E-34	-189	59B-E-2
-16	60H-E-55	-74	59A-E-94	-132	60C ₂ -E-37	-190	59B-E-7
-17	60H-E-58	-75	59A-E-95	-133	60D-E-66	-191	59B-E-17
-18	60I-E-3	-76	59B-E-3	-134	60E-E-123	-192	60A ₂ -E-103
-19	60I-E-5	-77	59B-E-23	-135	60E-E-124	-193	60C ₂ -E-36
-20	60J-E-18	-78	59B-E-27	-136	60E-E-125	-194	60E-E-141
-21	60J-E-26	-79	59B-E-28	-137	60H-E-68	-195	60D-E-73
-22	60J-E-27	-80	59B-E-39	-138	60K-E-25	-196	60E-E-138
-23	60K-E-26	-81	59D-E-6	-139	58-P-135	-197	60F-E-57
-24	60K-E-27	73-82	59G-E-4	-140	59C-E-5	-198	60F-E-51
-25	59G-E-1	-83	60A ₁ -E-170	-141	60C ₂ -E-40	-199	60F-E-55
-26	59G-E-2	-84	60A ₂ -E-101	-142	60D-E-59	-200	60H-E-77
-27	60C ₂ -E-35	-85	60B ₁ -E-66	-143	60G-E-16	-201	60I-E-6
-28	60F-E-58	-86	60B ₂ -E-23	-144	60H-E-69	-202	58-P-200
-29	60E-E-118	-87	60C ₂ -E-38	-145	59A-E-87	-203	59A-E-210
-30	60G-E-21	-88	60D-E-67	-146	59A-E-90	-204	59B-E-48
-31	60H-E-64	-89	60D-E-71	-147	59A-E-93	-205	59F-E-2
-32	60H-E-76	-90	60E-E-119	-148	59A-E-221	-206	60D-E-61
-33	59G-E-3	-91	60E-E-139	-149	59A-E-223	-207	60D-E-62
-34	60D-E-68	-92	60E-E-120	-150	60B ₁ -E-65	-208	60D-E-69
-35	60A ₁ -E-168	-93	60E-E-122	-151	60D-E-60	-209	60D-E-70
-36	60A ₁ -E-171	-94	60E-E-126	-152	60D-E-65	-210	60D-E-58
-37	60F-E-33	-95	60E-E-127	-153	60E-E-121	-211	60E-E-113
-38	60F-E-49	-96	60E-E-128	-154	60E-E-134	-212	60F-E-31
-39	60A ₁ -E-167	-97	60E-E-129	-155	60E-E-142	-213	60F-E-46
72-40	60H-E-57	-98	60E-E-140	-156	60F-E-35	-214	60F-E-53
-41	60F-E-50	-99	60E-E-115	-157	60F-E-38	-215	60F-E-54
-42	60G-E-19	-100	60E-E-131	-158	60I-E-1	-216	60H-E-70
-43	58-P-142	-101	60E-E-132	-159	60A ₁ -E-169	-217	60H-E-75
-44	60H-E-73	-102	60E-E-133	-160	60A ₂ -E-102	-218	60J-E-25
-45	60H-E-74	-103	60E-E-135	75-161	59B-E-4	-219	60J-E-17
-46	60F-E-44	-104	60E-E-143	-162	60K-E-22	-220	60J-E-19
-47	58-P-141	-105	60F-E-30	-163	60K-E-24	-221	60K-E-21
-48	59A-E-86	-106	60F-E-34	-164	60K-E-28	-222	60H-E-78
-49	59A-E-89	-107	60F-E-36	-165	58-P-213	-223	58-P-147
-50	60H-E-63	-108	60F-E-39	-166	59C-E-28	-224	59A-E-218
-51	60H-E-67	-109	60F-E-40	-167	59G-E-11	-225	59E-E-2
-52	60A ₁ -E-172	-110	60F-E-42	-168	60D-E-63	-226	60C ₂ -E-39
-53	60F-E-41	-111	60F-E-47	-169	60D-E-72	-227	60E-E-116
-54	60G-E-20	-112	60F-E-48	-170	60E-E-114	-228	60E-E-136
-55	60H-E-56	-113	60F-E-52	-171	60E-E-117	-229	60E-E-137
-56	60H-E-59	-114	60F-E-56	-172	60I-E-2		
-57	60H-E-61	-115	60H-E-53	-173	60I-E-4		
-58	58-P-138	-116	60H-E-54	-174	60J-E-15		

写真番号对照表

写真	実測図	遺 構	写真	実測図	遺 構	写真	実測図	遺 構	写真	実測図	遺 構
1	861	上SB42Pit	57	618	上SE10	115	646	上SE17	173	62-1	上SD05
2	837	60A ₁ 検出	58	369	上SE09	116	651	上SE17	174	858	60H検出
3	836	60A ₁ 検出	59	365	上SE09	117	670	上SE12	175	859	60F検出
4	838	上SD18	60	428	上SE13	118	691	上SK77	176	860	上SK108
5	863	60E検出	61	429	上SE13	119	688	上SK19	177	857	上SD98
6	-	上SK94	62	431	上SE13	120	716	上SD15	178	892	上SE32
7	-	60E検出	63	430	上SE13	121	717	上SD43	179	893	上SE32
8	1	下SB01	64	384	上SE28	122	718	上SD43	180	891	上SE09
9	59	下SB10	65	424	上SE21	123	720	上SD43	181	888	上SE31
10	66	下SB11	66	423	上SE21	124	729	上SD50	182	894	下SB07
11	70	下SB12	67	442	上SE23	125	730	上SD50	183	160・142・27・-	
12	16	下SB03	68	620	上SE24	126	733	上SD50	184	25・9・8・6・24	
13	19	下SB05	69	619	上SE24	127	735	上SD50		・20・18・14	
14	-	下SB10	70	391	上SE31	128	736	上SD50	185	60・78・140・83・133	
15	60	下SB10	71	392	上SE31	129	743	上SD50		・100・56・137	
16	69	下SB12	72	393	上SE31	130	745	上SD50	186	148・150・153・157	
17	113	下SB22	73	395	上SE31	131	-	上SD50	187	48・46・43・40・	
18	120	下SB23	74	399	上SE31	132	766	上SK171		50・47・3・2	
19	90	下SB21	75	398	上SE31	133	767~784		188	165・166・167・176	
20	106	下SB21	76	403	上SE32	134	785~791			175・170・162・164	
21	84	下SB14	77	407	上SE32	135	810~817		189	181・-・185・187・	
22	-	下SB20	78	406	上SE32	136	792~801			-・197・196・215・	
23	115	下SB22	79	413	上SE125	137	818	60A ₁ 検出		42・45・228・229	
24	154	下SB35	80	412	上SE125	138	819	下SK13	190	33・34・39・35・	
25	153	下SB35	81	420	上SE125	139	820	60B ₁ 検出		36・37・38	
26	155	下SB35	82	421	上SE125	140	821	60B ₁ 検出			
27	158	下SK12	83	484	上SK20	141	822	60F検出			
28	158	下SK12	84	486	上SK20	142	823	60A ₁ 検出			
29	137	下SK10	85	488	上SK20	143	824	60A ₁ 検出			
30	156	下SK47	86	-	上SK08	144	825	60B ₂ 検出			
31	173	下SK13	87	-	上SK06	145	826	上SK08			
32	166	下SK13	88	577	上SK06	146	827	下SK10			
33	181	下SE02	89	578	上SK06	147	828	下SB13			
34	180	下SE02	90	584	上SK06	148	829	59C検出			
35	183	下SE02	91	-	60A ₁ 検出	149	830	59A検出			
36	195	下SE03	92	450	上SX02	150	831	59B検出			
37	198	下SE03	93	453	上SX02	151	832	60A ₁ 検出			
38	220	下SE03	94	452	上SX02	152	833	下SB05			
12-37	202	下SE03	95	451	上SX02	153	834	下SK46			
12-38	196	下SE03	96	461	上SX02	154	835	60A ₁ 検出			
39	211	下SE03	97	458	上SX02	155	839	60B ₁ 検出			
40	208	下SE03	98	596	上SK90	156	840	59A検出			
41	218	下SE03	99	598	上SK90	157	842	60B ₁ 検出			
42	217	下SE03	100	597	上SK90	158	843	60B ₂ 検出			
43	212	下SE03	101	601	上SK90	159	844	60B ₁ 検出			
44	216	下SE03	102	602	上SK90	160	845	下SB04			
45	222	下SE03	103	538	上SD41	161	846	59A検出			
46	604	上SE01	104	862	上SK37	162	848	60A ₁ 検出			
47	608	上SE01	105	509	上SK08	163	847	下SB22			
48	610	上SE01	106	864	上SD60	164	853	60A ₁ 検出			
49	-	上SE01	107	631	上SE11	165	852	下SB13			
50	611	上SE01	108	632	上SE11	166	854	下SB12			
51	348	上SE09	109	642	上SE16	167	-	上SD49			
52	346	上SE09	110	634	上SE16	168	-	下SB05			
53	349	上SE09	111	635	上SE16	169	-	上SD50			
54	350	上SE09	112	641	上SE16	170	-	上SK27			
55	-	上SE07	113	643	上SE16	171	855	上SD100			
56	617	上SE10	114	644	上SE16	172	856	60D検出			

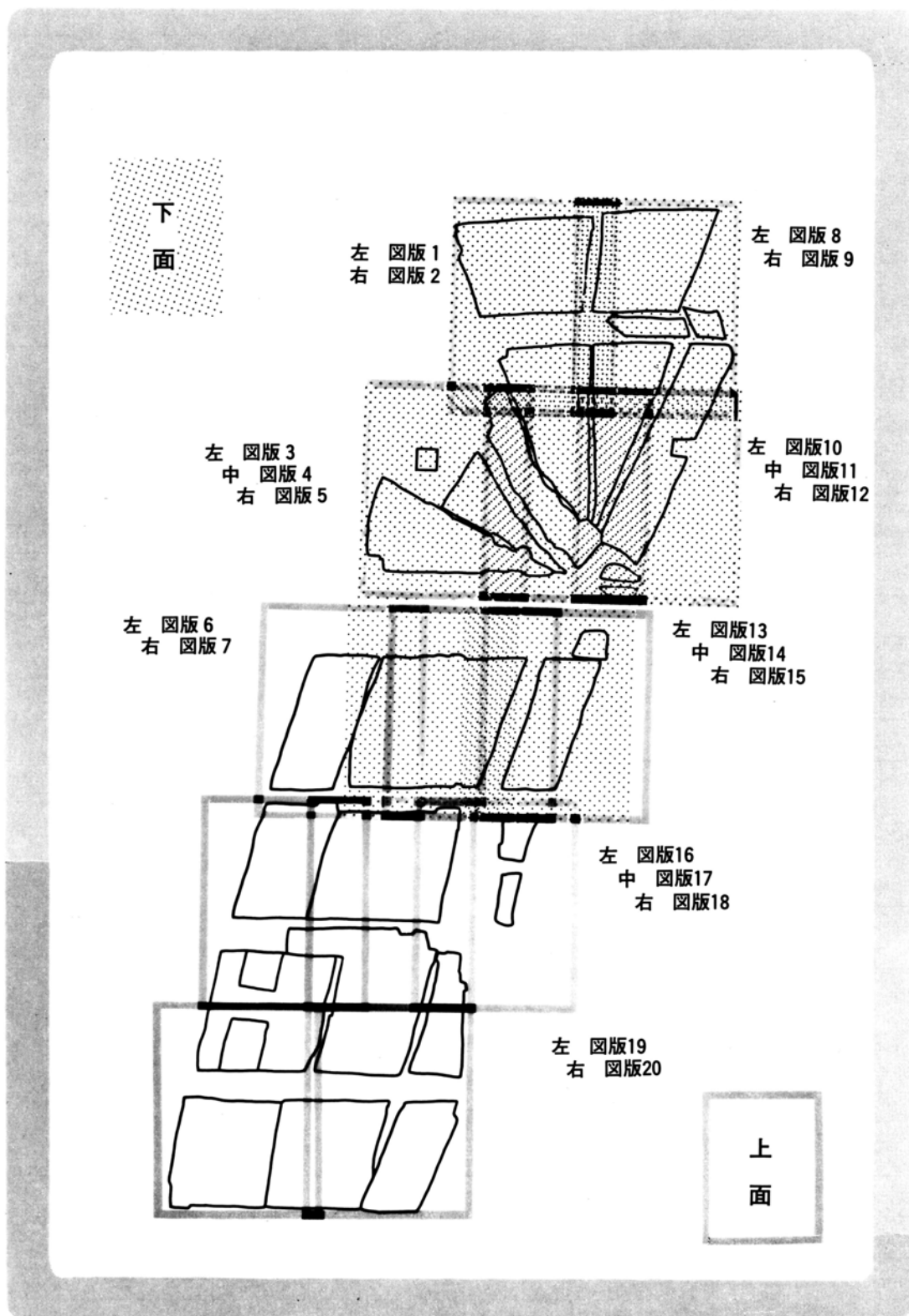


図 版

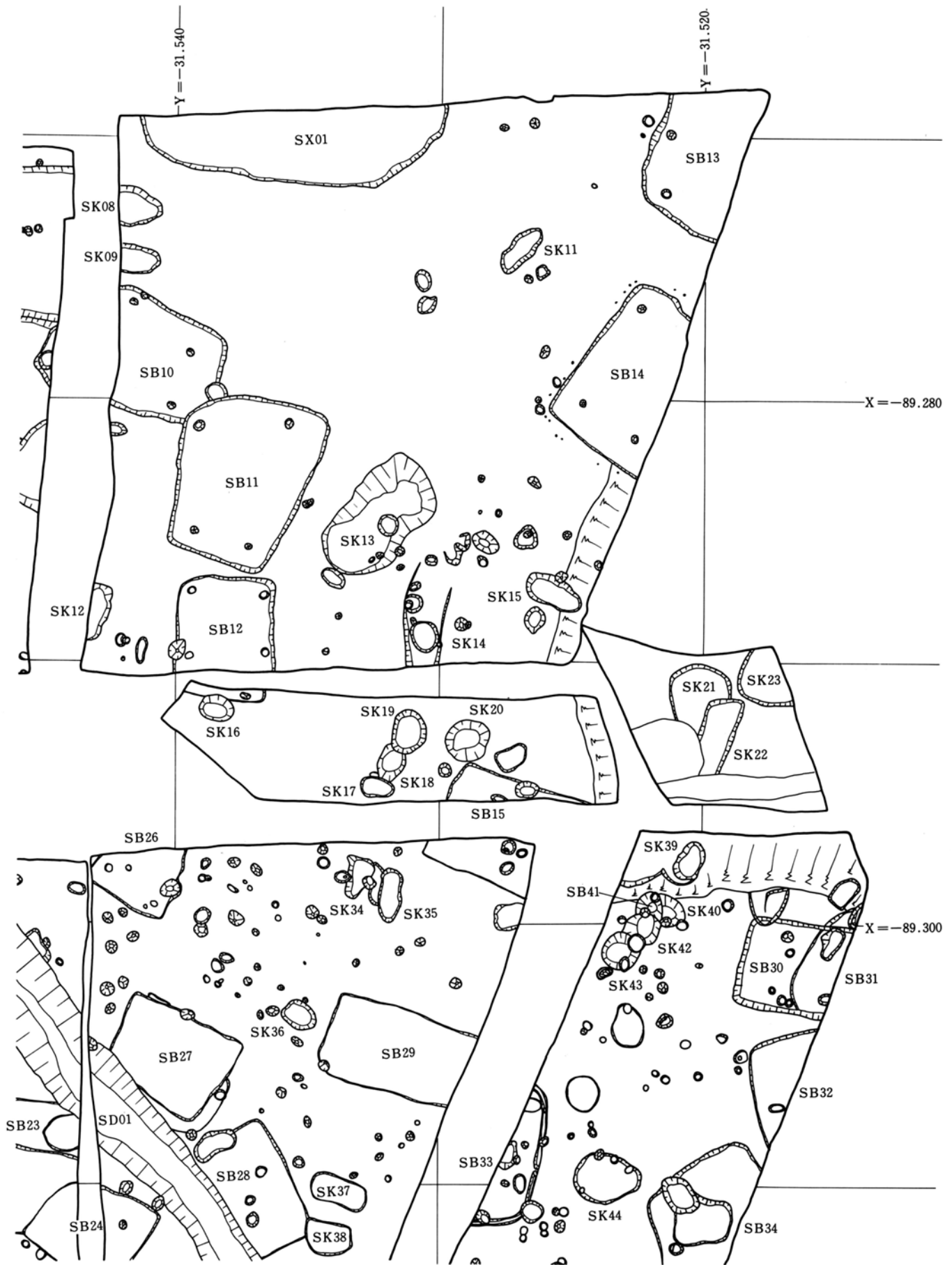
写真図版
遺構・遺物図版

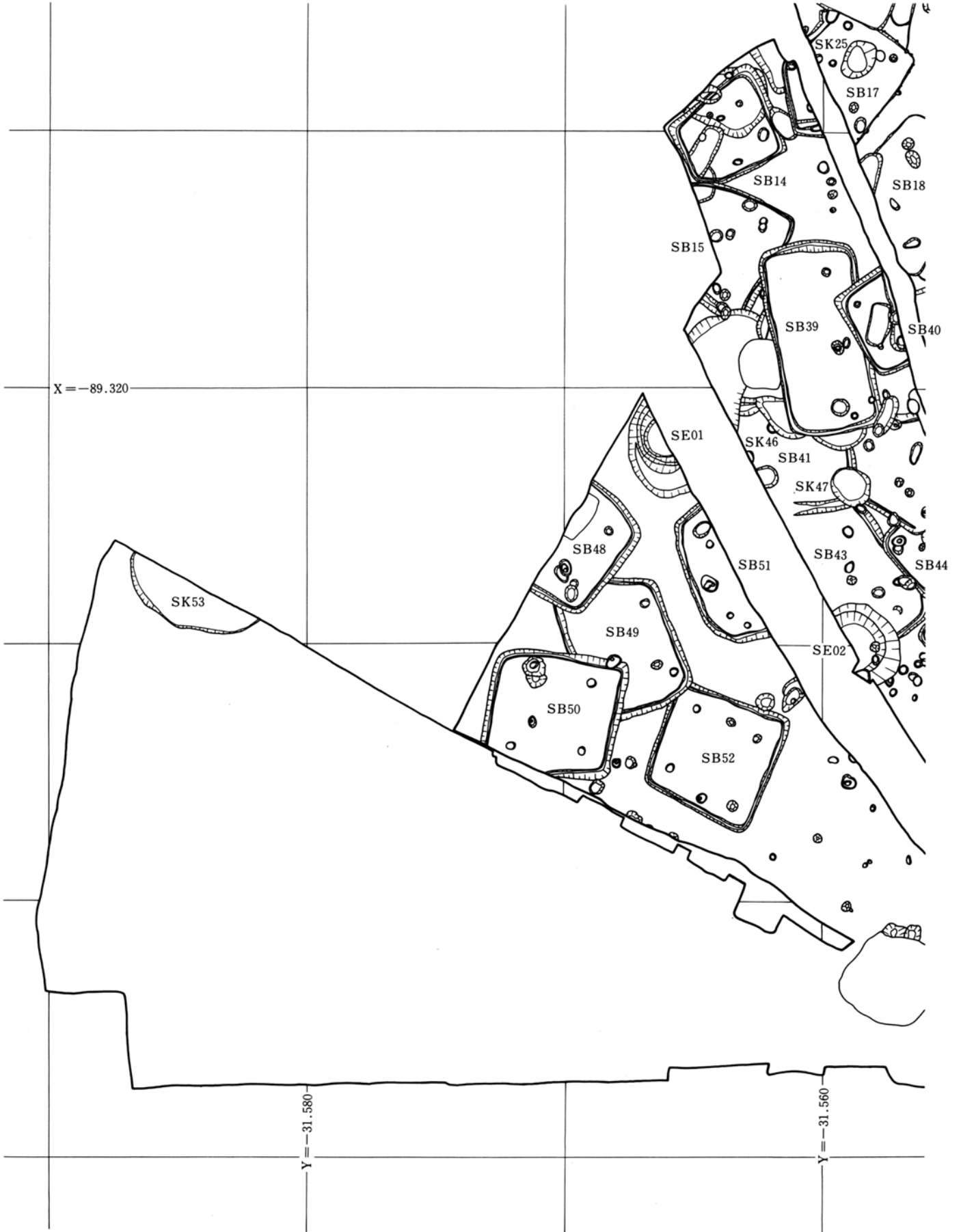
● 遺構図割付表

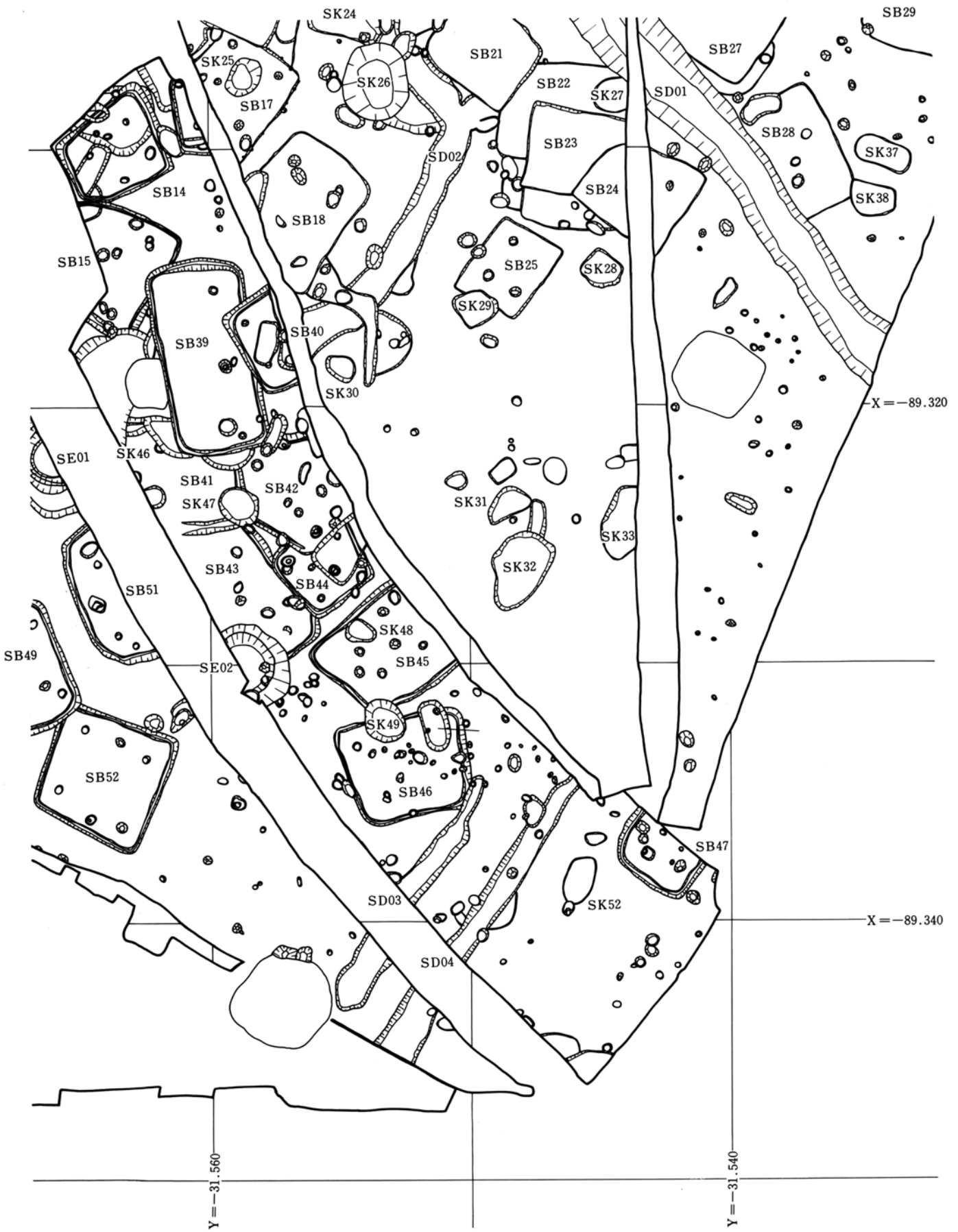
※遺構図版の縮率は 1 : 200

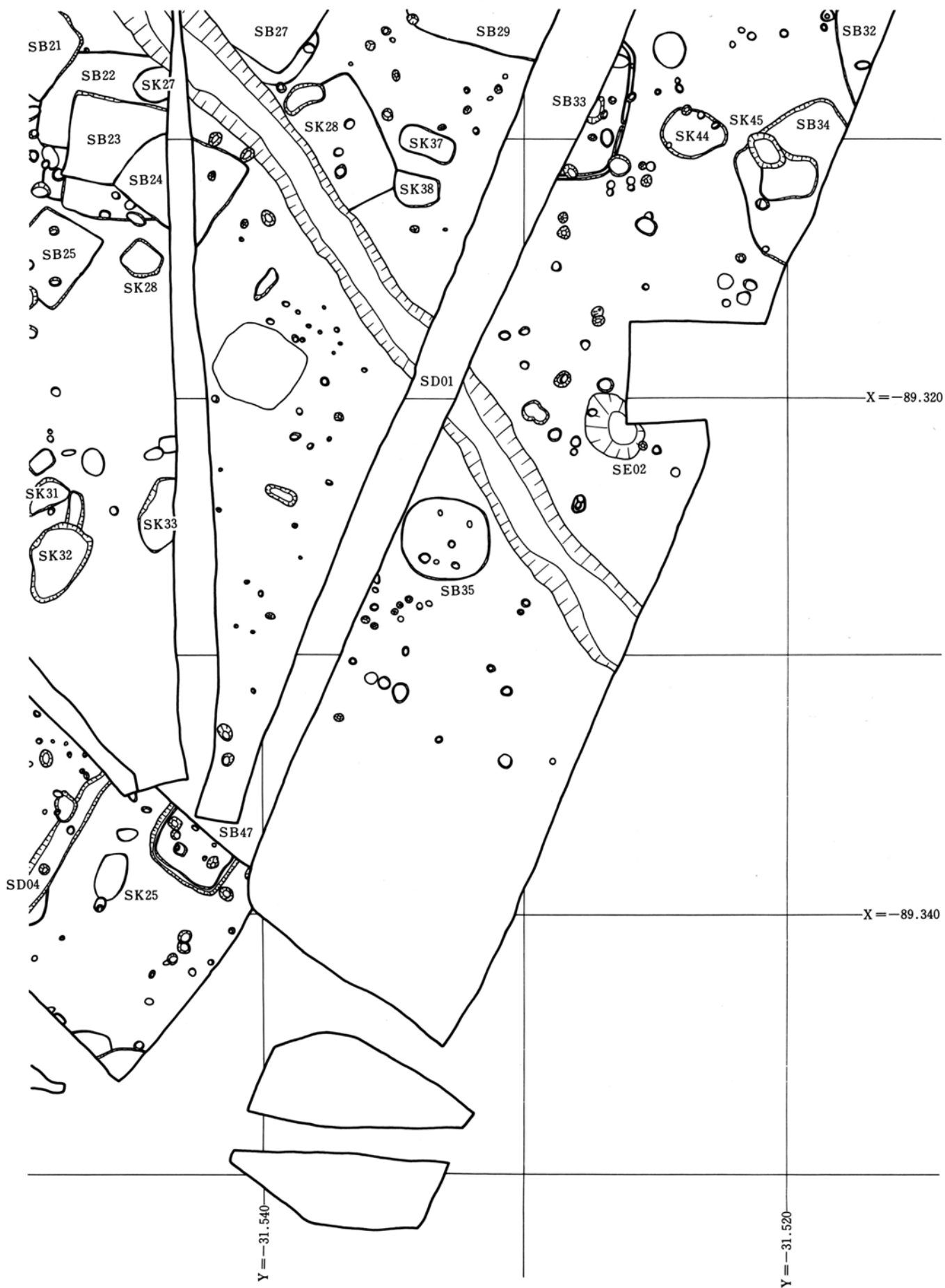


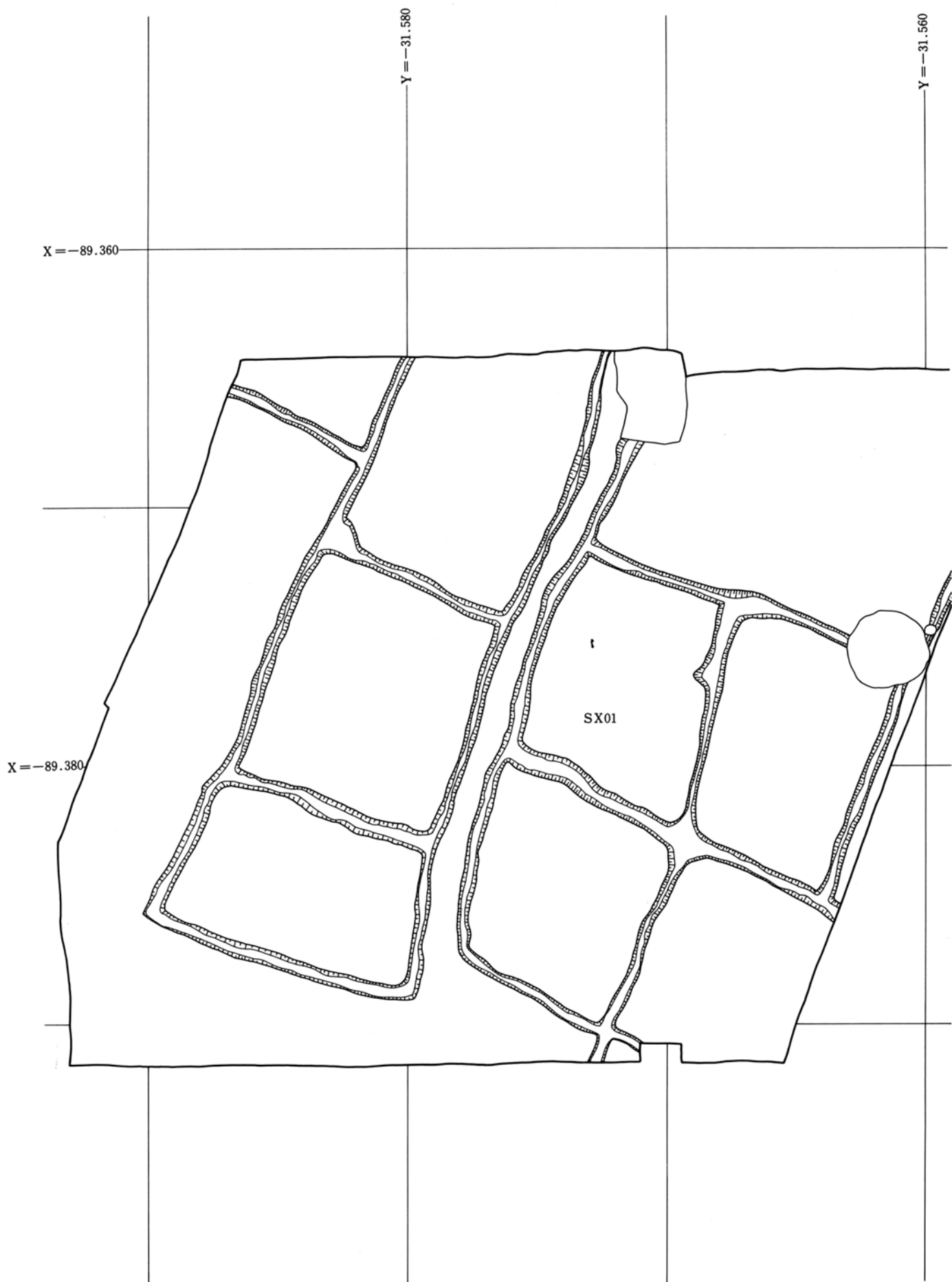


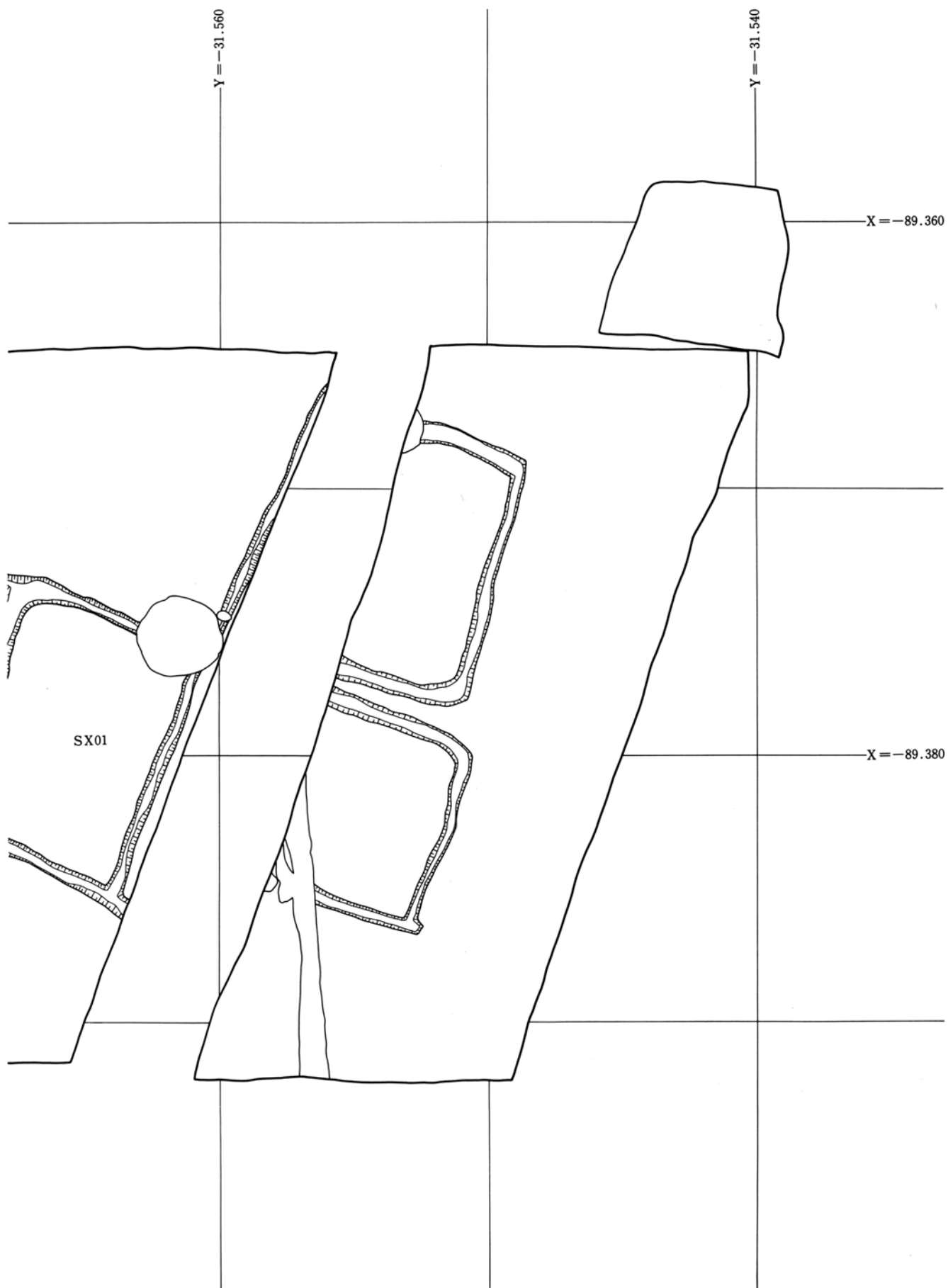










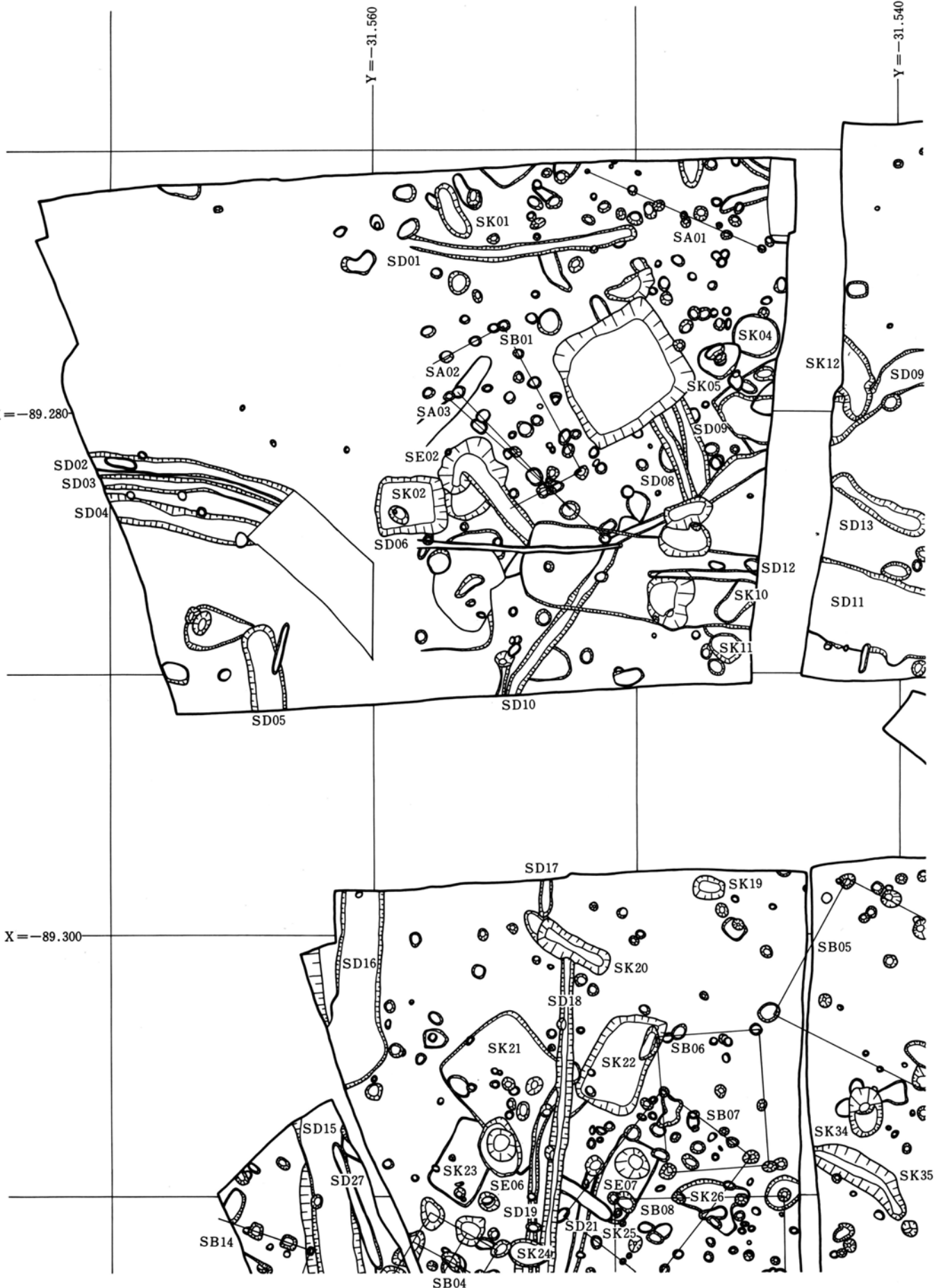


Y = -31.560

Y = -31.540

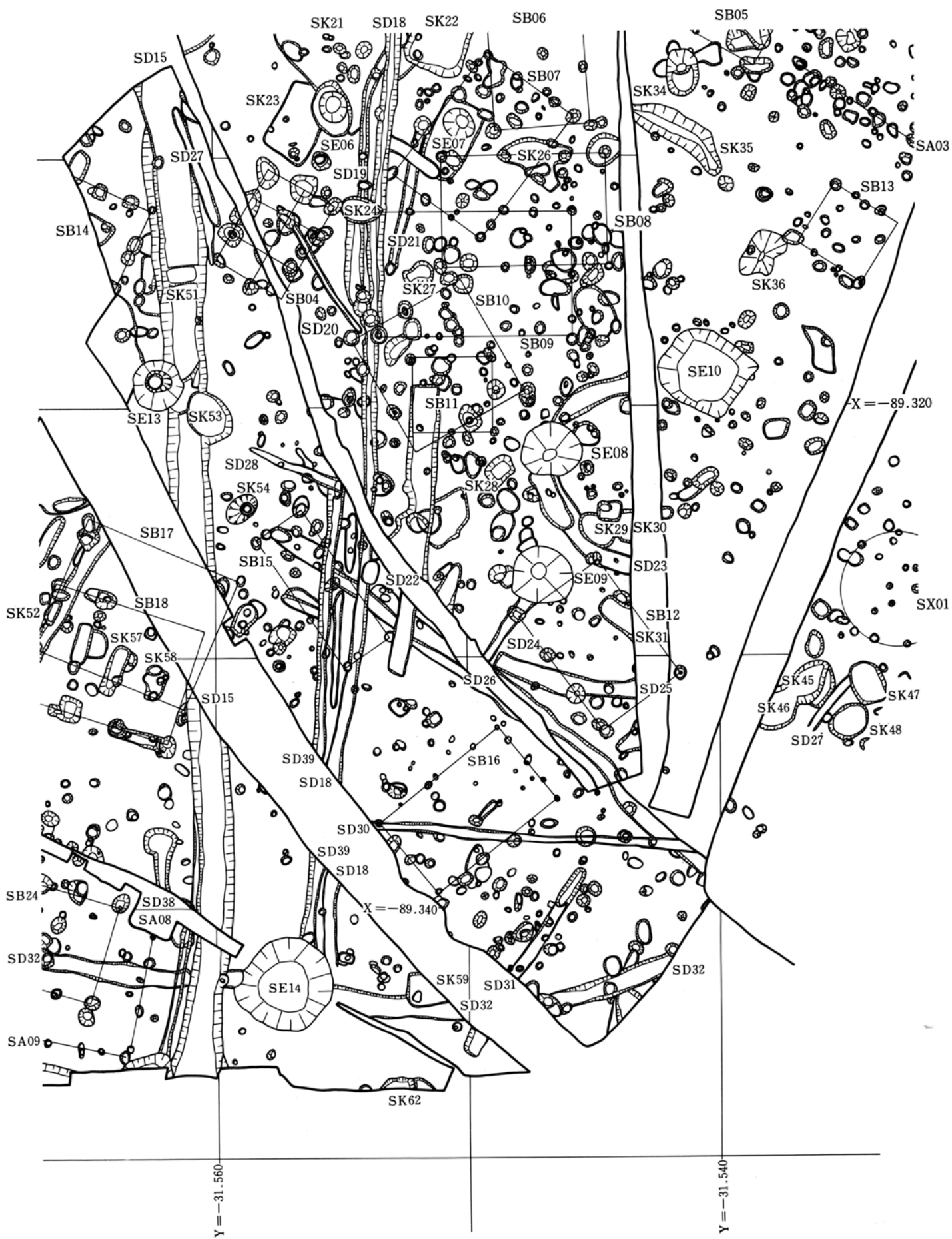
X = -89.280

X = -89.300

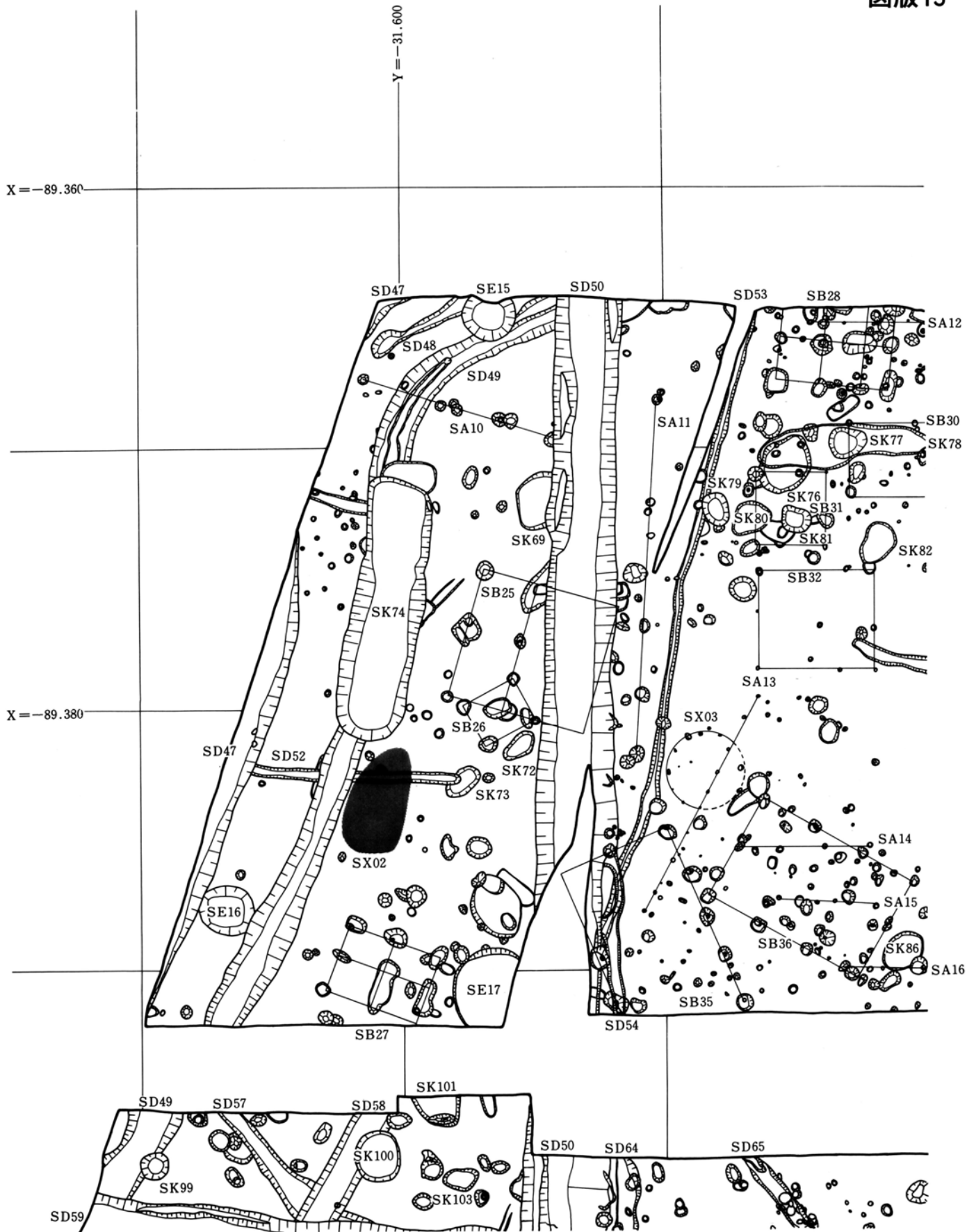


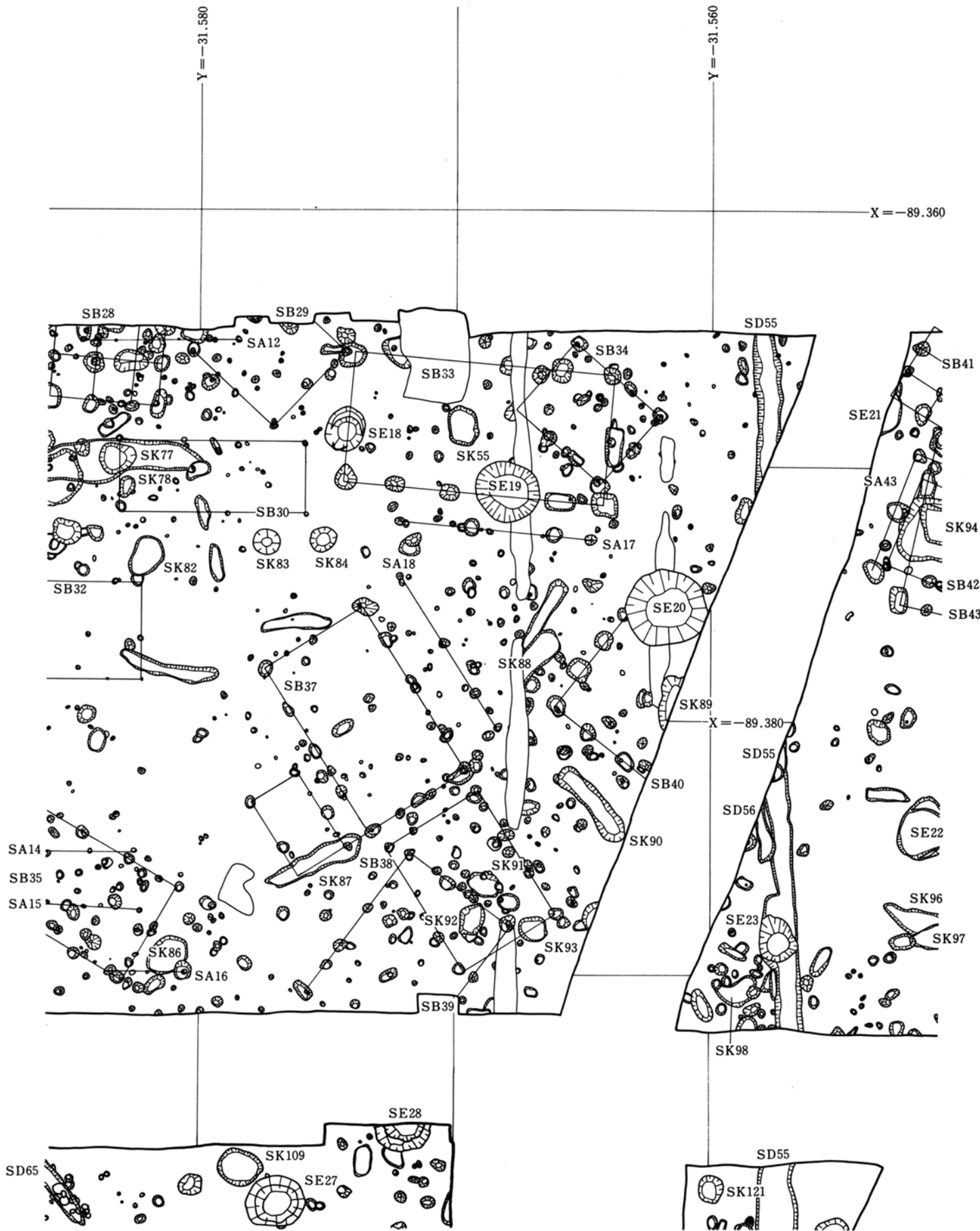


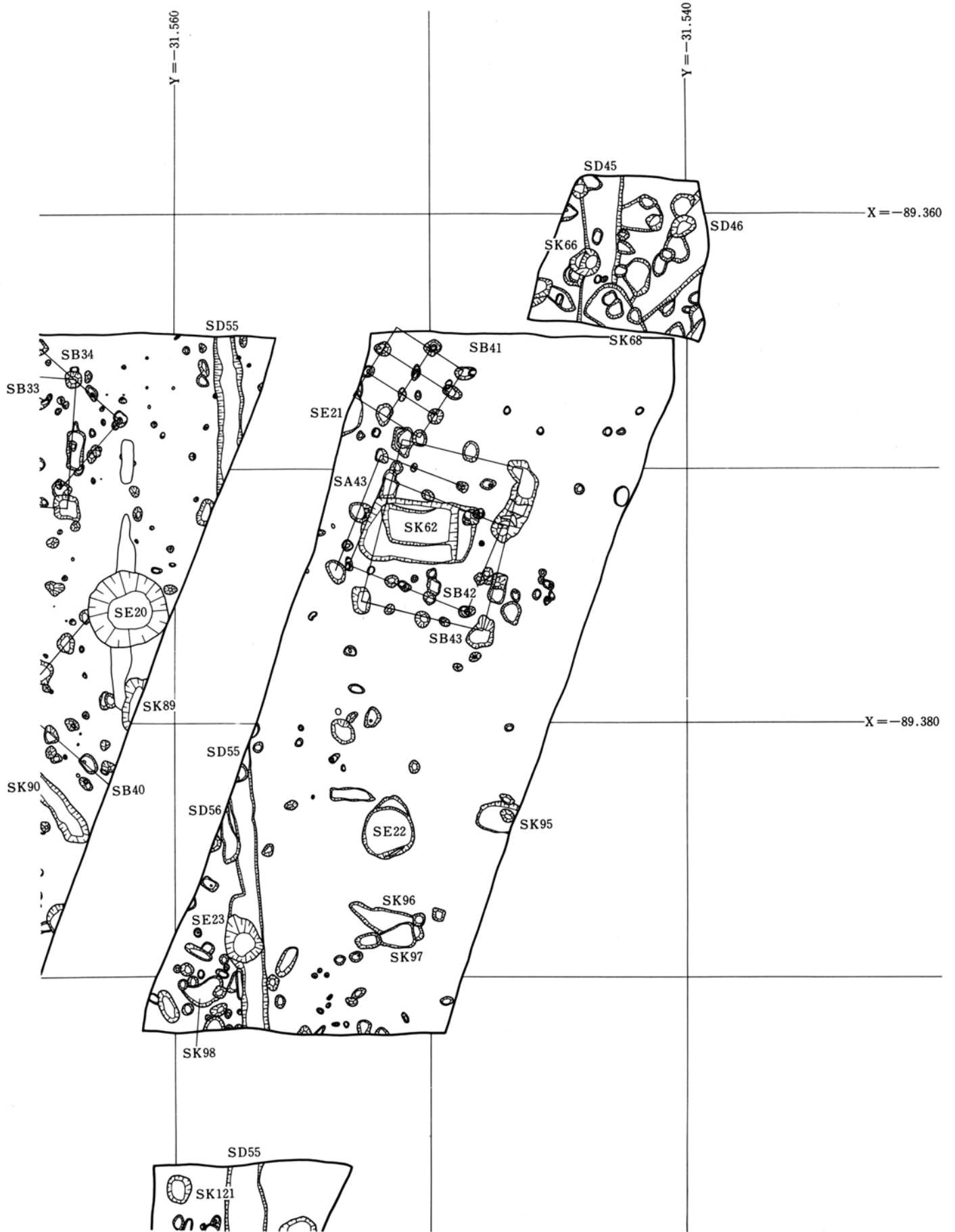




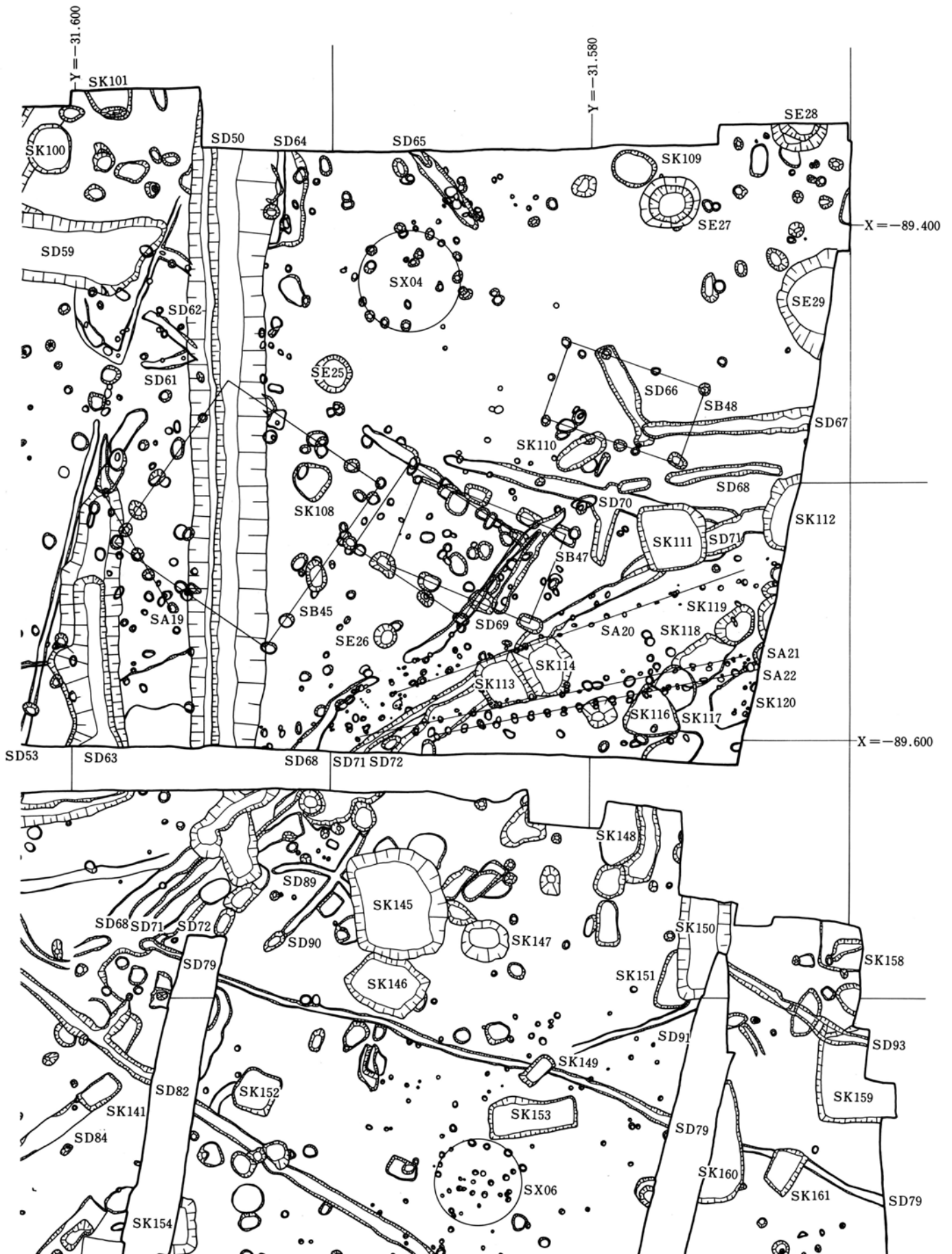




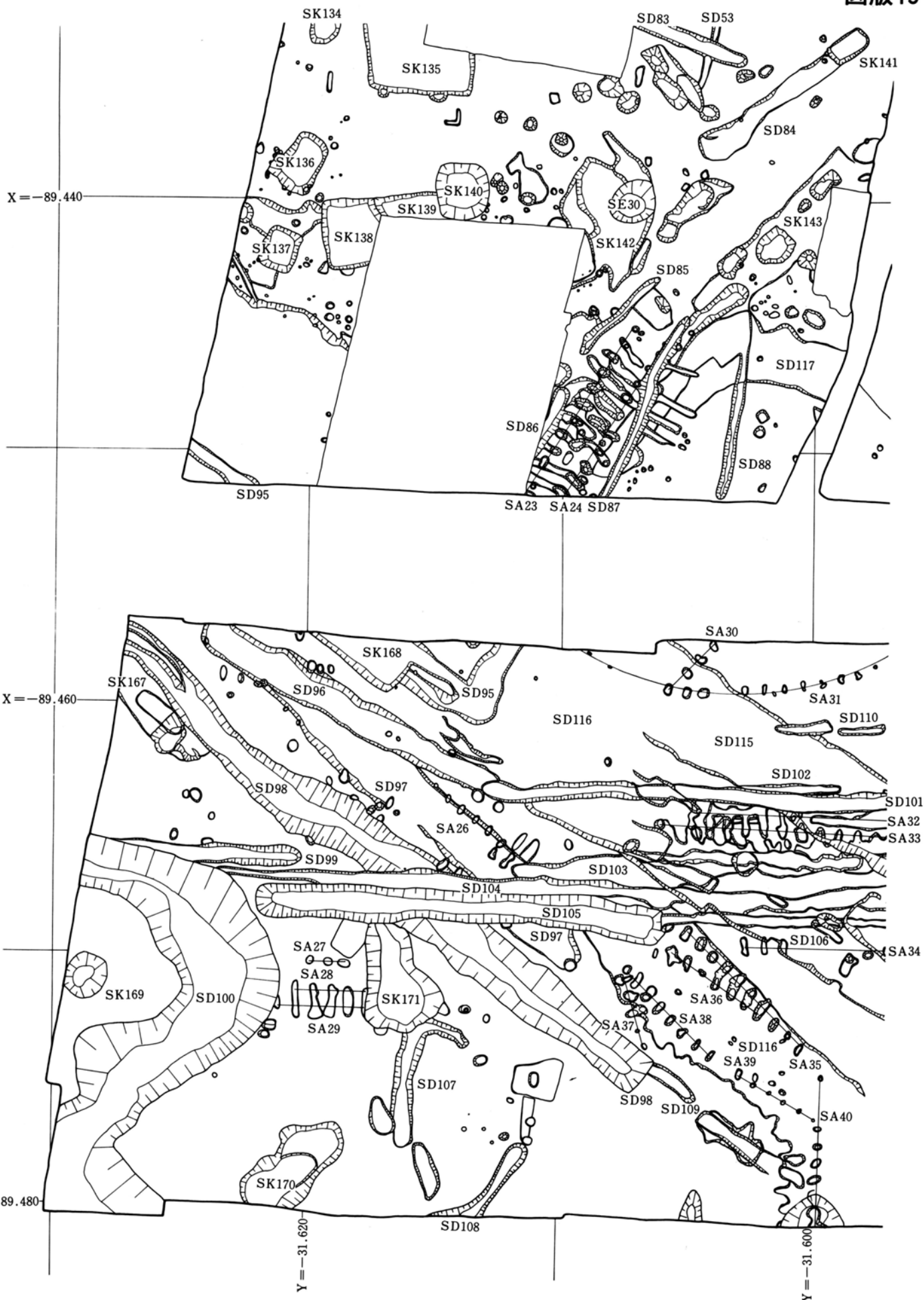


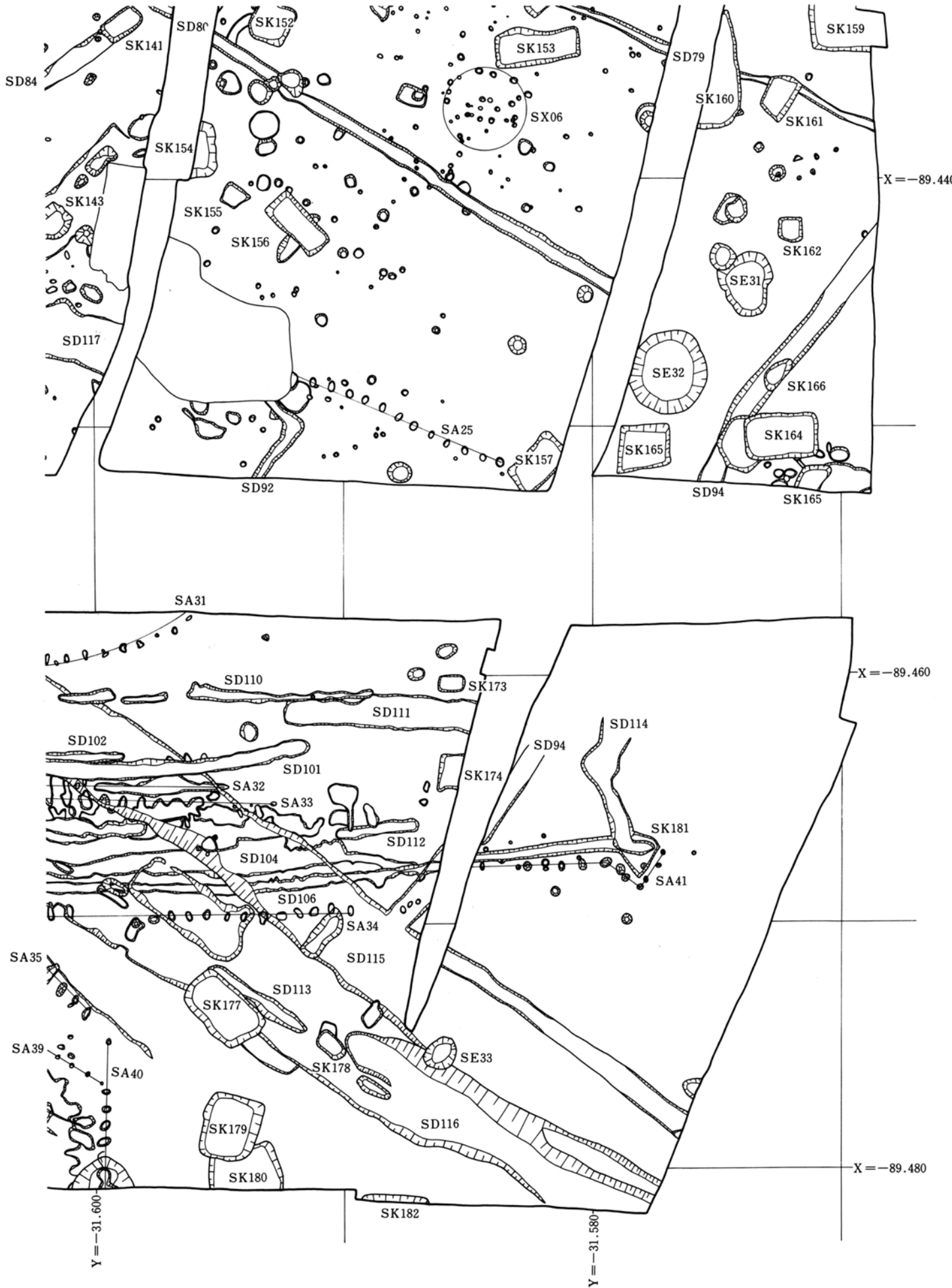


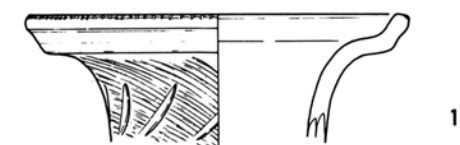








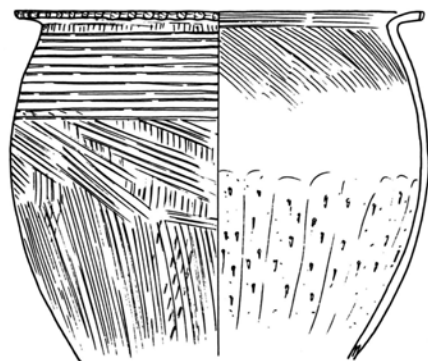




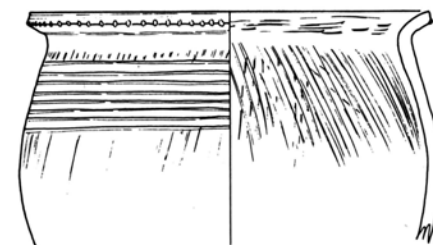
1



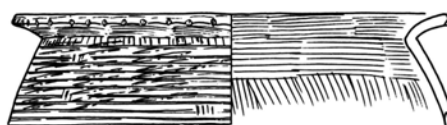
3



2



4



5

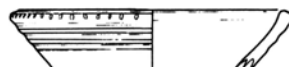
—— SB01 ——



6



7



8



9

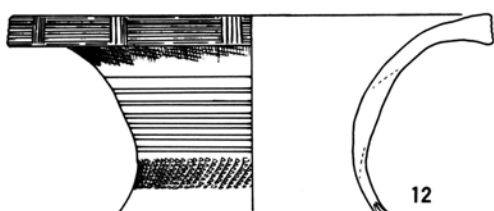


10



11

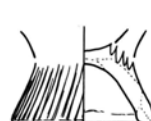
—— SB02 ——



12



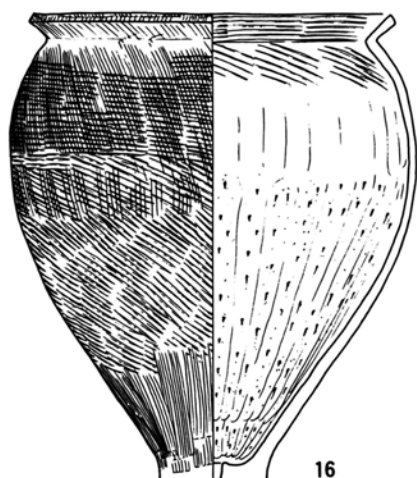
13



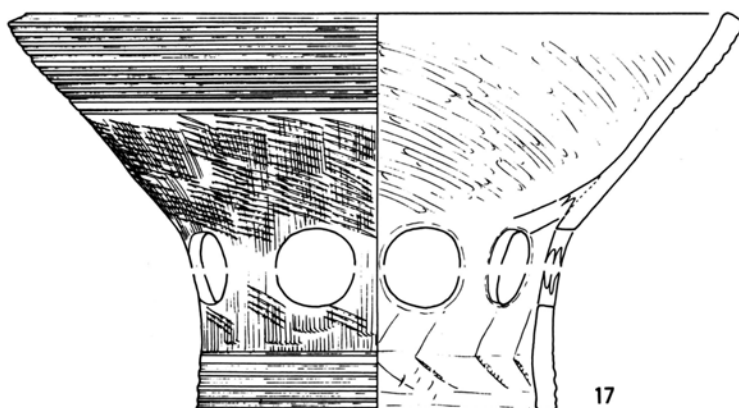
14



15

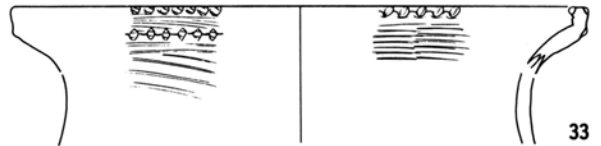
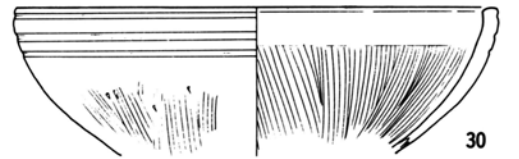
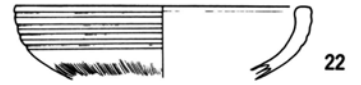
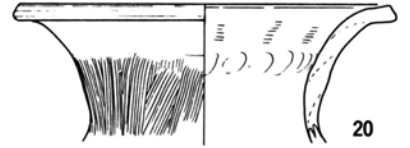
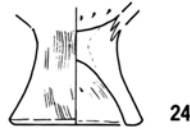
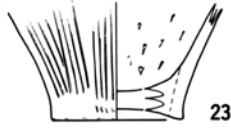
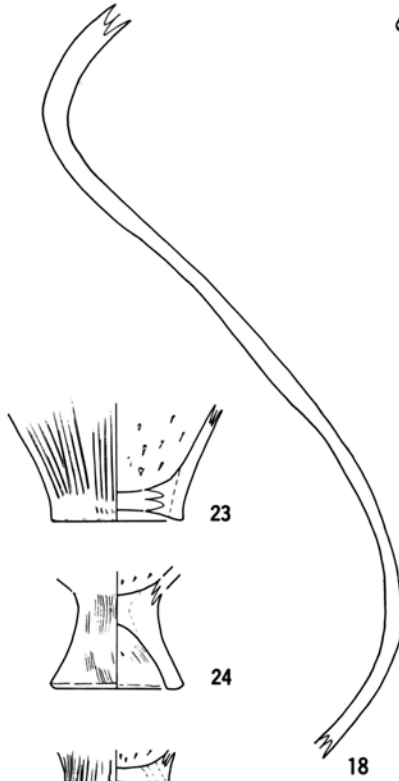
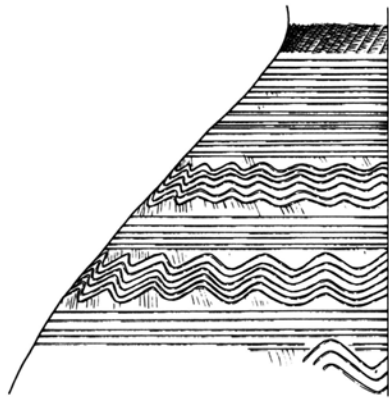
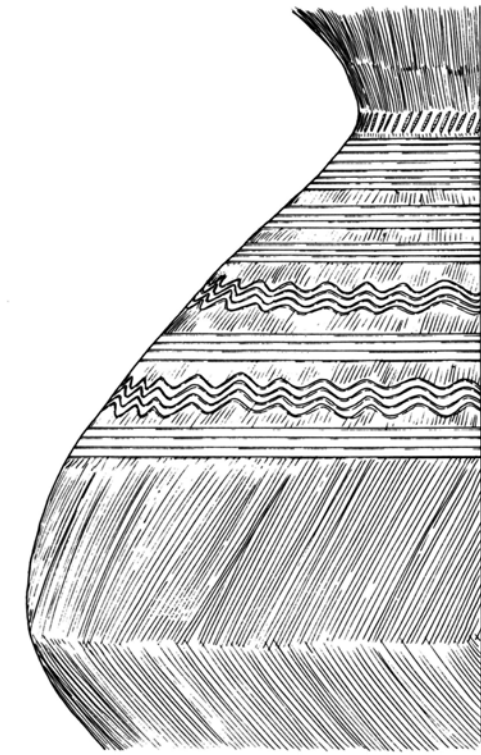


16

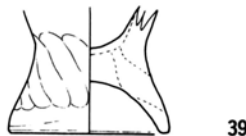
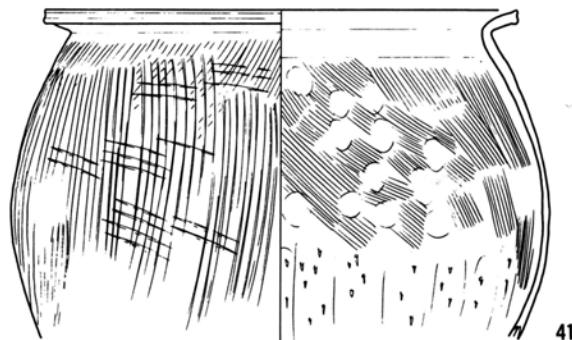
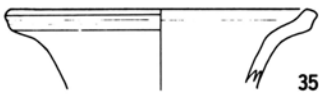
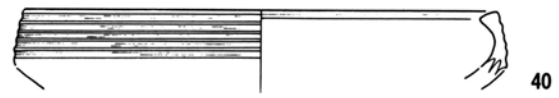


17

—— SB03 ——



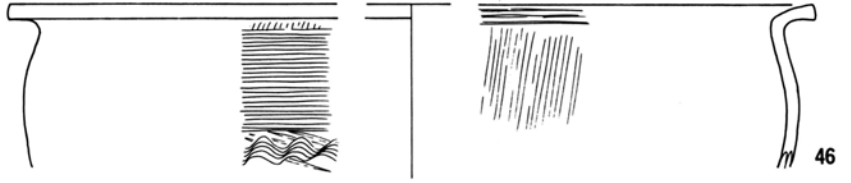
SB05



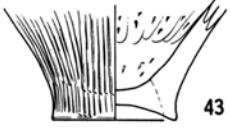
SB06



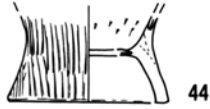
42



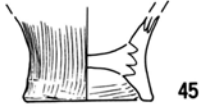
46



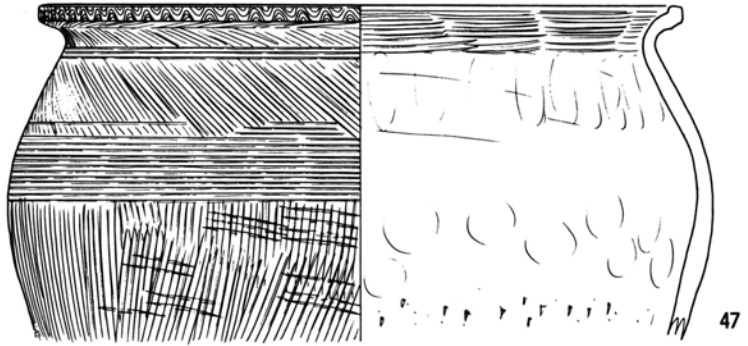
43



44



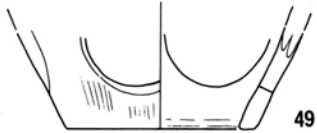
45



47



48

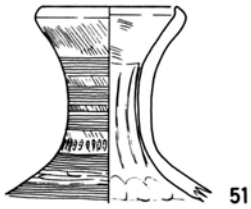


49

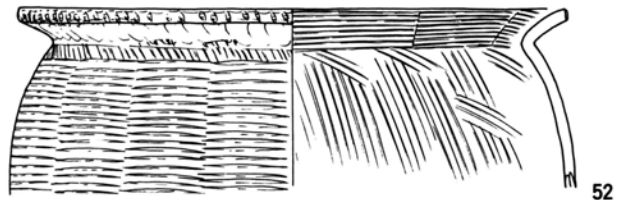


50

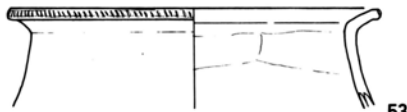
— SB06 —



51



52

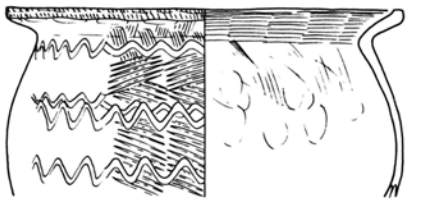


53



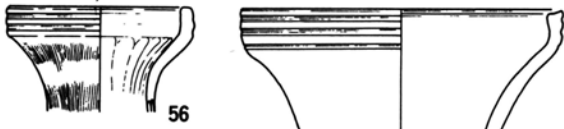
54

— SB08 —

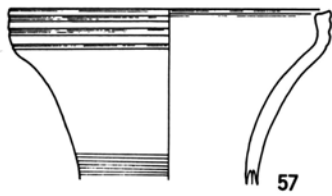


55

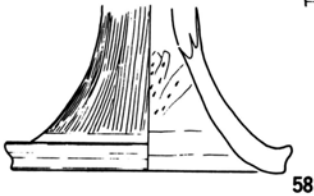
— 包含層 —



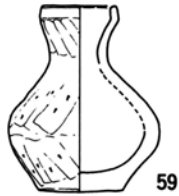
56



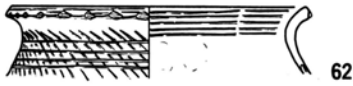
57



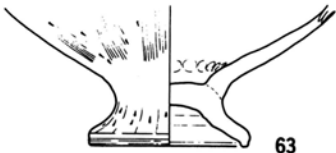
58



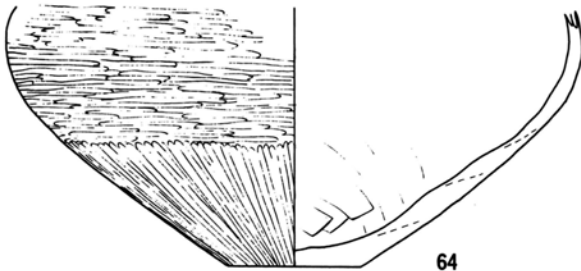
59



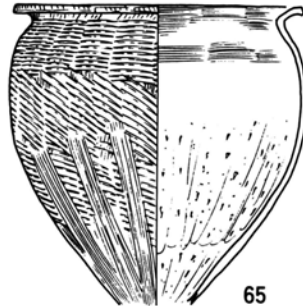
62



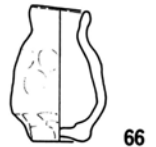
63



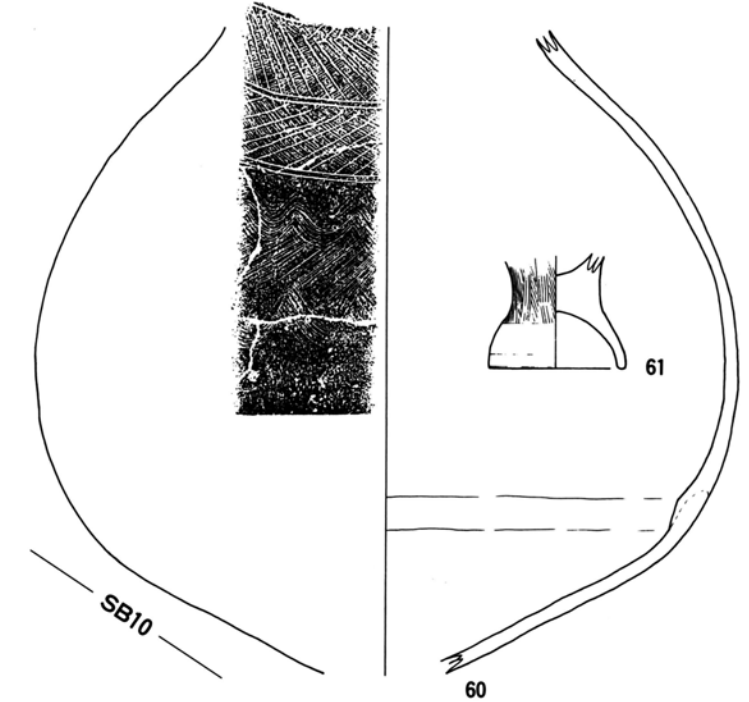
64



65



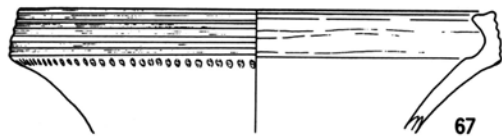
66



60

SB10

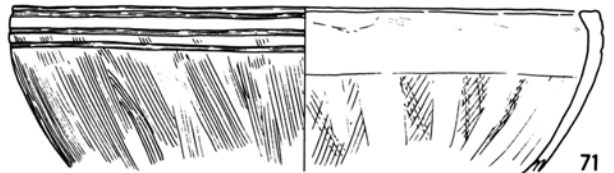
SB11



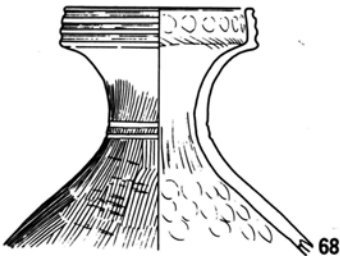
67



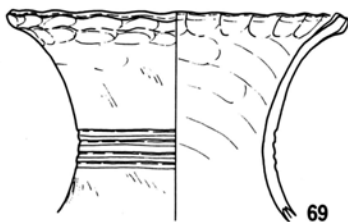
70



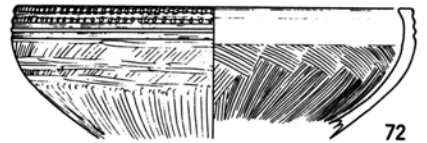
71



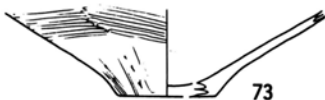
68



69



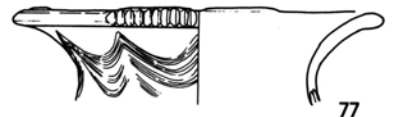
72



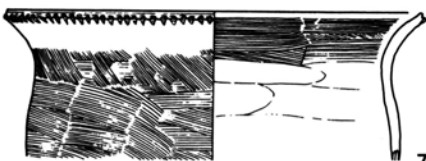
73



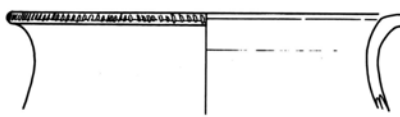
75



77



74

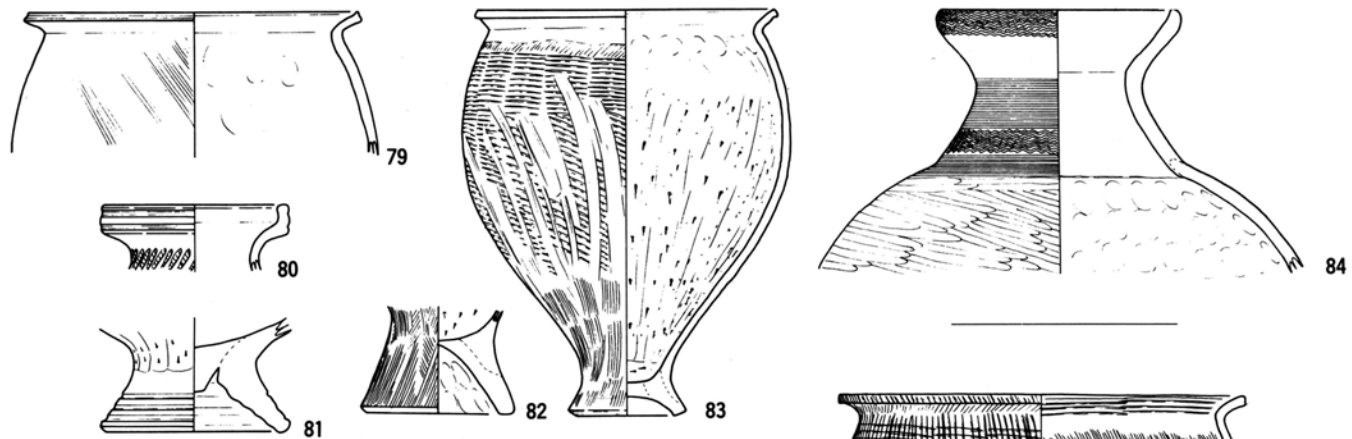


76

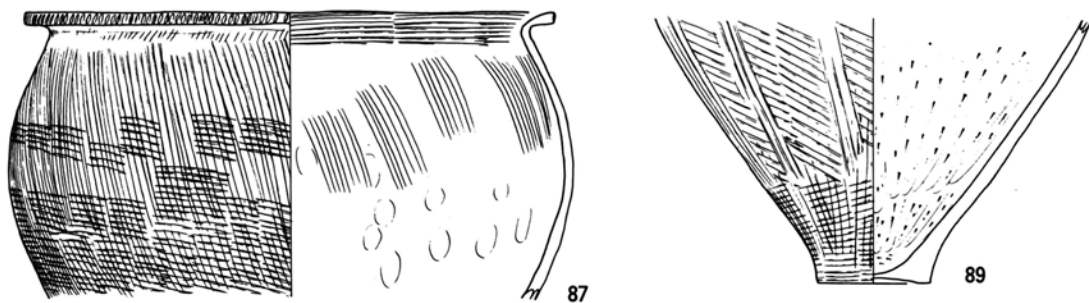
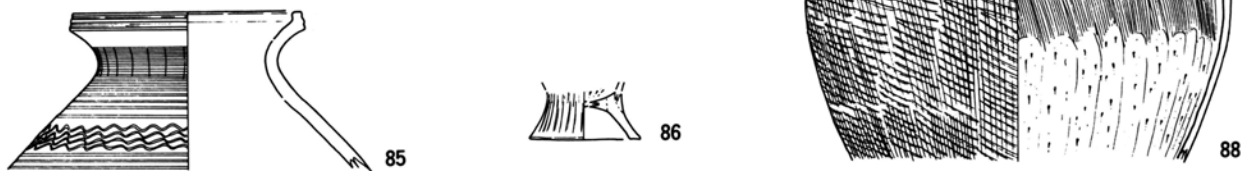


78

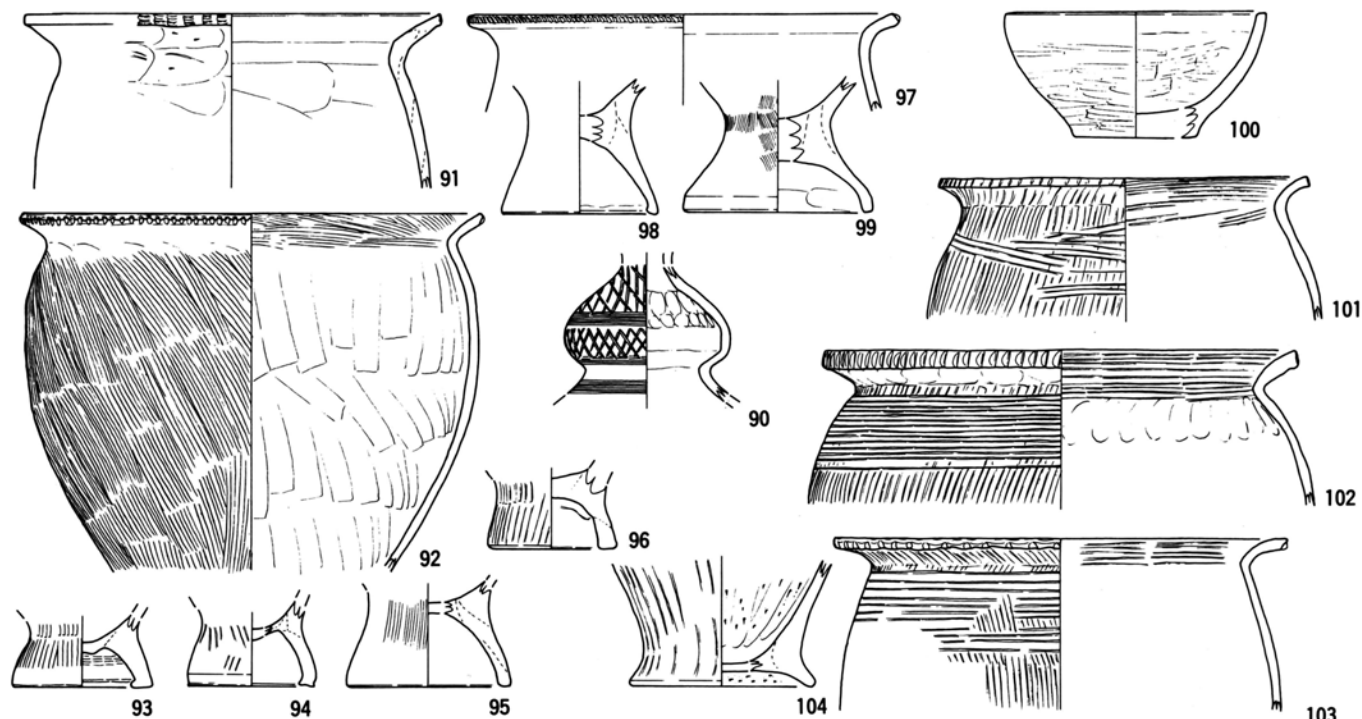
SB12



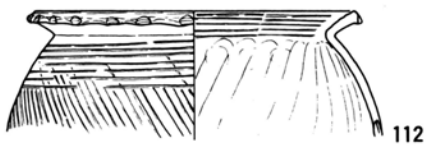
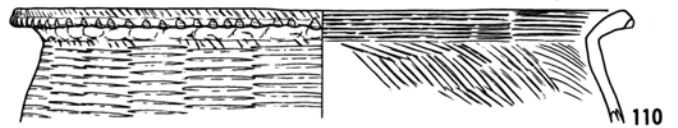
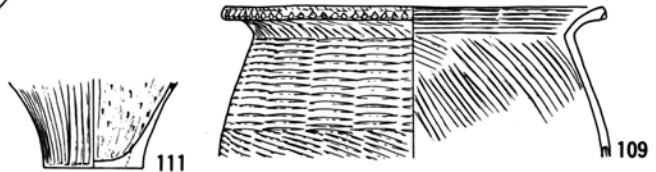
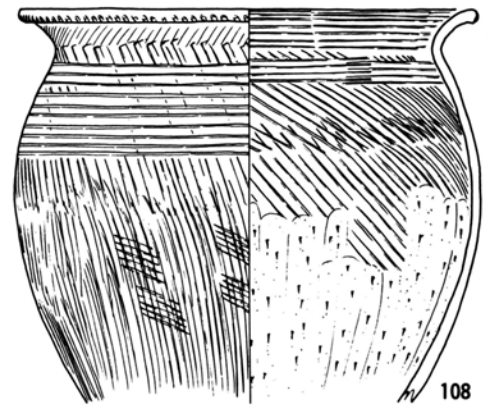
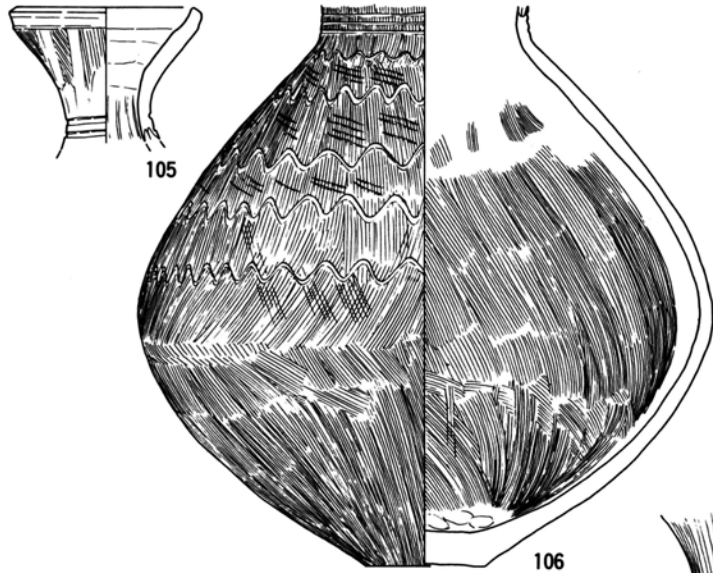
SB14



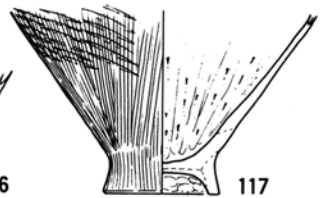
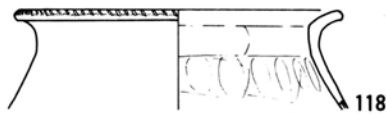
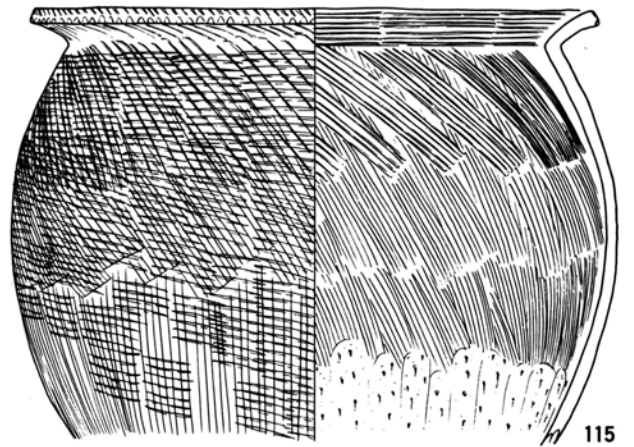
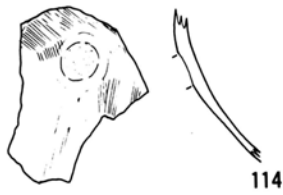
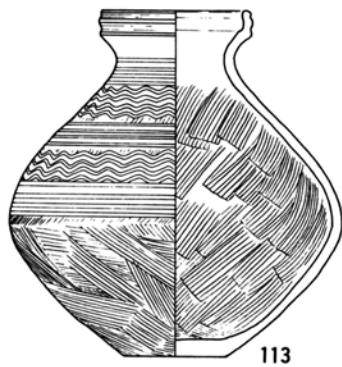
SB20



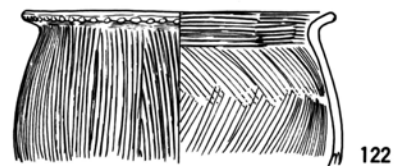
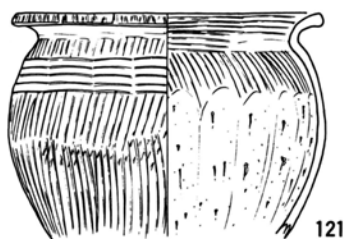
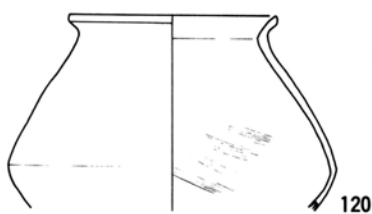
SB21



SB21

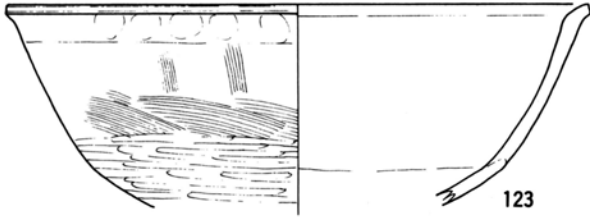


SB22

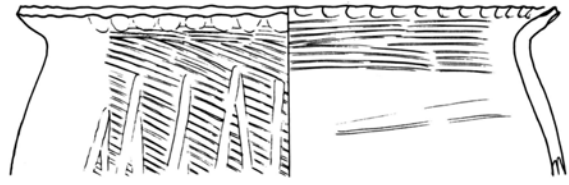


SB23

SB24

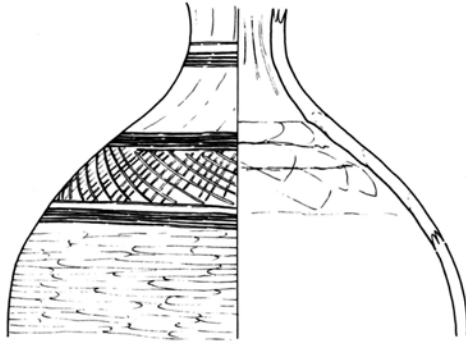


123

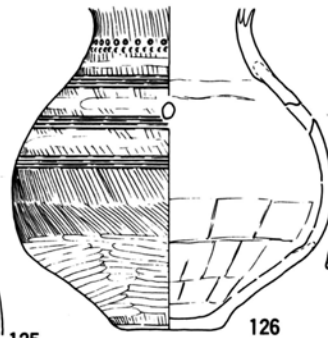


124

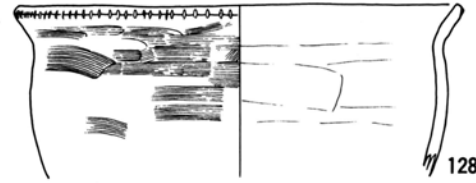
SB26



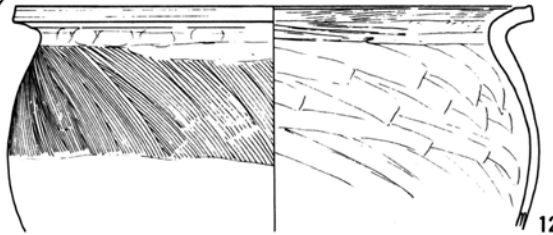
125



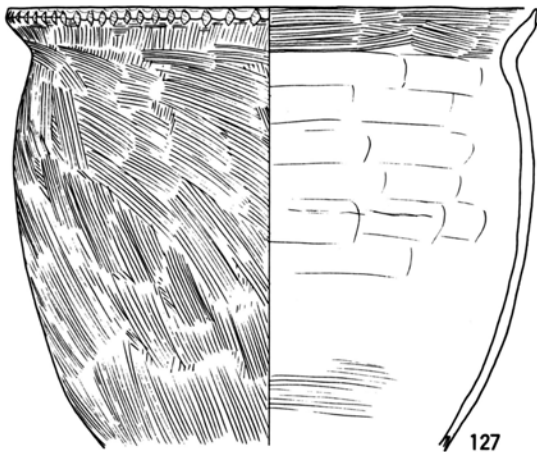
126



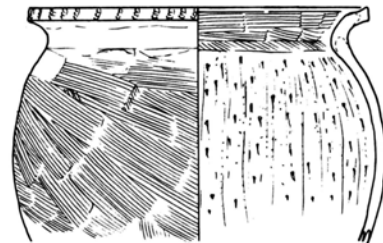
128



129



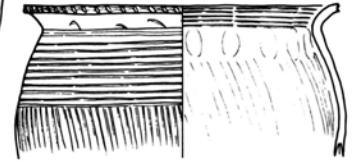
127



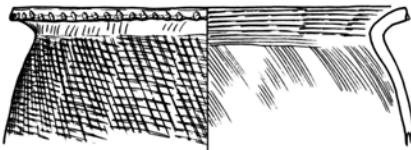
131



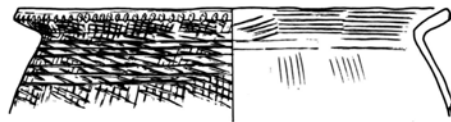
130



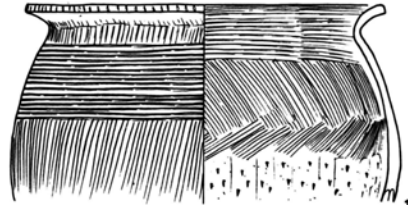
135



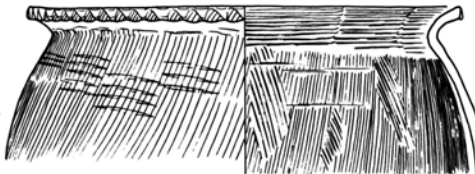
132



134



136



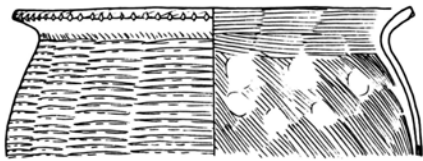
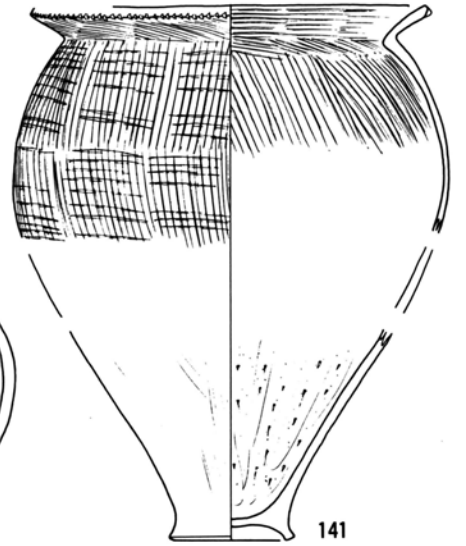
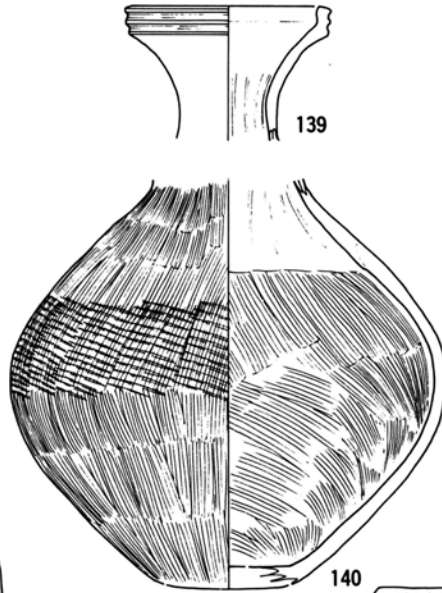
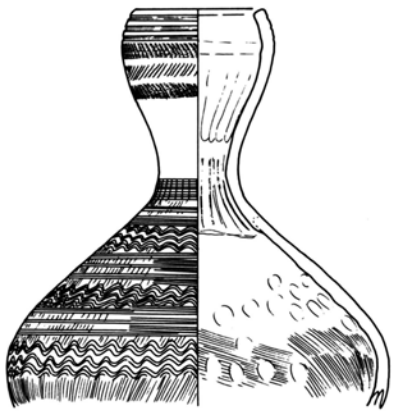
133

SB27

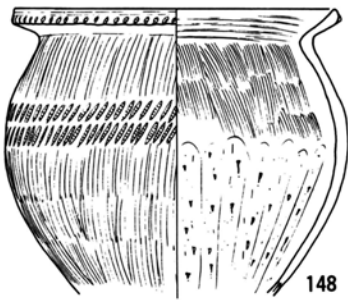


137

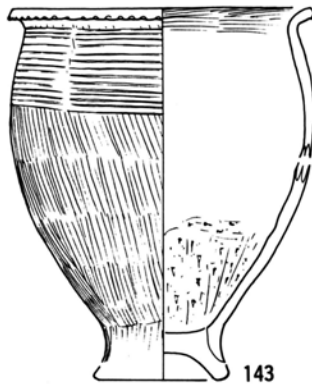
SK10



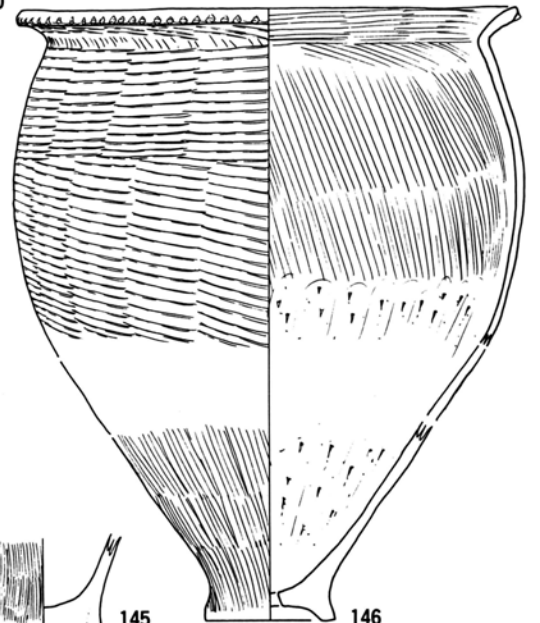
142



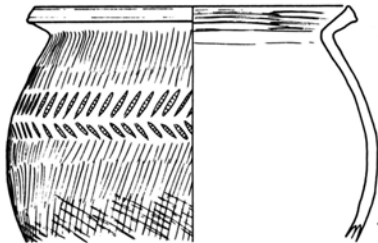
148



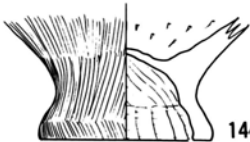
143



146



149



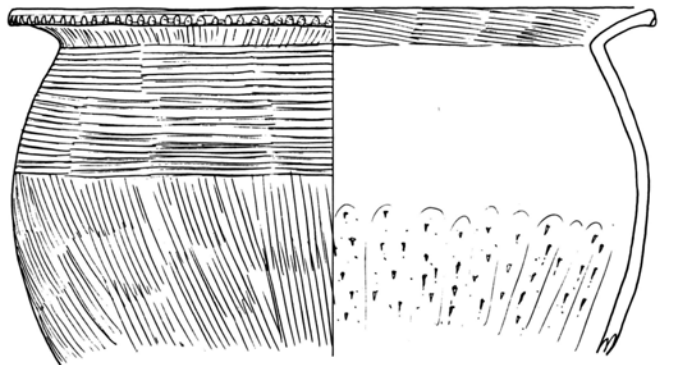
144



145

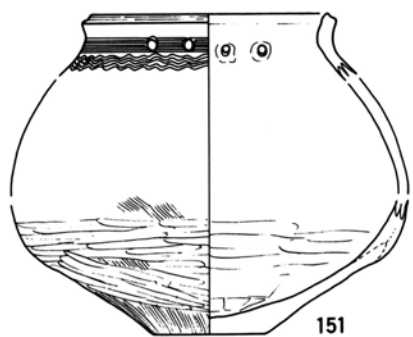


150

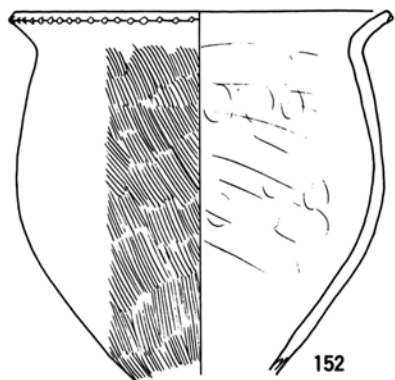


147

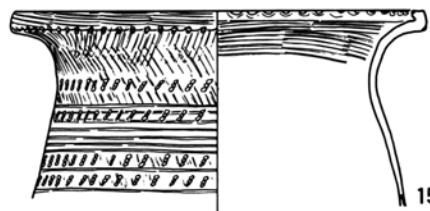
— SB35 —



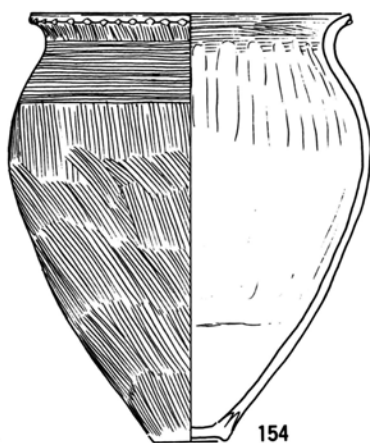
151



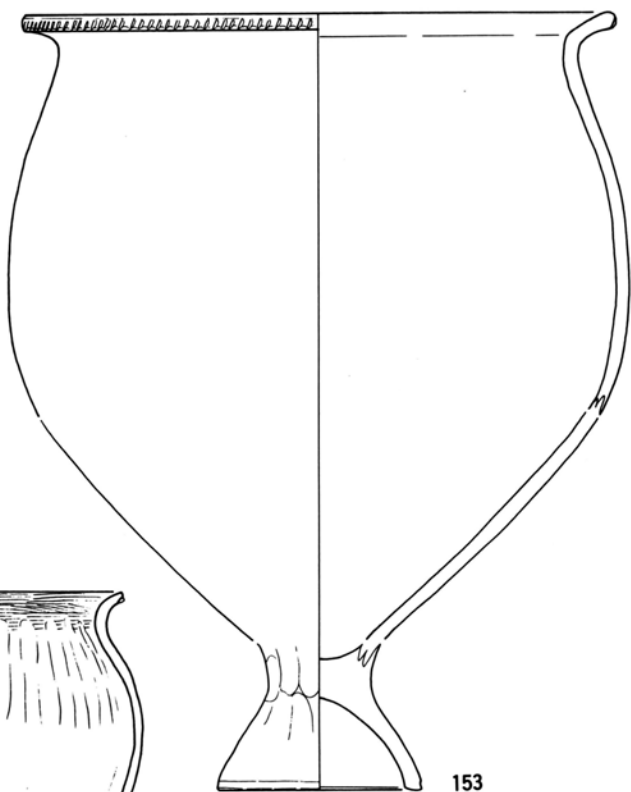
152



155

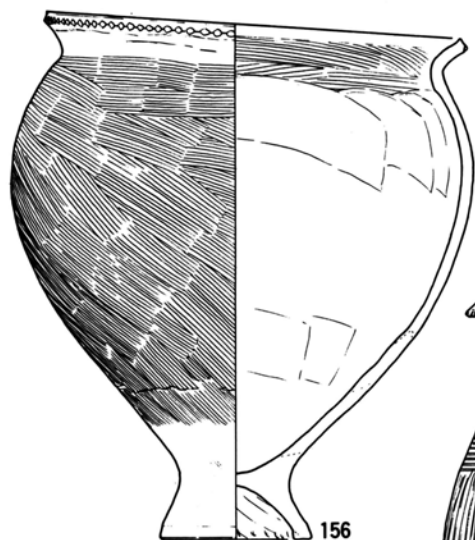


154



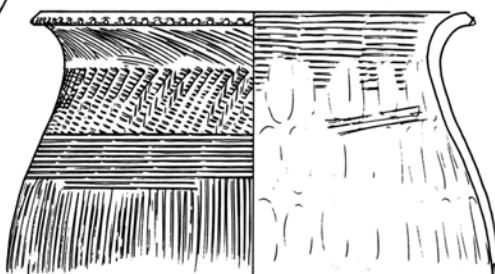
153

— SB35 —



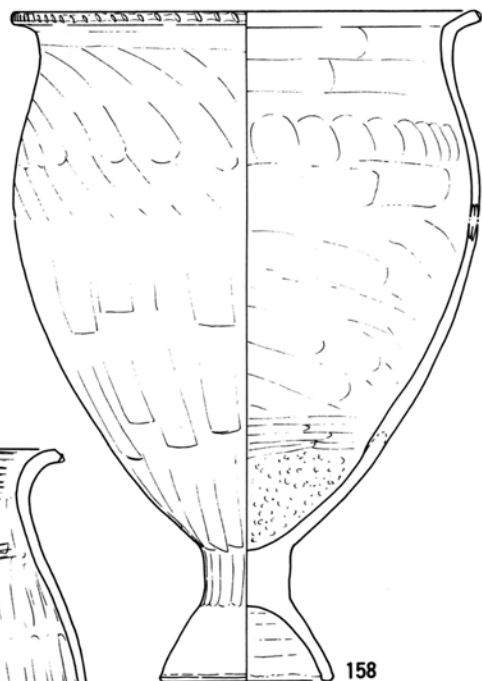
156

— SK47 —



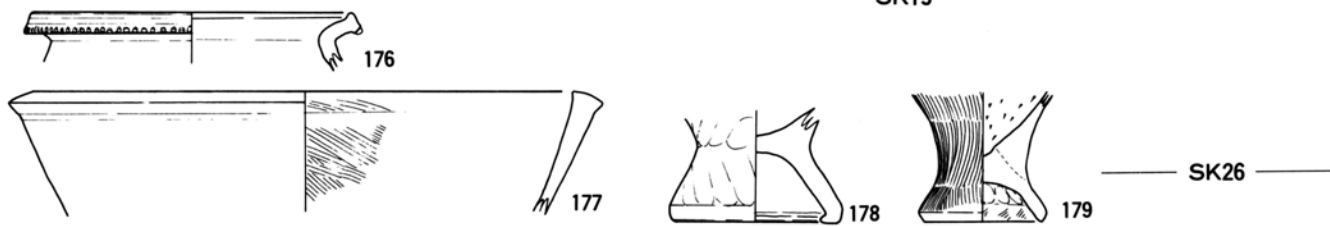
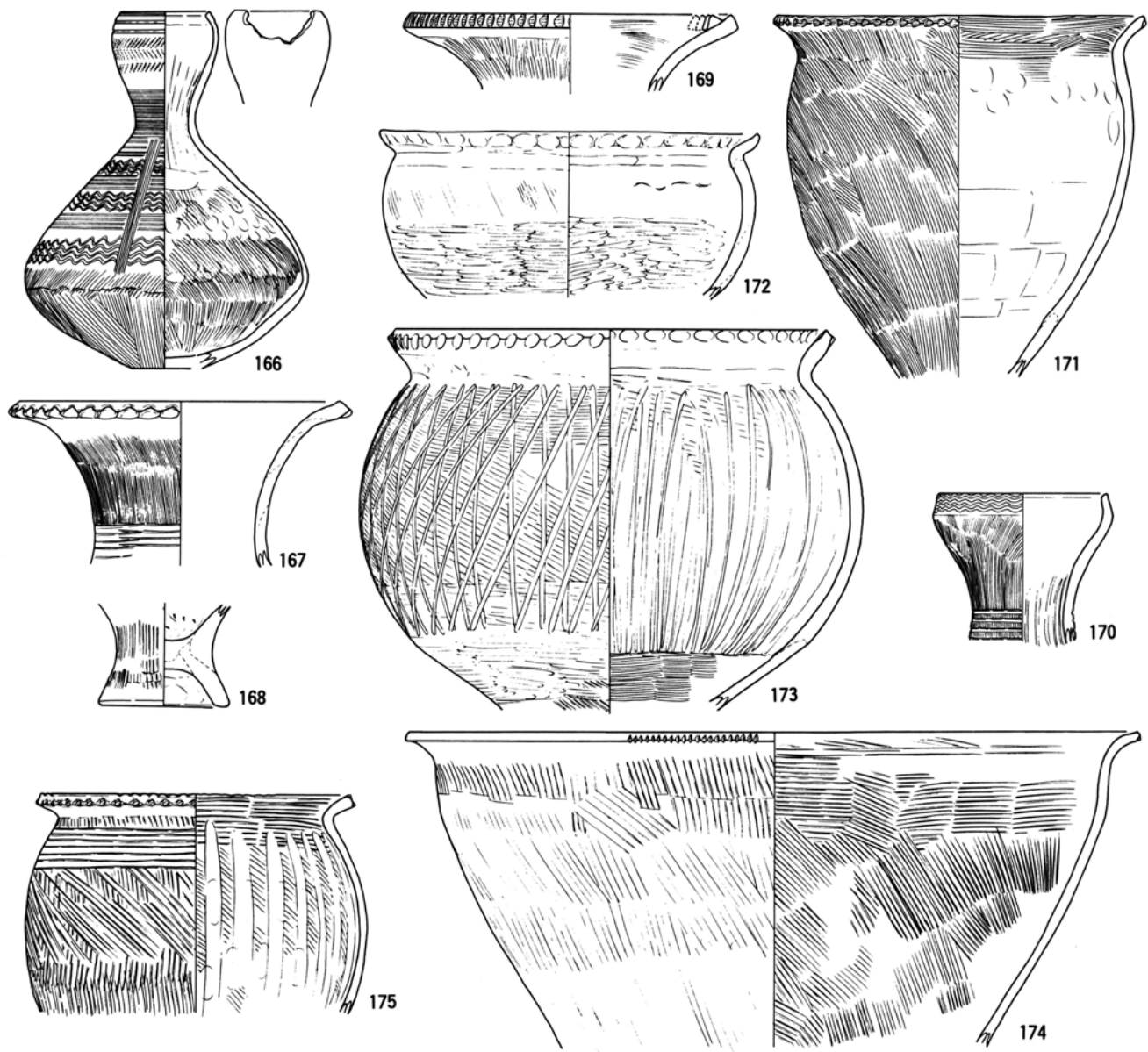
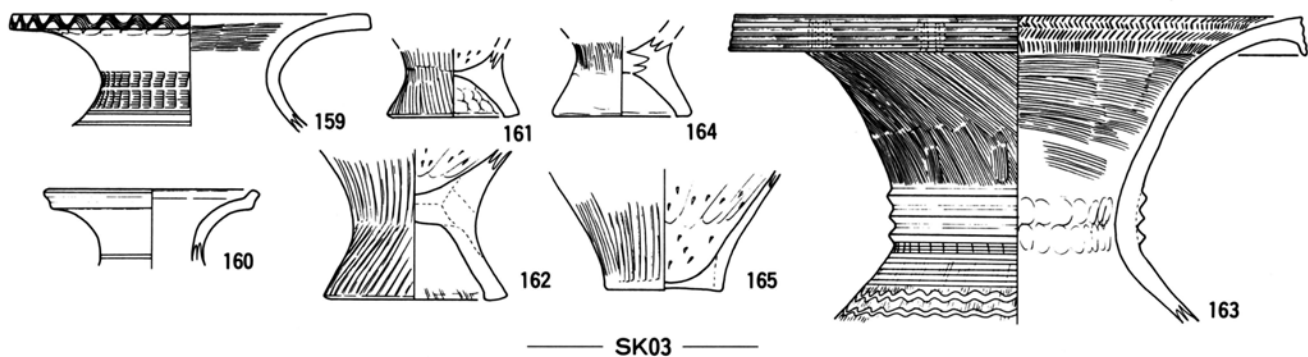
157

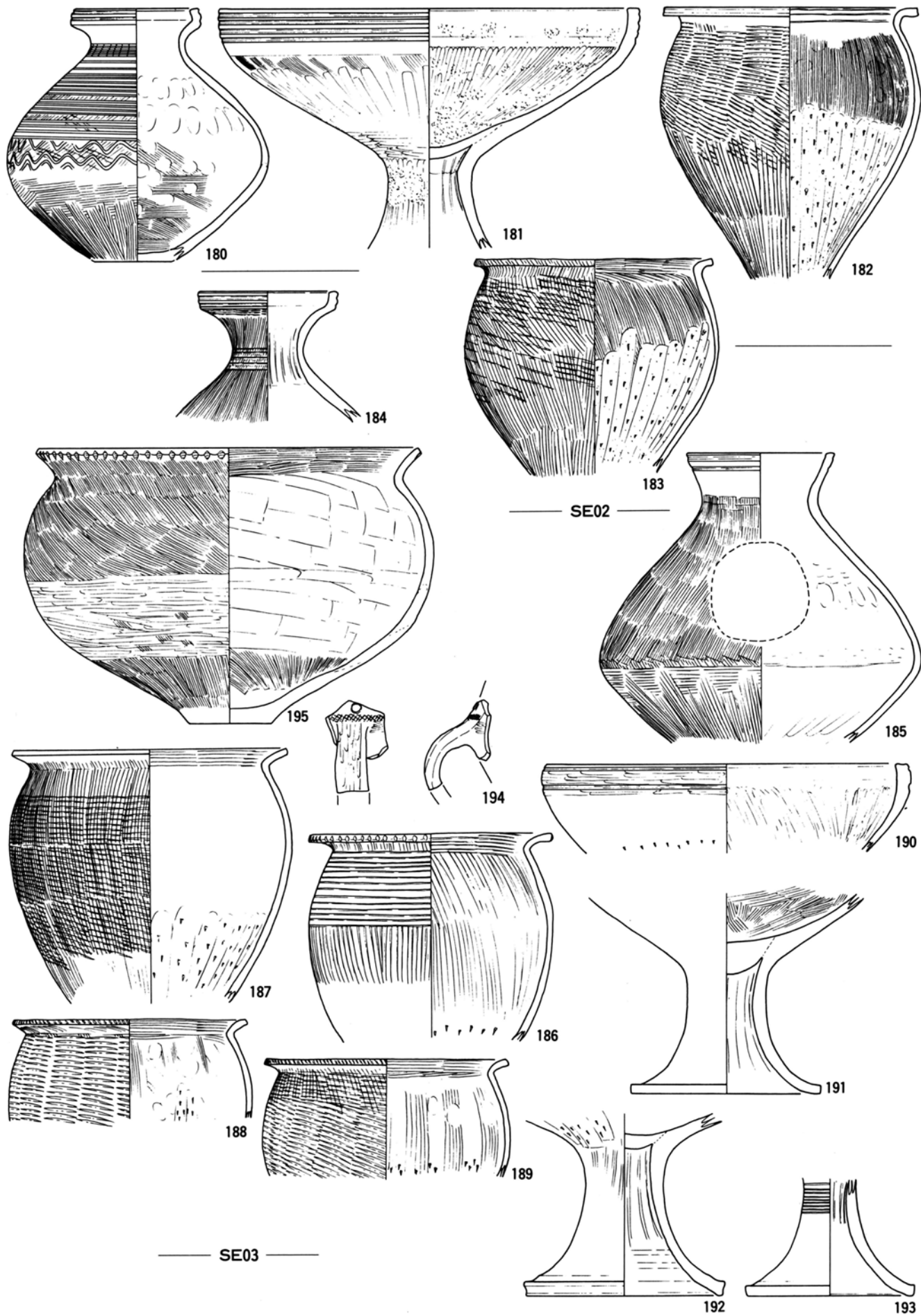
— SK35 —

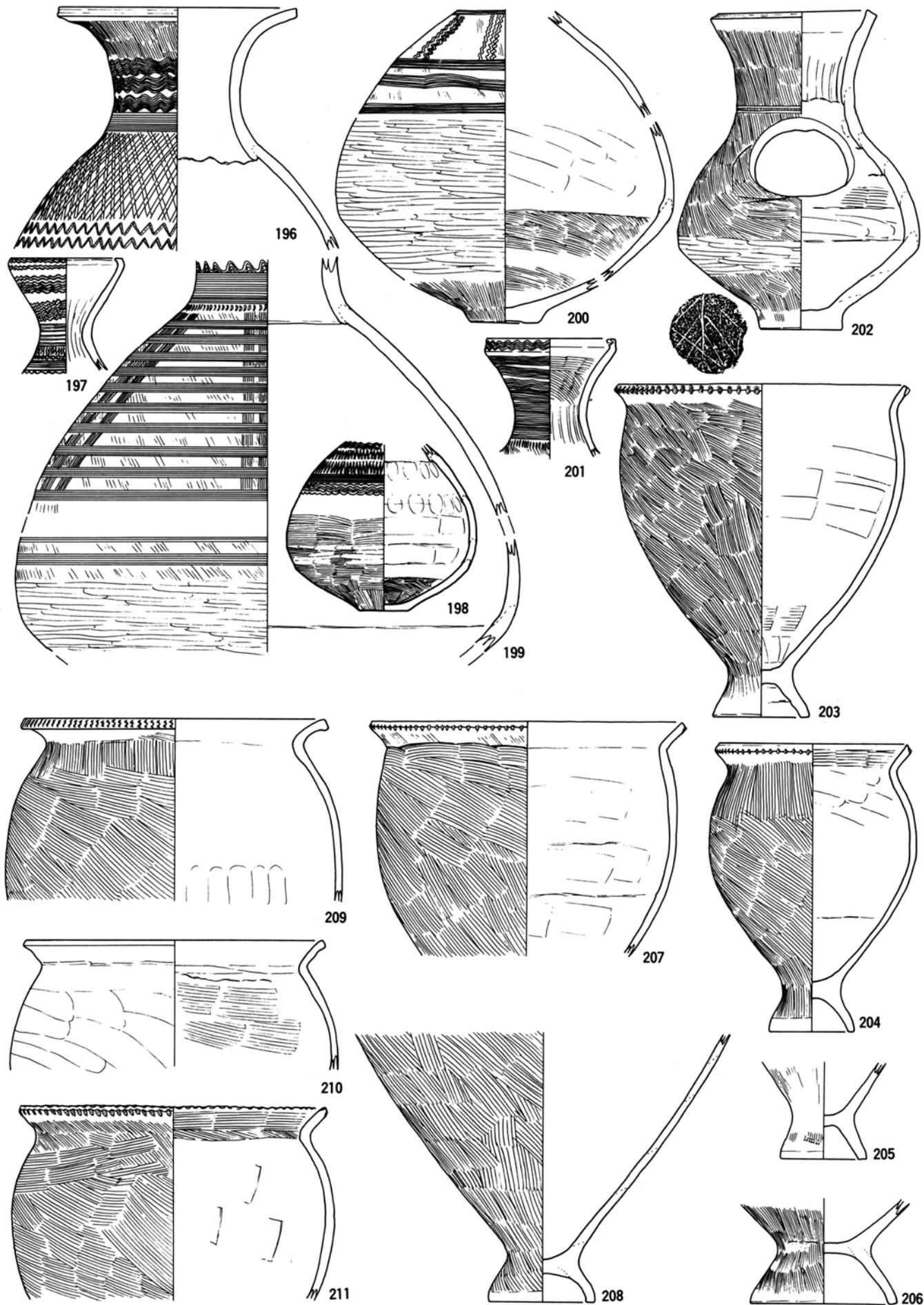


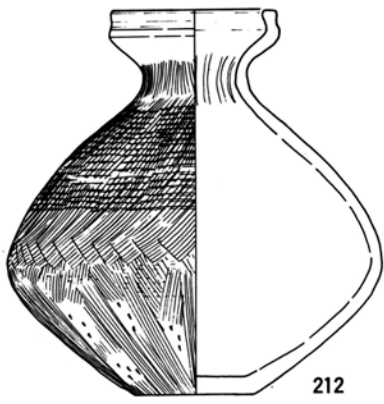
158

— SK12 —

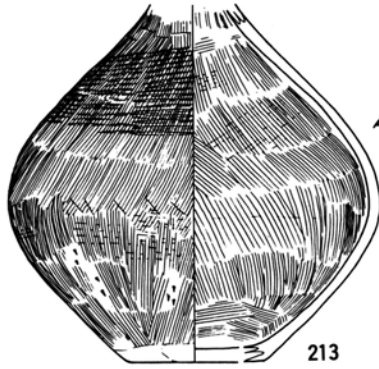




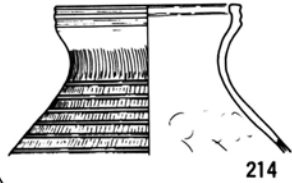




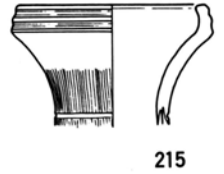
212



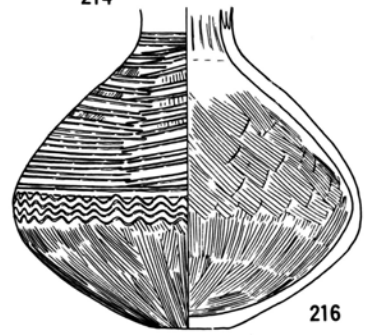
213



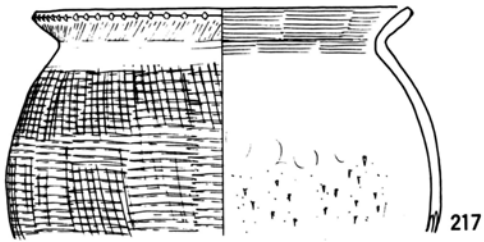
214



215



216



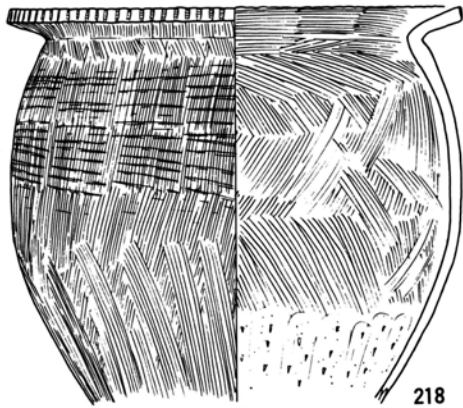
217



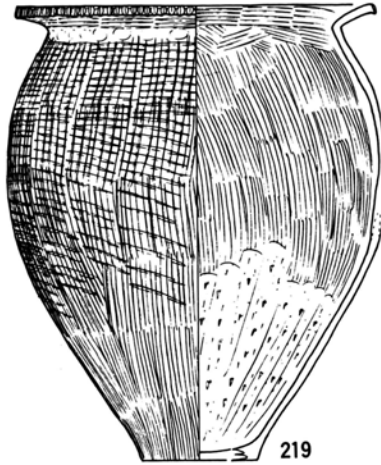
220



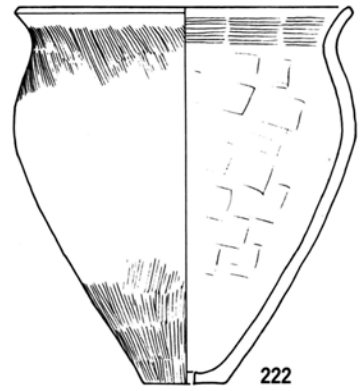
221



218



219

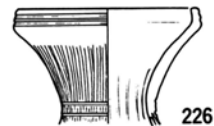


222

— SE03 —



223



226

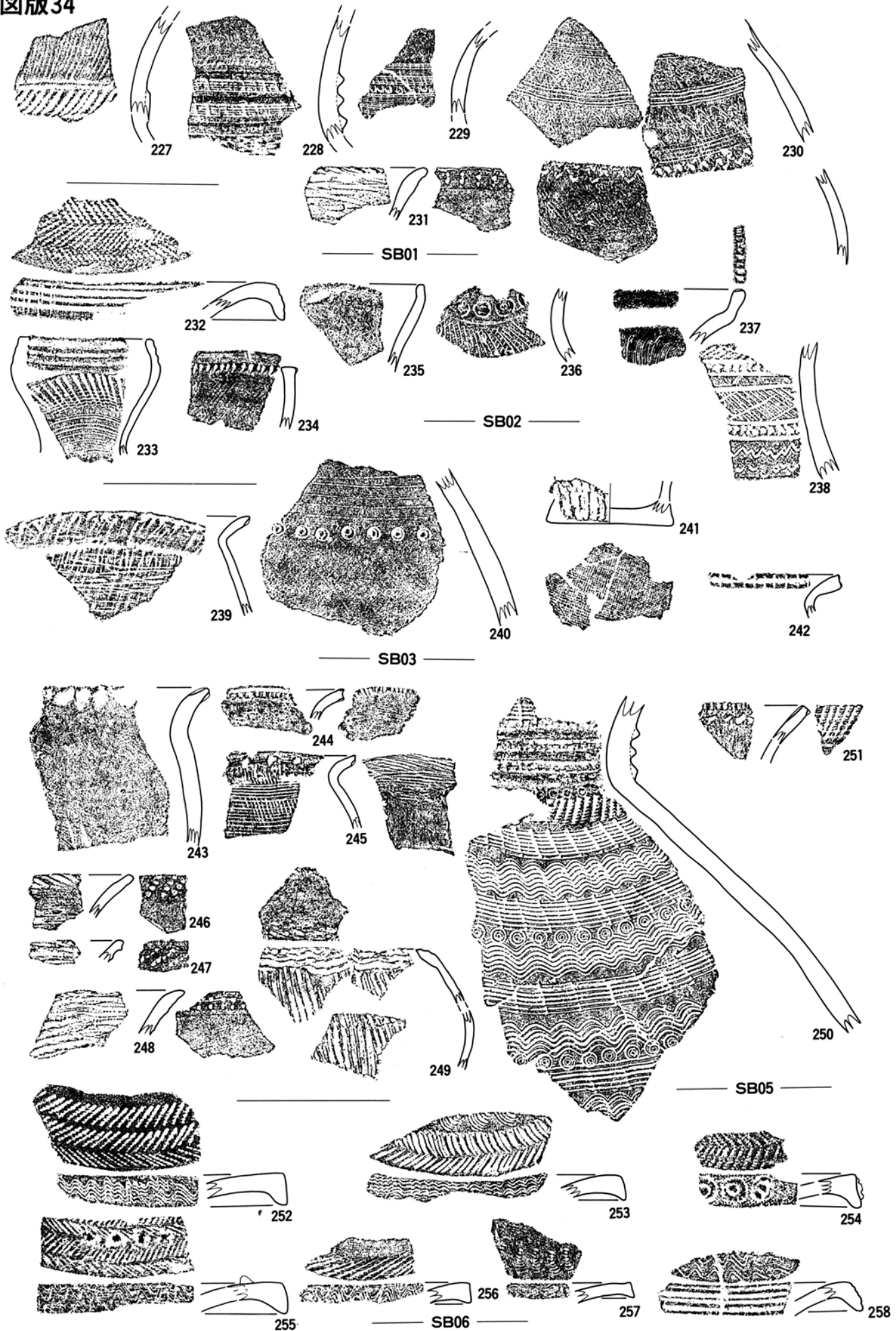


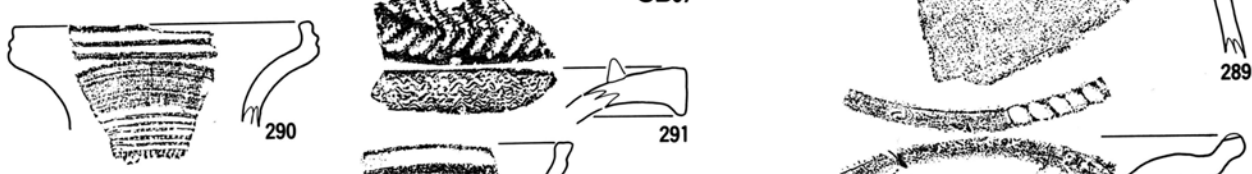
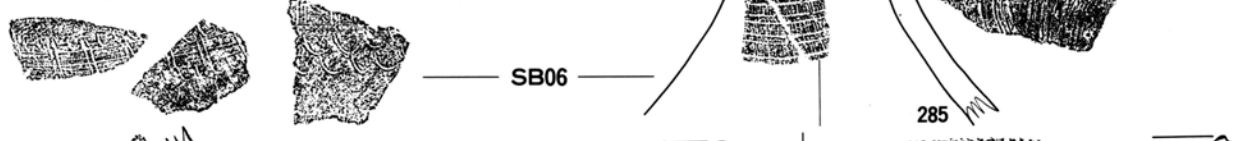
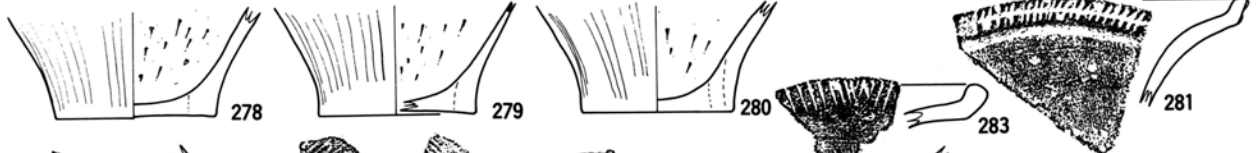
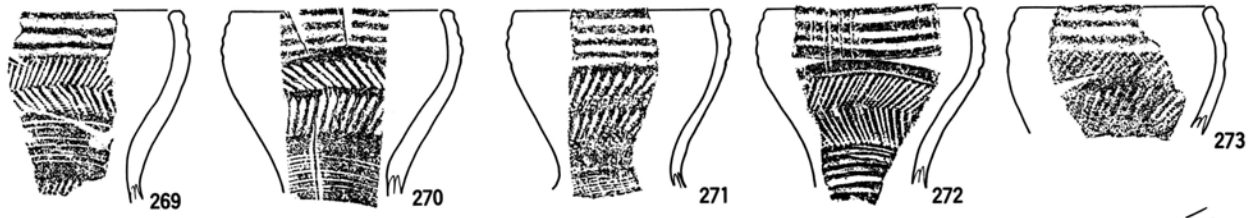
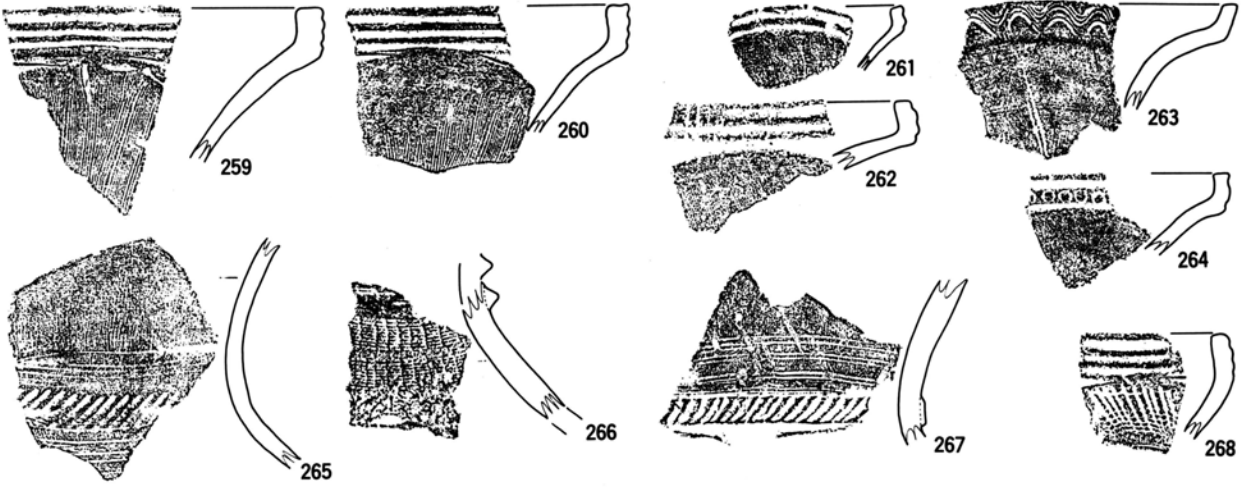
224



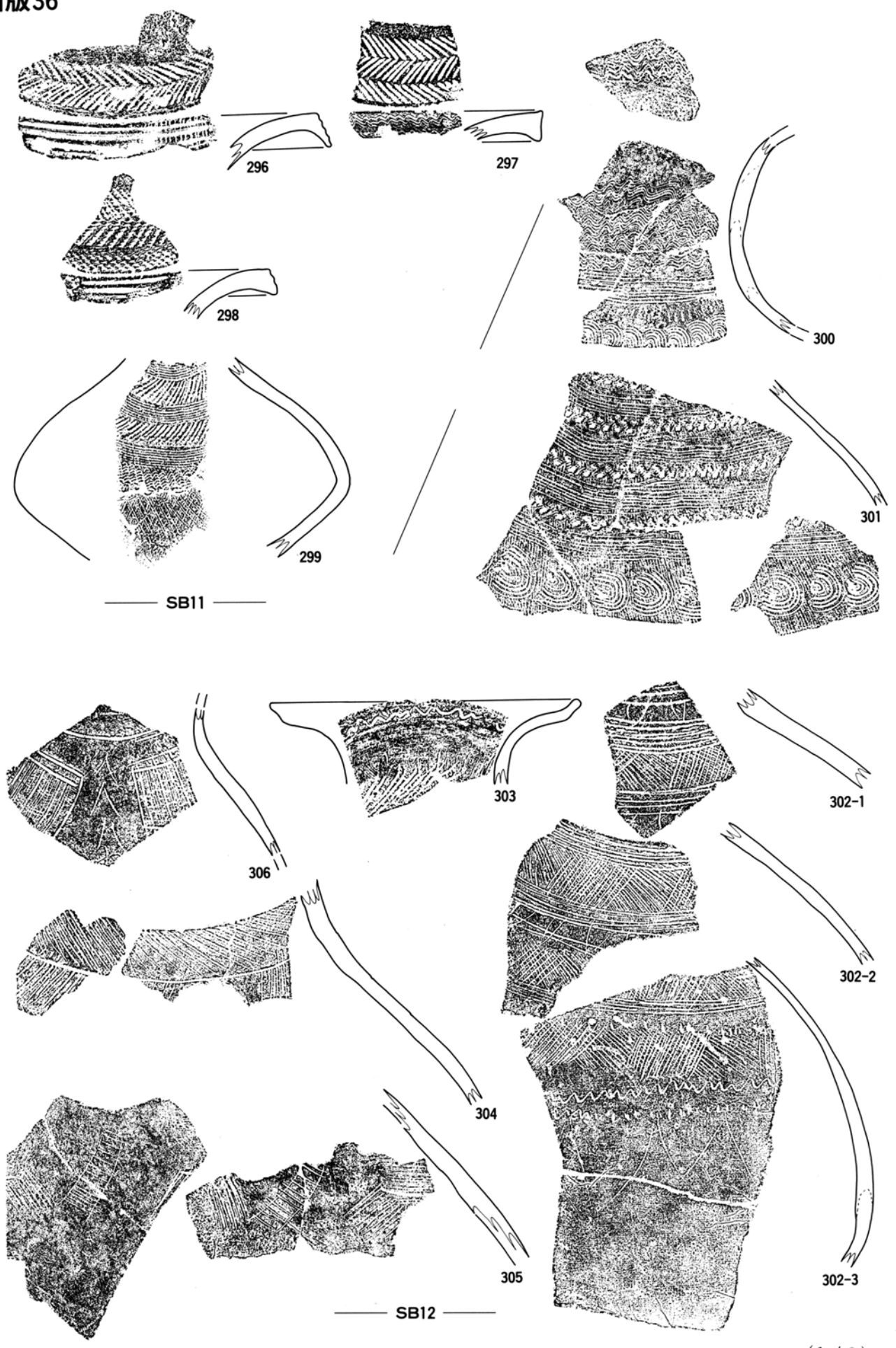
225

— SD01 —



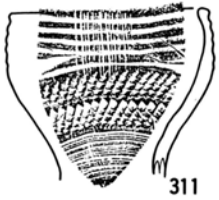


SB08





SB12



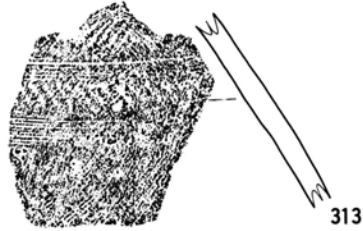
311

SB14



312

SB15



313

SB50



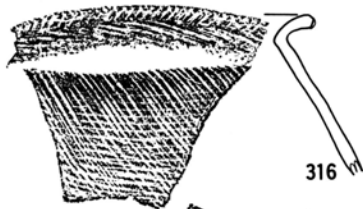
314

SB14



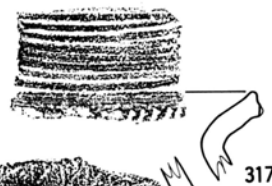
315

SB15



316

SB50



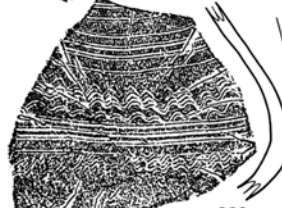
317

SB20



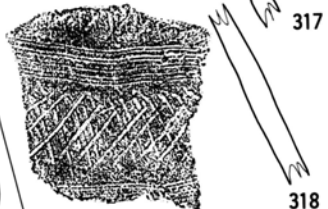
321

SB15



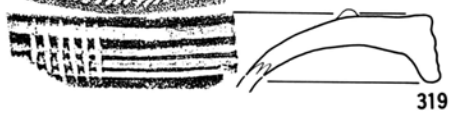
320

SB50



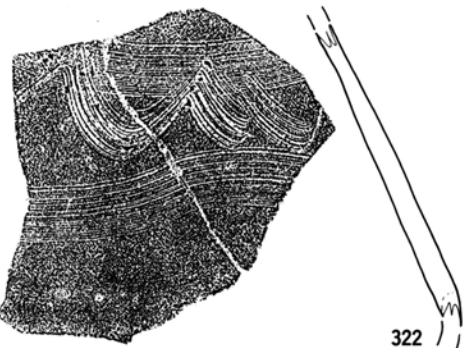
318

SB20



319

SB14

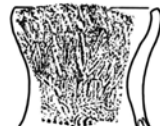


322

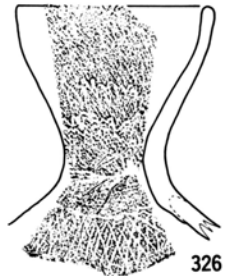
SB21



SB22

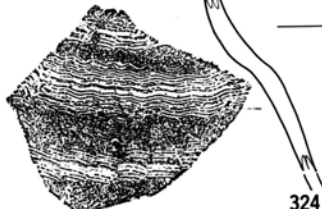


SB26



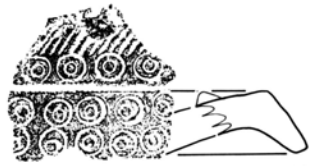
326

SB26



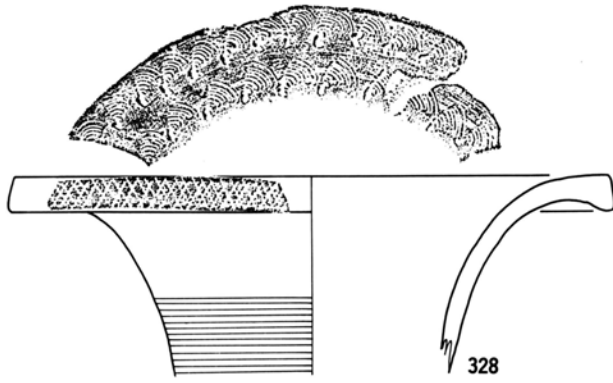
324

SB50



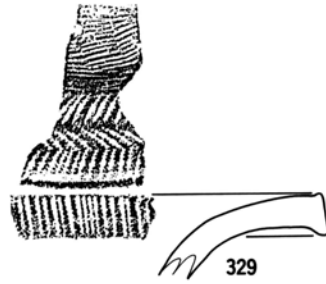
327

SK01

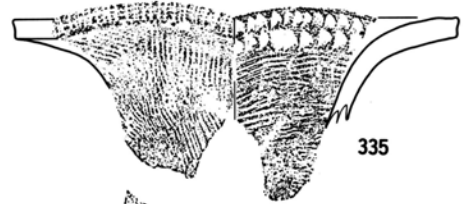


SB24

328



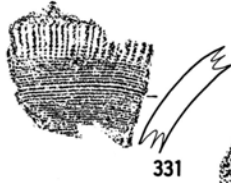
329



335



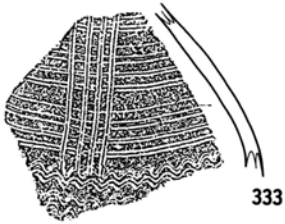
330



331



332

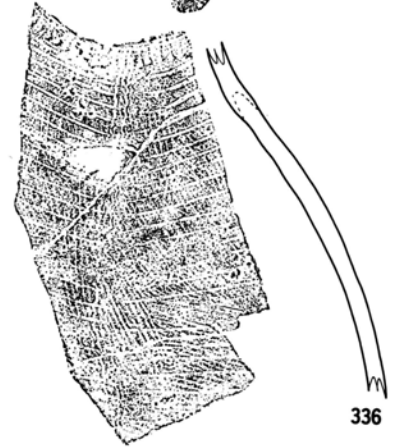


333



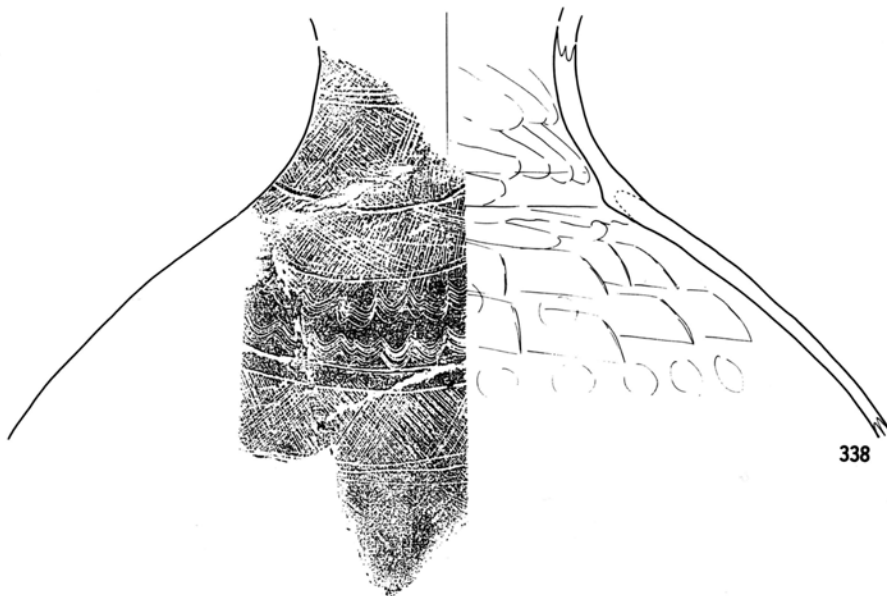
334

SK03



336

SK13



338

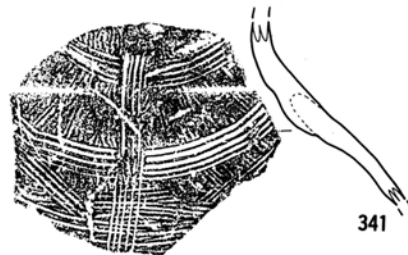
SK36



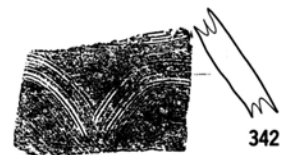
339



340

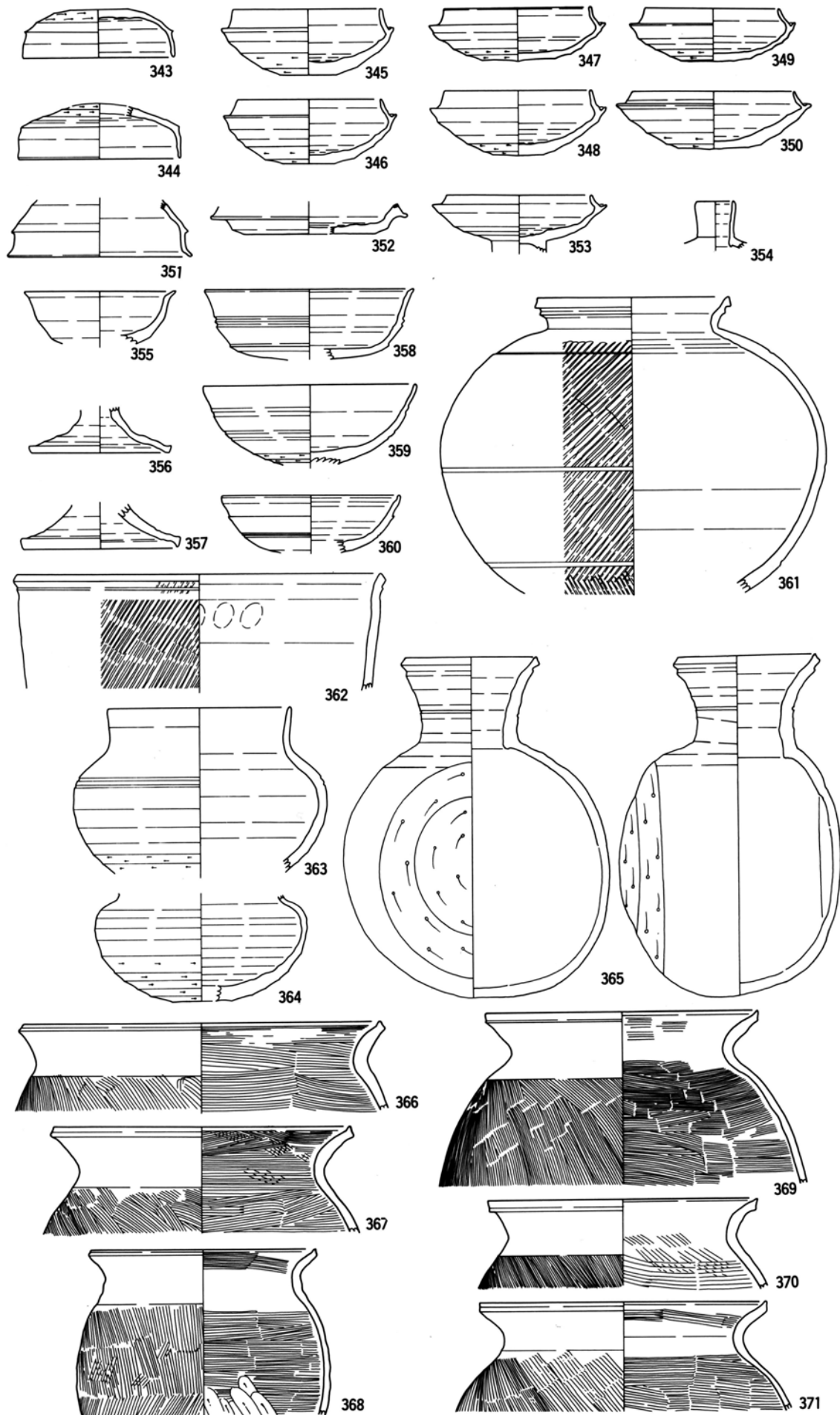


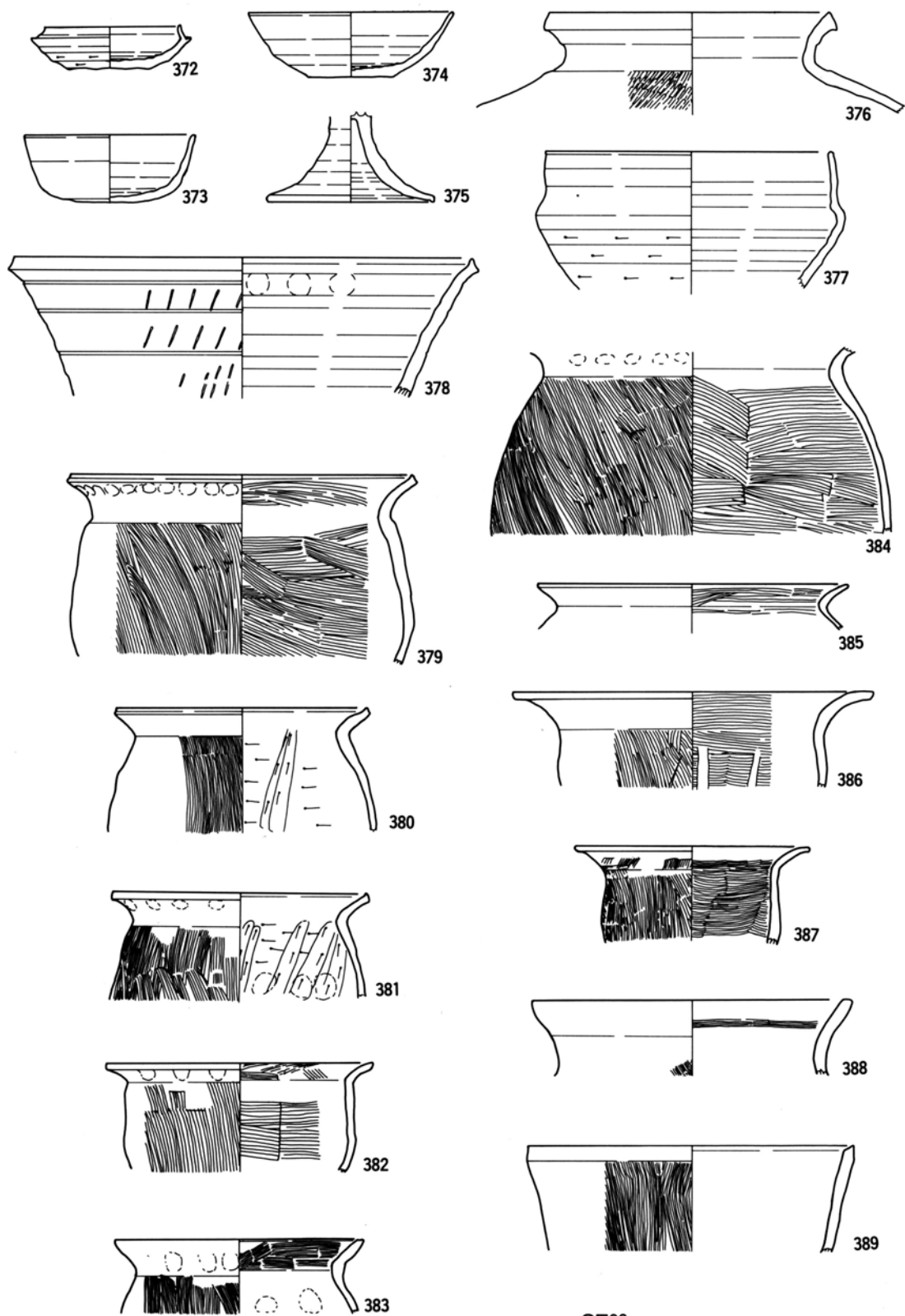
341

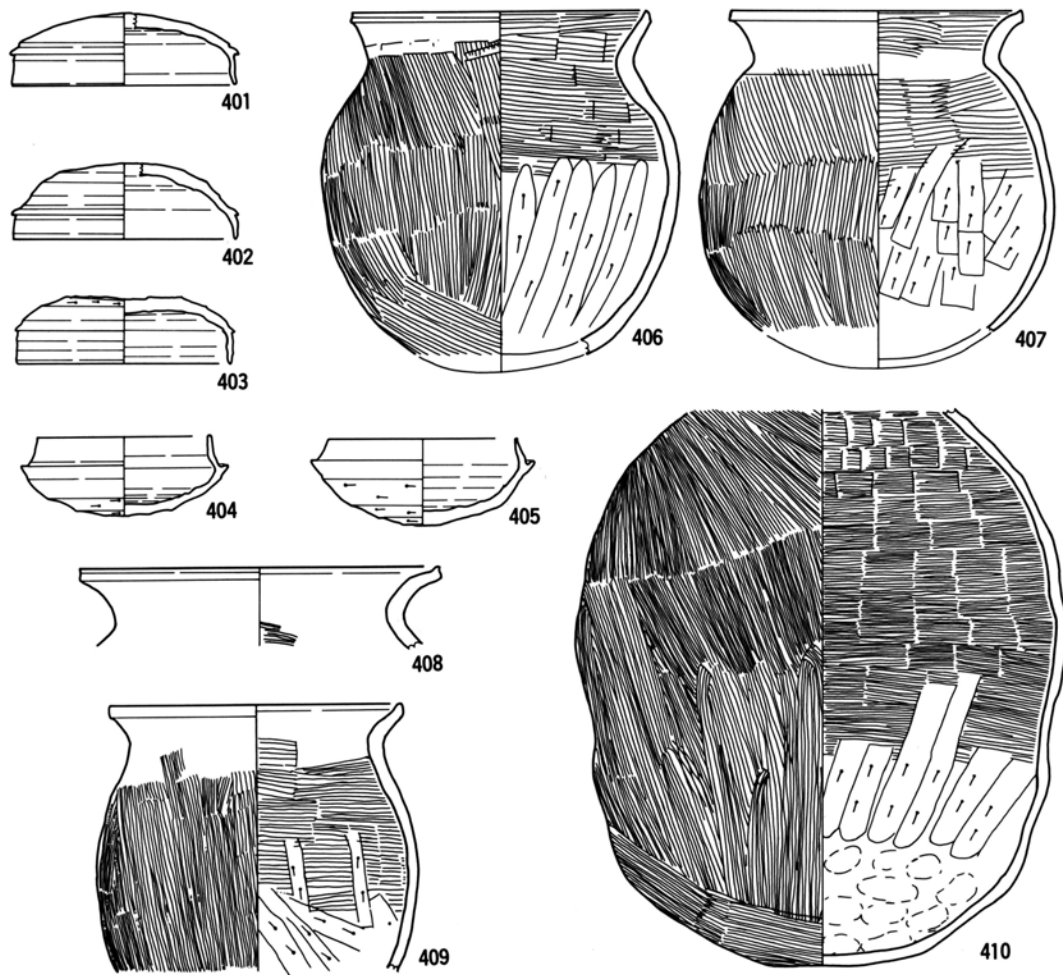
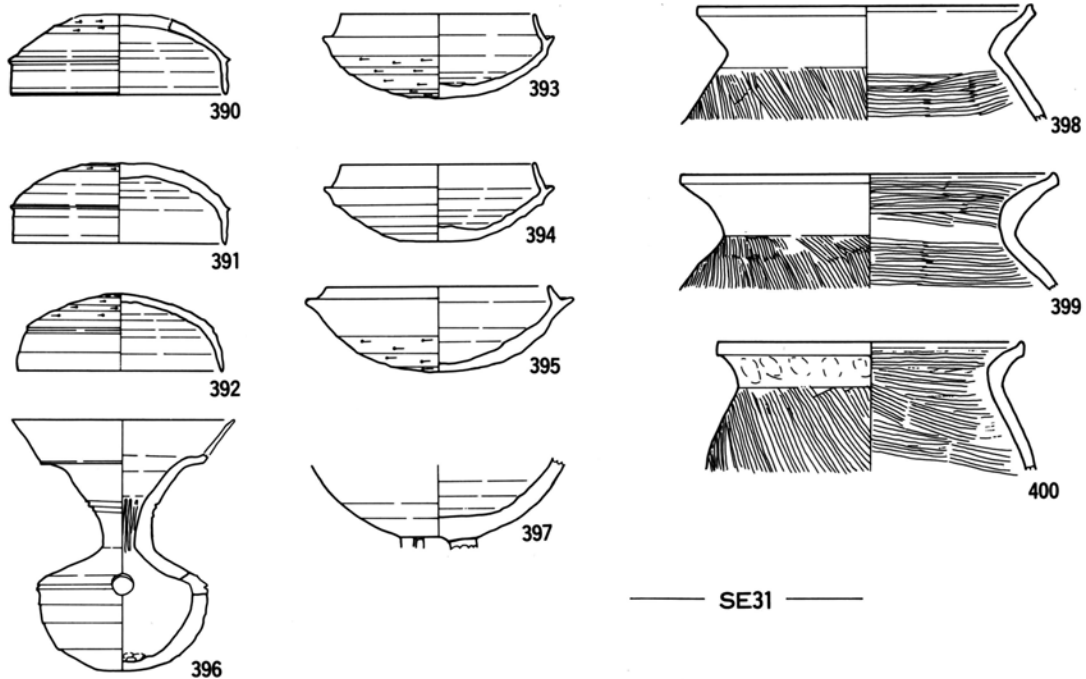


342

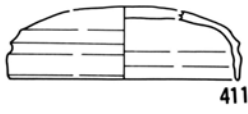
包含層







— SE32 —



411



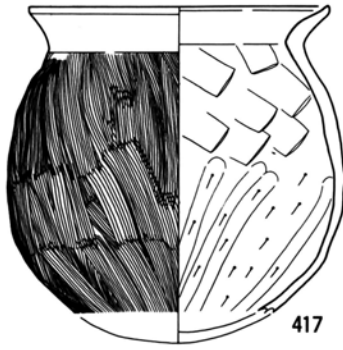
412



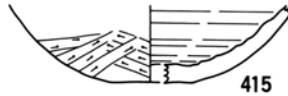
413



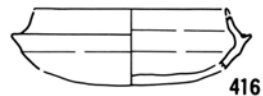
414



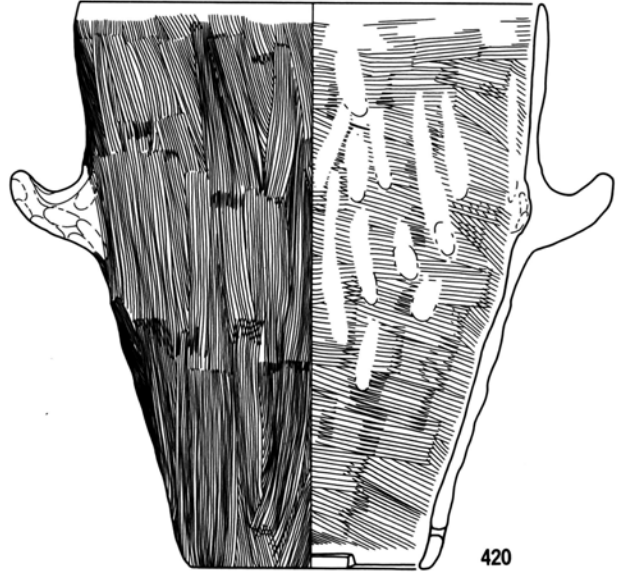
417



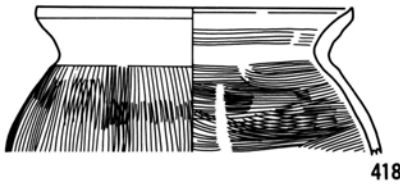
415



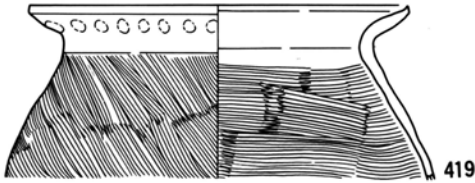
416



420

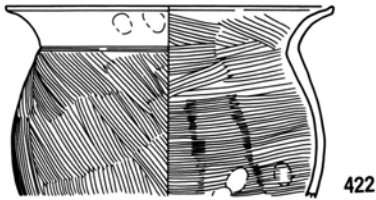


418

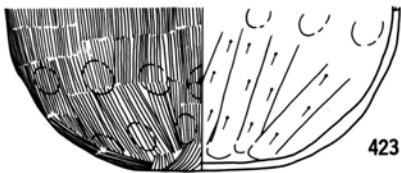


419

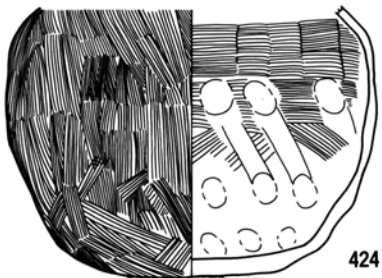
— SK 125 —



422

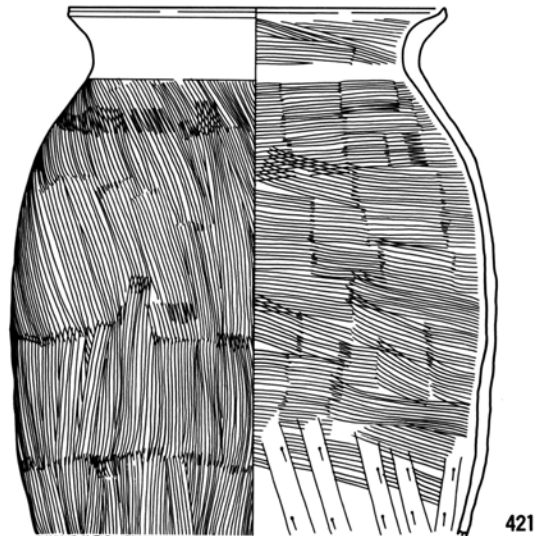
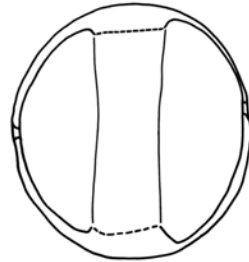


423



424

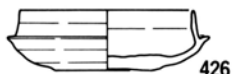
— SE 21 —



421



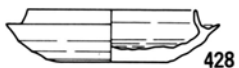
425



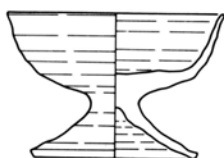
426



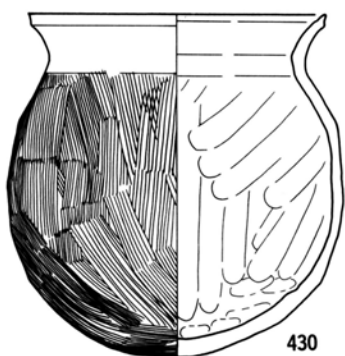
427



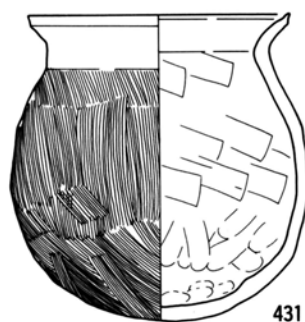
428



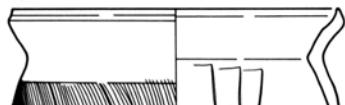
429



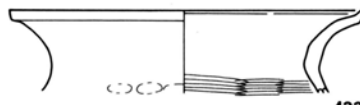
430



431



432

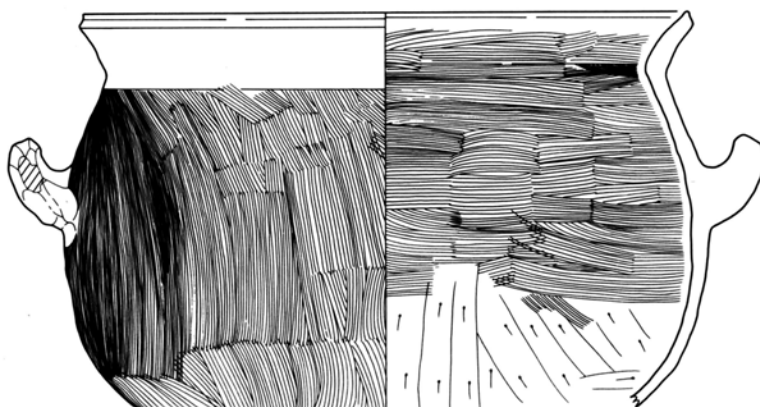


433



434

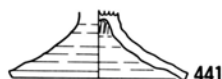
SE13



SE07



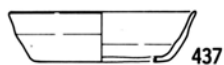
436



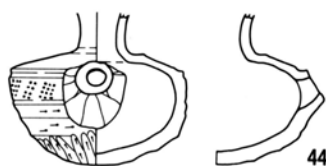
441



444



437



442



445



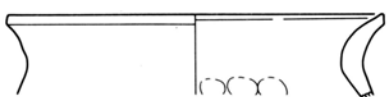
438



446

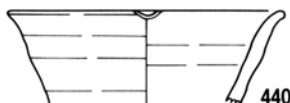


439

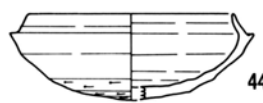


443

SD94



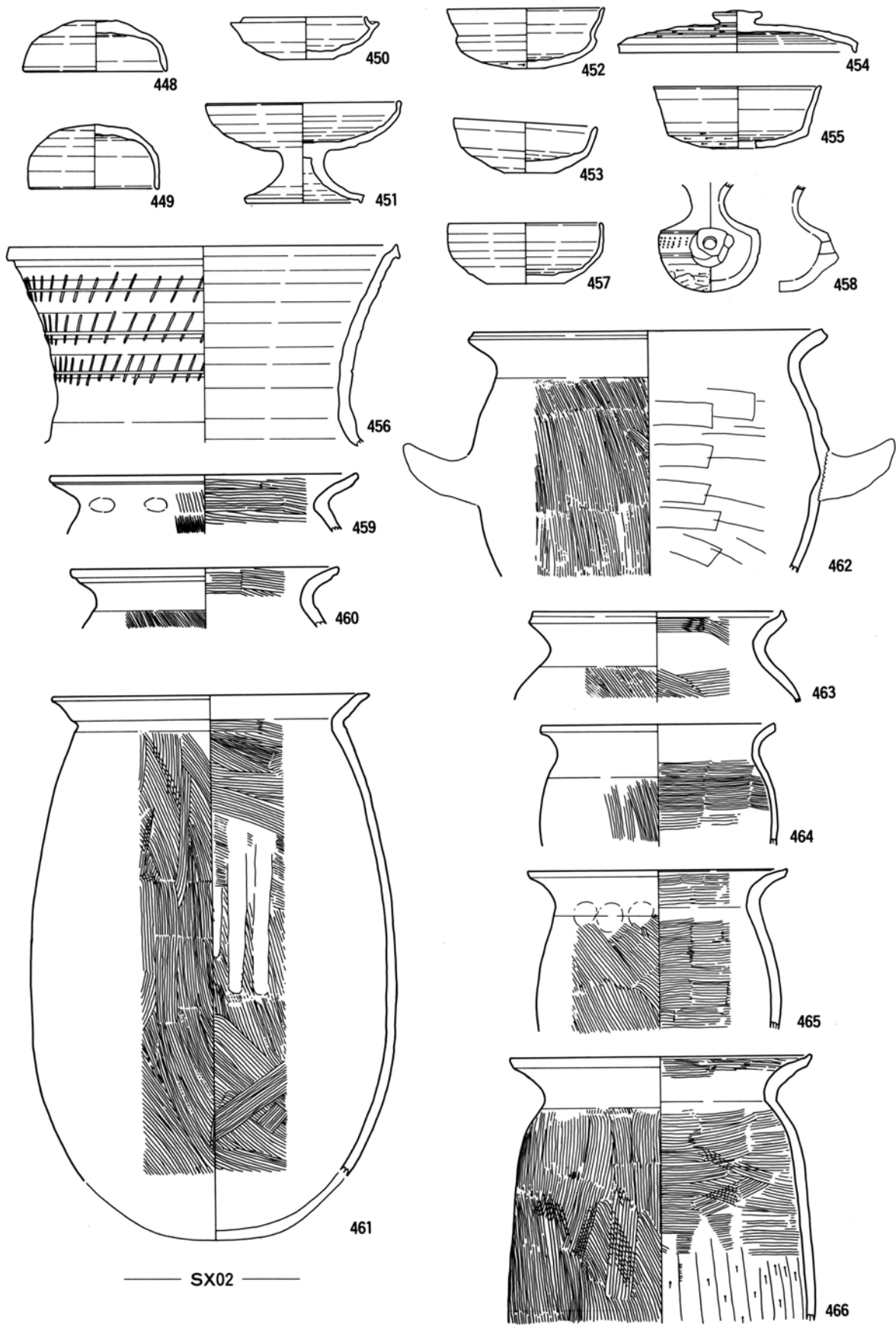
440

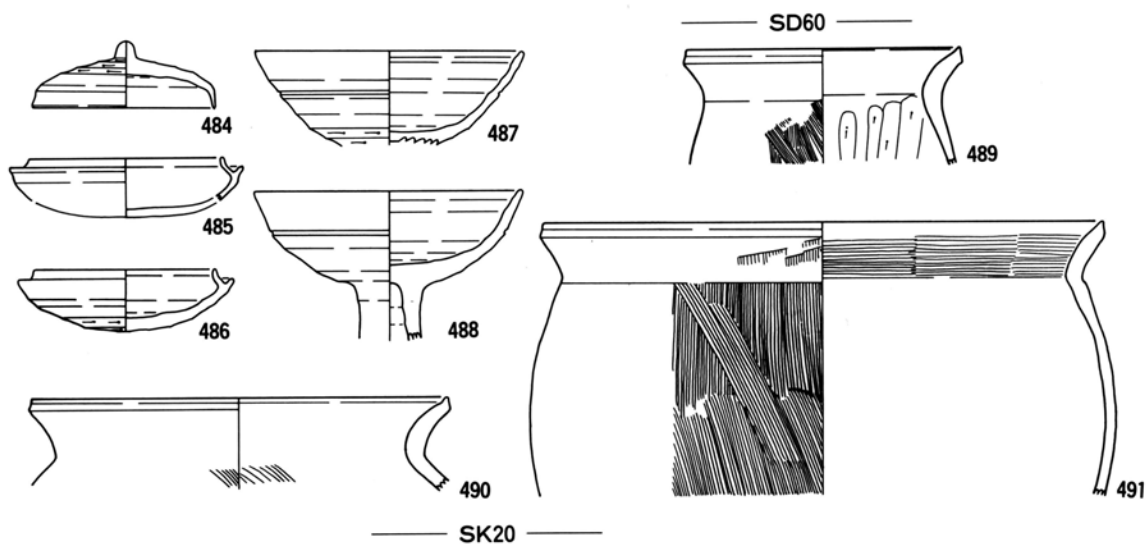
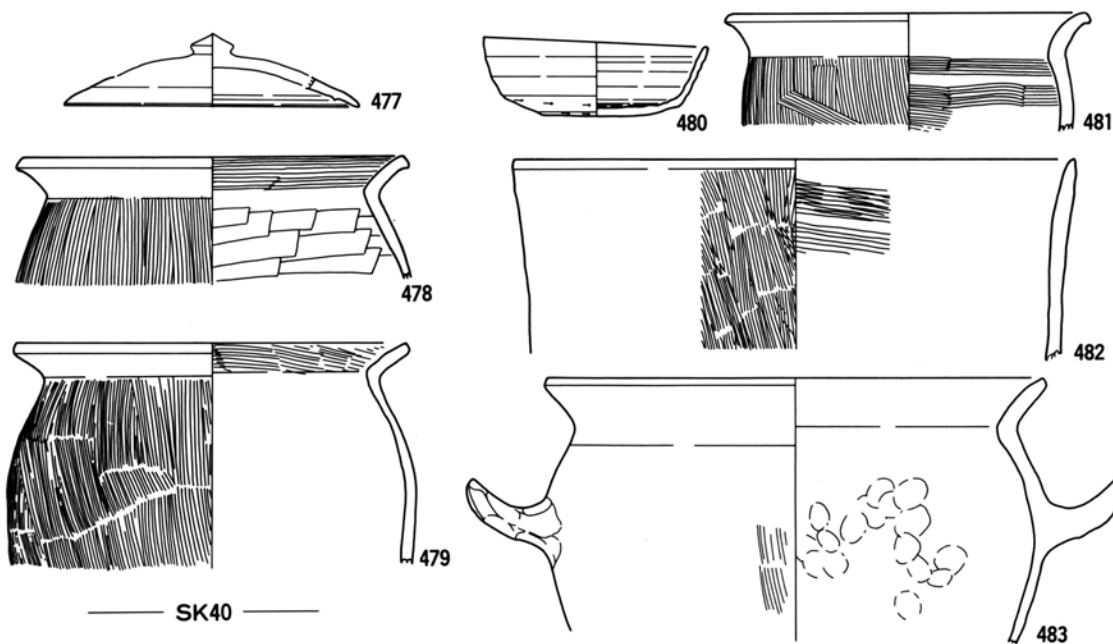
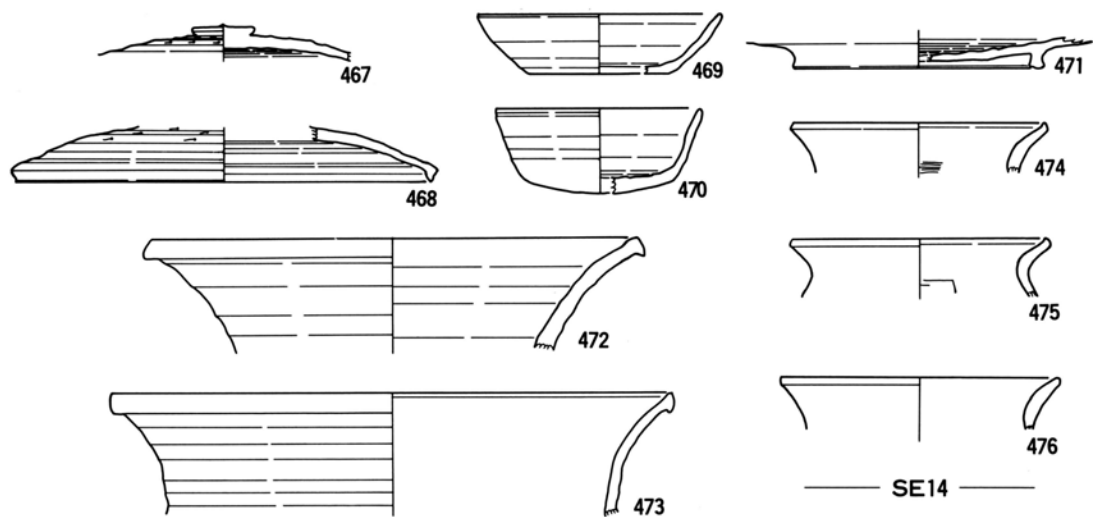


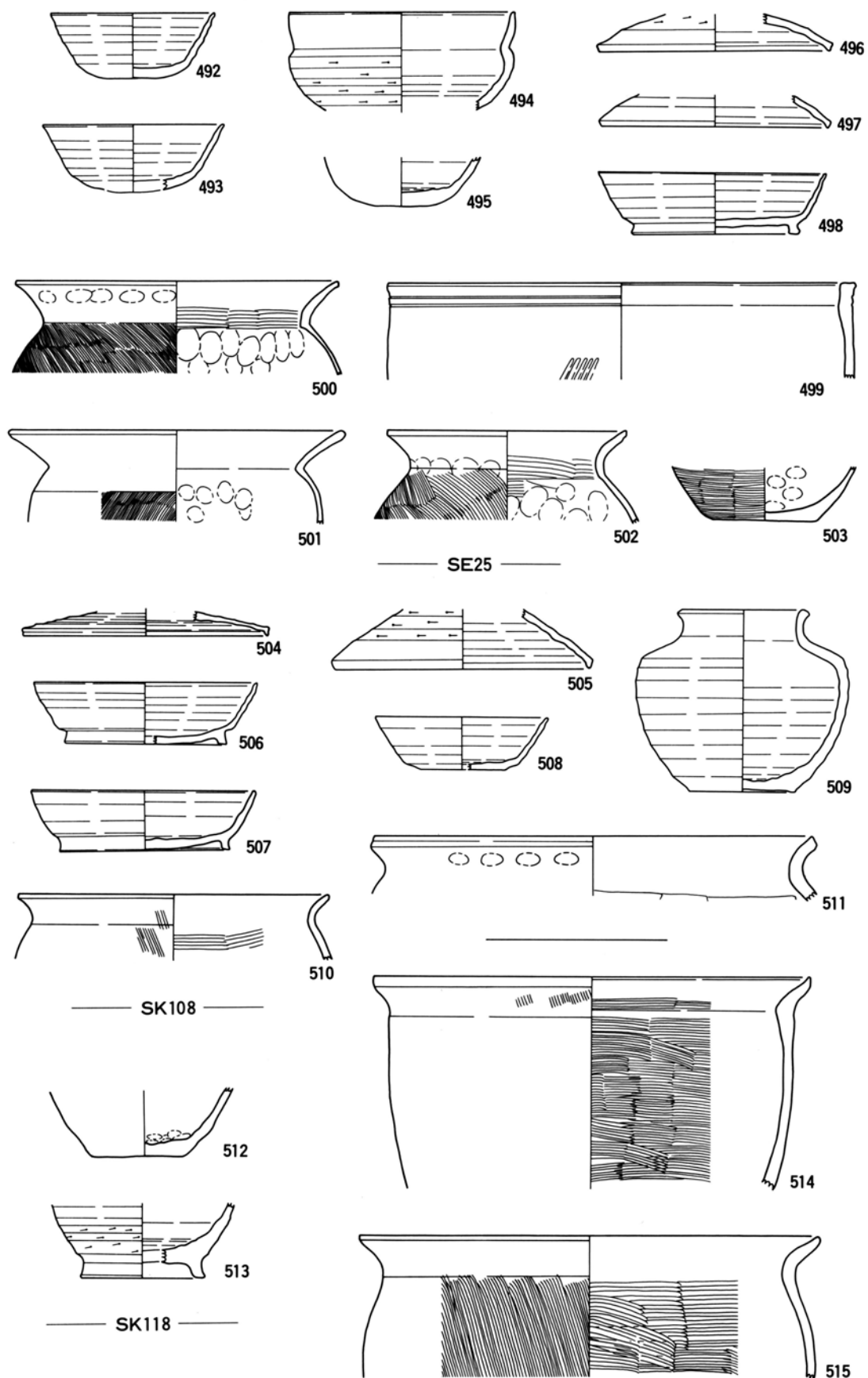
447

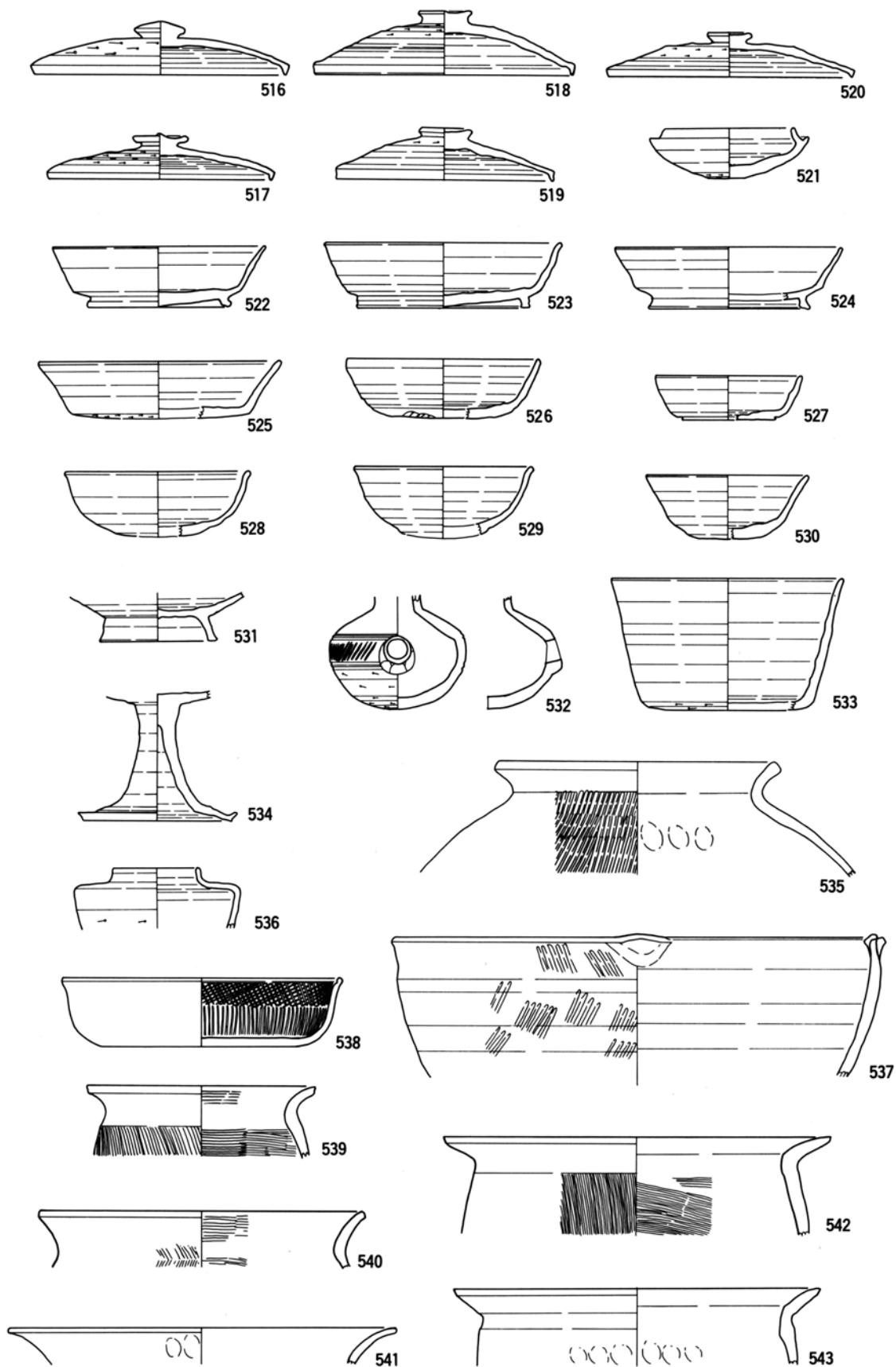
SE33

SE22

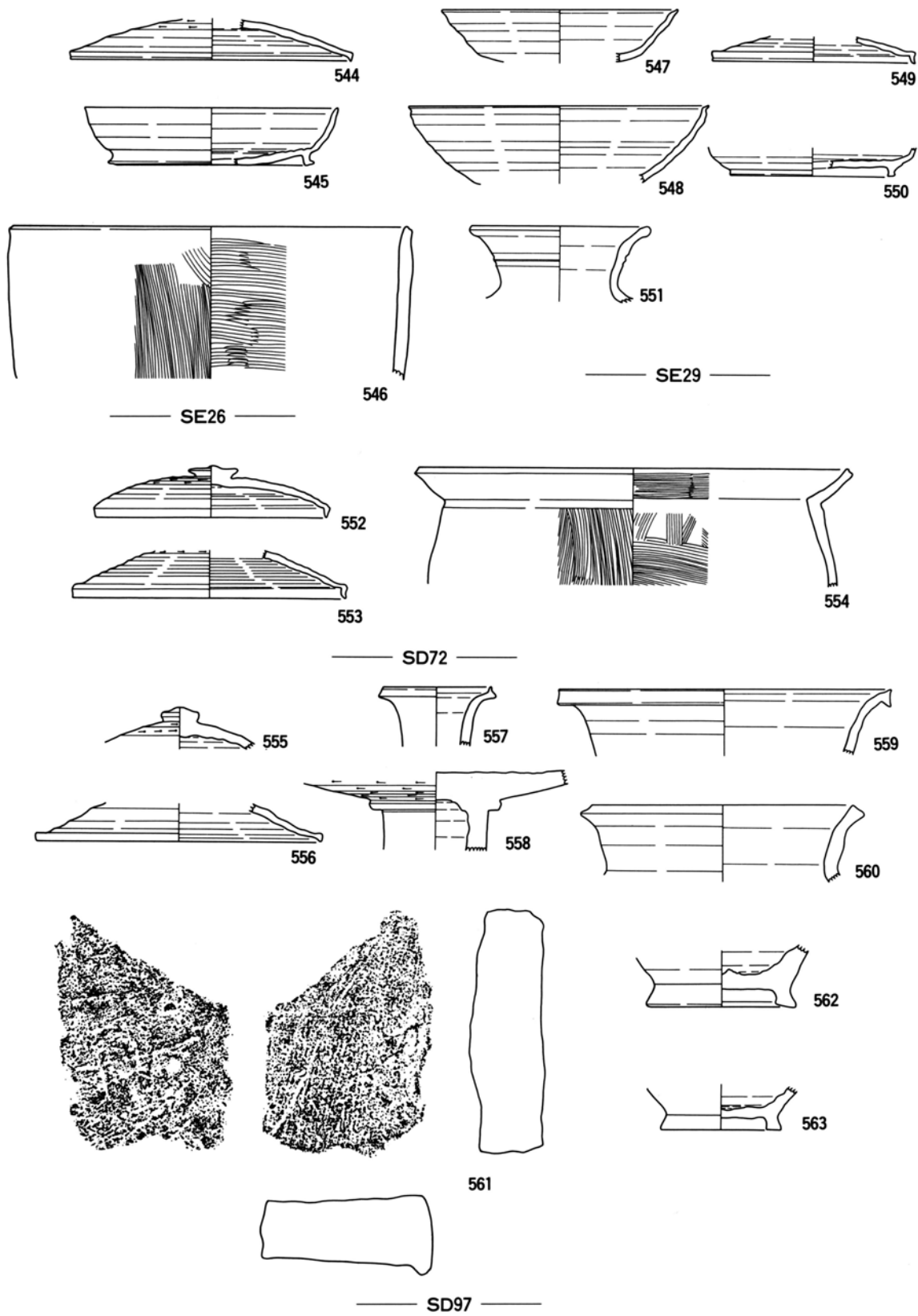


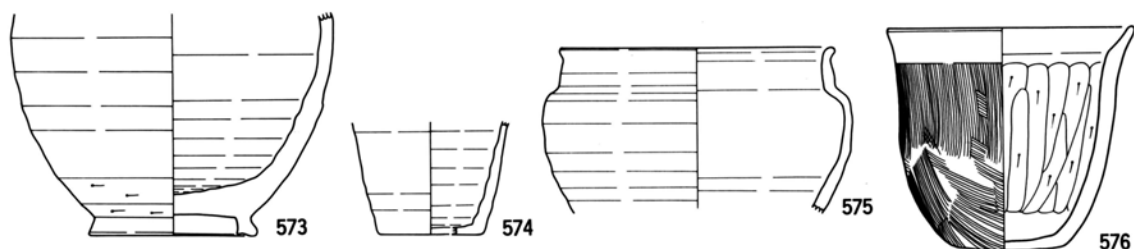
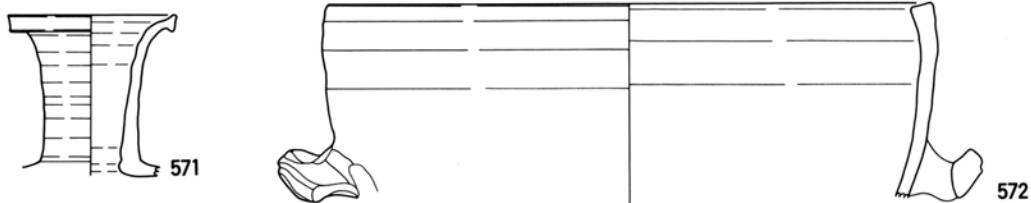




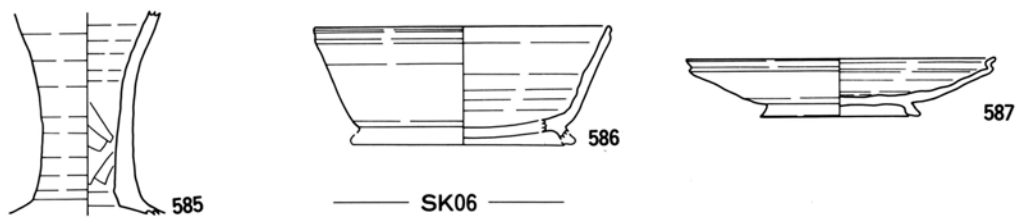
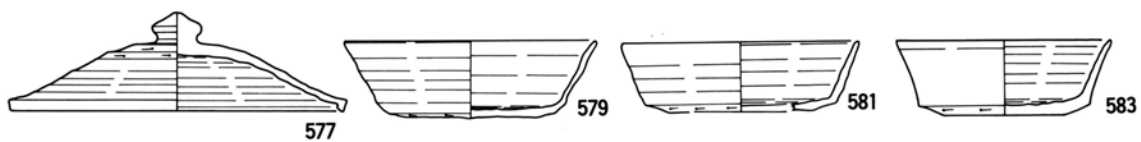


SD41

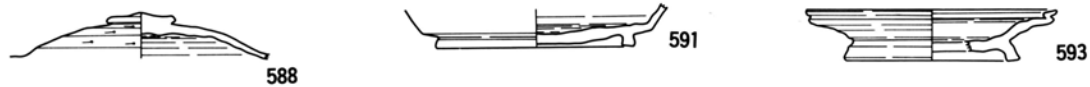




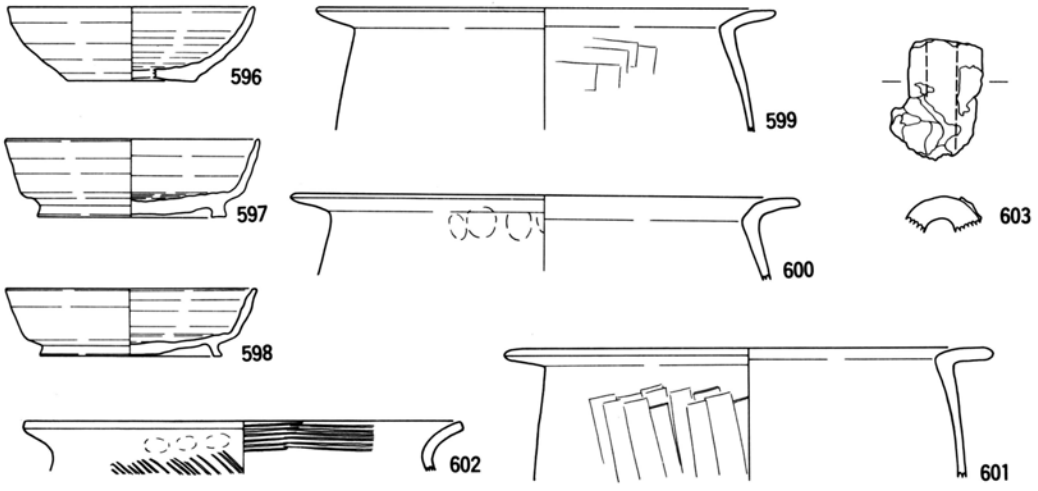
— SD49 —



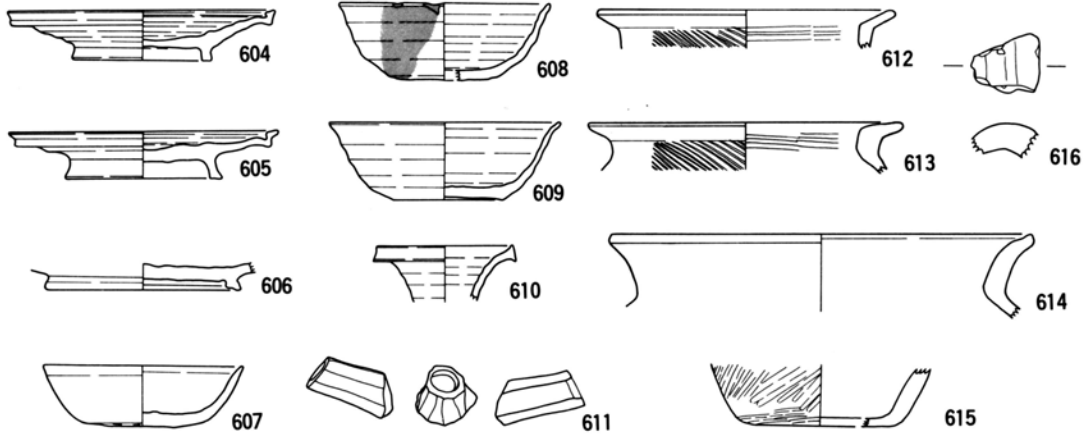
— SK06 —



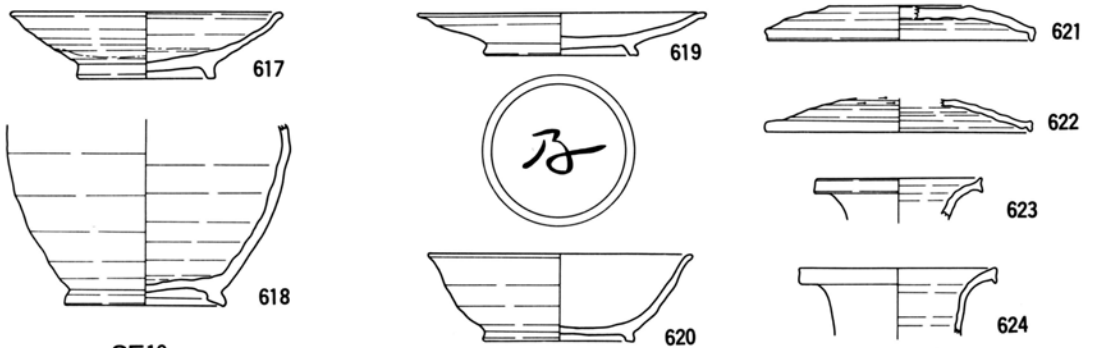
— SD98 —



SK90

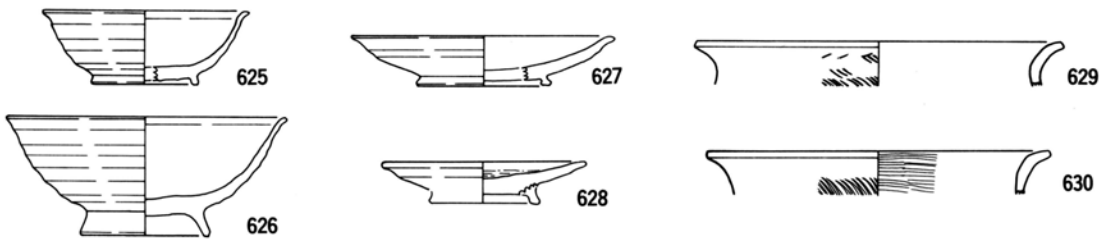


SE01

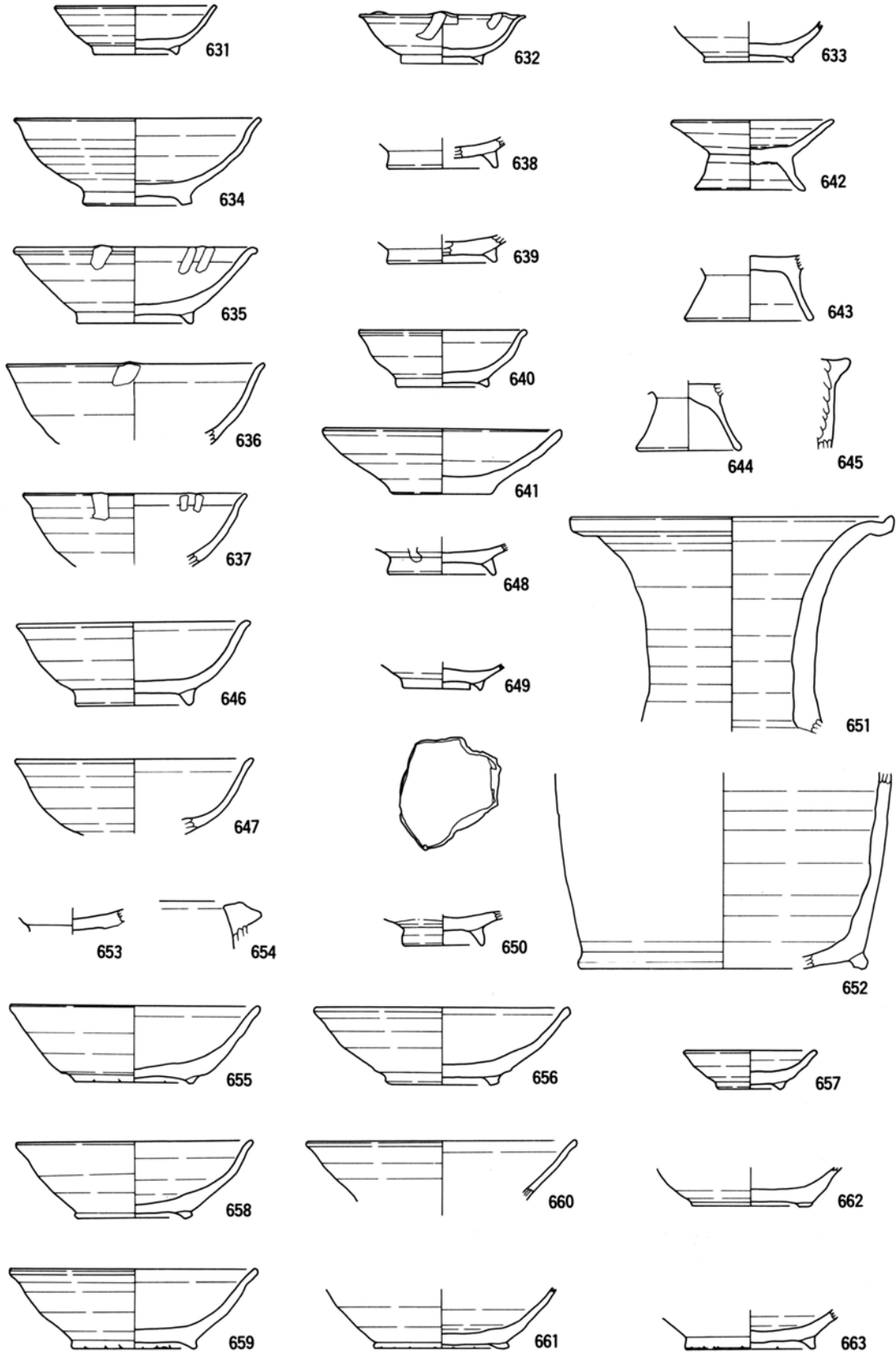


SE10

SE24



SE27



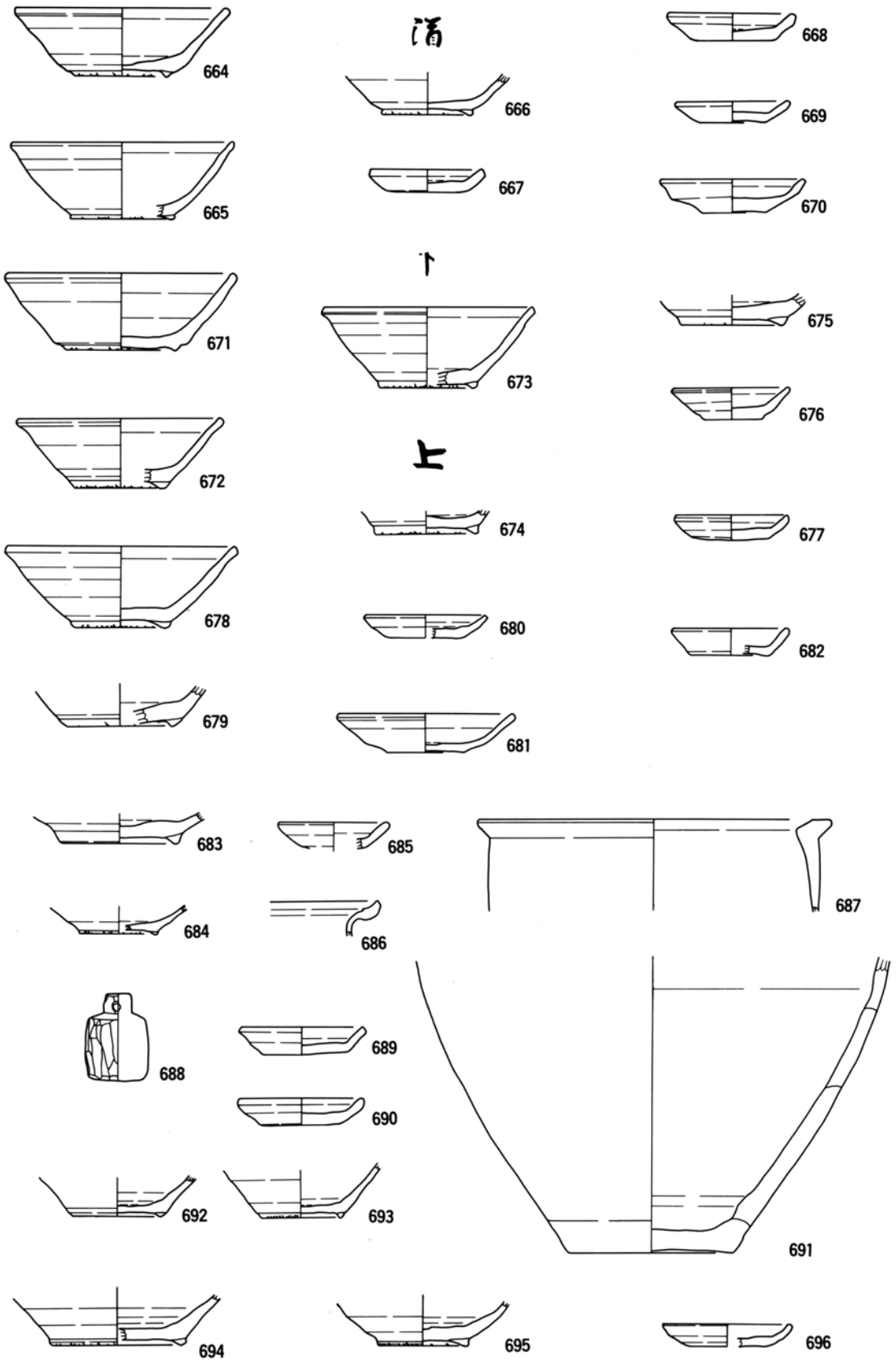
631~633
655~657

SE11、
SK05、

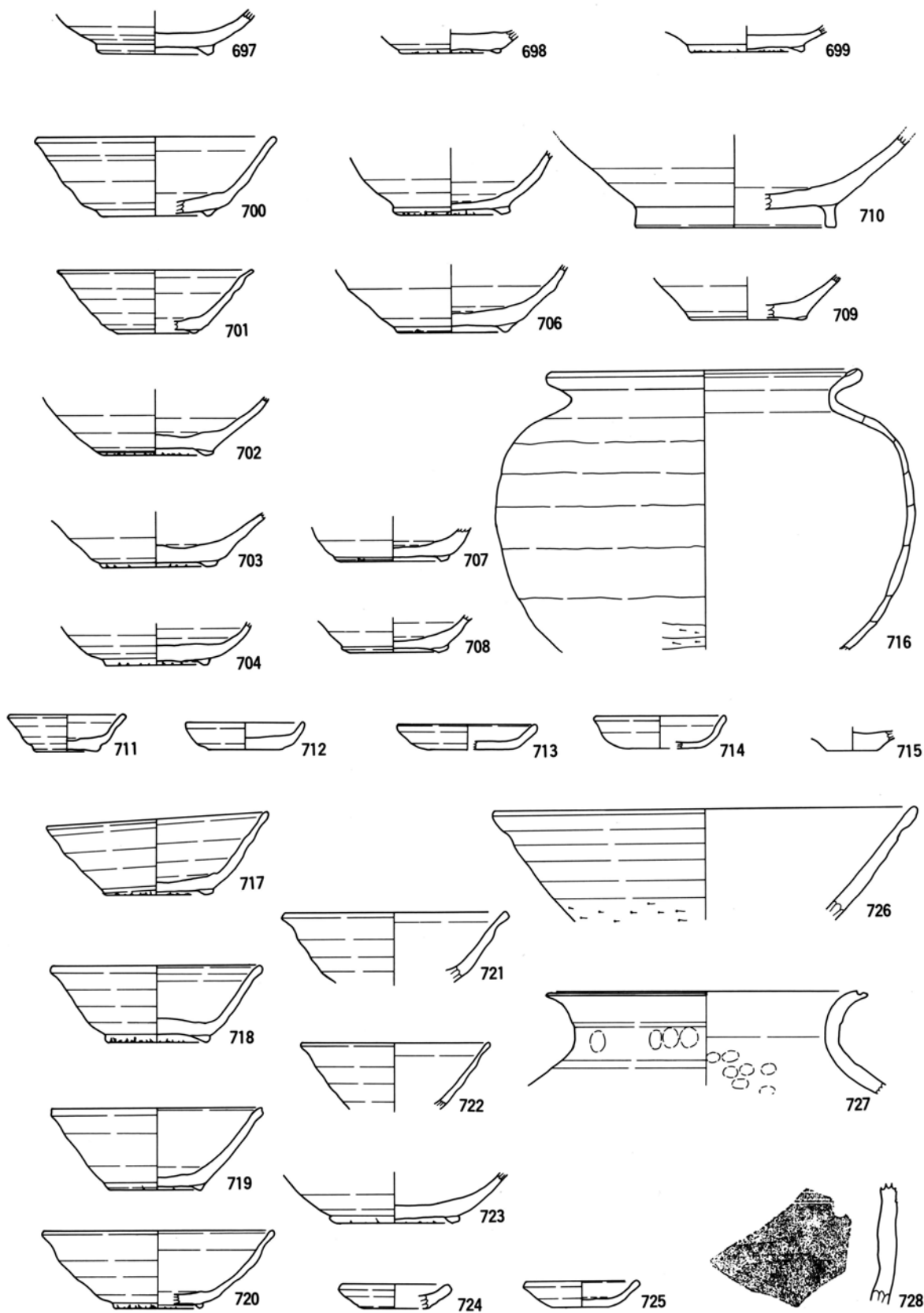
634~645
658~663

SE16、
SD49

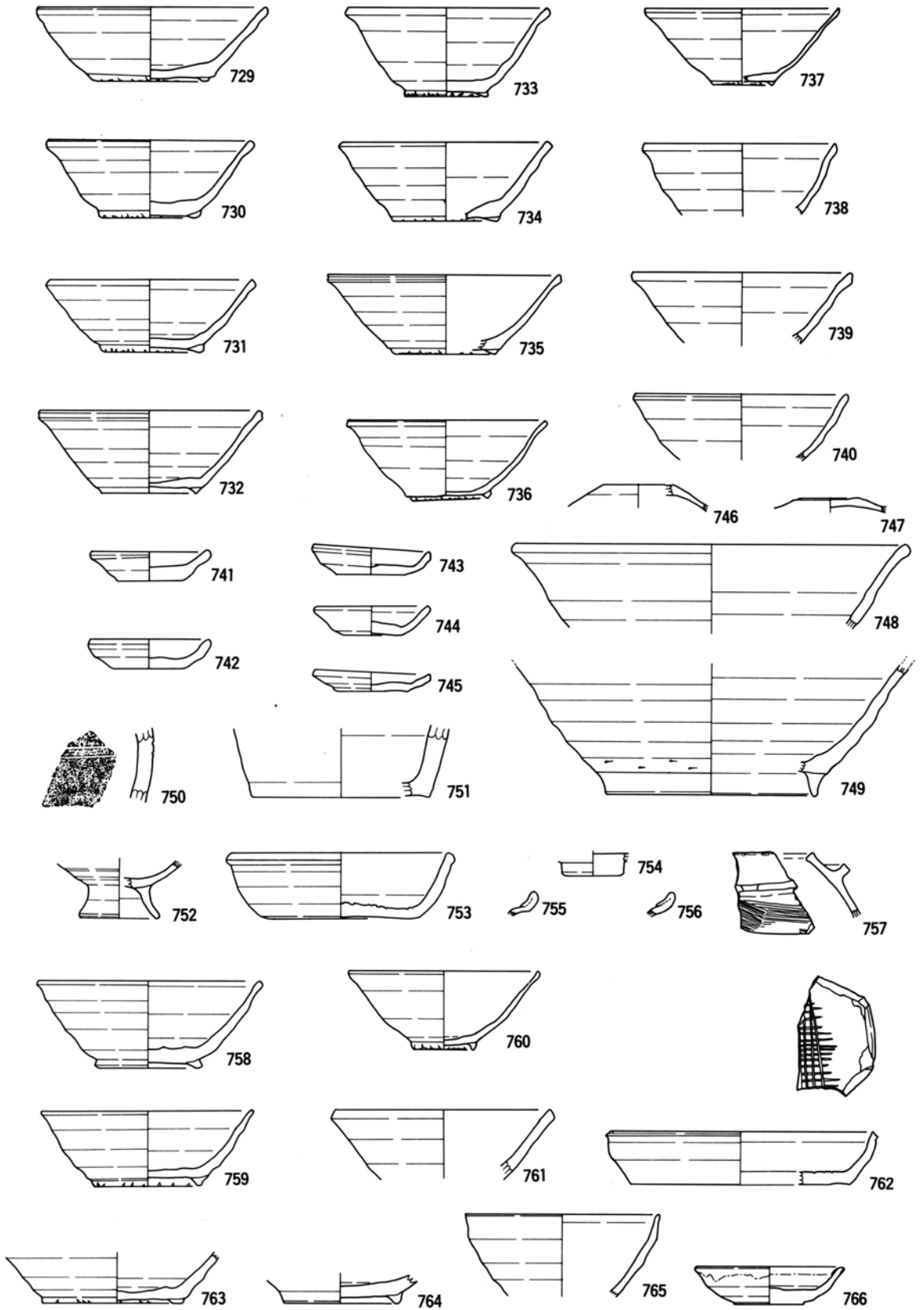
646~654 SE17



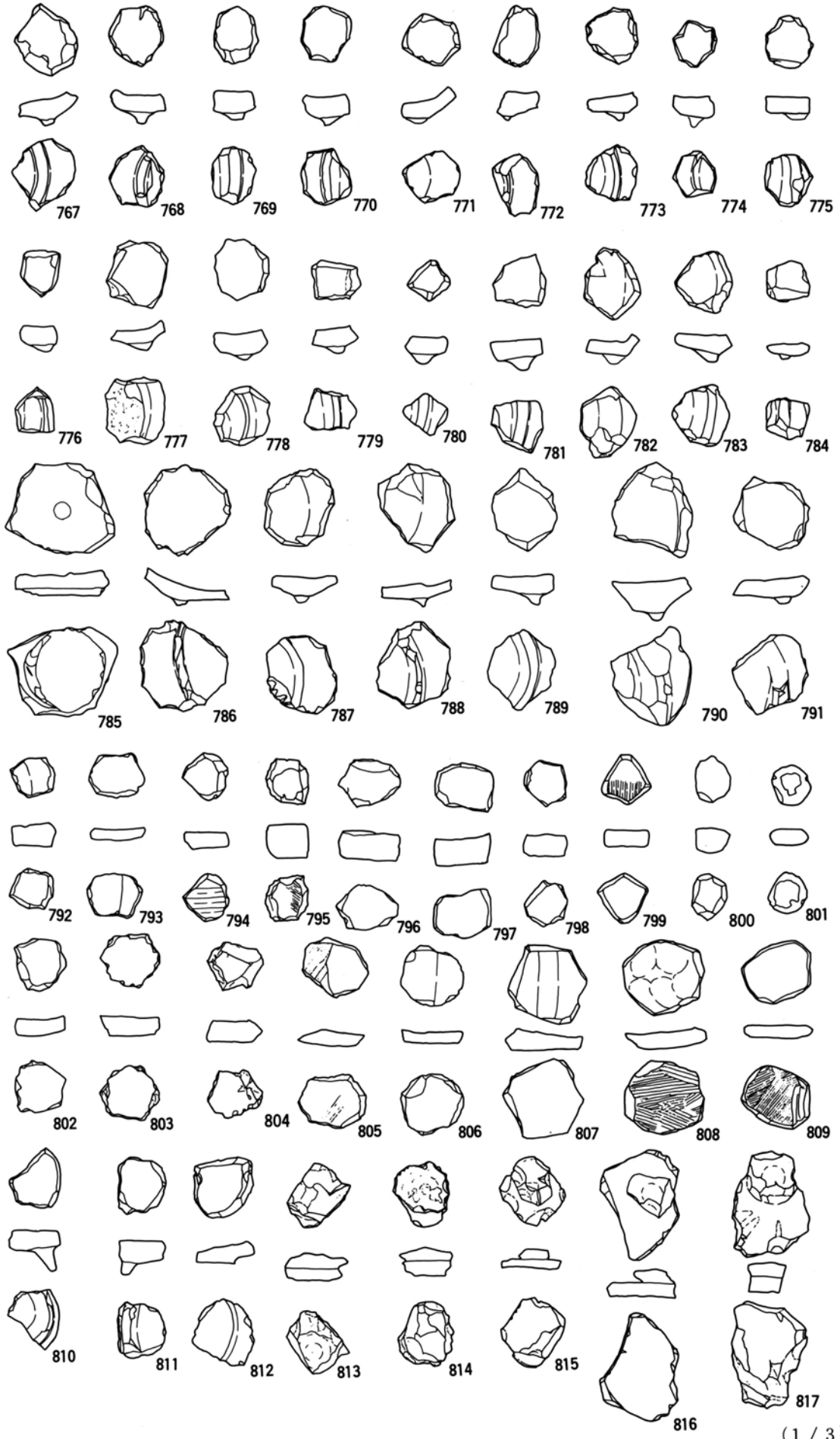
664~669 SE04、670 SE12、671~677 SE15、678~682 SE18
 683~687 SE20、688 SK19、689~691 SK77、692・693 SK78、694~696 SK144

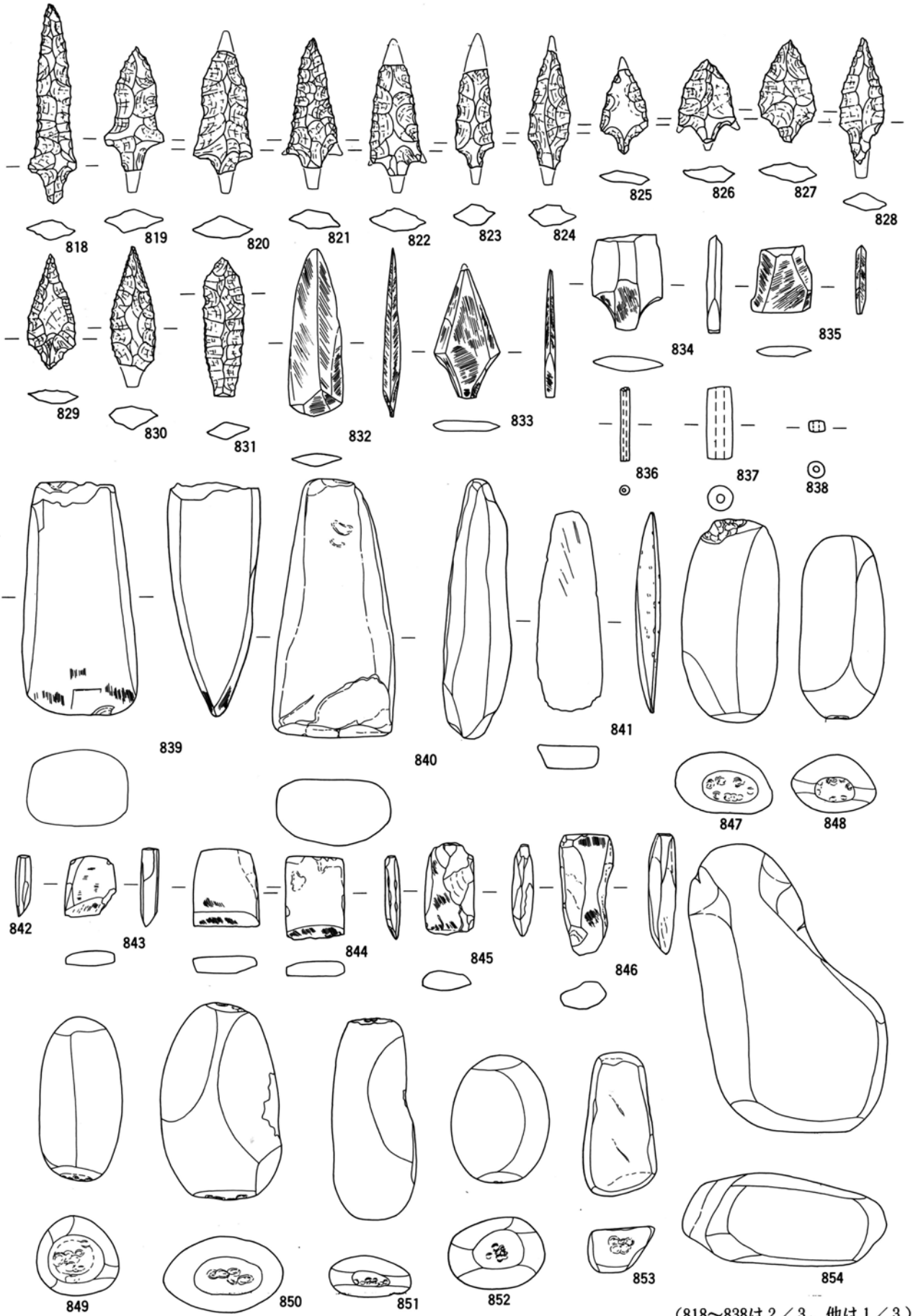


697~699 SD05、700~716 SD15、717~728 SD43

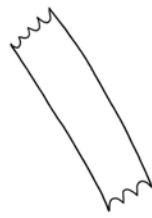


729~757 SD50、758~762 SD63、763·764 SD59
765·766 SK171

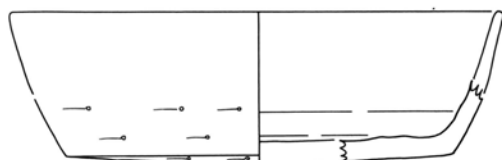




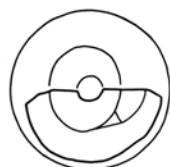
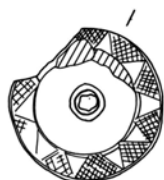
(818~838は2/3、他は1/3)



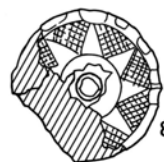
855



856



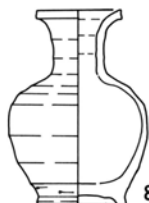
860



858



859



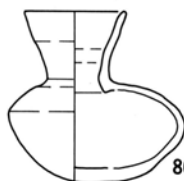
862



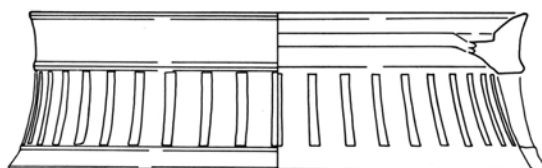
861



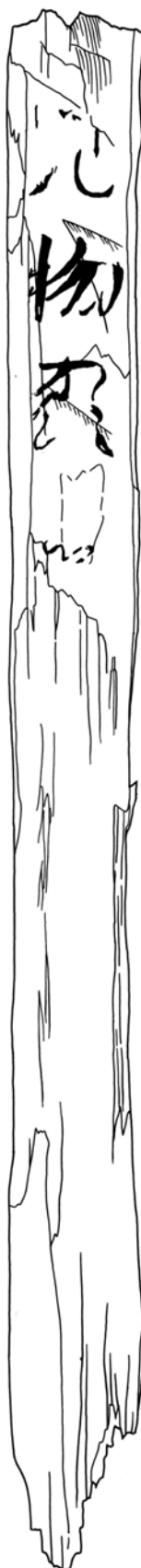
863



864

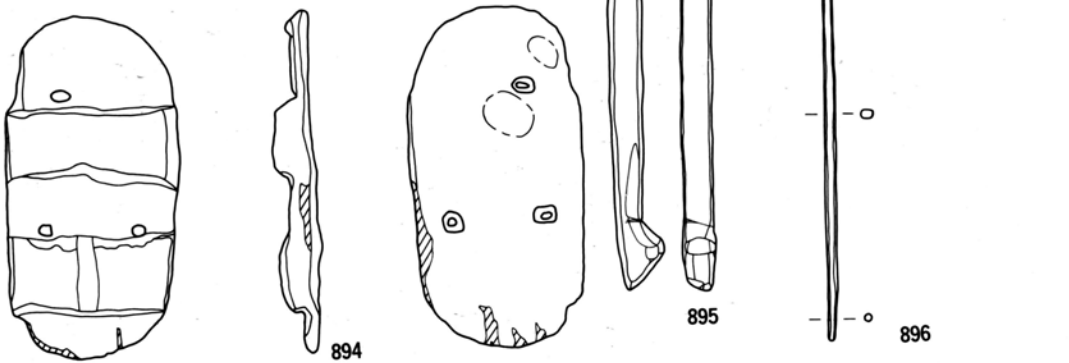
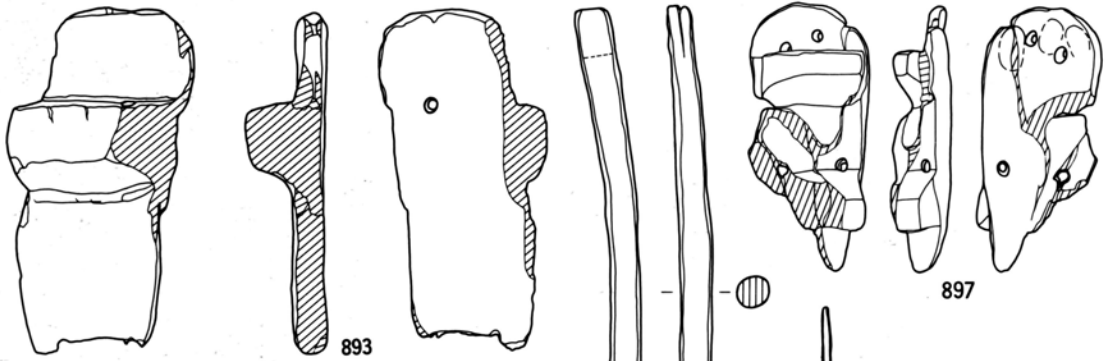
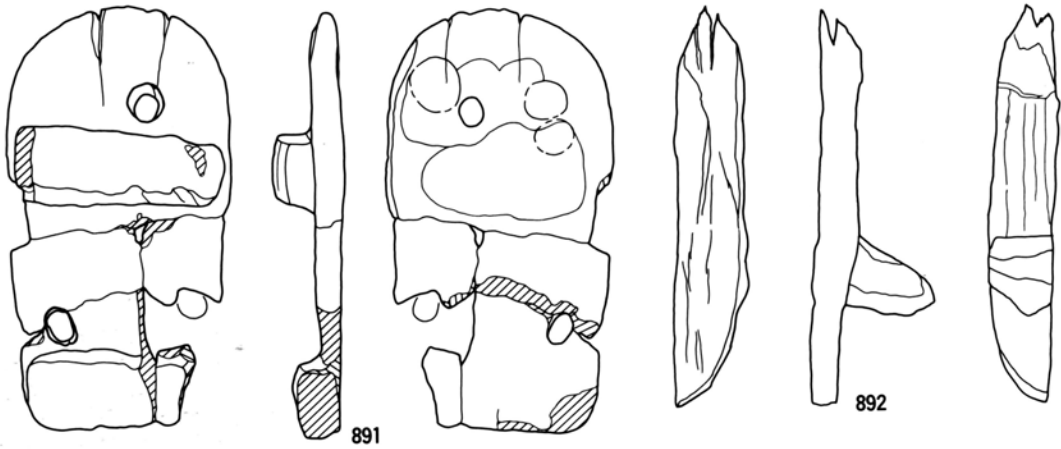
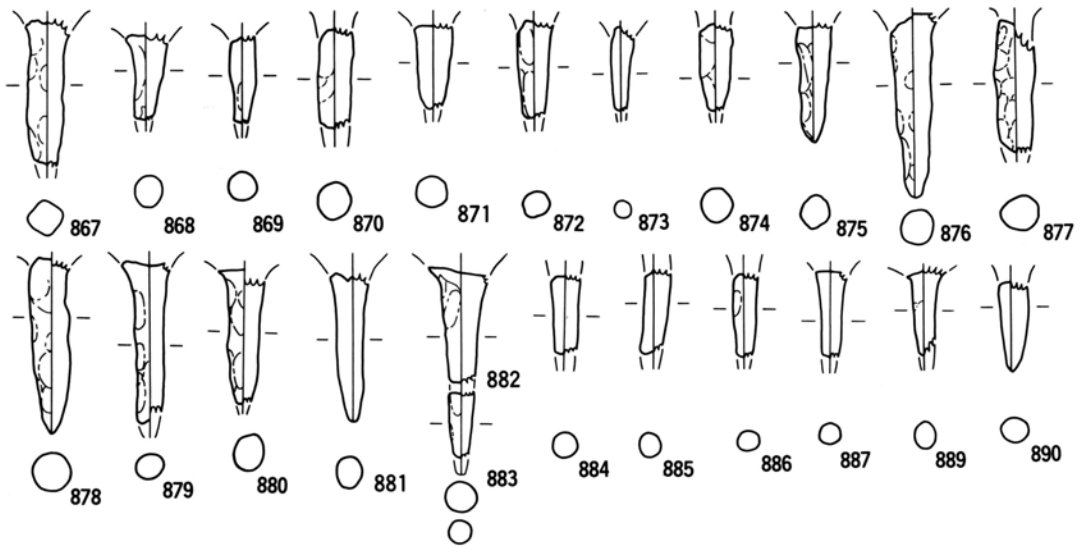


865



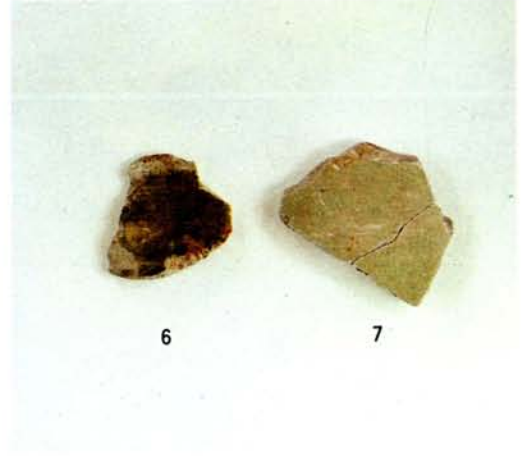
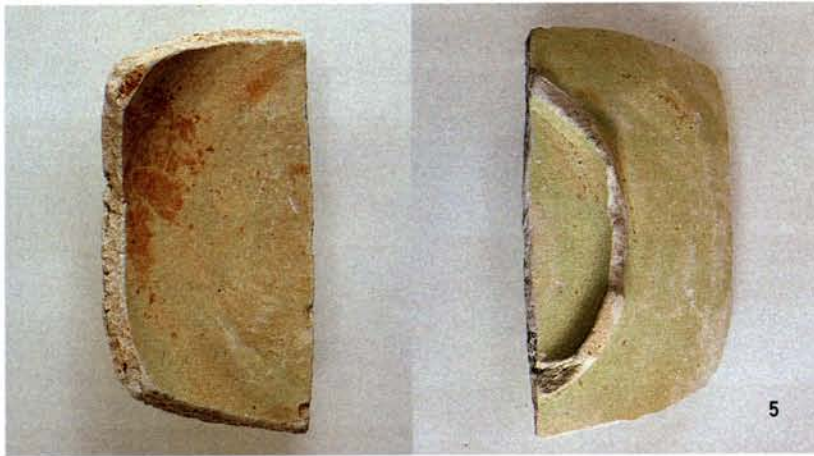
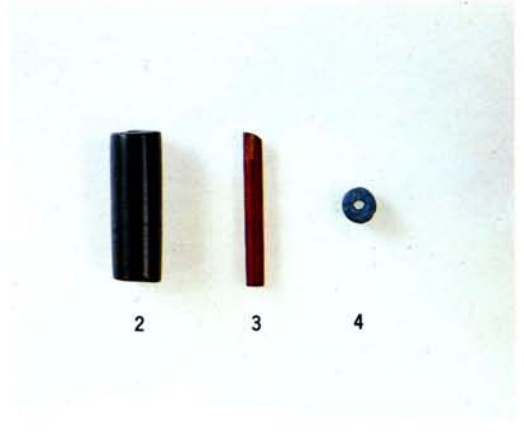
857

(857は1/1、855~861は1/2、他は1/4)



(867~890は1/3、他は1/4)

写真図版 1



左：上面SE01（西から）
右：下面SE03円窓付土器出土状態
（上 南東から、下 南西から）

写真図版 2

左：60A₁区上面(南から)
右：60B₁区上面(南東から)



左：60A₂区上面南側(北東から)
右：59A区(北から)



左：60D区上面西側(東から)
右：60C₂・C₃区上面(東から)



左：60E区(北から)
右：60H区(北から)



左：60G区(南から)
右：59B区(南から)



写真図版 3

左：60A₁区下面西側(東から)
右：60B₁区下面(南から)



左：60A₂区下面北東側(西から)
右：60C₃区下面西側(東から)



左：60F区中世遺構(東から)
右：60F区(東から)



左：60I区南側(北西から)
右：60J区(北東から)

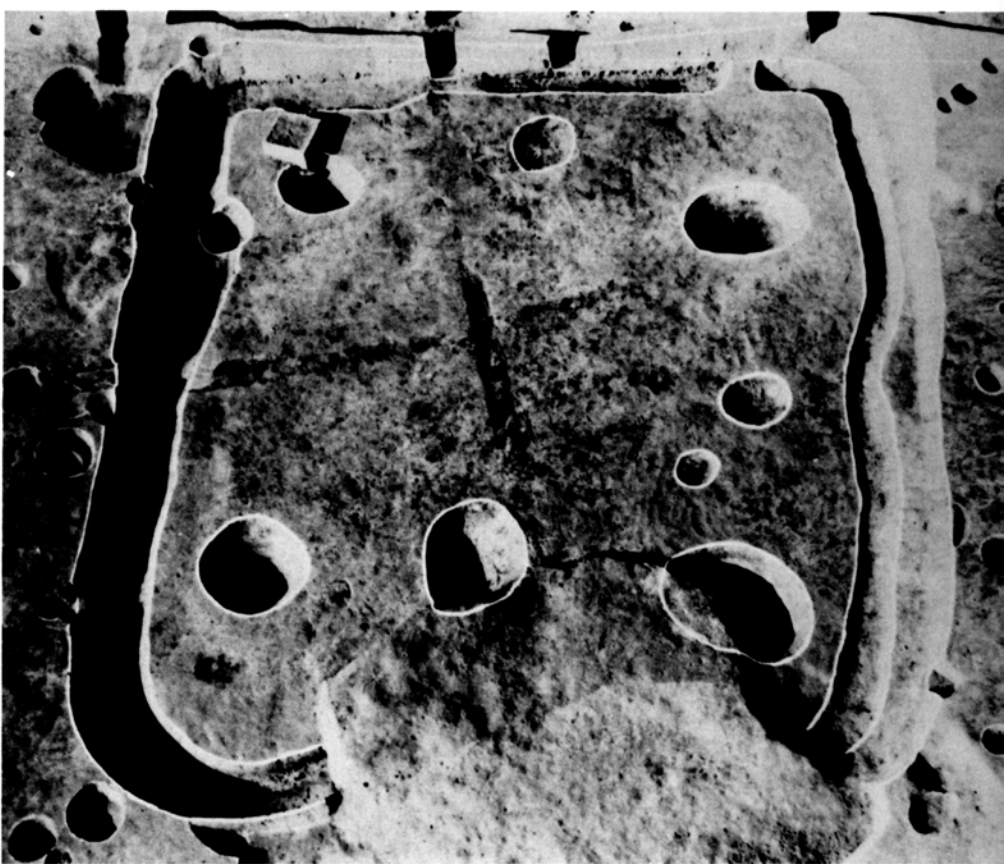


左：60K区(東から)
右：60L区(東から)

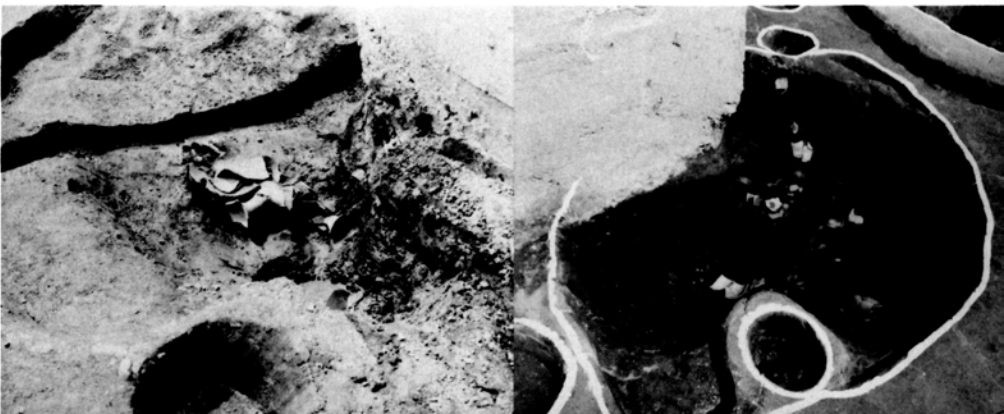




下面 SB05・SB06(東から)



下面 SB05(東から)



下面 SE03

左：上層土器出土状態(南から)

右：下層土器出土状態(西から)

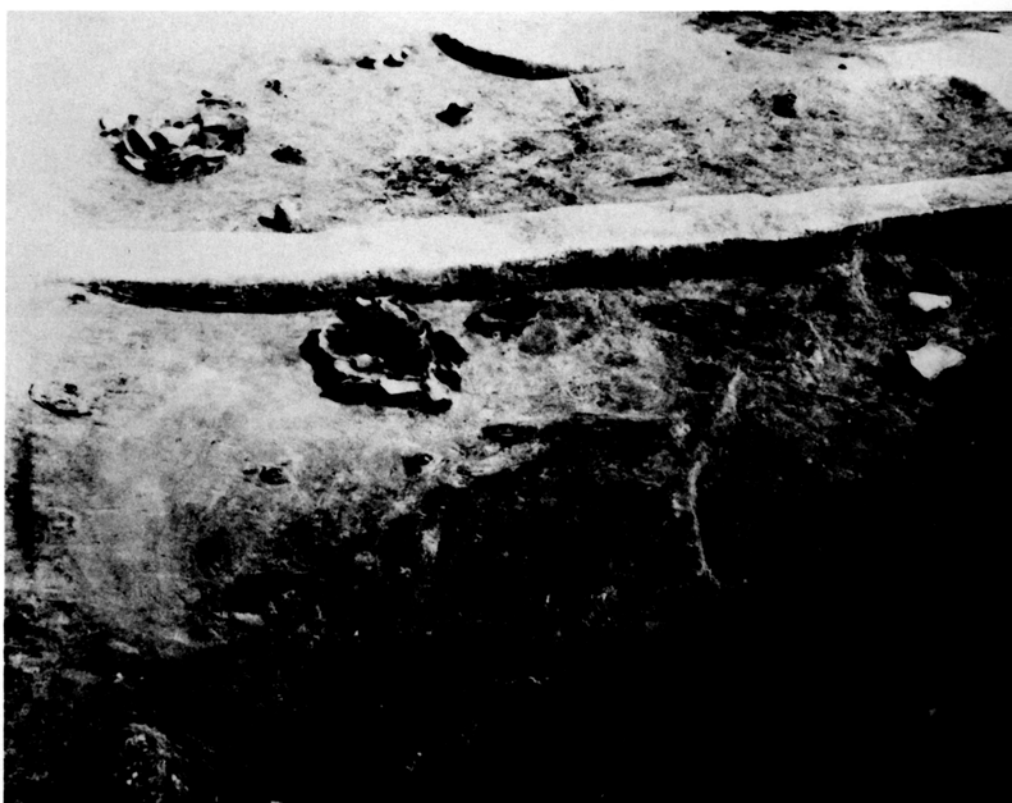
下面 SB14

炭化材・土器出土状態(南西から)

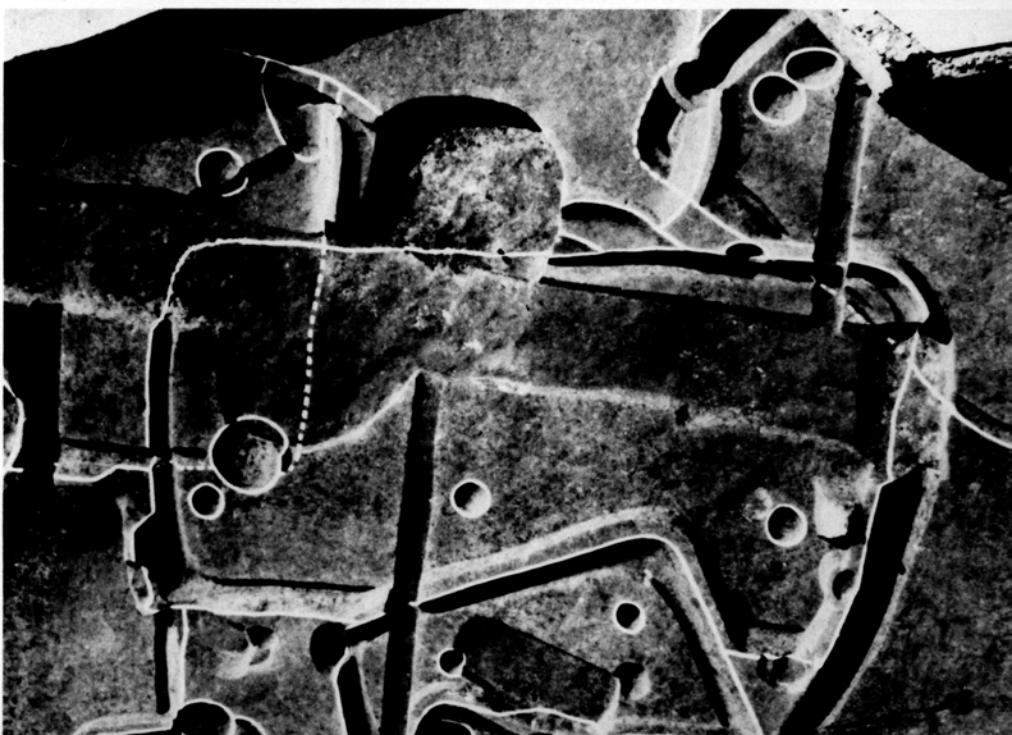


下面 SB26

炭化材・土器出土状態(東から)



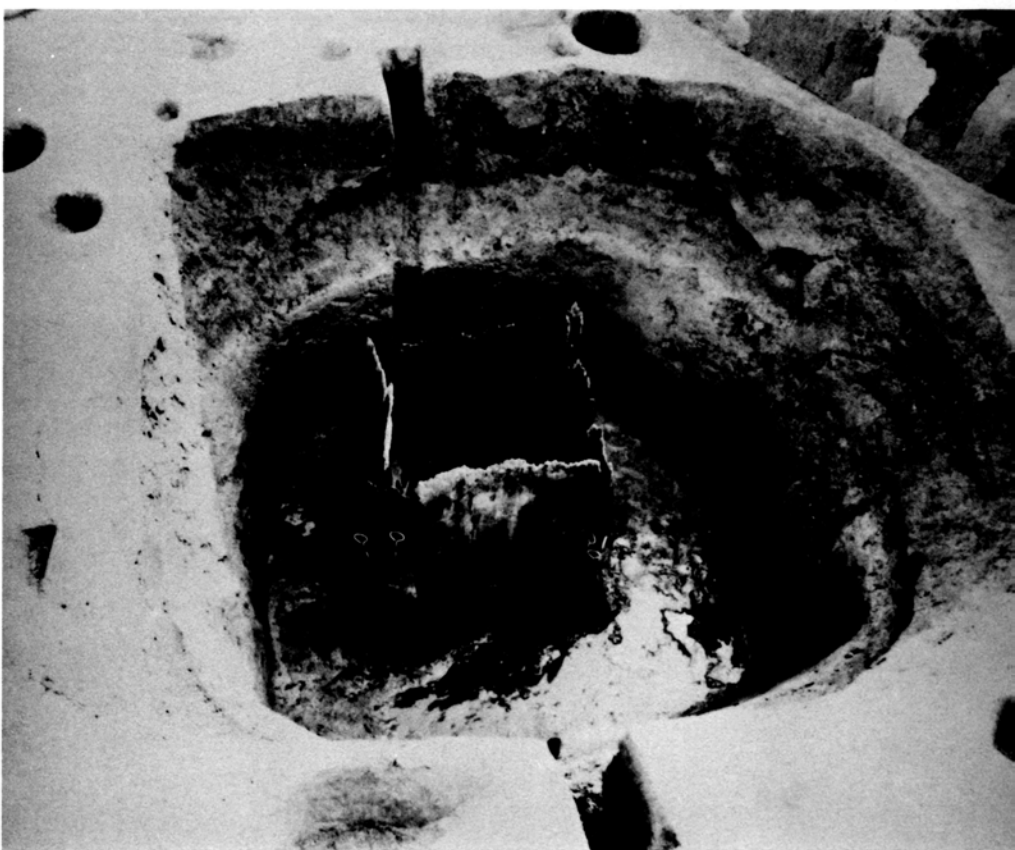
下面 SB19



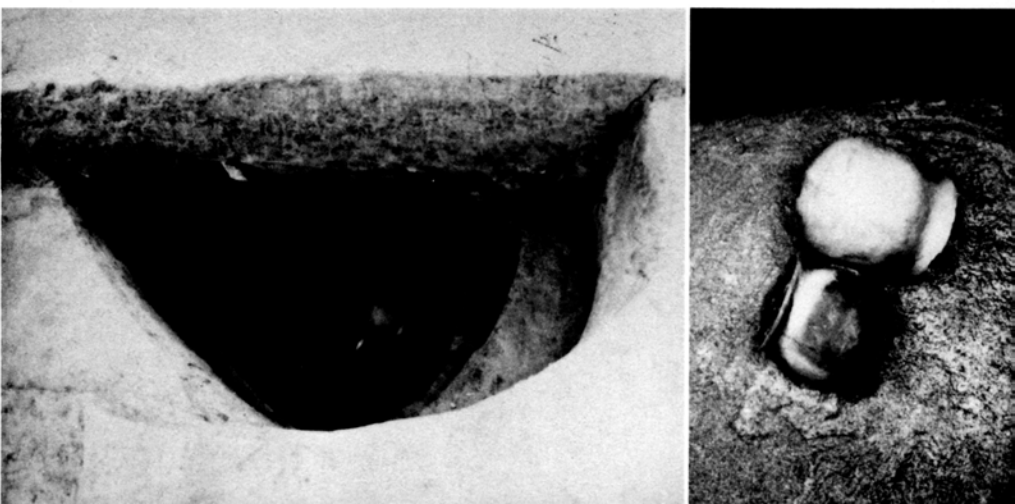
SE 22
井戸枠・曲物出土状態(東から)

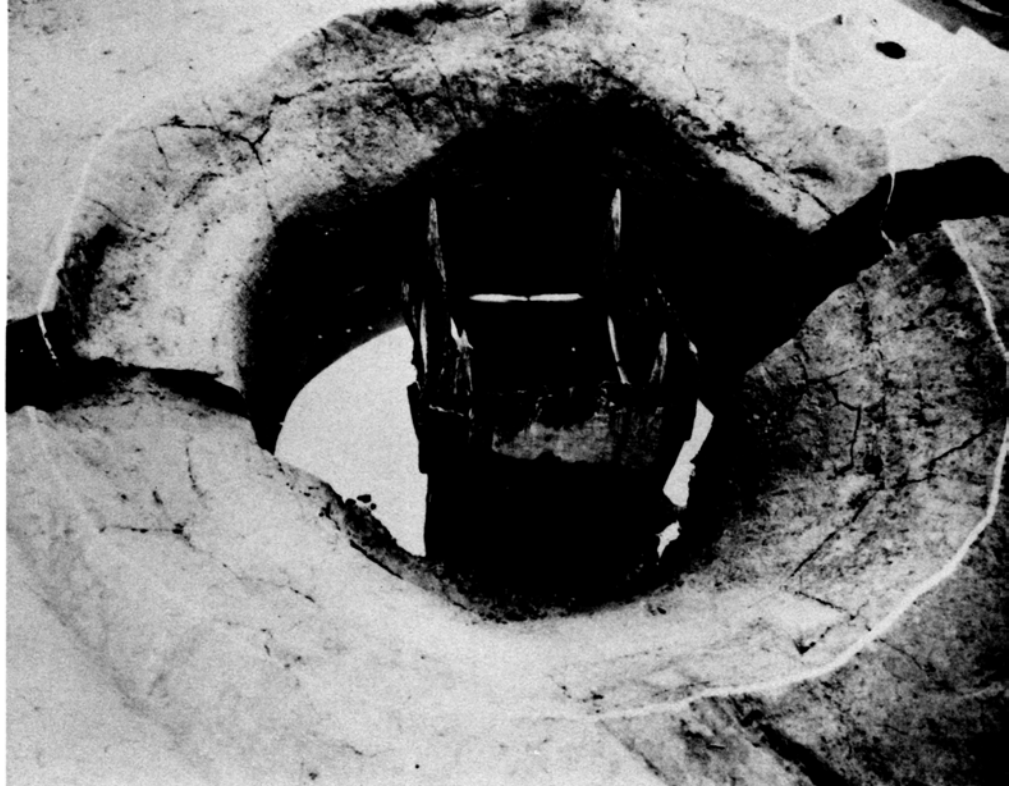


SE 10
井戸枠出土状態(北東から)



SE 13
土器出土状態(北から)

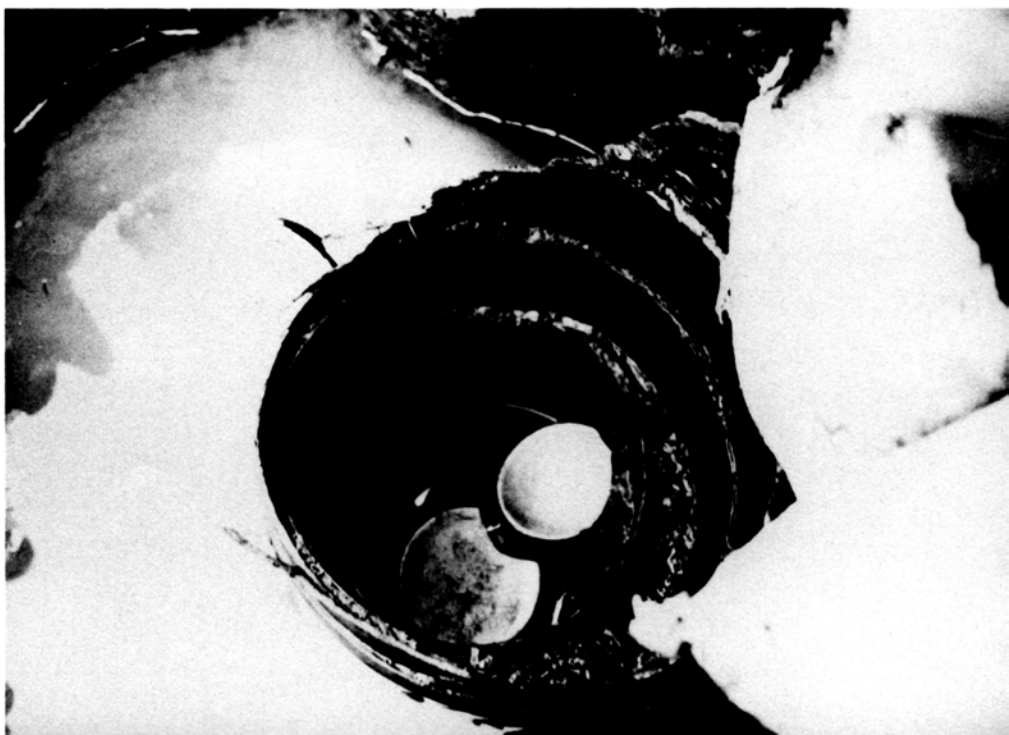




SE 14
井戸枠出土状態(北東から)



SE 14
井戸枠・砂おさえ出土状態(南から)



SE 24
土器・曲物出土状態(北から)

SE11
土器出土状態(北西から)



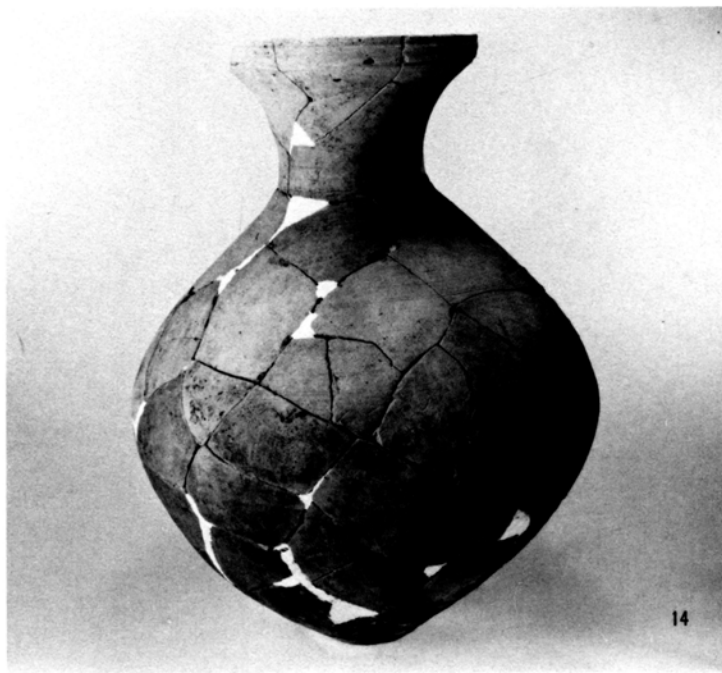
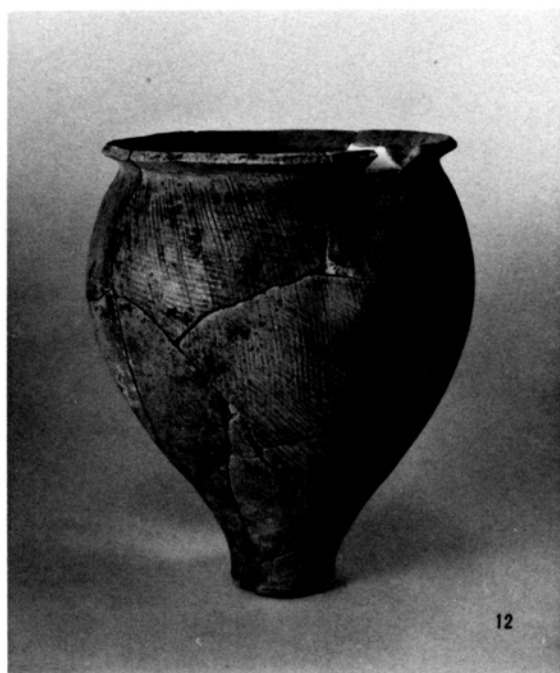
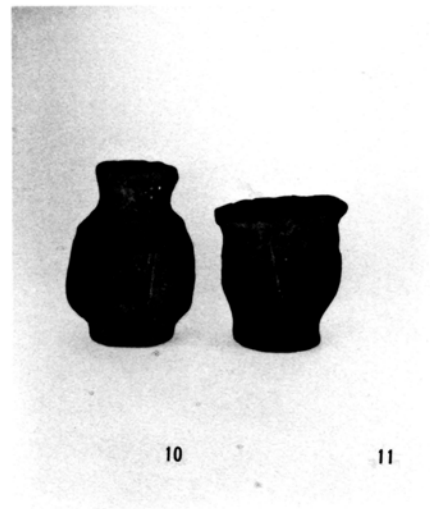
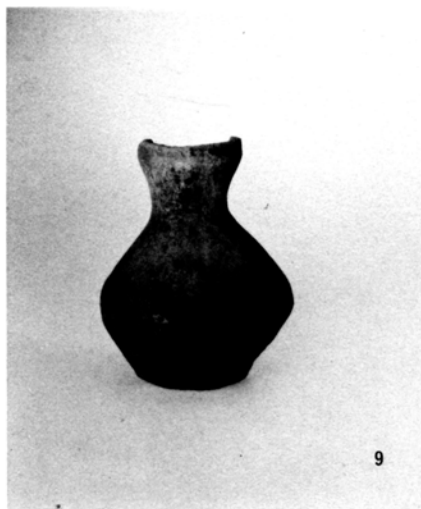
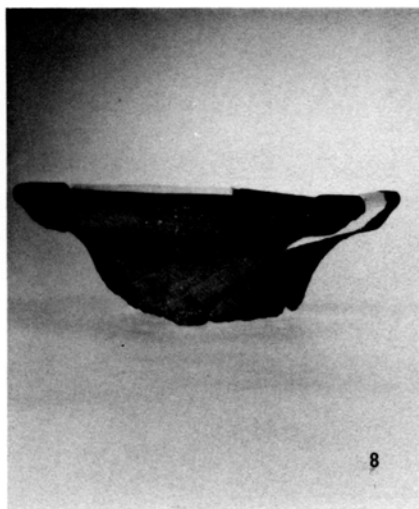
SE03
曲物出土状態(西から)

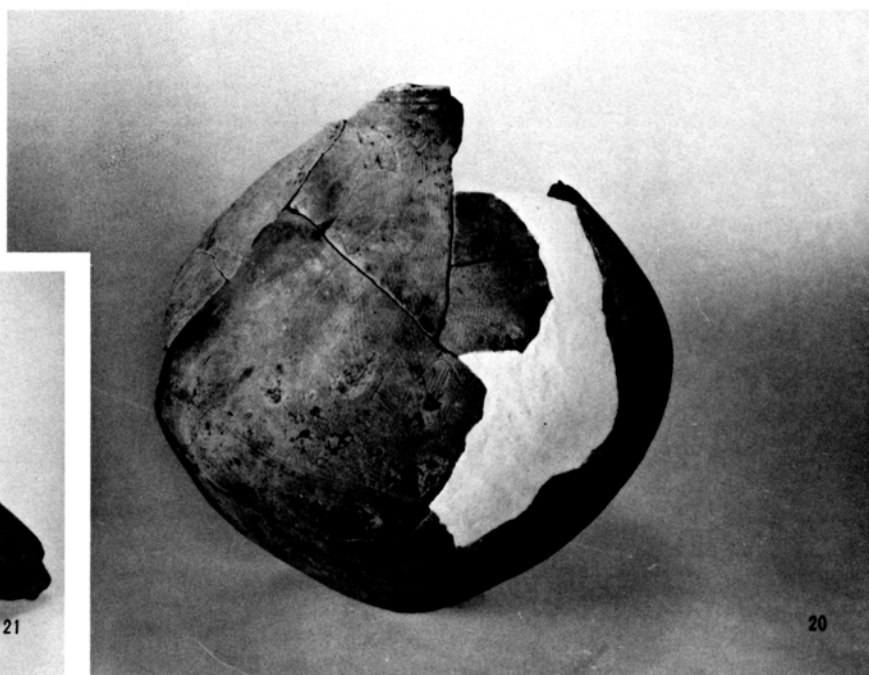
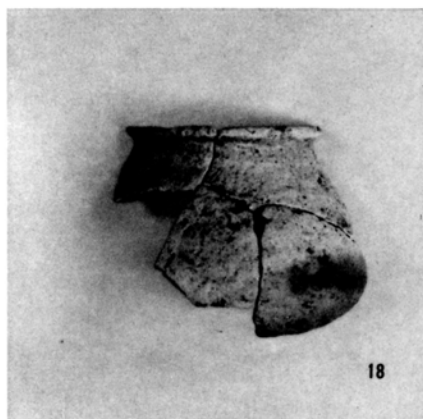
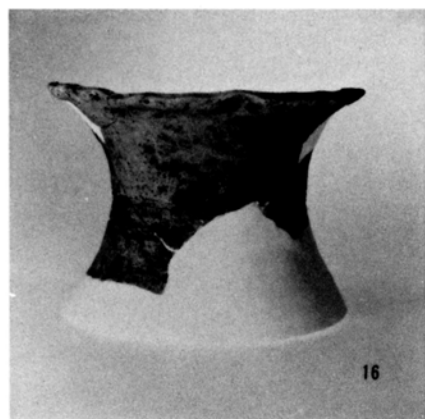


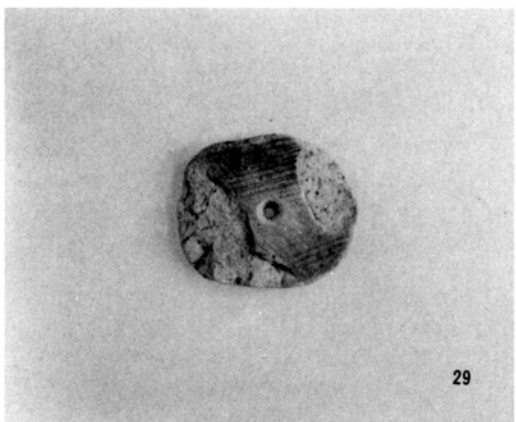
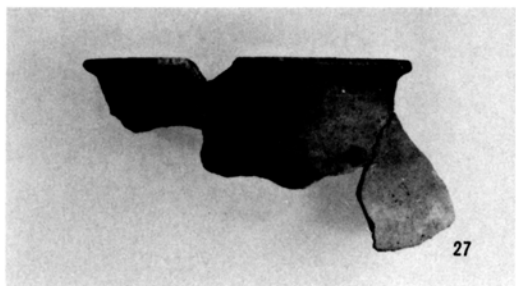
S K 125
土器出土状態(南から)

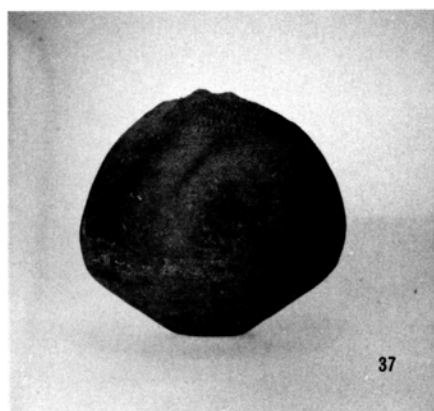
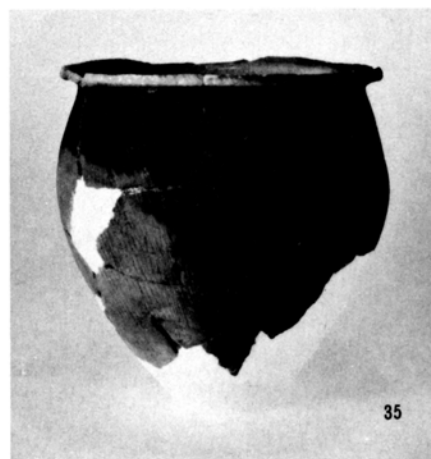
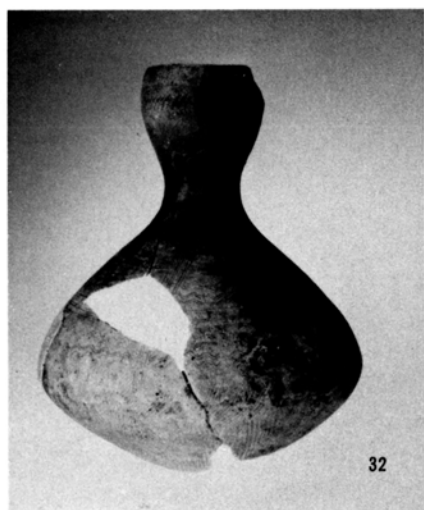
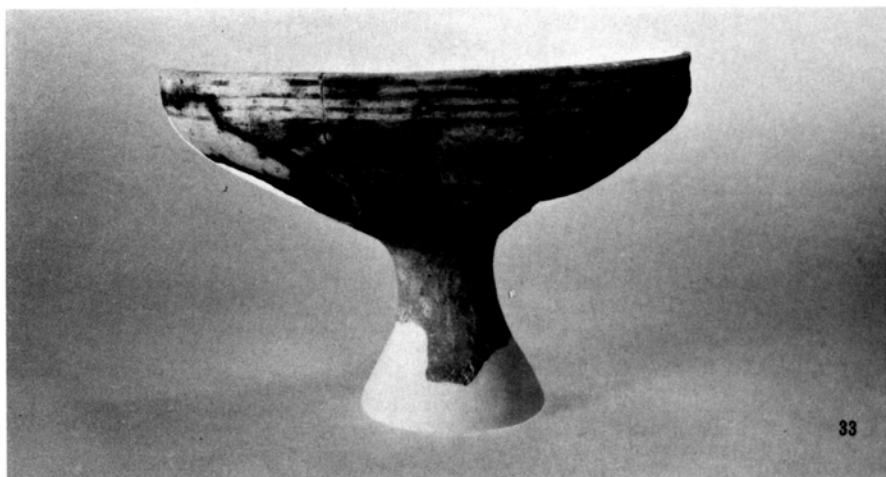
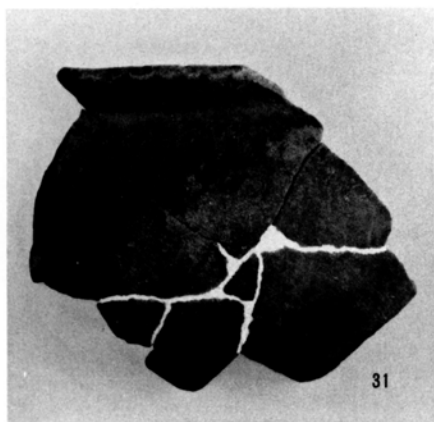


写真図版 9

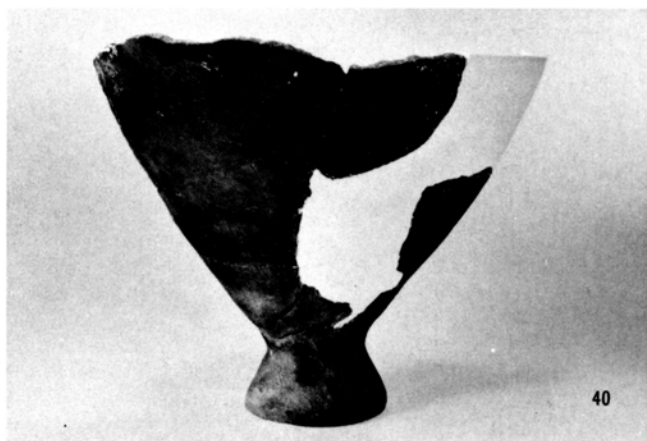
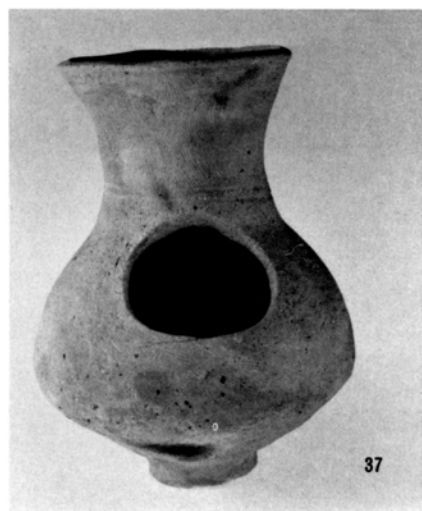




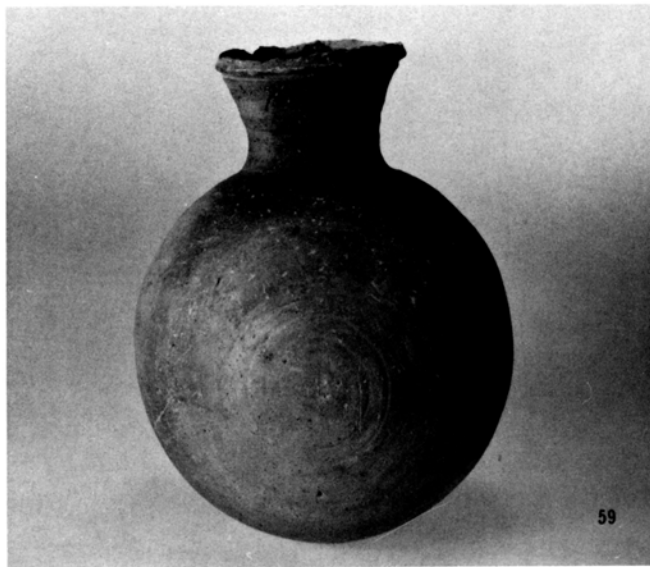
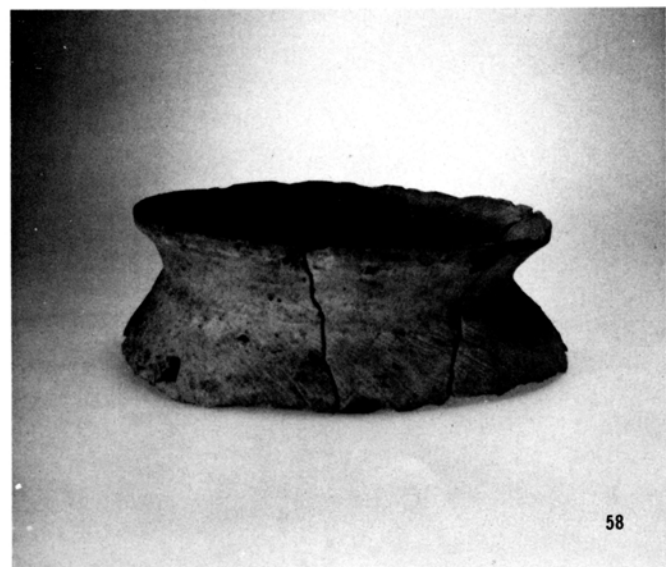
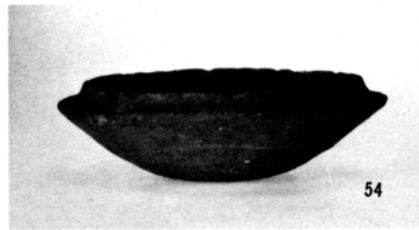
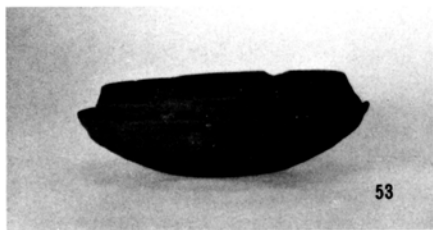
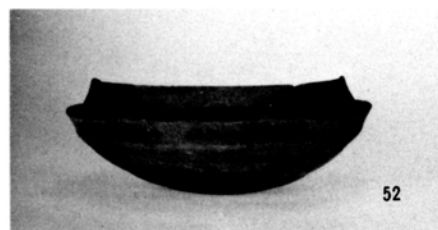
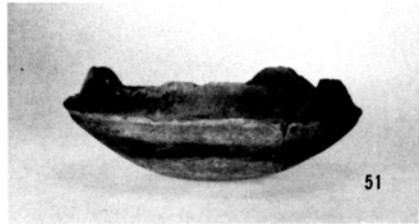
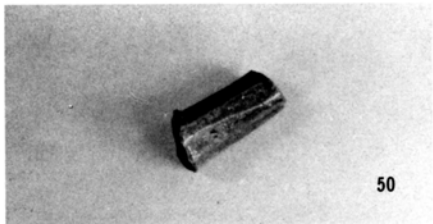
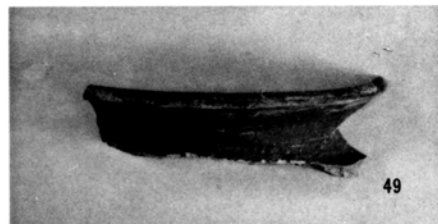
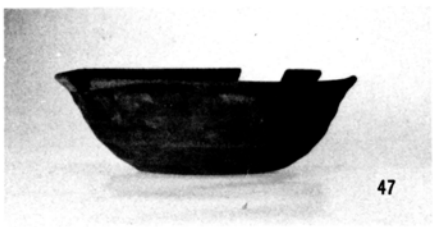
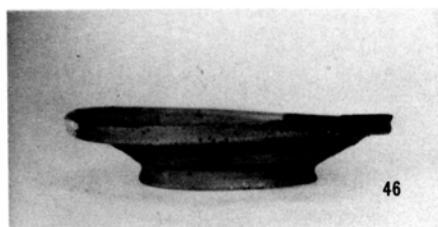




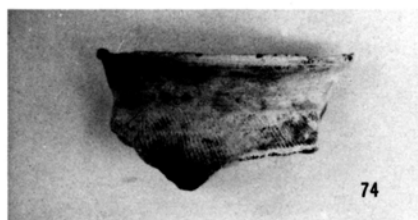
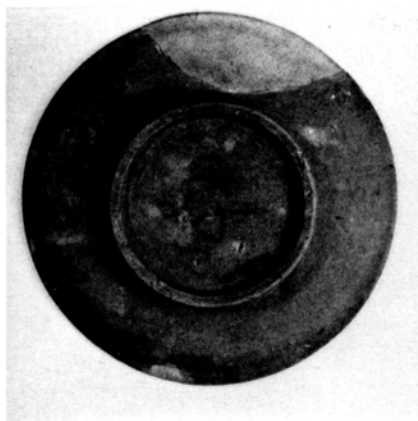
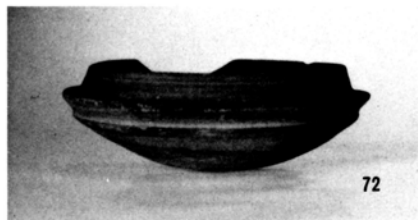
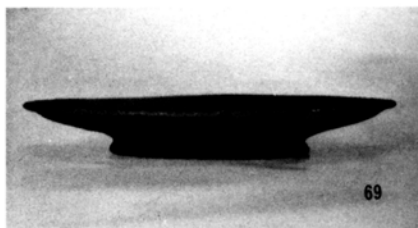
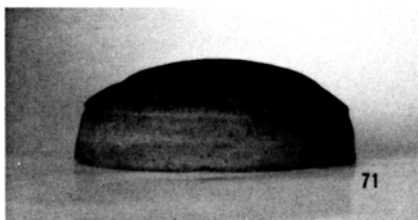
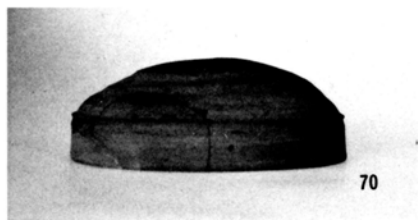
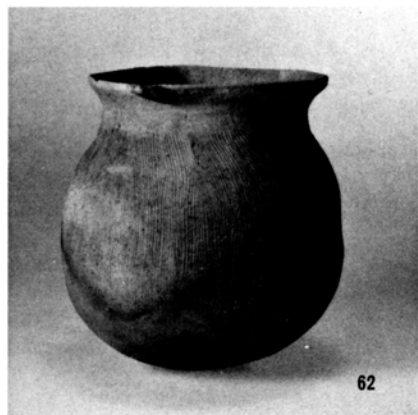
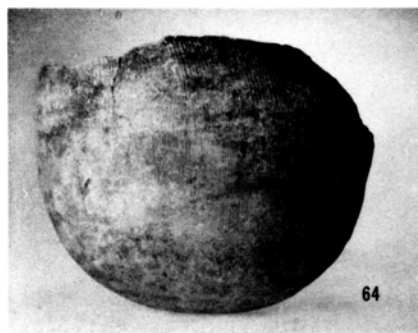
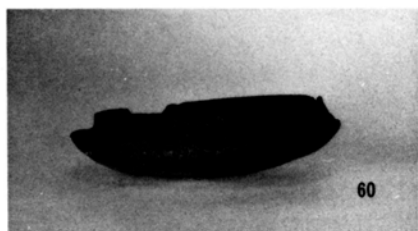
(38は1/3, 他は1/4)



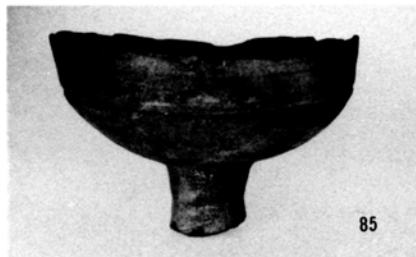
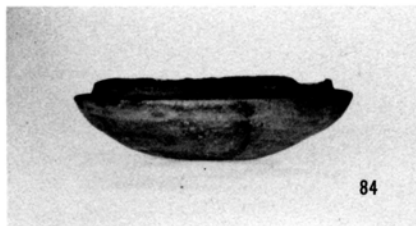
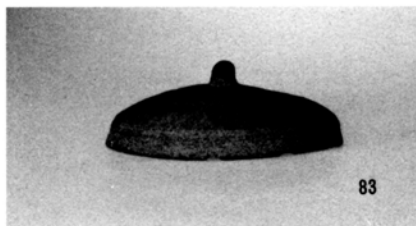
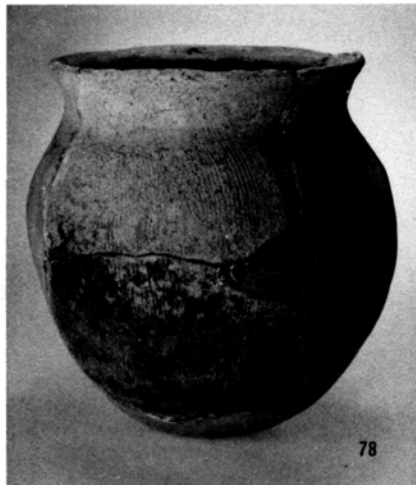
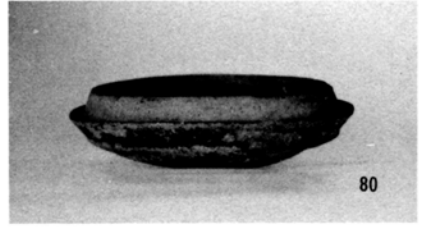
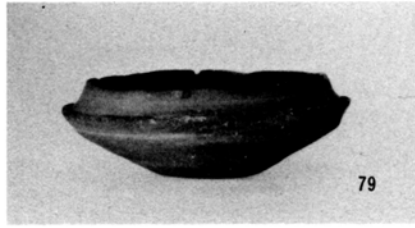
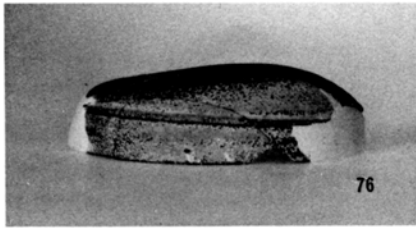
写真図版14



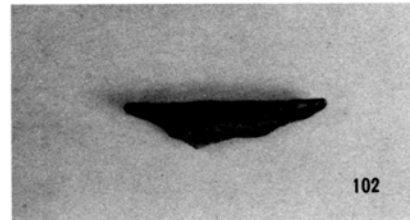
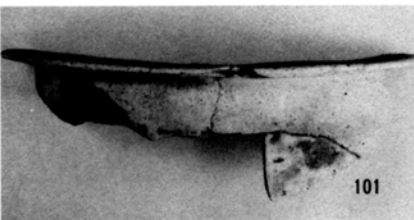
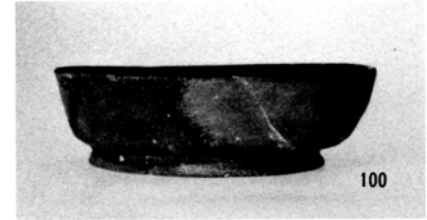
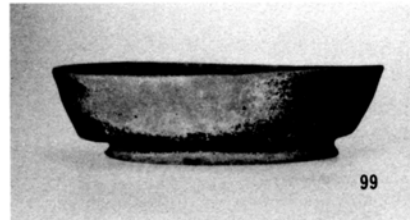
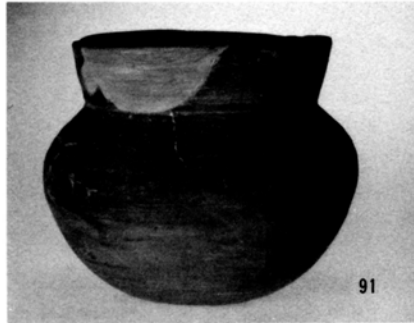
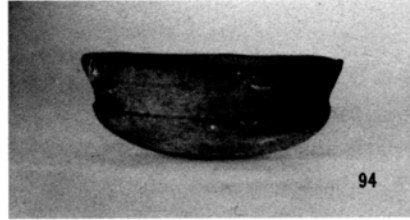
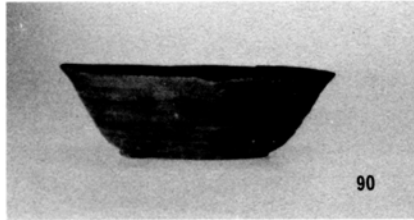
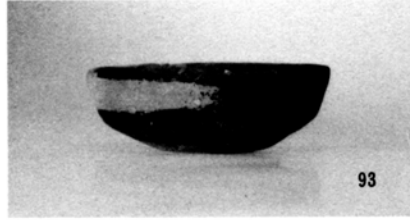
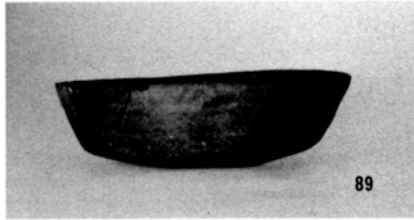
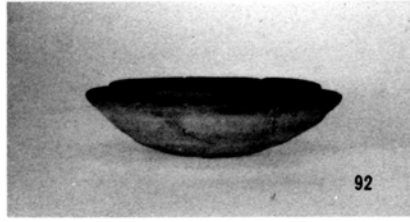
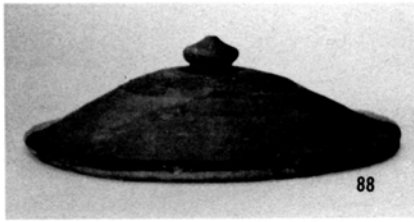
写真図版15

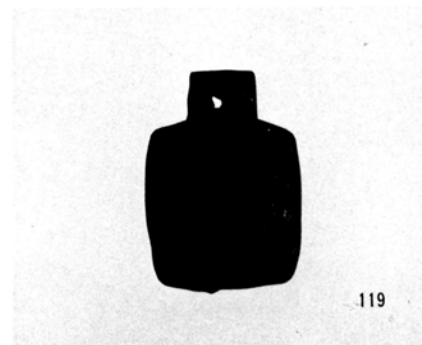
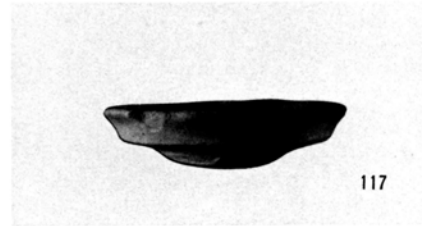
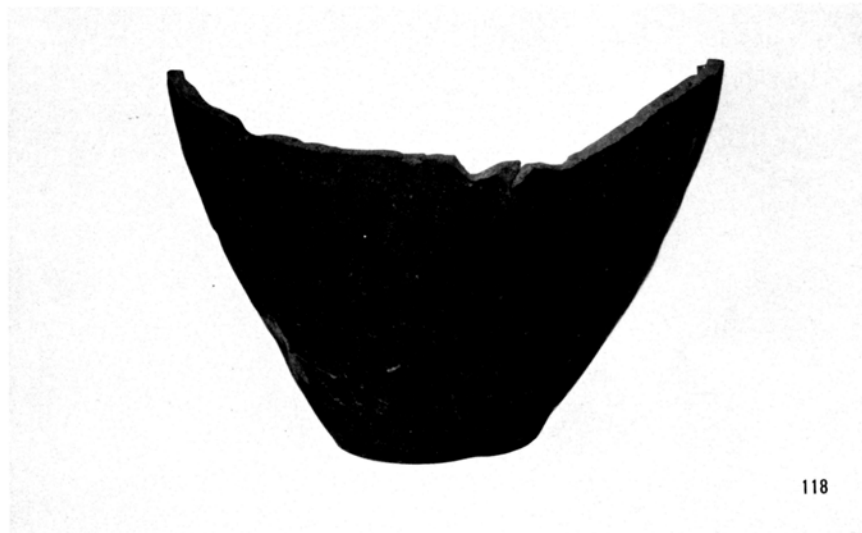
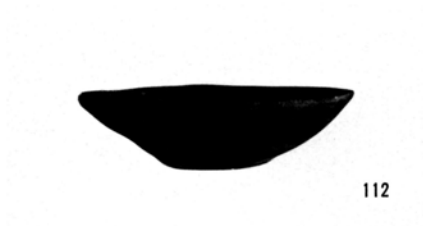


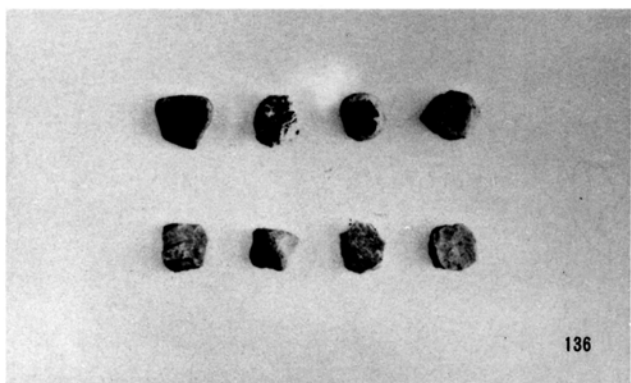
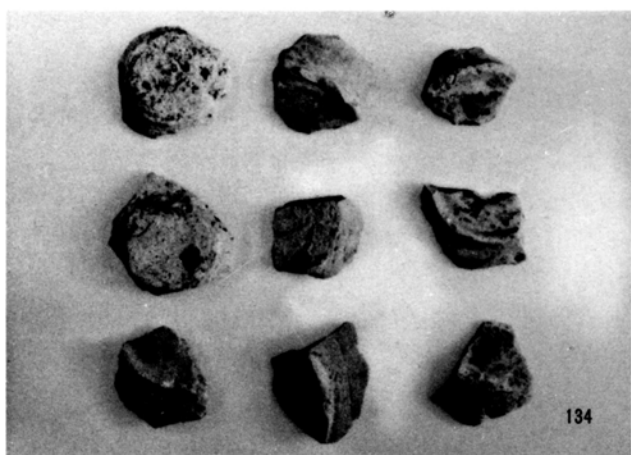
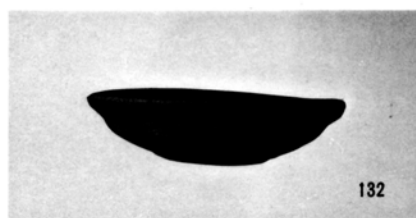
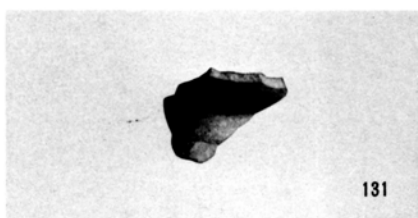
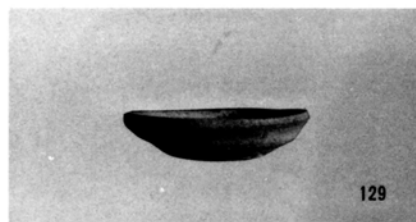
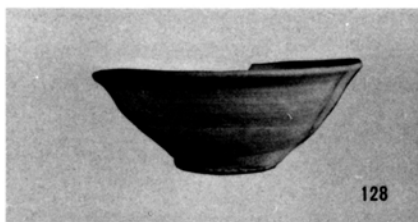
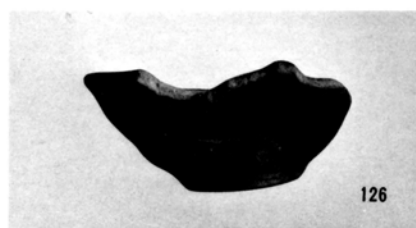
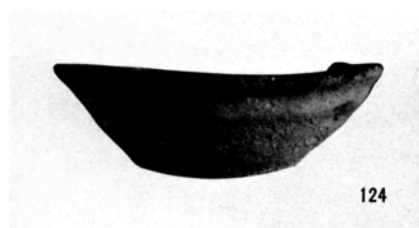
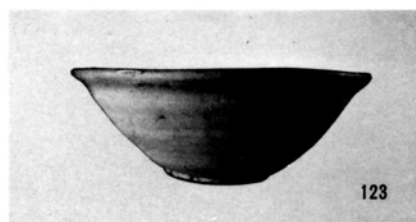
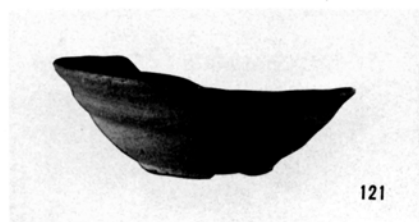
写真図版16



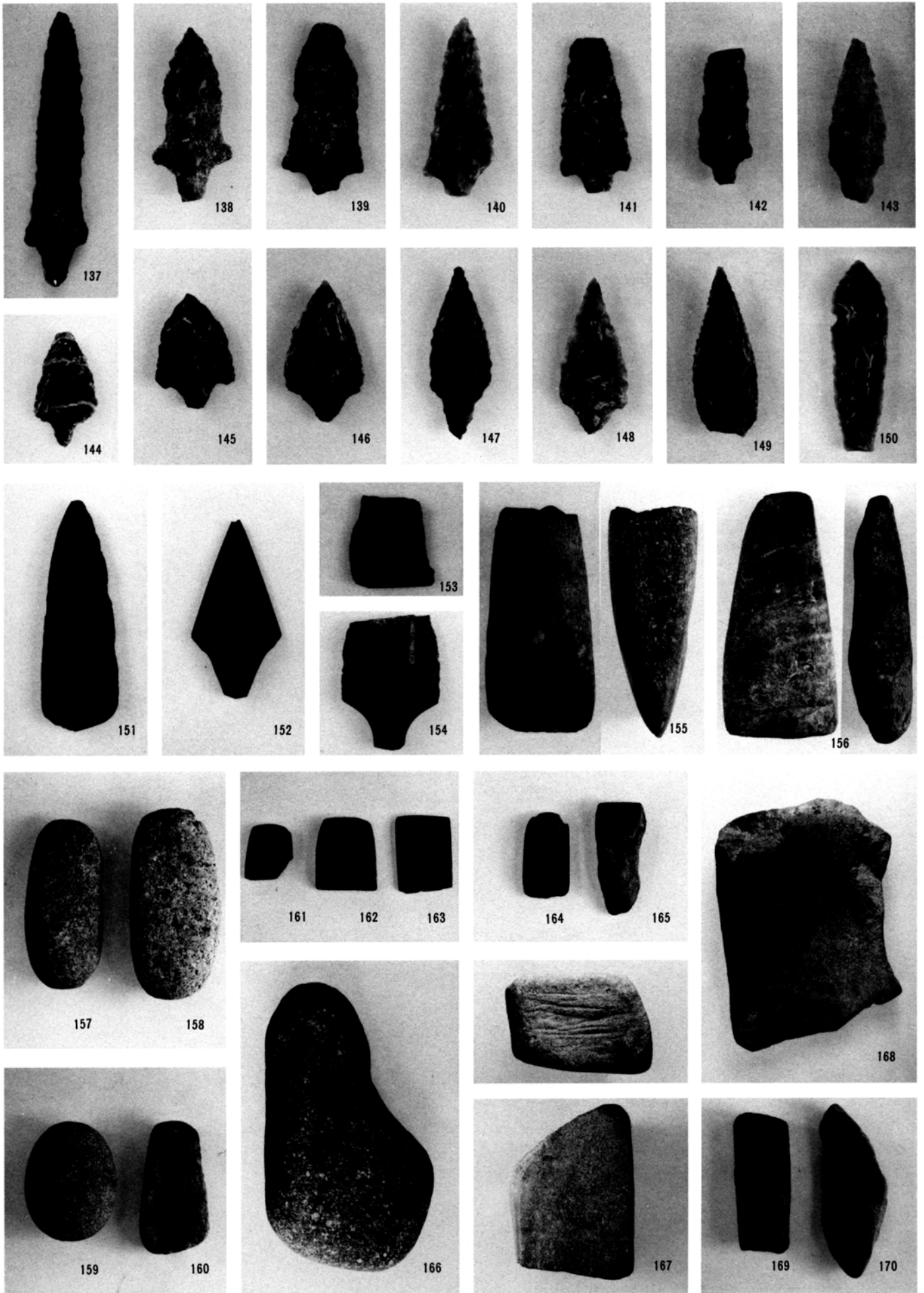
写真図版17

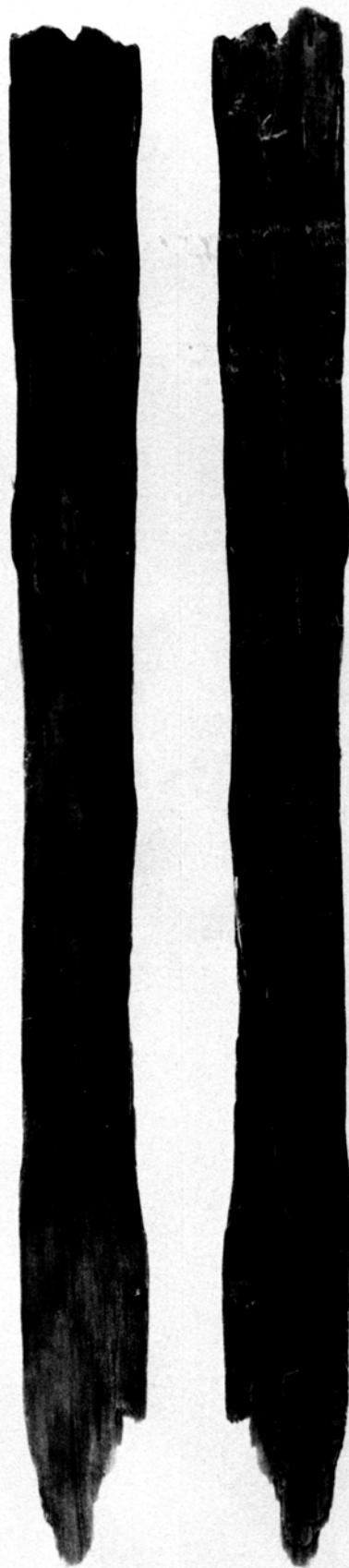
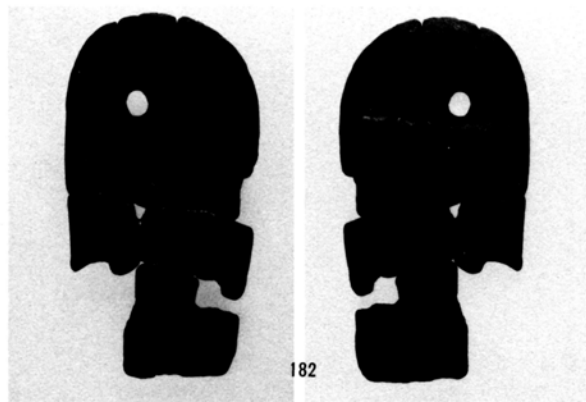
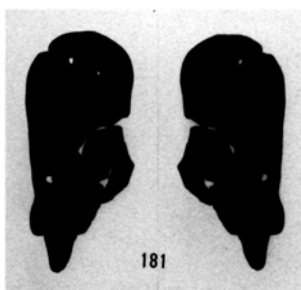
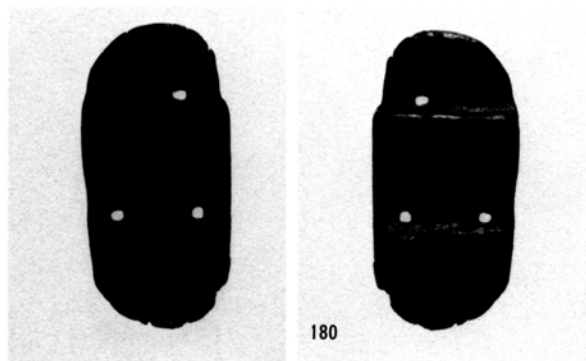
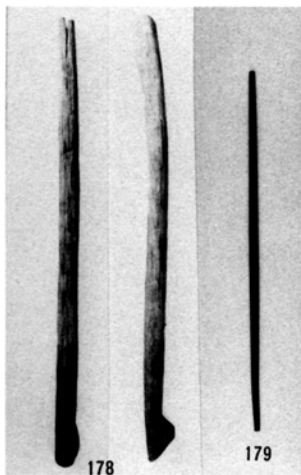
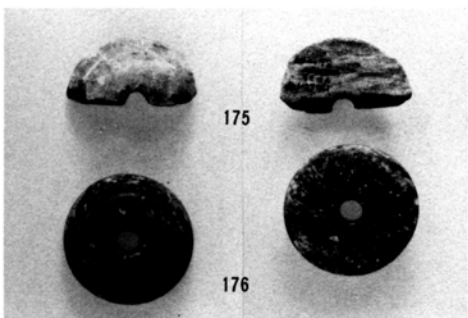
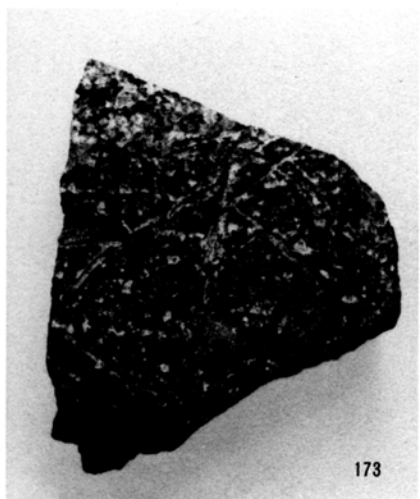
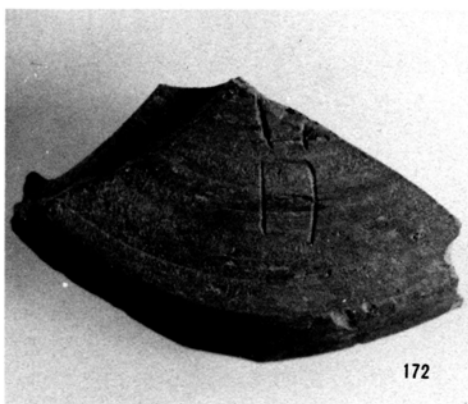
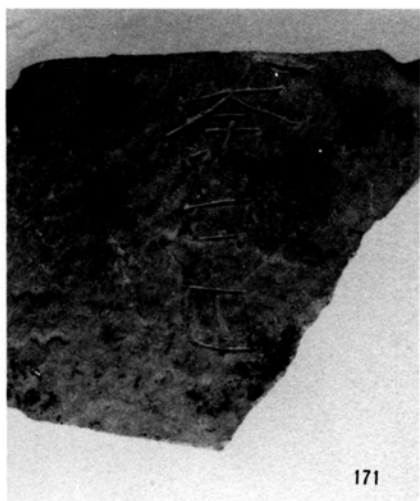




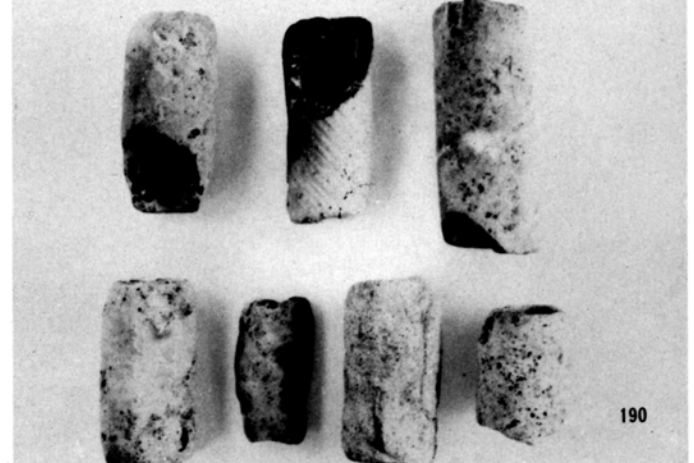
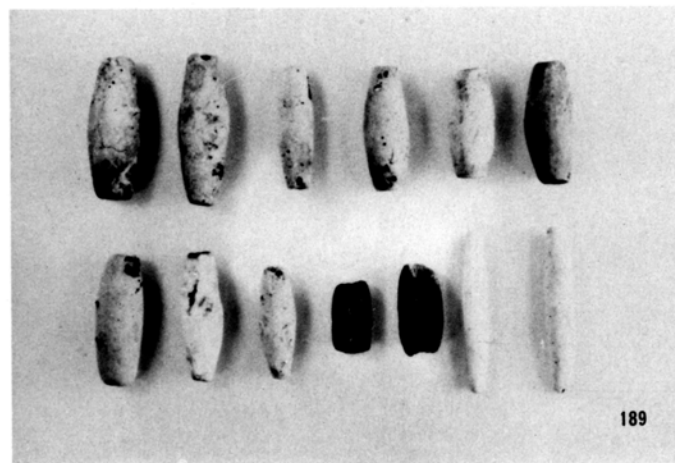
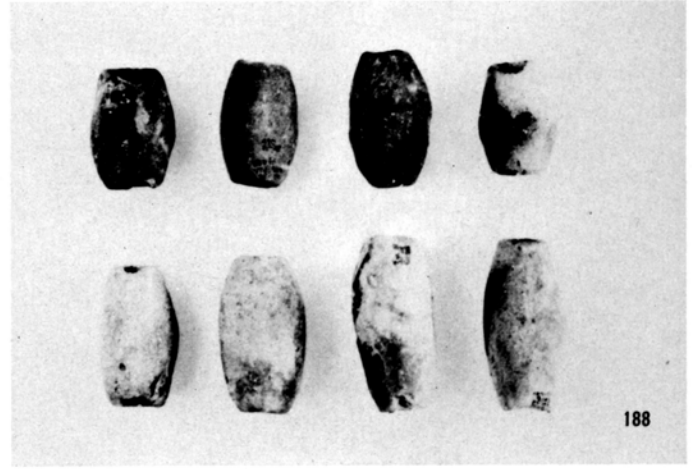
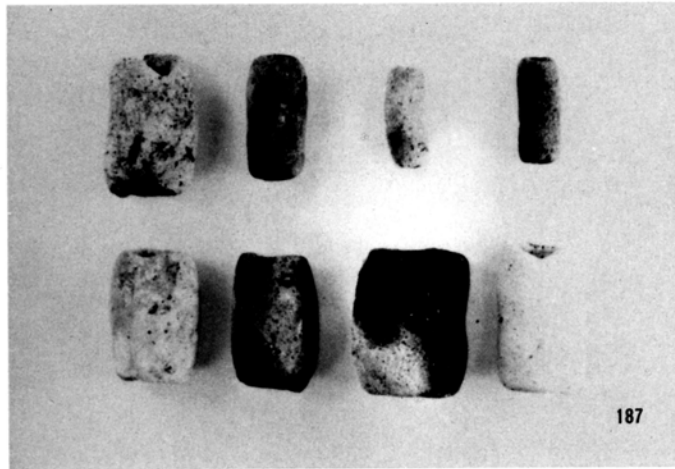
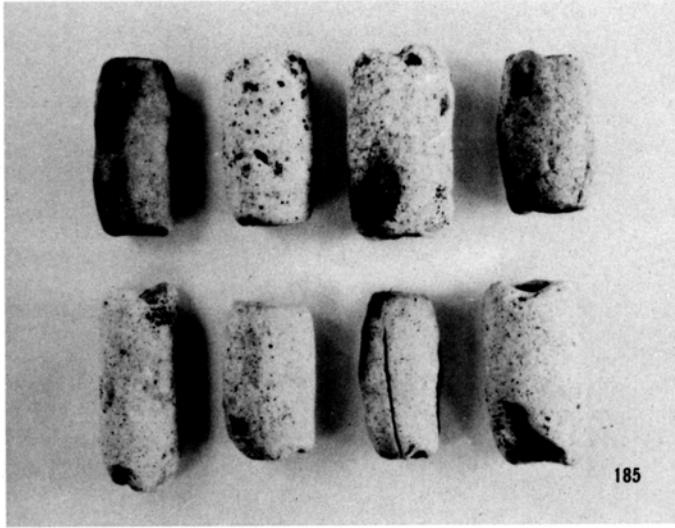
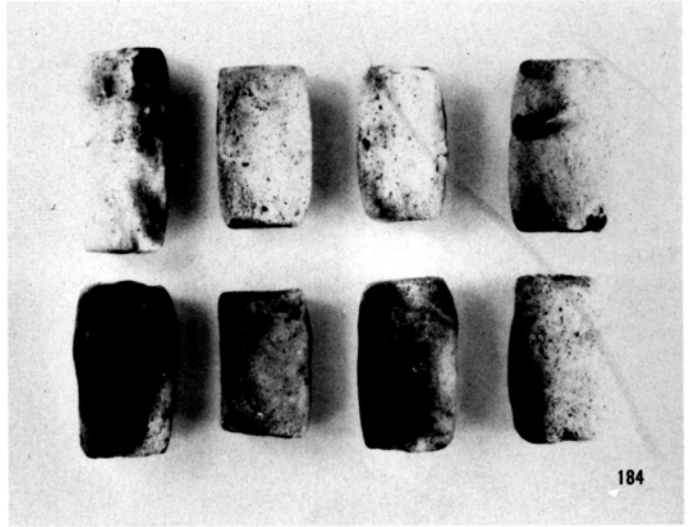
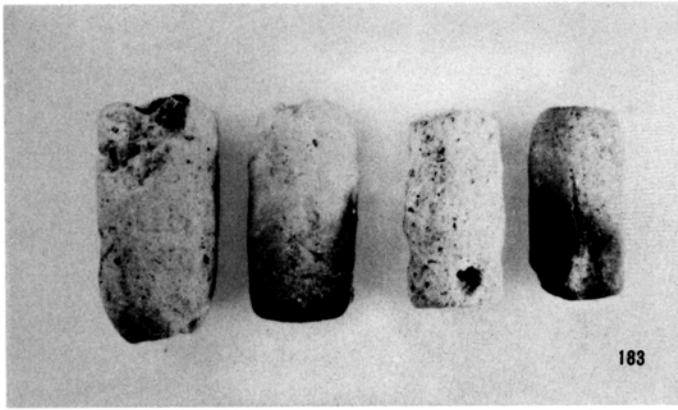


写真図版20





(171~176は1/2, 177は1/1, 179は1/3, 他は1/4)



(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

大 洩 遺 跡

1991年 3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 第 一 法 規 出 版
